宗　　像

埋蔵文化財発掘調査報告書

－ 1986年度 －

宗像市文化財発掘調査報告書

第 12 集

1987

宗像市教育委員会

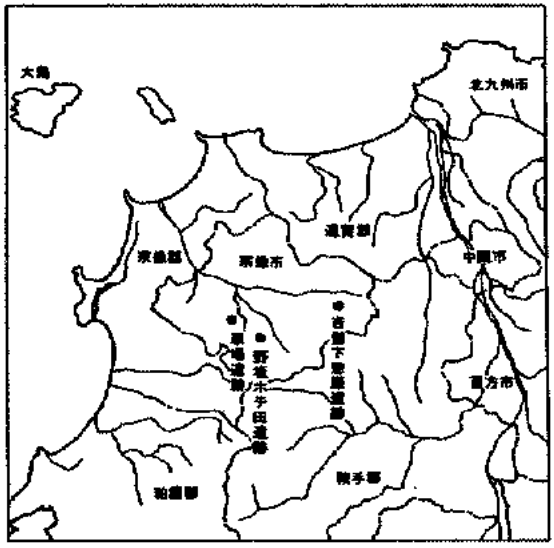
宗　　像

埋蔵文化財発掘調査報告書

－ 1986年度 －

宗像市文化財発掘調査報告書

第 12 集



1 9 8 7

宗像市教育委員会

序　　文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏内にあって十数年来、ベットタウンとして人口が増加しており、宅地開発や公共事業が目白押しの状況となっている。これらの開発事業に並行して、文化財の多くが、その姿を現わし、永遠にその姿を消し去っている。

開発によって文化財が破壊されていくのはどうすることもできないと言ってしまえば簡単であるが、その破壊される文化財は、私達の祖先が我々に残してくれた古代人の知恵であり、今現在、我々の科学技術の基礎ともなる重要な意義あるものである。また、これら文化財は国の宝であり、私達公共の宝であることを忘れてはならない。

今後とも以上の事を心に刻み、文化財と取り組んで行くとともに、本書が広く文化財保護及び学術研究の一資料として活用いただければ幸甚です。なお、発掘調査、本書発刊にあたり御協力をいただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

1987年 3 月 31 日

宗像市教育委員会
教育長　竹　原　　瑛

例　　言

1. 本書は、1986年度に国・県の補助を受けて実施した宗像市内の文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となった。
3. 本書の掘立柱建物及び出土遺物について、九州歴史資料館の横田賢次郎氏の助言を得た。
4. 本書吉留下惣原遺跡A区の石器については、宇美町歴史民俗資料館の平ノ内幸治氏にお願いした。
5. 本書使用の図の作製、製図は原俊一、清水比呂之、安部裕久、板橋皓世、清家直子、徳永映子、寺嶋克史、藤井隆晴が行った。
6. 本書使用の写真撮影は、原、清水、安部が行った。
7. 本書の執筆は、原、清水、安部が行った。各分担は文末に記した。
8. 図版の遺物番号は実測図番号と一致する。（例11－3……第11図3）
9. 本書の編集は清水、安部が行った。

本　文　目　次

			本文頁
第 1 章		序　説	1
	1	はじめに	1
	2	発掘調査の概要	2
第 2 章		野坂ホテ田遺跡	4
	1	はじめに	4
	2	A区の調査	9
	3	B区の調査	31
	4	まとめ	89
第 3 章		吉留下惣原遺跡	90
	1	はじめに	90
	2	A区の調査	92
	3	B区の調査	101
	4	まとめ	138
	5	縄文時代の調査	140
第 4 章		光岡草場遺跡	149
	1	調査の経過	149
	2	位置と環境	149
	3	遺跡の概要	152
	4	弥生時代の遺構と遺物	153
	5	古墳時代の遺物	164
	6	まとめ	165

挿　図　目　次

第１図　発掘調査遺跡位置図（１／50000）…… 3
第２図　野坂ホテ田遺跡発掘調査区図（１／2000）…… 5
第３図　野坂ホテ田遺跡Ａ区遺構配置図（１／200）…… 7・8
第４図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１～３号竪穴遺構実測図（１／30）…… 9
第５図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第４～６号竪穴遺構実測図（１／30）…… 10
第６図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第７・８号竪穴遺構実測図（１／30）…… 11
第７図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１号木棺墓実測図（１／30）…… 15
第８図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 18
第９図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第２号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 19
第10図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第３号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 21
第11図　野坂ホテ田遺跡Ａ区出土遺物実測図（１／３）…… 25
第12図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１号木棺墓遺物出土状況（１／20）…… 27
及び出土遺物実測図（土器１／３、鉄器１／２）
第13図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区遺構配置図（１／200）…… 29・30
第14図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第１～３号竪穴遺構実測図（１／30）…… 31
第15図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第４～６号竪穴遺構実測図（１／30）…… 34
第16図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第７・８号竪穴遺構実測図（１／30）…… 36
第17図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第９～13号竪穴遺構実測図（１／30）…… 40
第18図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第14～16号竪穴遺構実測図（１／30）…… 42
第19図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第１号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 44
第20図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第２号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 45
第21図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第３号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 47・48
第22図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第４号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 50
第23図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第５号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 52
第24図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第６号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 53
第25図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第７号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 55
第26図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第８号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 56
第27図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第９号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 57
第28図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第10号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 58
第29図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第11号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 60
第30図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第12号掘立柱建物跡実測図（１／60）…… 61

第31図　野坂ホテ田遺跡B区第13号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 63
第32図　野坂ホテ田遺跡B区第14号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 64
第33図　野坂ホテ田遺跡B区第15号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 66
第34図　野坂ホテ田遺跡B区第16号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 67
第35図　野坂ホテ田遺跡B区第17号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 69
第36図　野坂ホテ田遺跡B区第18号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 70
第37図　野坂ホテ田遺跡B区第19号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 71
第38図　野坂ホテ田遺跡B区第20号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 73
第39図　野坂ホテ田遺跡B区第21号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 74
第40図　野坂ホテ田遺跡B区第22号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 76
第41図　野坂ホテ田遺跡B区第1号掘立柱構築物跡実測図（1／60）…… 78
第42図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図Ⅰ（1／3）…… 79
第43図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）…… 86
第44図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図Ⅲ（1／3）…… 88
第45図　吉留下惣原遺跡発掘調査区図（1／2000）…… 91
第46図　吉留下惣原遺跡A区遺構配置図（1／200）…… 92
第47図　吉留下惣原遺跡A区第1～4号竪穴遺構実測図（1／30）…… 93
第48図　吉留下惣原遺跡A区第5号竪穴遺構実測図（1／30）…… 95
第49図　吉留下惣原遺跡A区第1号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 96
第50図　吉留下惣原遺跡A区第2号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 97
第51図　吉留下惣原遺跡B区遺構配置図（1／200）…… 99・100
第52図　吉留下惣原遺跡B区第1～6号竪穴遺構実測図（1／30）…… 101
第53図　吉留下惣原遺跡B区第7～11号竪穴遺構実測図（1／30）…… 105
第54図　吉留下惣原遺跡B区第12～14号竪穴遺構実測図（1／30）…… 107
第55図　吉留下惣原遺跡B区第1号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 109
第56図　吉留下惣原遺跡B区第2号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 110
第57図　吉留下惣原遺跡B区第3号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 111
第58図　吉留下惣原遺跡B区第4号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 113
第59図　吉留下惣原遺跡B区第5号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 114
第60図　吉留下惣原遺跡B区第6号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 115
第61図　吉留下惣原遺跡B区第7号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 116
第62図　吉留下惣原遺跡B区第8号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 117
第63図　吉留下惣原遺跡B区第9号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 119
第64図　吉留下惣原遺跡B区第10号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 121

第65図　吉留下惣原遺跡B区第11号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 122
第66図　吉留下惣原遺跡B区第12号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 123
第67図　吉留下惣原遺跡B区第13号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 125
第68図　吉留下惣原遺跡B区第14号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 126
第69図　吉留下惣原遺跡B区第15号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 127
第70図　吉留下惣原遺跡B区第16号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 128
第71図　吉留下惣原遺跡B区第17号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 129
第72図　吉留下惣原遺跡B区第18号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 130
第73図　吉留下惣原遺跡B区第19号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 131
第74図　吉留下惣原遺跡B区第1号掘立柱構築物跡実測図（1／60）…… 132
第75図　吉留下惣原遺跡B区第2号掘立柱構築物跡実測図（1／60）…… 132
第76図　吉留下惣原遺跡B区出土遺物実測図Ⅰ（1／3）…… 134
第77図　吉留下惣原遺跡B区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）…… 135
第78図　吉留下惣原遺跡縄文土器出土状況（1／20）…… 141
第79図　吉留下惣原遺跡A区出土遺物実測図Ⅰ（1／3）…… 142
第80図　吉留下惣原遺跡A区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）…… 143
第81図　吉留下惣原遺跡A区出土遺物実測図Ⅲ（1／1）…… 145
第82図　縄文時代遺跡立地（1／25000）…… 148
第83図　弥生時代主要遺跡分布図…… 150
第84図　光岡草場遺跡発掘調査区図（1／5000）…… 151
第85図　光岡草場遺跡現況測量図（1／300）…… 152
第86図　光岡草場遺跡遺構配置図（1／150）…… 153
第87図　光岡草場遺跡第24号土壙墓実測図（1／40）…… 156
第88図　光岡草場遺跡第1・2号土壙墓実測図（1／30）…… 157
第89図　光岡草場遺跡第3～8号土壙墓実測図（1／30）…… 158
第90図　光岡草場遺跡第10～14号土壙墓実測図（1／30）…… 159
第91図　光岡草場遺跡第15～21号土壙墓実測図（1／30）…… 160
第92図　光岡草場遺跡土壙墓出土土器（1／4）…… 161
第93図　光岡草場遺跡第1号甕棺墓実測図（1／20）…… 162
第94図　光岡草場遺跡第2号甕棺墓実測図（1／20）…… 162
第95図　光岡草場遺跡甕棺実測図（1／6）…… 163
第96図　光岡草場遺跡第1号墳出土鉄器実測図（鉄鏃1／3、鉄刀1／5）…… 164

図　版　目　次

図版1	野坂ホテ田遺跡調査前写真		
図版2	野坂ホテ田遺跡	1	A区全景（西から）
		2	A区全景（北から）
図版3	野坂ホテ田遺跡	1	A区第1号掘立柱建物跡（西から）
		2	A区第2号掘立柱建物跡（西から）
		3	A区第3号掘立柱建物跡（西から）
図版4	野坂ホテ田遺跡	1	A区1号木棺墓遺物出土状況（南から）
		2	A区1号木棺墓遺物出土状況（東から）
		3	A区1号木棺墓遺物出土状況（東から）
図版5	野坂ホテ田遺跡		A区出土遺物Ⅰ
図版6	野坂ホテ田遺跡		A区出土遺物Ⅱ
図版7	野坂ホテ田遺跡	1	B区全景（西から）
		2	B区全景（北から）
図版8	野坂ホテ田遺跡	1	B区第1号掘立柱建物跡（北から）
		2	B区第3号掘立柱建物跡（西から）
		3	B区第6号掘立柱建物跡（西から）
図版9	野坂ホテ田遺跡	1	B区第4号掘立柱建物跡（西から）
		2	B区第11号掘立柱建物跡（西から）
		3	B区第17号掘立柱建物跡（西から）
図版10	野坂ホテ田遺跡	1	B区第8号掘立柱建物跡（西から）
		2	B区第19号掘立柱建物跡（西から）
		3	B区第21号掘立柱建物跡（西から）
図版11	野坂ホテ田遺跡	1	B区P－215出土遺物（東から）
		2	B区P－215出土遺物（西から）
図版12	野坂ホテ田遺跡		B区出土遺物
図版13	吉留下惣原遺跡	1	A区調査前写真（東から）
		2	B区調査前写真（南から）
図版14	吉留下惣原遺跡	1	A区全景（西から）
		2	A区全景（東から）
図版15	吉留下惣原遺跡	1	A区第1号竪穴遺構（東から）
		2	A区第2号竪穴遺構（西から）
図版16	吉留下惣原遺跡	1	A区第3号竪穴遺構（南から）

		2	A区第1号掘立柱建物跡（西から）
図版17	吉留下惣原遺跡	1	A区グリット全景（南から）
		2	A区グリット全景（東から）
図版18	吉留下惣原遺跡	1	A区南壁土層写真
		2	A区東壁土層写真
図版19	吉留下惣原遺跡	1	A区遺物出土状況
		2	A区遺物出土状況
図版20	吉留下惣原遺跡		出土遺物Ⅰ
図版21	吉留下惣原遺跡		出土遺物Ⅱ（掉図第83図）
図版22	吉留下惣原遺跡	1	B区全景（南から）
		2	B区全景（東から）
図版23	吉留下惣原遺跡	1	B区第7号掘立柱建物跡（東から）
		2	B区第9号掘立柱建物跡（東から）
図版24	吉留下惣原遺跡	1	B区第14号掘立柱建物跡（南から）
		2	B区第15号掘立柱建物跡（東から）
図版25	吉留下惣原遺跡	1	B区第20号掘立柱建物跡（東から）
		2	B区第21号掘立柱建物跡（東から）
図版26	吉留下惣原遺跡	1	B区第1・2号掘立柱建物跡切り合い状況
		2	B区第2号溝状遺構・第2号掘立柱建物跡切り合い状況
図版27	吉留下惣原遺跡	1	B区第4号掘立柱建物跡第6号第7号竪穴遺構切り合い状況
		2	B区第14号掘立柱建物跡第1号竪穴遺構切り合い状況
図版28	光岡草場遺跡	1	遺跡遠景（1：草場遺跡、2：光岡長尾遺跡）
		2	第24号土壙墓（南東から）
図版29	光岡草場遺跡	1	第2号土壙墓とその周辺（▽は第2号土壙墓を示す）
		2	第8号土壙墓とその周辺（▽は第8号土壙墓を示す）
図版30	光岡草場遺跡	1	土壙墓群（西から）
		2	土壙墓群（東から）
図版31	光岡草場遺跡		土壙墓出土土器
図版32	光岡草場遺跡	1	第1号甕棺墓（南東から）
		2	第2号甕棺墓（南から）
図版33	光岡草場遺跡		第1・2号甕棺墓（5・6は1号、7・8は2号甕棺）
図版34	光岡草場遺跡	1	第1号墳出土鉄鏃
		2	第1号墳出土鉄刀
		3	第1号墳現況（南から）

第1章　序　説

1. はじめに

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置するという地理的条件を備えており、両市の通勤圏としての宅地化が急速に進んでいる。また、かつての純農村であった本市にも、農業経営等に近代化の波が押し寄せ、近年は、都市近郊型の複合経営を目指した生産基盤の整備が進められている。基盤整備の中心となる事業はほ場整備事業であり、県営ほ場整備をはじめ、市営、団体営、個人規模の事業が毎年実施されている。

本年度の発掘調査は、農業基盤整備に伴うものであり、事業規模が大型であるために、確認された遺跡の原状保存は困難を極めており、盛土等により可能な限りの保存対策を講じてきたが、消滅が必至な区域については記録保存という形で対処した。

本書は1986年度の発掘調査についての報告である。発掘調査は次の組織で行った。

組　織

総　括	宗像市教育委員会	教育長	竹原　瑛
		教育部長	白木　国明
		社会教育課長	乙藤　重松
		社会教育係長	井上　弘
庶務・会計		主事	大賀由美子
発掘調査		主事	原　俊一
		技師	清水比呂之
		技師	安部　裕久

発掘調査において、福岡農林事務所、宗像市産業課、南郷土地改良区、吉武土地改良区の方々に協力をいただいた。また、土地所有者の山田明次郎氏には発掘調査の過程において便宜をはかっていただき、感謝の意を表したい。

最後に、発掘調査には地元をはじめ、福岡教育大学、福岡大学の参加、協力をいただいた。

2. 発掘調査の概要

本年度の発掘調査は、梅雨明け後の県営ほ場整備事業の着手とともに7月から入った。

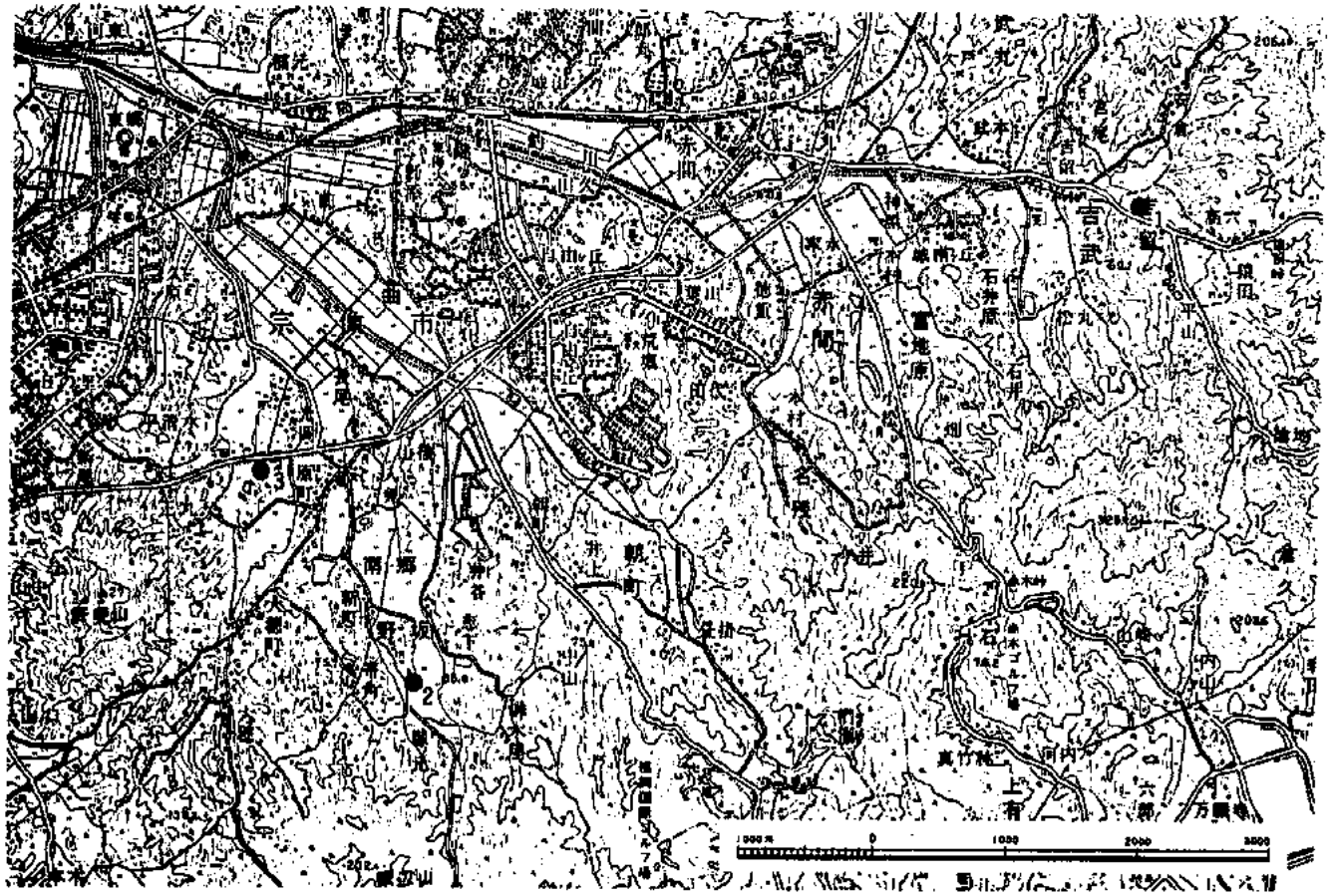
野坂ホテ田遺跡は、県営ほ場整備に伴い緊急発掘調査を実施した遺跡である。発掘調査に先行して、遺跡の広がりを重機によるトレンチ調査で確認したが、地形の変化が大きく、全体に削平が進んでいたため、事業区の北側台地部を調査対象とした。

吉留下惣原遺跡は、県営ほ場整備に伴い緊急発掘調査を実施した遺跡である。前年度の事前踏査により、台地上に遺物の散布が見られ、台地上全体に遺跡の広がりが推定できていた。本年度の調査では、最も残りのよいと思われる2地点を選んで発掘調査を実施した。

光岡草場遺跡は、畑地造成に伴い緊急発掘調査を実施した遺跡である。当地は1972年の分布調査により周知化されていた遺跡であり、開発に伴い土地所有者から発掘届が出された。現地踏査を行った結果、墳丘をもつ古墳一基を確認した。このため年度事業が押しつまってはいるが、踏査の結果から短期調査が可能であるとの判断から急遽発掘調査に踏み切った。

第1表　1986年度発掘調査一覧表

遺跡名	所在地（宗像市）	調査原因	調査面積	調査期間
野坂ホテ田遺跡	大字野坂字ホテ田	ほ場整備	3,000㎡	1986年7月18日～9月11日
吉留下惣原遺跡	大字吉留字下惣原	ほ場整備	2,000㎡	1986年9月13日～12月24日
光岡草場遺跡	大字光岡字草場	畑地造成	300㎡	1986年11月27日～1987年1月31日



第1図　発掘調査遺跡位置図（1／50000）　　1．吉留下惣原遺跡　2．野坂ホテ田遺跡　3．光岡草場遺跡

第2章　野坂ホテ田遺跡

1. はじめに

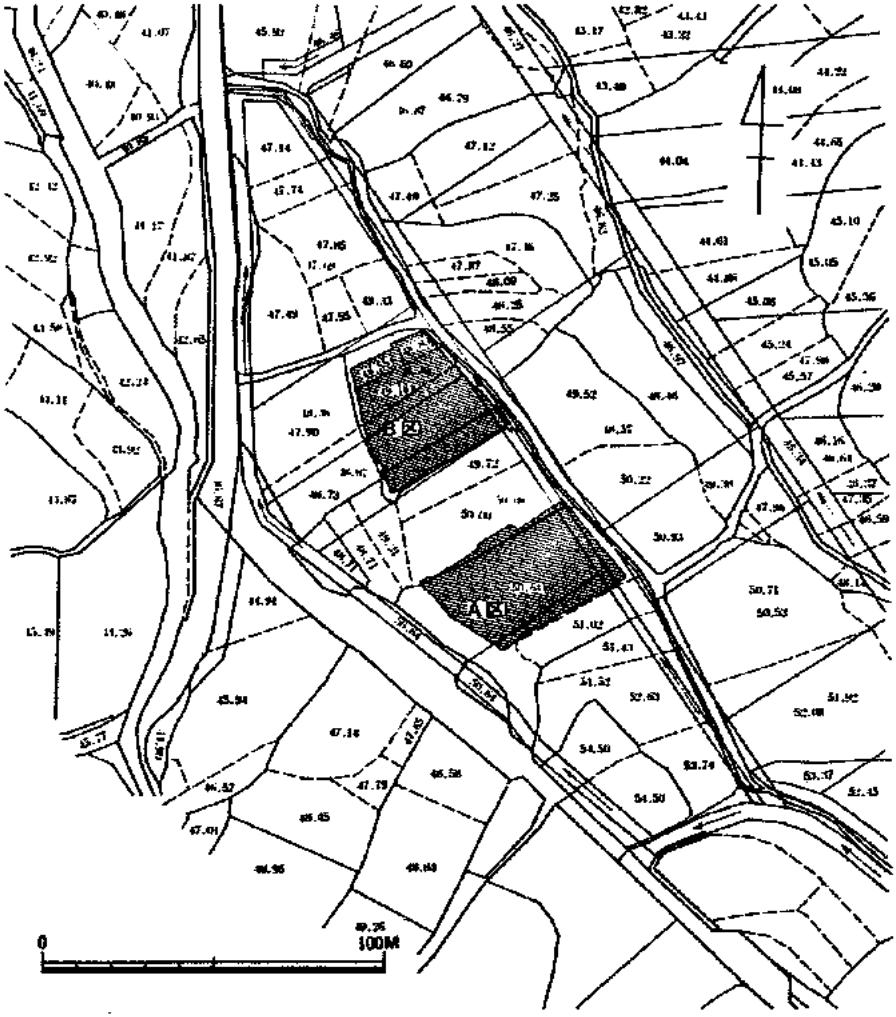
野坂ホテ田遺跡は、福岡県宗像市大字野坂字ホテ田に所在する遺跡で、宗像市と若宮町との郡境にそびえる標高232.4mの磯辺山から北東へと派生する丘陵の西側緩斜面にあたる標高48mから50mの地点に位置している。『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）[1]』では、330395番の円墳所在地点から南へ約250m、330396番・330397番の円墳所在地点から東へ約250mの地点にあたる。

当遺跡の所在する野坂地区は、『筑前國續風土記拾遺[2]』中に、「和名抄に此郡郷名の内に野坂（乃佐加）とある是也。廣色にて属村十數所あり中にも、原町は官道を狭みて人家あり共南は即ち当村に属し、北は光岡村に隷けり。此村より鞍手郡山口村の内成水へ越る小道あり。居居數所に散在す。森吉・廣宗・今院・塚元・千疋原・中山・江下・次郎丸・大井・入免・松ヶ崎・原町・新町・八ヶ等にあり。此村の名承元四年の文書に野坂庄また永仁七年の文書に東郷内野坂など見へたり。」と記している。また、慶長検地帳には、野坂村田畠166町と記されており、和名抄にみえる『乃佐加』、承元四年（1210年）の文書にみえる『野坂庄』などとあわせて、野坂地区が古くから高い農業生産力を有していたことを裏づけるものであろう。当遺跡の現況でも、狭い丘陵に挟まれた谷水田を形成しており、北側に開く宗像地域最大の穀倉地帯と目されている宗像盆地へと続いている。

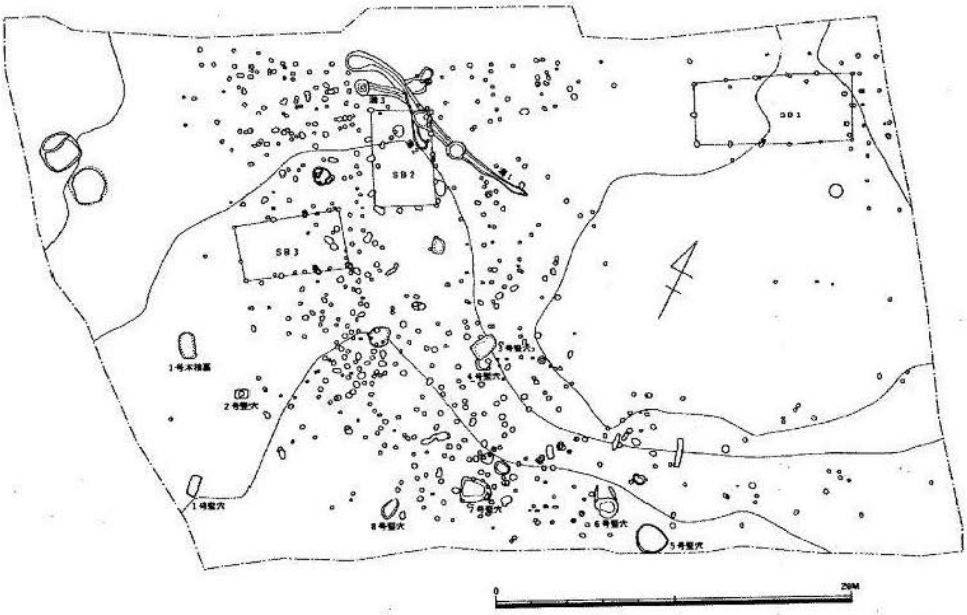
当遺跡の周辺には、13～14世紀を主体とする遺物を出土している中世集落群と目される野坂中山遺跡[3]や鍛冶炉を検出し、弥生時代中期と古墳時代初頭から5世紀代を主体とする遺物を出土している野坂一町間遺跡[4]、『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）』に記されている野坂及び中山の諸古墳・積石塚・遺物散布地など多くの遺跡が分布している。

発掘調査は、野坂地区県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査として、11*ha*のうち、切り盛り調整が思うにまかせずに削土される部分について調査を実施し、このうち遺構の遺存状況が比較的よいと思われる2地点から掘立柱群等を検出した。南からそれぞれA区1600㎡、B区1400㎡と称して面的調査を実施した。

発掘調査期間は、梅雨明けやらぬ昭和61年7月18日、重機搬入後ただちにおこなった試掘調査によって始まり、昭和61年9月11日遺構実測及び平板測量完了と共に、当遺跡の発掘調査を終了した。



第２図　　野坂ホテ田遺跡発掘調査図（１／2000）



第3図　野板ホラ田遺跡A区遺構配置図（1／200）

2. A 区 の 調 査

当区は、面的調査を実施した内、南側に位置するもので、標高49.5mから50.5mの間に分布する1600㎡の区域である。当区からは、竪穴遺構8基、木棺墓1基、溝状遺構3基、掘立柱建物跡3棟と多数の柱穴と思われる小竪穴遺構を検出した。小竪穴遺構に関しては、遺物取り上げの便宜上、発掘進行順に遺物を出土したもののみにP番号1番から253番を符した。この中には、掘立柱建物跡3棟の柱穴も含まれているが、これは後に各遺構の柱穴番号に変更するものとした。

1） 第1号竪穴遺構

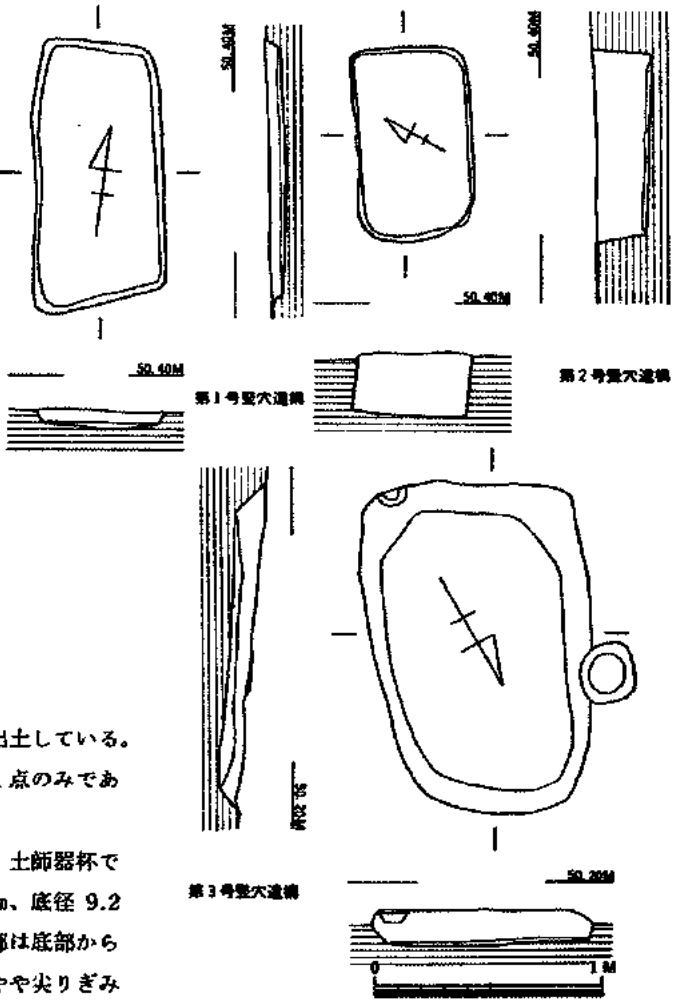
（1） 遺 構（第4図）

主軸をN－8°－W方向にとるもので、標高50.25 mの等高線上にあり、調査区の南西隅に位置している。形は長方形を呈し、長軸長1.16m×短軸長0.56mを測る。

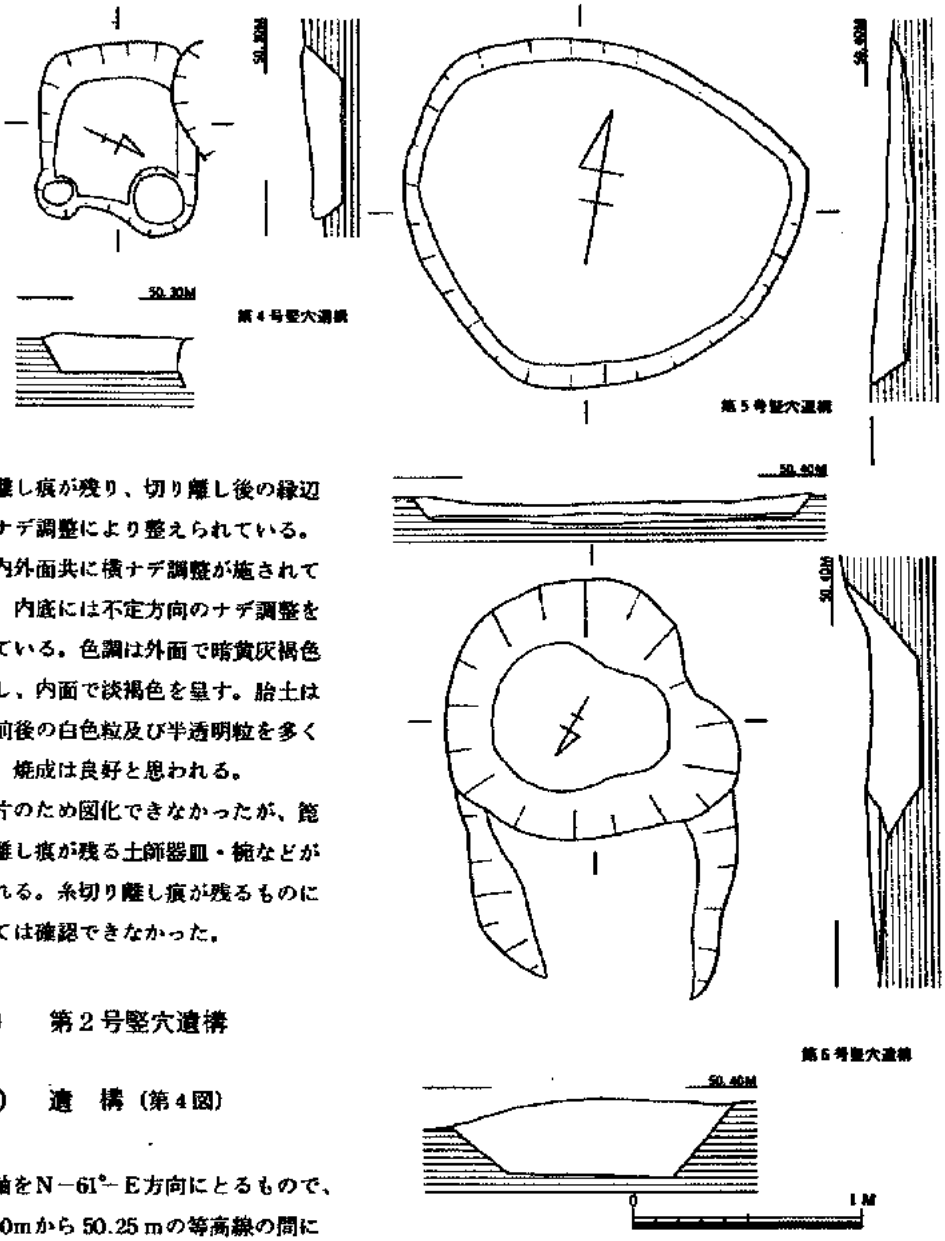
（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・杯・椀や鉄細片などが出土している。図示できるものは、土師器杯1点のみであった。

土師器（第11図7） 7は、土師器杯である。口径12.8cm、器高2.3cm、底径 9.2cmを測る。器壁は肉厚で、体部は底部から外上方へ立ち上る。口縁部はやや尖りぎみで、端部は丸くおさめている。底部には篤



第4図 野坂ホテ田遺跡A区第1～3号竪穴遺構実測図（1／30）



第5図　野坂ホテ田遺跡A区第4～6号竪穴遺構実測図（1／30）

切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整を施している。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面で淡褐色を呈す。胎土は1㎜前後の白色粒及び半透明粒を多く含む。焼成は良好と思われる。

細片のため図化できなかったが、篦切り離し痕が残る土師器皿・椀などがみられる。糸切り離し痕が残るものについては確認できなかった。

2）　第2号竪穴遺構

（1）　遺　構（第4図）

主軸をN－61°－E方向にとるもので、標高50mから50.25mの等高線の間にあり、第1号竪穴遺構の北5mの所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長0.87m×短軸長0.49mを測る。

当遺構からの出土遺物は無い。

3）　第３号竪穴遺構

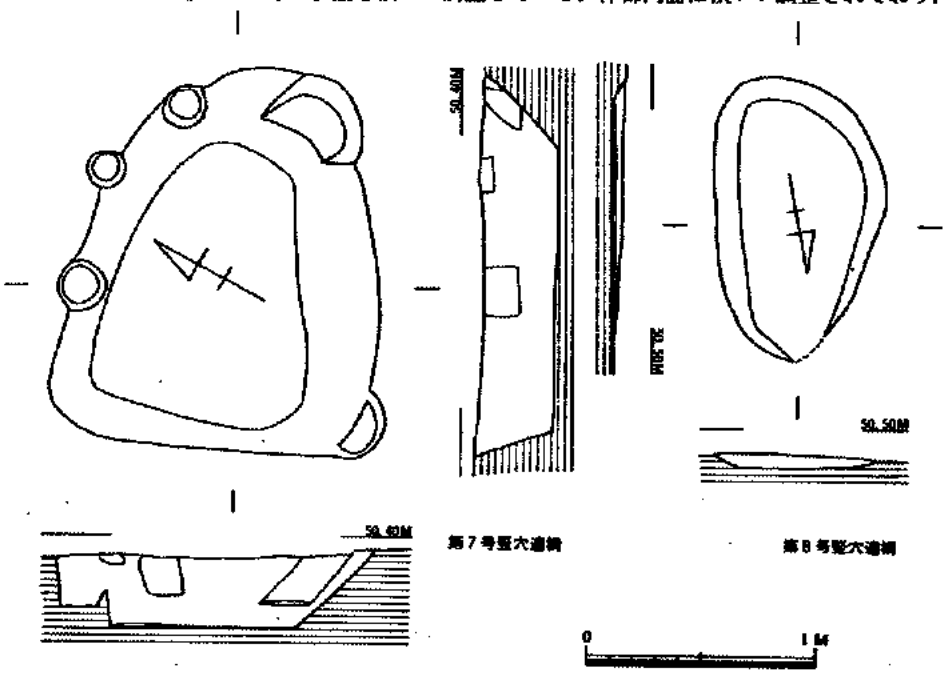
（１）　遺　構（第４図）

主軸をＮ－30°－Ｅ方向にとるもので、標高50mの等高線上にあり、第２号竪穴遺構の東13mの所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.45m×短軸長0.98mを測る。当遺構南東壁隅により、第４号竪穴遺構を切る。西壁中央部は、213号小竪穴に切られている。

（２）　出土遺物

当遺構からは、土師器破片・須恵器壷と思われる破片や杯などが出土している。図示できるものは、須恵器杯１点のみであった。

須恵器（第11図８）　　８は、須恵器杯である。復元口径15.8cm、器高2.3cm、底径12cmを測る。器壁は肉厚で、体部は底部から外上方へ直線的に立ち上る。器高に対して底径が５倍程ある浅い器形で、口縁端部を丸くおさめている。底部から0.6cmの高さまで左回転の轆轤による篦削り調整が施され、それ以上を横ナデ調整している。体部内面は横ナデ調整されており内



第６図　　野坂ホテ田遺跡Ａ区第７・８号竪穴遺構実測図（１／30）

底は不定方向のナデ調整を施している。色調は内外面共体部は青灰色、底部は灰色を呈している。胎土は0.5㎜程の白色粒及び黒色粒を多く含んでいる。焼成は良好。

図化することはできないが、当遺構内から焼土塊を検出している。

4） 第4号竪穴遺構

（1） 遺 構（第5図）

主軸をN－65°－E方向にとるもので、標高50mの等高線上にあり、第3号竪穴遺構南側に接した所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.59m×短軸長0.69mを測る。北西壁を第3号竪穴遺構から切られ、北東隅及び東隅を217号小竪穴等に切られている。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・椀、青磁、須恵器などの破片、鉄滓、焼土塊が出土している。

土師器（第11図9） 9は、土師器皿である。復元口径7.6㎝、器高1.1㎝、底径6.0㎝を測る。小型のもので、体部は底部から外上方へ直線的に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。体部内外面共に横ナデ調整である。底部切り離し痕については痕跡を残していない。色調は内外面共に淡黄灰褐色を呈している。胎土は、ほとんど砂粒を含まないものである。焼成は良好と思われる。

5） 第5号竪穴遺構

（1） 遺 構（第5図）

主軸をN－11°－W方向にとるもので、標高50.25mから50.5mの間にあり、第1号竪穴遺構の東26mの所に位置し、調査区南壁に接している。形は、円形を呈し、長軸長1.77m×短軸長1.55mを測る。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿、青磁、瓦器質の破片、鉄滓、鞴の羽口と思われるものなどが出土している。

土師器（第11図10）　10は、土師器皿である。復元口径7.4cm、器高1.0cm、底径6.4cmを測る。器壁は肉厚で小型である。体部は底部からほぼ垂直的に屈曲して立ち上り、口縁部をやや内彎させ、端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整を施している。色調は内外面共に赤褐色を呈している。胎土は0.5mm程の白色粒及び黄金色粒を多く含んでいる。焼成は良好と思われる。

青磁（第11図11・12）　11は、龍泉窯系青磁椀の小片と思われる。図示した傾きは定かではない。口縁端部を丸くおさめ、口縁部内面には1条の沈線を施している。釉色は内外面共に暗青緑色を呈している。胎土は青灰白色を呈する緻密なものである。焼成は良好。12は、龍泉窯系青磁椀1－5類に属するものと思われる。図示した傾きは定かではない。口縁端部を丸くおさめ、体部外面には片彫の線により鎬の無い蓮弁文を施している。釉色は暗黄緑色を呈している。胎土は灰白色を呈する緻密なものである。焼成は良好。

その他の遺物（第11図13）　13は、鞴の羽口と思われる土製破片である。形態を復元すると円筒形になるものと思われる。筒の内径は約4cm程で、熱のためか、黒変している。胎土は1mm前後の白色粒を多く含む粗なものである。

6）　第6号竪穴遺構

（1）　遺　構（第5図）

主軸をN－29°－W方向にとるもので、標高50.25mから50.5mの間にあり、第5号竪穴遺構の西2mの所に位置している。形は、北側壁を削平されているが隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸長1.87m×短軸長1.24mを測る。床面は北側と南側で0.16m程の段差を有し、南側の方が深くなっている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、糸切り離し痕の残る土師器、白磁、青磁、瓦器質小片、鉄滓、鞴の羽口などが出土しているが、あまりの細片のため土器の図化はできなかった。

鞴羽口（第11図14）　14は、鞴の羽口である。土装のもので、炉と接する送風口の破片である。形態は円筒形になるものと思われる。熱のためか、器表が溶けて気泡ができており、色も黒色か紫色を呈している。胎土は1mm前後の白色粒を多く含む粗なものである。

7） 第7号竪穴遺構

（1） 遺 構（第6図）

主軸をN－62°－E方向にとるもので、標高50.25mから50.5mの間にあり、第6号竪穴遺構の西7mの所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.67m×短軸長1.35mを測る。

当遺構北壁は、58・59号小竪穴によって切られている。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・杯、青磁椀、須恵器杯、瓦器質の鉢、鉄滓、焼土塊などが出土している。

土師器（第11図15～19） 15～17は、土師器皿である。15は、復元口径8.6cm、器高0.9cm、底径7.0cmを測る。器壁は肉厚で、体部は、底部からわずかに屈曲させただけのもので、すぐにやや尖りぎみで丸くおさめた口縁部となる。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外面共に横ナデ調整が施されている。内底にもナデ調整を施したものか底部に板目圧痕を残す。色調は内外面共に淡褐色を呈する。胎土は砂粒をほとんど含んでいない。焼成は良好と思われる。16は、復元口径8.4cm、器高0.9cm、底径7.0cmを測る。体部は、底部から外上方へ直線的に立ち上る。口縁端部は丸くおさめられている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整を施している。色調は外面で黄灰褐色を呈し、内面で淡褐色を呈する。胎土は4mm程の白色粒1粒と0.5mm程の白色及び黒色粒を含む。焼成は良好と思われる。17は、復元口径7.8cm、器高1.1cm、底径6.6cmを測る。器壁は肉厚で、体部は底部から外上方へ直線的に立ち上る。口縁部はやや尖りぎみで端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整を施している。色調は内外面共に淡褐色を呈している。胎土は0.5mm程の白色粒を少量含むものである。焼成は良好と思われる。18は、土師器杯である。口径14.2cm、器高3.6cm、底径7.2cmを測る。体部は底部から外上方へ直線的に立ち上り、口縁部をやや内傾ぎみに整えている。口縁部はやや尖りぎみで端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられているが、やや粗である。体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には回転によるナデ調整で渦巻の様を呈す。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈している。胎土は微砂粒を含むだけの精良なものである。焼成は良好と思われる。

19は、土師器鉢の小片である。図示した傾きは定かではない。口縁端部を外方へ屈曲させ、口縁部内面に１条の突帯を粘りつけたような形状に整えている。色調は外面で暗灰褐色を呈し、内面で暗茶褐色を呈している。胎土は１㎜前後の白色粒を多く含み、粗な多孔質のものである。

青磁（第11図20）　20は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－２類に属するものと思われる。口縁部がやや外反し、端部を丸くおさめている。体部内面には片彫りと櫛描きによる蓮華の草花文を施している。釉色は内外面共に淡黄緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈する緻密なものの中に微粒ではあるが、黒色粒をみとめる。焼成は良好。

8）　第８号竪穴遺構

（1）　遺　構（第６図）

主軸をＮ－10°－Ｅ方向にとるもので、標高 50.25 ｍから50.5ｍの間にあり、第７号竪穴遺構の西４ｍの所に位置している。形は、北側壁を削平されているが隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸長1.25ｍ×短軸長0.72ｍを測る。

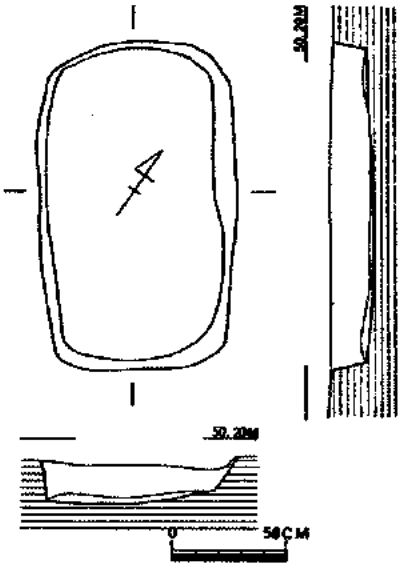
（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器杯破片、鉄滓などが出土しているが、細片のため図化することができなかった。

9）　第１号木棺墓

（1）　遺　構（第７図）

主軸をＮ－35°－Ｗ方向にとるもので、標高50ｍから 50.25 ｍの間にあり、第１号竪穴遺構の北８ｍの所に位置している。墓壙は、長方形を呈し、長軸長1.46ｍ×短軸長0.86ｍを測る。



第７図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１号木棺墓実測図（１／30）

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器皿５点、青磁椀１点、鉄刀

1口、釘11本、楔1本、針1本、不明鉄器1点が出土している。これらの出土状況は、まず、青磁椀の中に5点の土師器皿が裏向きの状態で入ったものが遺構北側東寄りに置いてあった。又鉄刀は遺構ほぼ中央に刃を北側に向け切先を東位にとってあった。その鉄刀のすぐ南側に不明鉄器があり、東側及び南側に棺材と思われる木片と共に釘、楔、針などが各々出土した。

土師器（第12図2～6）　2～6は、土師器皿である。2は、口径8.2㎝、器高1.3㎝、底径6.5㎝を測る。体部は、底部から外上方へ立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外共に横ナデ調整が施されている。内底には不定方向ナデ調整が施されている。底面には板目圧痕が残る。色調は内外面共に淡褐色を呈している。胎土は1㎜前後の白色粒及び0.5㎜程の黒色粒を多く含んでいる。焼成は良好と思われる。3は、口径8.4㎝、器高1.2㎝、底径6.5㎝を測る。器壁は底部が薄く、口縁部で厚くなっている。体部は底部から外上方へ立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外面共に横ナデ調整が施されている。内底は未調整である。色調は外面で茶褐色を呈し、内面で淡褐色を呈している。胎土は0.5㎜程の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。4は、口径8.2～8.5㎝、器高1.4㎝、底径6.8㎝を測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。体部は内外面共に横ナデ調整が施されている。内底には不定方向ナデ調整が施されており、底部に板目圧痕を残す。色調は内外面共に淡褐色を呈す。胎土は1㎜前後の白色粒を多く含んでいる。5は、口径8.3㎝、器高1.4㎝、底径6.7㎝を測る。体部は底部から外上方へ立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺及び内底は未調整である。色調は内外面共に淡褐色を呈する。胎土は1㎜前後の白色粒を多く含んでいる。焼成は良好と思われる。6は、口径8.4㎝、器高1.4㎝、底径5.4㎝を測る。器壁は底部でやや薄く、口縁部でやや厚い。体部は底部から外上方へ立ち上り、口縁部をやや尖りぎみに、端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り切り離し後の縁辺及び内底は未調整である。色調は外面で褐色を呈し、内面で淡褐色を呈している。胎土は1㎜前後の白色粒を多く含んでいる。焼成は良好と思われる。

青磁（第12図1）　1は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2－b類に属するものと思われる。口径16.8㎝、器高7.6㎝、高台径6.1㎝、高台高1.0㎝を測る。器壁は全体に肉厚となっている。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁部を若干外反させる。口縁端部は丸くおさめている。底部から体部1.5㎝程の高さまで箆削り調整で、それ以上を横ナデ調整している。高台は断面四角形で、高台部畳付及び高台見込みは露胎である。口縁部内面には1条の沈線を巡らし、内面には片彫と櫛描による蓮華の草花文を、上からみた文様2つと蓮華の葉を横からみた文様1つを配す。見込みには弱い沈線が入り蓮華文を配す。底部には高台を挟んで対角に重ね焼成の際

の目跡を４ヶ所残す。色調は内外面共に黄灰緑色を呈す。胎土はやや赤味をおびた淡黄色を呈し緻密である，焼成は良好。こまかい真入が器表面全体を被っている。

鉄刀（第12図７）　７は、鉄短刀である。切先及び茎を欠く。現存長22.8cm、刃部長17.7cm、最大身巾2.4cm、最大茎巾1.5cm、背巾0.5cmを測る。關部は背と刃部で0.7cm程ずれており背部より刃部側の方が切先に近いものである。刀身は真直ぐに伸び、直刀の形状を示す。断面からみると、片面は鎬造り、他面は平造りと思われる。図化できなかったが、身部には鞘の痕跡と思われる木質片が付着している。

釘（第12図９～12）　釘は全部で11本出土している。現存長は2.6cm～4.4cmで、最大巾は0.8cm～1.2cmである。釘の頭には叩打痕を残している。木棺材と思われる木質片中に埋った状態で検出されたことを考慮すると、木棺を固定する材として使用された可能性が高い。

楔（第12図13）　楔はこれ１本のみである。釘と共伴して出土している。現存長3.1cm、最大巾0.9cm、最小巾0.2cm、厚さ0.3cmを測る。

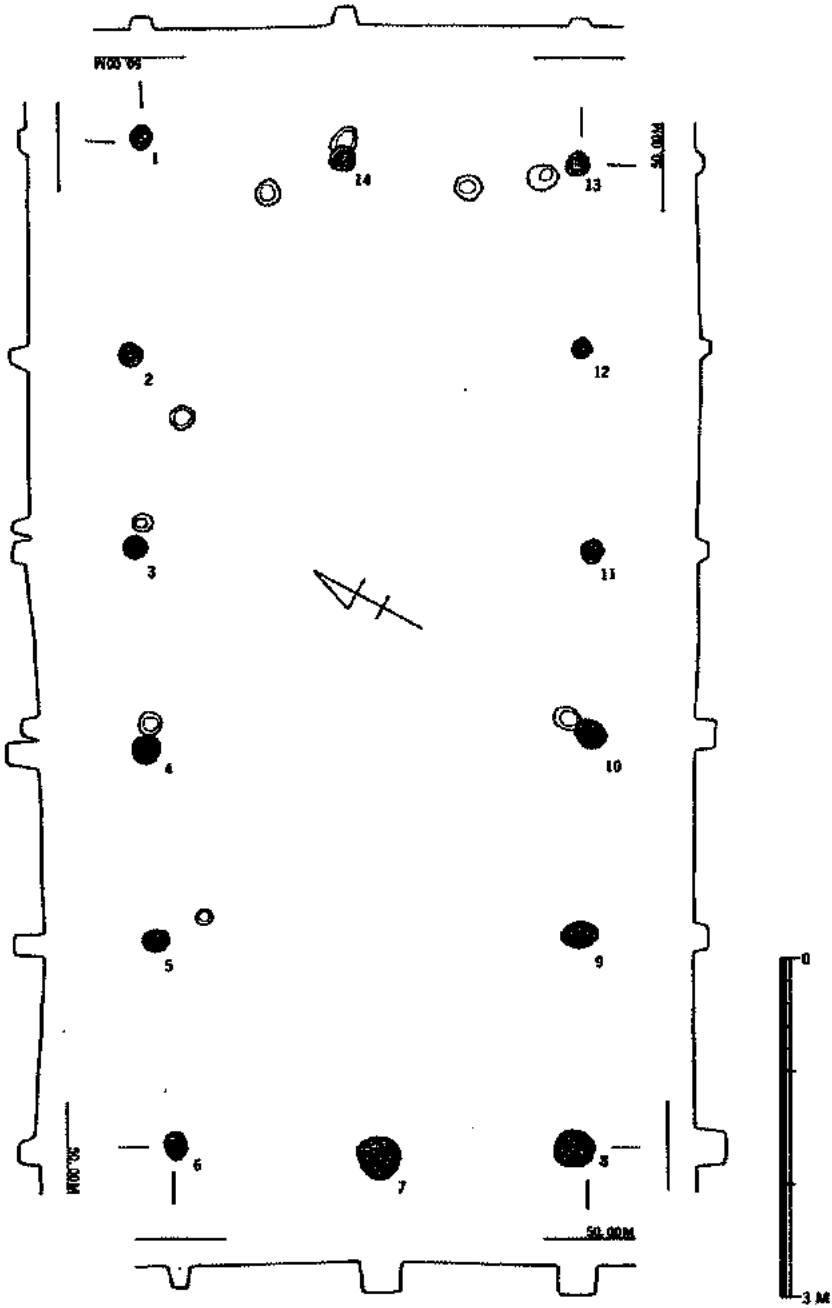
針（第12図14）　現存長2.4cm、最大巾0.4cm、厚さ0.2cmを測る。頭に長さ0.2cm×巾0.1cmの長楕円形を呈する穿孔がある。

不明鉄器（第12図８）　８は、名称及び用途伴に不明の鉄器である。最大長7.7cm，最大巾2.1cm、最大厚0.3cmを測る。中央部を中軸にして、左右相対をなす三角形状を呈するものである。中央部付近3.4cmが刃部のようになり両端はやや尖りぎみに細く先端は丸くなる。刃部のようになっている端には0.4cm程の抉りがみられる。私見ではあるが、両端に何かをつけ中央部の刃部のような所を使用し，物を削る用途が考えられる。

10)　第１号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第８図）

主軸をN－62°－E方向にとるもので、標高49.5mと49.75mの間に、等高線と直交する形で、第５号竪穴遺構の北24m、小さな谷を狭んだ所に位置している。短軸２間×長軸５間の建物で、東側短軸長は4.08mを測り、各柱穴間長は北から1.78m，2.08mを測る。西側短軸長は3.74mを測り、各柱穴間長は北から1.76m、1.76mを測る。北側長軸長は9.19mを測り、各柱穴間長は東から1.92m、1.76m、1.76m、1.70m、1.88mを測る。南側長軸長は９mを測り、各柱穴間長は東から1.64m、1.70m、1.60m、1.82m、1.88mを測る。

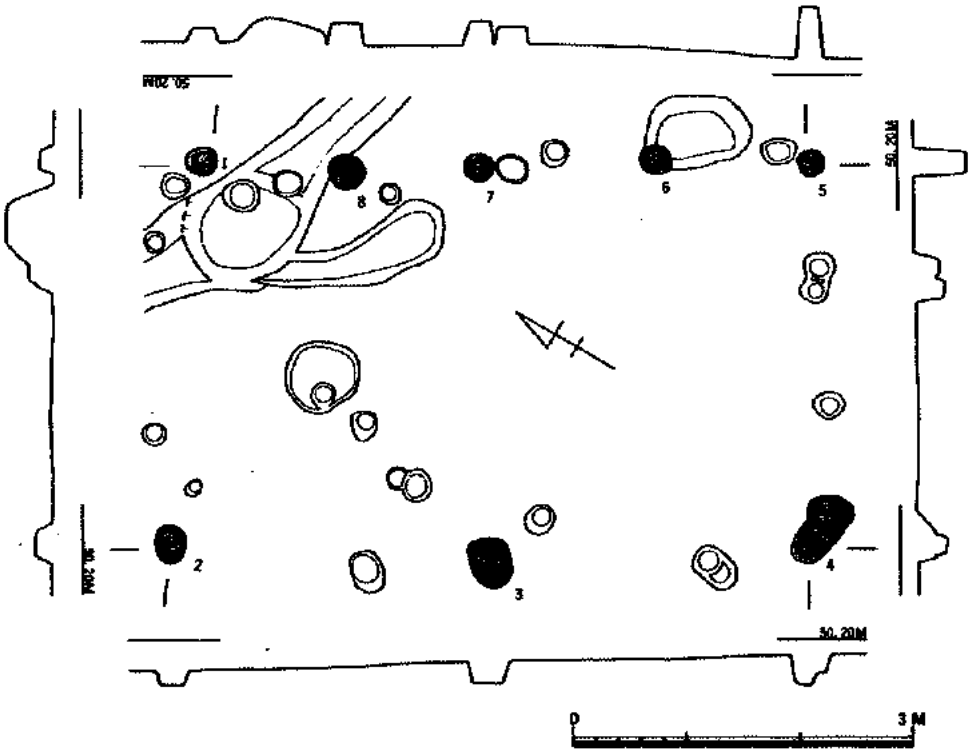


第８図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第１号掘立柱建物跡実測図（１／60）

（2）　出土遺物

当遺構６・７・８号柱穴からは、糸切り離し痕の残る土師器杯・篦切り離し痕の残る土師器皿などが出土している。

土師器（第11図１・２）　１・２は、土師器皿である。１は、口径9.4㎝、器高0.9㎝、底径7.9㎝を測る。体部は、底部からわずかに立ち上らせたもので、すぐに口縁部となる。この口縁部はやや尖りぎみで端部を丸くおさめたものである。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外面共に横ナデ調整が施されている。内底には不定方向のナデ調整が施され、底面には板目圧痕が残る。色調は内外面共に淡黄灰褐色を呈している。胎土は砂粒をほとんど含まない精良のものである。焼成は良好と思われる。２は、復元口径9.0㎝、器高1.0㎝、底径7.0㎝を測る。体部は、底部から外上方に立ち上り、器壁を徐々に減じ、口縁端部を尖りぎみにおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は、内外面共に横ナデ調整が施されている。内底には不定方向のナデ調整が施され、底面には板目圧痕が残る。色調は内外



第９図　野坂ホテ田遺跡Ａ区第２号掘立柱建物跡実測図（１／60）

面共に化粧がけのため赤褐色を呈する。胎土は淡灰白色を呈するもので砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好と思われる。底糸切り離し痕の残る土師器皿については、細片のため図化することができなかった。

11) 第2号掘立柱建物跡

(1) 遺 構 (第9図)

主軸をN－30°－W方向にとるもので、標高50mの等高線と直交する形で、第1号木棺墓の北東16mの所に位置している。短軸1間×長軸4間の建物で、南側短軸長は3.64mを測り、柱穴間長は3.40mを測る。北側短軸長は3.70mを測り、柱穴間長は3.35mを測る。東側長軸長は5.65mを測り、各柱穴間長は北から1.28m、1.18m、1.54m、1.38mである。西側長軸長は6.0mを測る。東側長軸の柱穴に相対する西側長軸の柱穴は3号柱穴のみで、6・8号柱穴に相対する柱穴は検出することができなかった。2号柱穴から3号柱穴は2.80m、3号柱穴から4号柱穴は2.79mを測る。当遺構8号柱穴は第1号溝状遺構埋土上から切り込んだ状況で検出されている。

(2) 出土遺物

当遺構1～8号柱穴からは、底糸切り離し及び篦切り離し痕の残る土師器皿・杯、瓦器質の高台付椀、同安窯系青磁と思われる破片、鉄滓などが出土している。

土師器(第11図3)　3は、土師器皿である。復元口径9.8cm、器高1.2cm、底径7.2cmを測る。体部は、底部から体部の境をやや細めにし、外上方へ立ち上る。口縁端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外面共に横ナデ調整が施されている。内底には不定方向のナデ調整が施され、底面には板目圧痕が残る。色調は外面で黄灰褐色を呈し、内面で赤橙色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。

12) 第3号掘立柱建物跡

(1) 遺 構 (第10図)

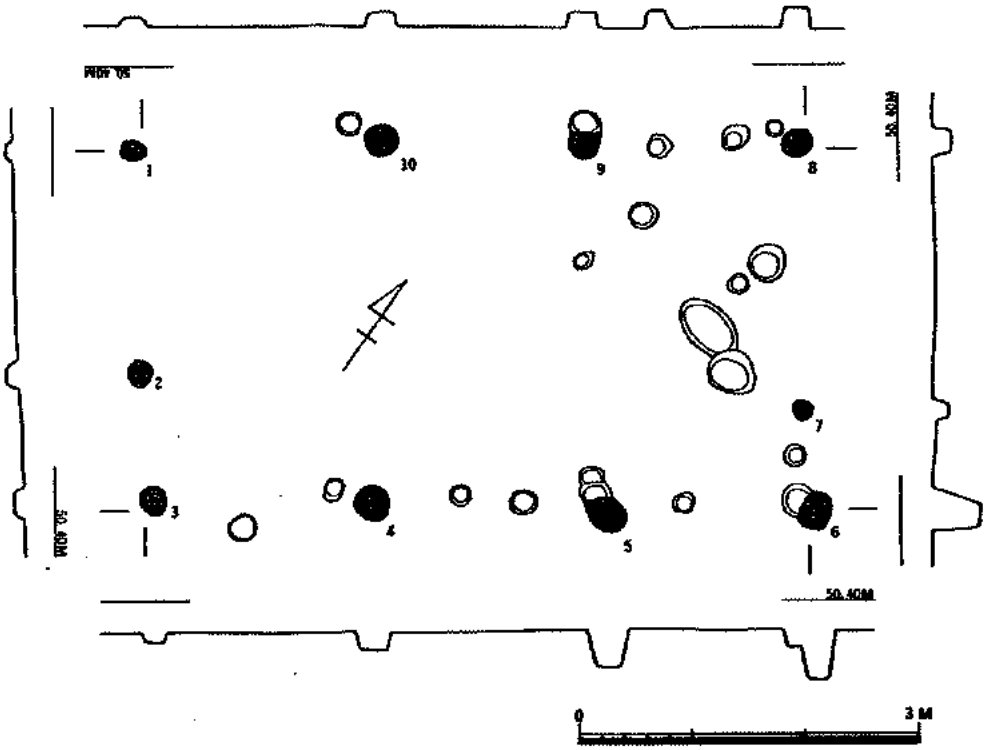
主軸をN－54°－E方向にとるもので、標高50mから50.25mの等高線の間に、等高線と平行

する形で、第２号掘立柱建物跡の西２ｍの所に位置している。短軸２間×長軸３間の建物で、東側短軸長は3.56ｍを測り、柱穴間長は北側から2.38ｍ、0.91ｍを測る。西側短軸長は3.34ｍを測り、柱穴間長は北側から1.98ｍ、1.11ｍを測る。短軸２間ではあるが、２・７号柱穴が南側に偏し、短軸長の約⅓の位置にある。北側長軸長は6.08ｍを測り、柱穴間長は西側から2.18ｍ、1.78ｍ、1.89ｍを測る。南側長軸長は6.06ｍを測り、柱穴間長は西側から1.91ｍ、2.02ｍ、1.84ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構４～６号・８～10号柱穴からは、土師器皿、青磁皿・椀、瓦器質の土器、鉄滓及び焼土塊などが出土している。

土師器（第11図４）　　４は、土師器皿である。復元口径7.6ｃｍ、器高1.1ｃｍ、底径5.4ｃｍを測る。体部は底部から急激に屈曲し外上方へ立ち上る。口縁端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺はかるくナデている。体部は内外面共に横ナデ調



第10図　　野坂ホテ田遺跡Ａ区第３号掘立柱建物跡実測図（１／60）

整を施している。内底の調整は不明である。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈している。胎土は白色の微砂を含むものである。焼成は良好と思われる。

青磁（第11図５・６）　５は、同安窯系青磁皿Ⅰ－２類に属するものと思われる。体部は、底部からやや上位で屈曲し、外上方へ立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。外面屈曲部下位は篦削り調整を施した後に施釉している。内面は体部と見込みの境に段を有している。見込みには篦による片彫りと櫛描によるジグザグ文のようなものを配している。釉色は内外面共に暗黄緑色を呈している。胎土は白灰色を呈し密なものである。焼成は良好である。復元口径10.2cmを測る。６は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－１類に属するものと思われる。復元口径16.6cmを測る。器壁は肉厚である。体部は外上方に立ち上り、口縁部を若干外反させ端部を丸くおさめている。内外面共に文様を有していない。釉色は暗黄緑色を呈している。胎土は白灰色を呈し緻密である。焼成は良好。

13)　溝状遺構（第３図）

当調査区内には第１～３号までの溝状遺構が存在している。これらの遺構は、調査区の北側中央、標高49.75ｍと50ｍの間に位置しており、相互に切り合っている。この切り合い関係については遺構が浅かったことと土質・土色などが似ていたことなどもあいまって確認できなかった。出土遺物については、切り合いのない場所から出土しているもので、各遺構のものは混入していない。これらを踏まえて各遺構について述べる。

（１）　第１号溝状遺構

東西に走るもので、直線距離にして12.8ｍを測る。東端部が狭く、西側に行くにつれてその巾を増して行き、西端部で最大となる。

出土遺物（第11図21・22）　21は、滑石製の石蓋である。つまみの部分の破片である。つまみを右回転方向に２段に分けて削り出している。色調は蓋部で銀色を呈し、つまみ部で黒銀色を呈す。22は、滑石製の石鍋と思われる。底部のみの破片である。底を上にして右回転方向に削り出している。色調は外面で暗黒褐色を呈し、内面で黒銀色、断面は小豆色を呈する。他に土師器杯・底に篦切り離し痕の残る土師器皿、青磁、瓦器質の土器、鉄滓及び焼土痕などが出土している。

（２）　第２号溝状遺構

北西から南東に走るもので、直線距離にして3.3ｍを測る。北西側は第１号溝状遺構との切り合いで消滅している。

出土遺物（第11図23）　23は、土師器椀である。復元口径16.5cmを測る。器壁は薄く、体部は緩やかに外上方に立ち上り、口縁部を外反させる。内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に淡黄灰褐色を呈している。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好とは言えない。共伴したものに瓦器質の椀及び土師器皿がある。土師器皿については底に糸切り離し痕などの有無について確認できなかった。

（３）　第３号溝状遺構

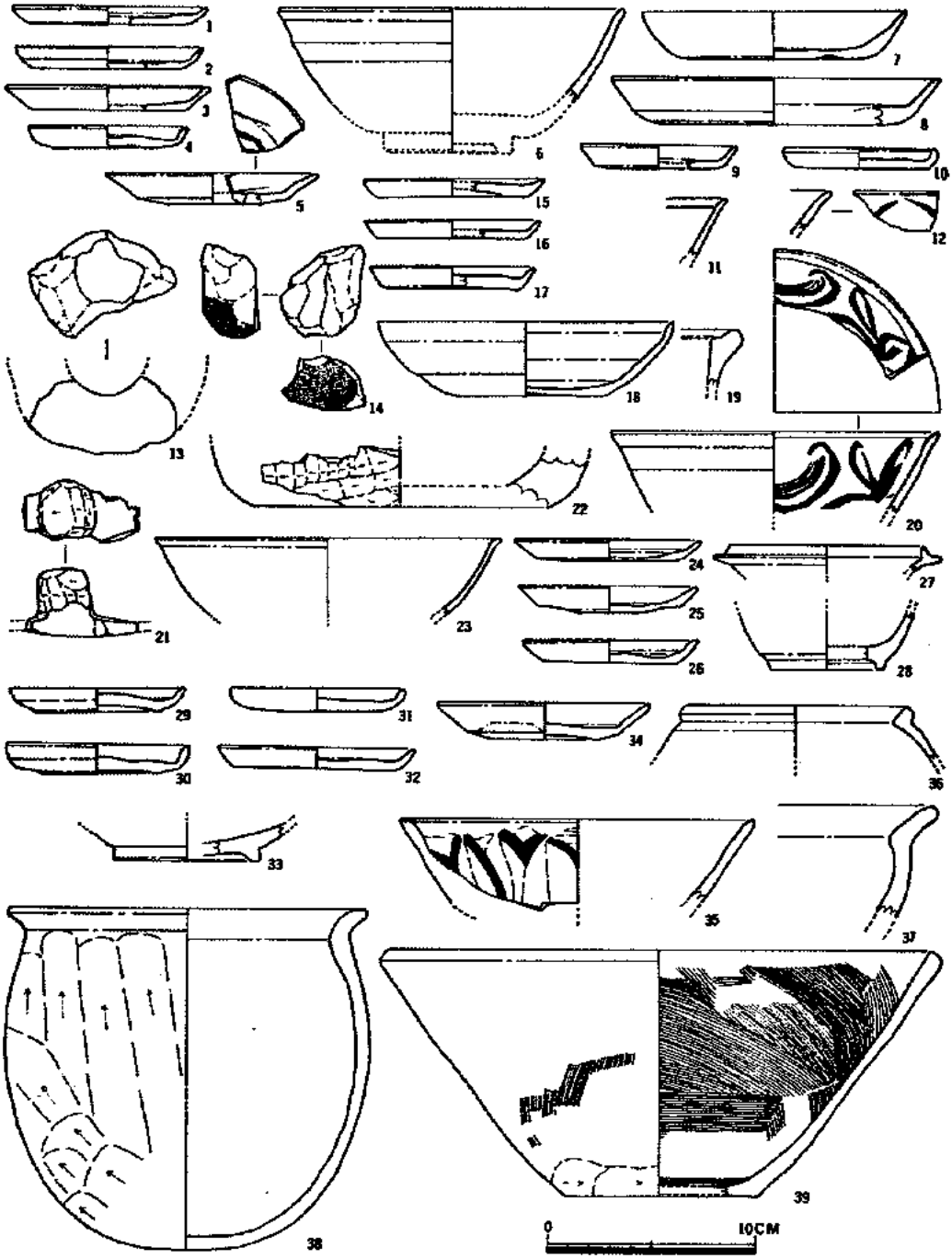
南西から北東に走るもので、直線距離にして4.5ｍを測る。遺構中央部が第１号溝との切り合いで消滅している。

出土遺物（第11図24～28）　24～26は、土師器皿である。24は、復元口径9.0cm、器高1.0cm、底径7.0cmを測る。器壁は薄く、体部は底部から緩やかに屈曲する。口縁端部はやや尖りぎみである。底部には篦切り離し痕が残っている。篦切り離し後の縁辺はかるくナデた程度である。体部は内外面共に横ナデ調整を施しており、内底は回転によるナデである。色調は内外面共に淡褐色を呈している。胎土は0.5mm以下の白色粒をわずかに含むものである。焼成は良好と思われる。25は、口径8.6cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。体部と底部の境は器壁が薄くなっている。体部中途から緩やかに屈曲して立ち上る。口縁端部はやや尖りぎみである。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。体部は内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整が施されている。底部には板目圧痕が残る。色調は外底面で暗黄灰褐色を呈し、外面で暗褐色を呈す。胎土は0.5mm程の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。26は、口径8.5cm、器高1.1cm、底径6.5cmを測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底面には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。体部は内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整が施されている。底部には板目圧痕が残る。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面で暗褐色を呈す。胎土は0.5mm以下の白色粒及び赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。27・28は、須恵器杯及び高台付椀である。27は、復元口径9.2cm、受部径11.0cmを測る。たち上りは0.5cmと底く、内傾し、口縁端部は鋭く尖っている。内側は垂直に近く立ち上る。受部は浅く水平にのび、端部を丸くおさめている。体部は内外面共に横ナデ調整を施している部分が残存している。色調は体部外面で黒灰色を基調とし、黄緑色の斑点をちりばめたようになっている。立ち上り及び体部内面で青灰色を呈す。胎土は、暗青灰色を中心に青灰色で挟んだような色調を呈し、黒色及び白色粒を含むものである。焼成は良好である。28は、復

元高台径5.4㎝を測る。体部は底部から外上方に立ち上る。高台は底部と体部の境に付きほぼ垂直に立つ。色調は内外面共に淡青灰色を呈している。胎土は0.5㎜程の白色粒を含むものである。焼成は良好。

14) その他の小竪穴出土遺物

土師器（第11図29～32・37・38） 29～32は、土師器皿である。29は、口径4.4㎝、器高1.2㎝、底径6.1㎝を測る。器壁は肉厚で、体部中途に段をもって屈曲するもので、そのまま口縁端部となる。底部は若干あげ底となっており、篦切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は未調整である。体部は内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗茶褐色を呈している。胎土は0.5㎜程の白色粒を含んでいる。焼成は良好と思われる。30は、口径8.8㎝、器高1.5㎝、底径5.4㎝を測る。器壁は肉厚で体部中途で屈曲して垂直に立ち上る。底部には糸切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は未調整である。体部は内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に茶褐色を呈している。焼成は良好と思われる。31は、口径8.4㎝、器高1.1㎝、底径7.2㎝を測る。体部は底部から垂直に屈曲し、口縁部となり端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整を施しており、内底は不定方向にかるくナデている。色調は外面で茶褐色を呈し、内面で暗褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を多く含んでいる。焼成は良好と思われる。32は、口径9.4㎝、器高1.0㎝、底径8.0㎝を測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部内外面共に横ナデ調整を施しており、内底は不定方向ナデ調整を施している。底部には板目圧痕が残る。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈している。胎土は白色の微砂粒を含むものである。焼成は良好と思われる。37は、土師器土鍋である。器壁は肉厚である。体部は頸部付近でやや内彎し、頸部内面に1稜を有して口縁部に続き大きく外反する。口縁端部は丸くおさめている。体部、口頸部共に横ナデ調整を施している。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、口縁部に黒斑を有する。内面では暗黄灰褐色を呈す。胎土は1㎜前後の白色粒及び微粒の黄金色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。38は、土師器甕である。口径17.0㎝、器高16.4㎝を測る。底部は平底様の丸底を呈しており、体部は緩やかにふくらみ球形を呈する。頸部はやや内彎し、内面に緩やかな稜を有して外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸くおさめている。体部外面は底から口縁部方向への篦削り調整を施し、内面は篦削り調整を施した後にナデ調整を施している。口縁部は内外面共に横ナデ調整を施している。色調は外面で赤褐色を呈し、底部及び胴部最大部へ黒斑を有する。内面では暗黒褐色を呈す。胎土は白色及び半透明の砂粒を多く含む多孔質のものである。焼成は良好と思われる。

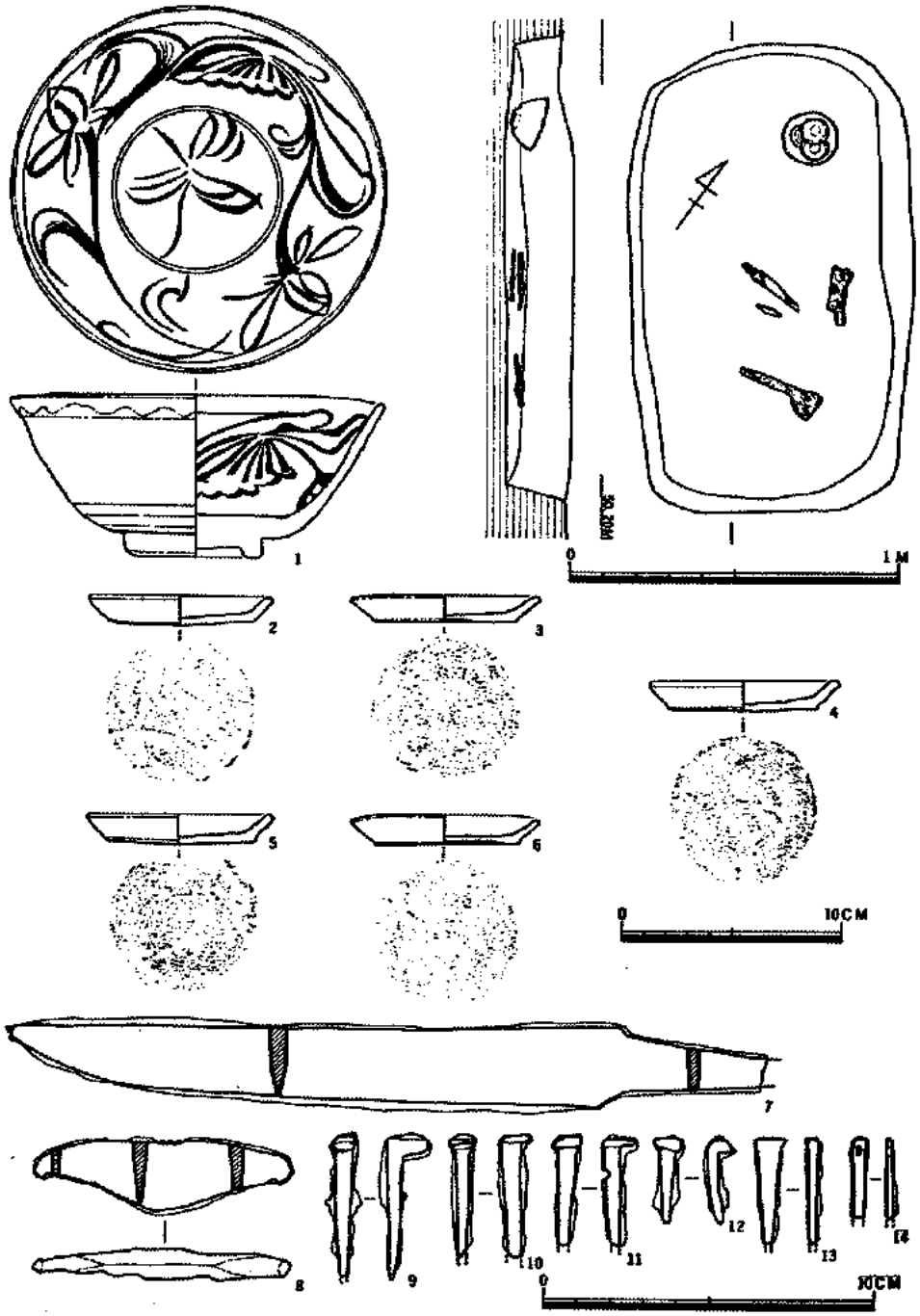


第11図　野坂ホテ田遺跡A区出土遺物実測図（1／3）

瓦器（第11図33・39）　33は、高台付椀である。復元口径7.0cmを測る。器壁は肉厚である。体部は底部との境に稜線を有し、外上方へ立ち上る。高台は巾広でやや外方へ張り出す。体部内外面共に丁寧なナデ調整を施している。色調は外面で暗灰色を呈し、内面で黒灰色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良のものである。焼成は良好と思われる。39は、鉢である。復元口径26.0cm、器高11.8cm、底径9.4cmを測る。平底の底部から外上方へ直線的に立ち上る体部で、口縁端部を方形におさめている。体部は縦方向の刷毛目調整を施した後に横ナデ調整を施している。内面は底部及び体部下半に横ナデ調整を施し、それ以上は右斜下から左斜上への縦刷毛目調整を左回転方向に施している。色調は外面で暗灰色を呈する。底部から口縁部にかけて煤状のものが付着しているものか、黒色を呈している。内面では暗灰色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成は良好と思われる。

陶磁器（第11図34～36）　34は、同安窯系青磁皿Ⅰ－1－a類に属するものと思われる。口径10.0cm、器高1.8cm、底径5.0cmを測る。体部は中程で屈曲し、見込みとの境に段を有している。口縁端部は外面を丸くおさめ、内面を直線にし鋭い稜をなす。調整は体部屈曲部分以下を篦削り調整し、底部を若干あげ底にしている。内外面共に無文で、外面下半及び底部は露胎である。釉色は淡灰黄緑色を呈す。胎土は黄灰白色を呈しており、緻密である。焼成は良好。35は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類に属するものと思われる。復元口径17.0cmを測る。器壁は肉厚で、口縁端部を丸くおさめている。体部外面に篦状工具による削り出しの鎬蓮弁文を配している。釉色は暗緑灰色を呈している。胎土は青味をおびた灰白色を呈し、部分的に桃色を呈するものである。焼成は良好である。36は、壺と思われる破片である。胴長になるものと思われるもので、胴部と頸部の境は不明瞭である。口縁部は「く」字に短く折れ、端部断面三角形を呈する。釉色は内外面共に暗灰黄緑色を呈する。胎土は黄灰白色を呈し、微粒の黒色粒を含むものである。

その他の遺物　鉄滓を出土した小竪穴が16基あり、鞴の羽口を出土した小竪穴が3基ある。図化できなかったが、89号小竪穴から鉄鏃の茎のような形をした鉄器細片が出土している。



第12図　野坂ホテ田遺跡A区第1号木棺墓遺物出土状況(1／20)及び出土遺物実測図

(土器1／3、鉄器1／2)

第13図　野坂ホテ田遺跡B区遺構配置図（1／200）

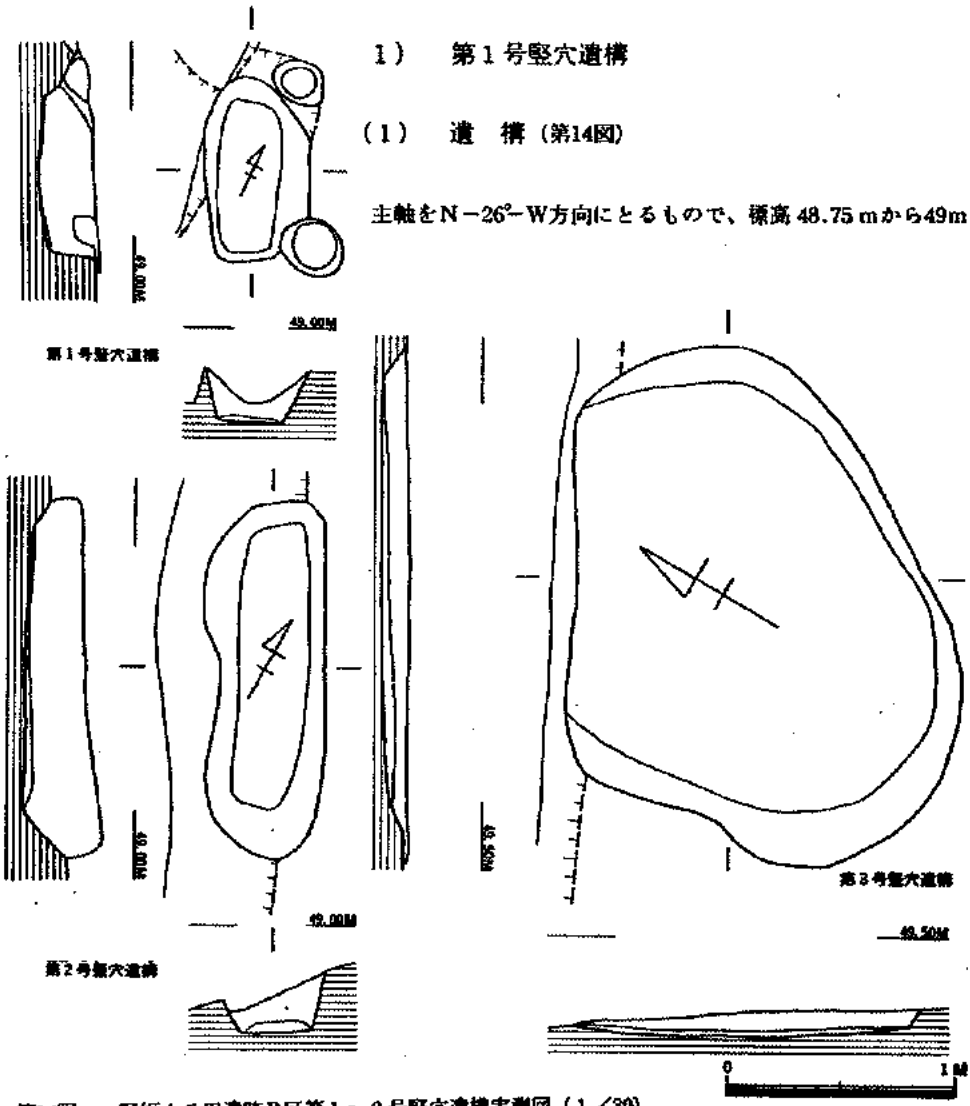
3. B 区 の 調 査

当区は、面的調査を実施した内、北側に位置するもので、標高48mから49.25 mの間に分布する1400m²の区域である。当区からは、竪穴遺構16基、溝状遺構7基、掘立柱建物跡22棟、掘立柱構築物1基と多数の小竪穴遺構を検出した。A区同様に、小竪穴遺構に関してP番号1番から422番を符した。各遺構の柱穴に含まれるものは、後に各遺構の柱穴番号に変更する。

1） 第1号竪穴遺構

（1） 遺 構（第14図）

主軸をN－26°－W方向にとるもので、標高48.75 mから49m



第14図　野坂ホテ田遺跡B区第1～3号竪穴遺構実測図（1／30）

の間にあり、調査区西壁の南側に接した所に位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長0.82m×短軸長0.46mを測る。北西壁は水田区画のため削平され、北及び東隅は399号小竪穴などによって切られている。

当遺構からの出土遺物は無い。

2） 第2号竪穴遺構

（1） 遺 構（第14図）

主軸をN－30°－W方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、調査区西壁に接し第1号竪穴遺構の北3mの所に位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長1.59m×短軸長0.45mを測る。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・鉢、須恵器の壺と思われる破片、瓦器質の椀、青磁椀、白磁、滑石製石鍋、鉄滓などが出土している。

土師器（第42図16） 16は、土師器土鍋の破片である。図示した傾きは定かではない。器壁は肉厚である。体部上位はやや内彎ぎみに口縁部下に至る。これより「く」字に屈曲し外上方に口縁部がやや内彎ぎみに立ち上がる。口縁端部は外面を横ナデ調整により平坦に整え、断面三角形を呈する。体部外面は左斜下から右斜上方への刷毛目調整を施し、屈曲部から口縁部にかけては横ナデ調整を施している。内面は横方向の刷毛目調整を施している。色調は内外面共に黄褐色を基調とするが、外面では煤のためか黒色化している。胎土は中心黒色を黄褐色が挟んだ色調を呈するもので、0.5mm以下の白色粒及び赤褐色粒を含むものである。

青磁（第42図15） 15は、龍泉窯系椀Ⅰ－5類に属するものと思われる。図示した傾きは定かではない。口縁端部は丸くおさめられている。体部外面には片彫の線により鎬の無い蓮弁文を施している。釉色は暗黄緑色を呈す。胎土は青灰白色を呈するもので、緻密である。

3） 第3号竪穴遺構

（1） 遺 構（第14図）

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高49mから49.25mの間にあり、調査区南壁中央部

付近に位置している。形は、楕円形を呈し、長軸長3.28m×短軸長4.40mを測る。遺構北西壁を第2号溝状遺構に切られている。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・杯、須恵器壺・甕、白磁椀などが出土している。

土師器（第42図17～21） 17～21は、土師器皿である。17は、復元口径8.0cm、器高1.0cm、底径5.8cmを測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁端部を若干外反させる。調整は、内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。18は、復元口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.8cmを測る。体部は外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には篦切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は横ナデ調整を施しており、内底は不定方向のナデ調整である。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は1mm前後の半透明粒及び微粒の白色粒・赤色粒を含むものである。19は、復元口径9.4cm、器高1.3cm、底径7.0cmを測る。体部は外上方に立ち上り、口縁端部はやや尖りぎみである。底部には篦切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。色調は内外面共に淡褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含む精良なものである。焼成は良好と思われる。20は、復元口径9.4cm、器高0.8cm、底径7.6cmを測る。器壁は薄く、体部は外上方に立ち上り、口縁端部は長丸におさめている。底部は上げ底で、篦切り離し痕を残し、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。体部は内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。底部には板目圧痕が残る。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面はやや赤みをおびた淡黄色を呈す。胎土は0.5mm程の赤褐色粒及び微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。21は、復元口径10.6cm、器高1.3cm、底径8.0cmを測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁部は体部に比して細く、端部を丸くおさめている。体部内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に赤みをおびた黄褐色を呈す。胎土は0.5mm程の赤褐色粒及び微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。

白磁（第42図22） 22は、白磁椀と思われる。図示した傾きは定かではない。口縁部は器壁が薄く、小さい玉縁を持っている。施釉は薄く、釉色は黄灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し緻密である。焼成は良好。

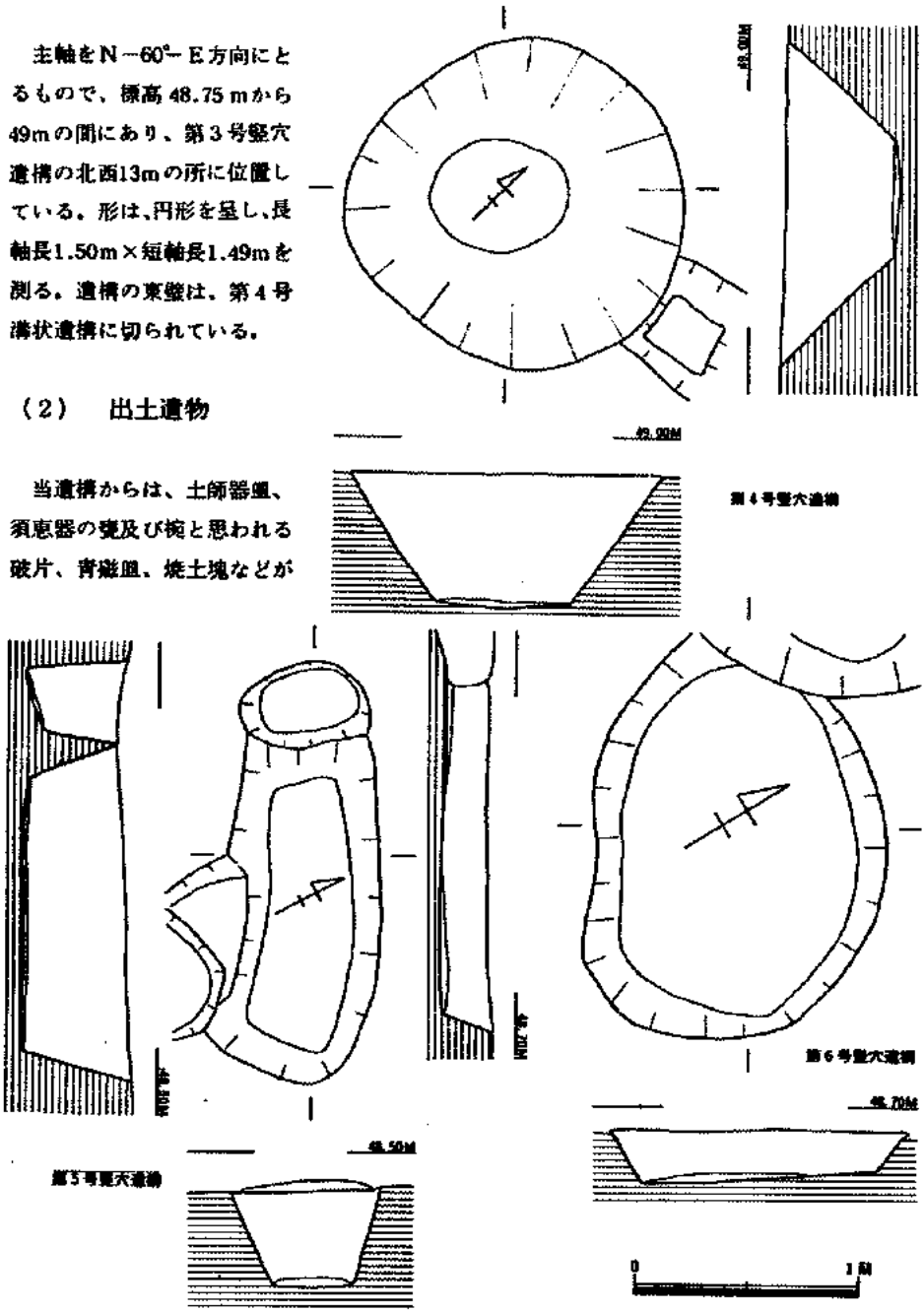
4） 第4号竪穴遺構

（1） 遺 構（第15図）

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、第3号竪穴遺構の北西13mの所に位置している。形は、円形を呈し、長軸長1.50m×短軸長1.49mを測る。遺構の東壁は、第4号溝状遺構に切られている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器皿、須恵器の甕及び椀と思われる破片、青磁皿、焼土塊などが



第15図　野坂ホテ田遺跡B区第4～6号竪穴遺構実測図（1／30）

出土している。いずれも図化することができなかった。土師器皿については、糸切り離し痕を残すもので、板目圧痕のみられるものも検出している。

5） 第5号竪穴遺構

（1） 遺 構（第15図）

主軸をN－62°－W方向にとるもので、標高48.25mから48.5mの間にあり、第18号掘立柱建物跡の北2mの所に位置している。長軸長1.53m×短軸長0.67mを測る。遺構北西壁及び南壁は、それぞれ389号・382号小竪穴に切られている。

当遺構からの出土遺物は無い。

6） 第6号竪穴遺構

（1） 遺 構（第15図）

主軸をN－59°－W方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、第5号掘立柱建物跡の西4mの所に位置している。形は、楕円形を呈し、長軸長1.68m×短軸長1.29mを測る。遺構の北西壁は、第7号竪穴遺構に切られている。

当遺構からの出土遺物は無い。

7） 第7号竪穴遺構

（1） 遺 構（第16図）

主軸をN－28°－W方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、第6号竪穴遺構の北西壁を切った状況で検出された。形は、楕円形を呈し、長軸長1.41m×短軸長1.19mを測る。遺構の北西隅及び西壁中央部は、それぞれ小竪穴に切られている。

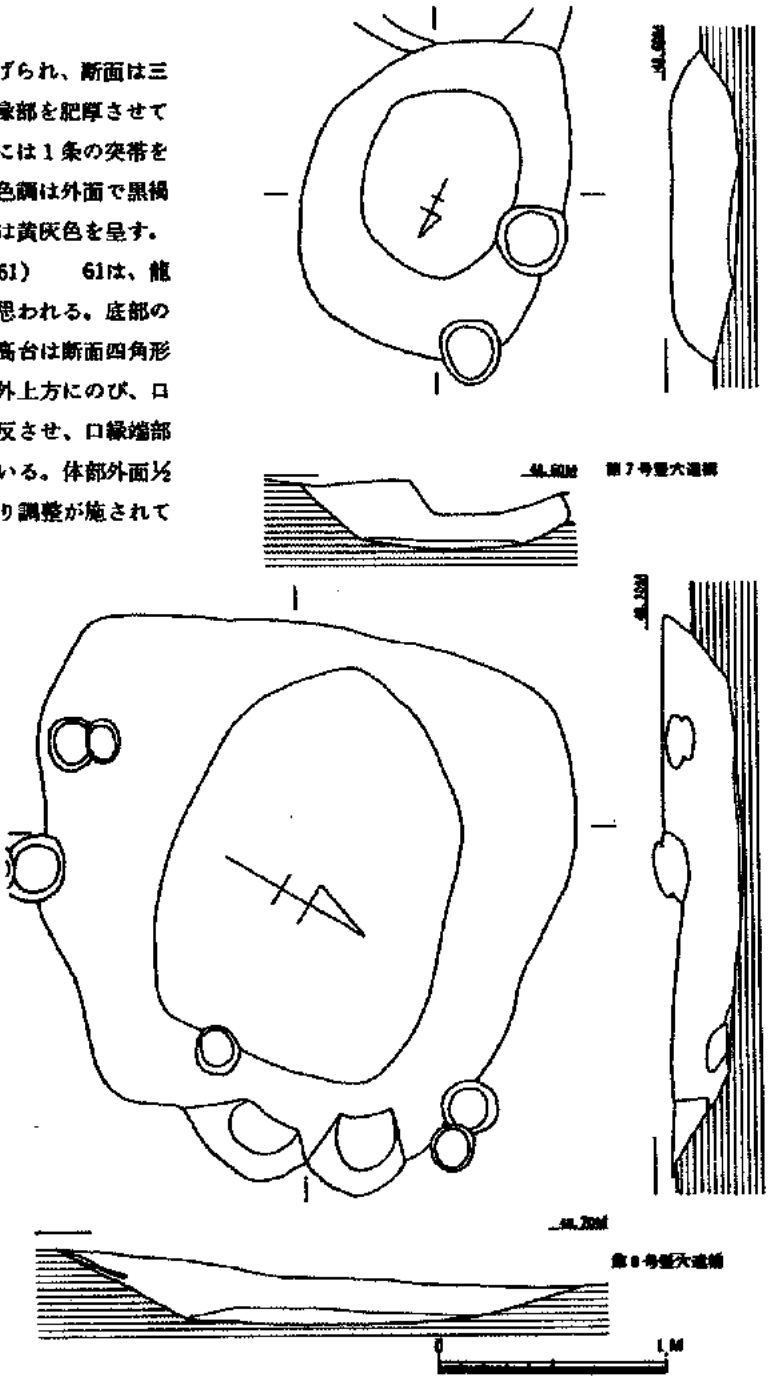
（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器、須恵器甕、青磁椀などが出土している。

須恵器（第42図23） 23は、須恵器甕の口縁部破片と思われるものである。口縁端部は、

かるくつまみ上げられ、断面は三角形を呈し、口縁部を肥厚させている。口縁部下には１条の突帯を巡らしている。色調は外面で黒褐色を呈し、内面は黄灰色を呈す。

青磁（第43図61）　61は、龍泉窯系青磁椀と思われる。底部の器壁は肉厚で、高台は断面四角形を呈す。体部は外上方にのび、口縁部を僅かに外反させ、口縁端部を丸くおさめている。体部外面½程以下は、篦削り調整が施されている。内面は、見込みに弱い沈線を巡らせている。体部には篦及び櫛描により、飛雲文と三日月状の文様を相対したものを配している。口縁部には１条の沈線を巡らせている。釉色は内面及び外面上半で黄灰色を基調とし斑文状に青緑色を呈す。外面下半は青緑色を発す。胎土は淡青灰



第16図　野坂ホテ田遺跡Ｂ区第７・８号竪穴遺構実測図（１／30）

色を呈し、緻密である。焼成は良好で全体にこまかい貫入を有する。

8） 第8号竪穴遺構

（1） 遺 構（第16図）

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、6・7号竪穴遺構の1m内外の所に位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長2.41m×短軸長2.33mを測る。遺構の北壁により、第1号溝状遺構が切られている。

当遺構からの出土遺物は無い。

9） 第9号竪穴遺構

（1） 遺 構（第17図）

主軸をN－15°－E方向にとるもので、標高48.25mから48.5mの間にあり、第7号竪穴遺構の5mの所に位置している。形は、楕円形を呈し、長軸長1.57m×短軸長1.24mを測る。遺構の北及び南壁は1号溝状遺構に切られている。又南壁を切る小竪穴があり、それを切る215号小竪穴がある。西壁は265号小竪穴によって切られている。

（2） 出土遺物

当遺構からは、土師器の皿・杯、白磁皿、青磁椀、須恵器、鉄滓及び焼土塊などが出土している。

土師器（第42図24・25） 24・25は、土師器皿である。24は、復元口径6.8cm、器高1.1cm、底径5.2cmを測る。器壁はやや肉厚で、体部は底部から外上方に立ち上る。口縁端部はやや尖りぎみではあるが丸くおさめている。調整は、内外面共に横ナデ調整を施している。底切り離しについては不明であるが、切り離し後は丁寧に横ナデ調整により整えられている。色調は内外面共に淡黄灰褐色を呈す。焼成は良好と思われる。25は、口径9.6cm、器高1.3cm、底径7.2cmを測る。器壁は肉厚で、体部は底部から外上方に僅かに立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。調整は内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には回転によるナデ調整が施されている。底には板目圧痕がみられる。色調は内外面とも暗褐色を呈す。焼成は良好と思われる。

青磁（第42図26）　26は、青磁椀の破片である。図示した傾きは定かではない。口径部は僅かに内彎して直立し、端部をやや尖りぎみではあるが丸くおさめている。釉色は内外面共に黄緑灰色を呈す。胎土は灰白色を呈している。焼成は良好である。

白磁（第42図27）　27は、白磁皿である。復元口径8.8cmを測る。器壁は肉厚である。体部は外上方に立ち上り、内部1条沈線より上を外反させている。釉色は灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し緻密である。焼成は良好である。

10)　第10号竪穴遺構

（1）　遺　構（第17図）

主軸をN－82°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、4号溝状遺構の北1mの中央付近に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.47m×短軸長0.52mを測る。遺構の東壁は3号掘立柱建物跡4号柱穴に切られている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器皿などの破片が出土している。しかし、いずれも細片のため図化できるものは無かった。又土師器で底部切り離し痕を確認できるものも見い出せなかった。

11)　第11号竪穴遺構

（1）　遺　構（第17図）

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、第4号溝状遺構の北5mの所に位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長1.29m×短軸長0.94mを測る。遺構の南西壁中央を小竪穴により切られている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器、須恵器甕と思われる破片、瓦器質の土器、白磁椀、焼土塊などが出土している。

白磁（第42図28）　28は、V－4類に属すると思われる白磁椀である。体部はやや丸味を

おびて立ち上り、口縁部を外反させ、端部を水平にするものである。外面口縁部下2cm程のところまで篦削り調整が施され、内面口縁部下には1条の沈線を巡らす。施釉は薄く、釉色は内外面共に灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し緻密である。焼成は良好である。

12) 第12号竪穴遺構

(1) 遺 構 (第17図)

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、第13号掘立柱建物跡の北側と接するような所に位置している。形は、楕円形を呈し、長軸長0.87m×短軸長0.81mを測る。

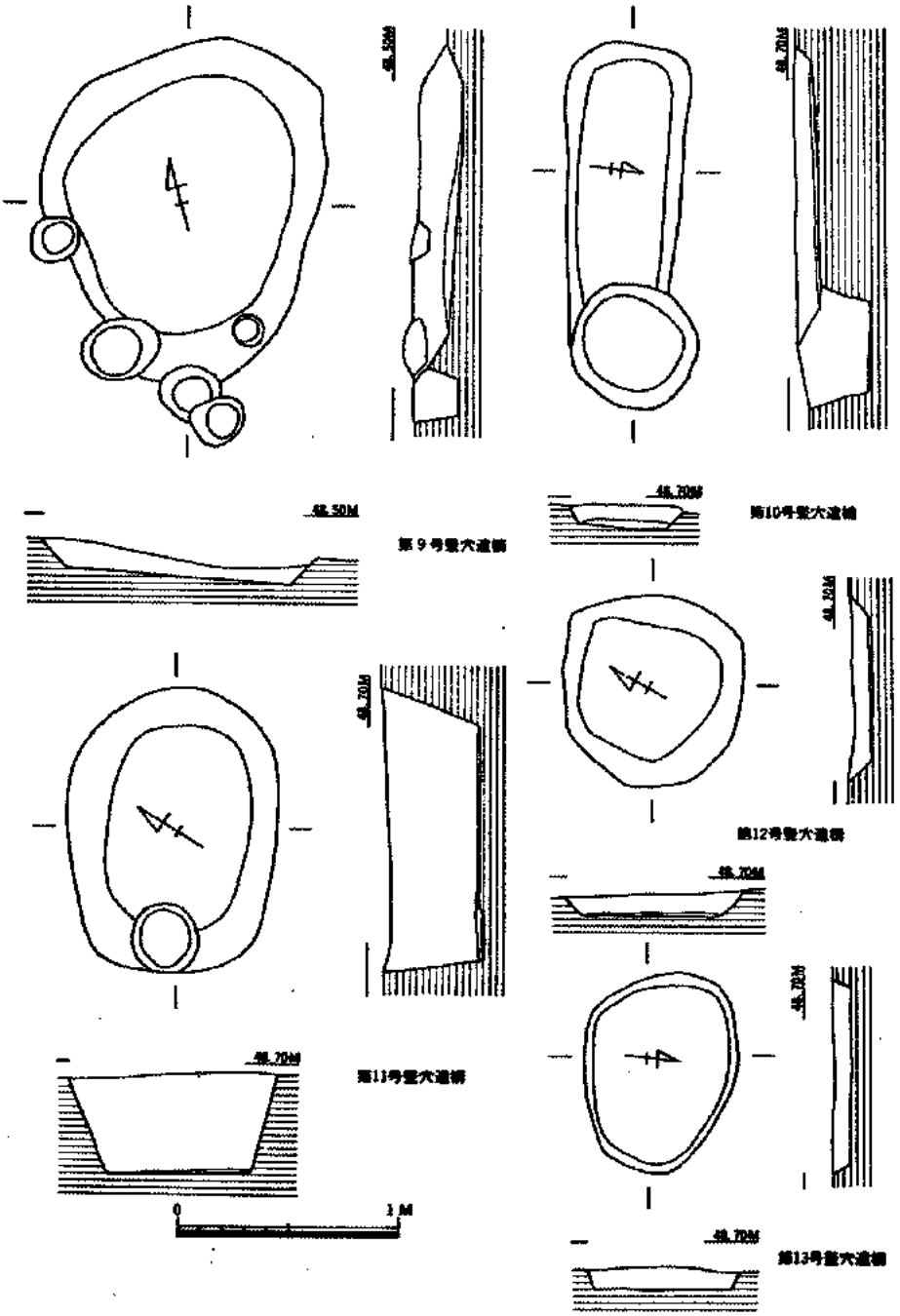
(2) 出土遺物

当遺構からは、土師器皿・高台付椀・甕、須恵器甕と思われる破片、瓦器質の杯・椀、白磁椀、焼土塊などが出土している。

土師器（第42図29） 29は、土師器皿である。復元口径10.2cm、器高1.2cm、底径8.0cmを測る。体部は底部から外上方に僅かに立ち上り、端部を丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整によって整えられている。体部には横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整を施している。底には板目圧痕がみられる。胎土は1mm前後の白色粒及び5mm程の半透明粒を含むものである。色調は外面で灰褐色を呈し、内面で灰白色を呈す。焼成はあまい。

瓦器（第42図30） 30は、瓦器椀である。復元口径10.8cmを測る。器壁は薄く、体部中位がやや肥厚する。体部は丸味をもって立ち上り、口縁下をややくぼませ、端部は丸くおさめている。調整は体部内面で横方向の篦研磨調整を施し、外面では上位を横方向の篦研磨、下位を不定方向の篦研磨調整している。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。色調は内面で灰黒色を呈し銀色の光沢がみられる。外面では上位で灰色を呈し下位は灰黒色を呈している。焼成は良好である。

白磁（第42図31） 31は、白磁椀Ⅳ類に属するものと思われる。復元底径7.0cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上るものと思われる。調整は体部下位に篦削り調整を施しており、施釉は体部上位及び内面のみで、下位は施釉されず露胎となっている。釉色はやや青味をおびた灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し、0.5mm程の黒色粒を含むもので緻密である。焼成は良好である。



第17図　野坂ホチ田遺跡B区第９～13号竪穴遺構実測図（１／30）

13)　第13号竪穴遺構

（1）　遺　構（第17図）

主軸をN－84°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、12号竪穴遺構1m程西の所に位置している。形は、楕円形を呈し、長軸長0.91m×短軸長0.68mを測る。

当遺構からの出土遺物は無い。

14)　第14号竪穴遺構

（1）　遺　構（第18図）

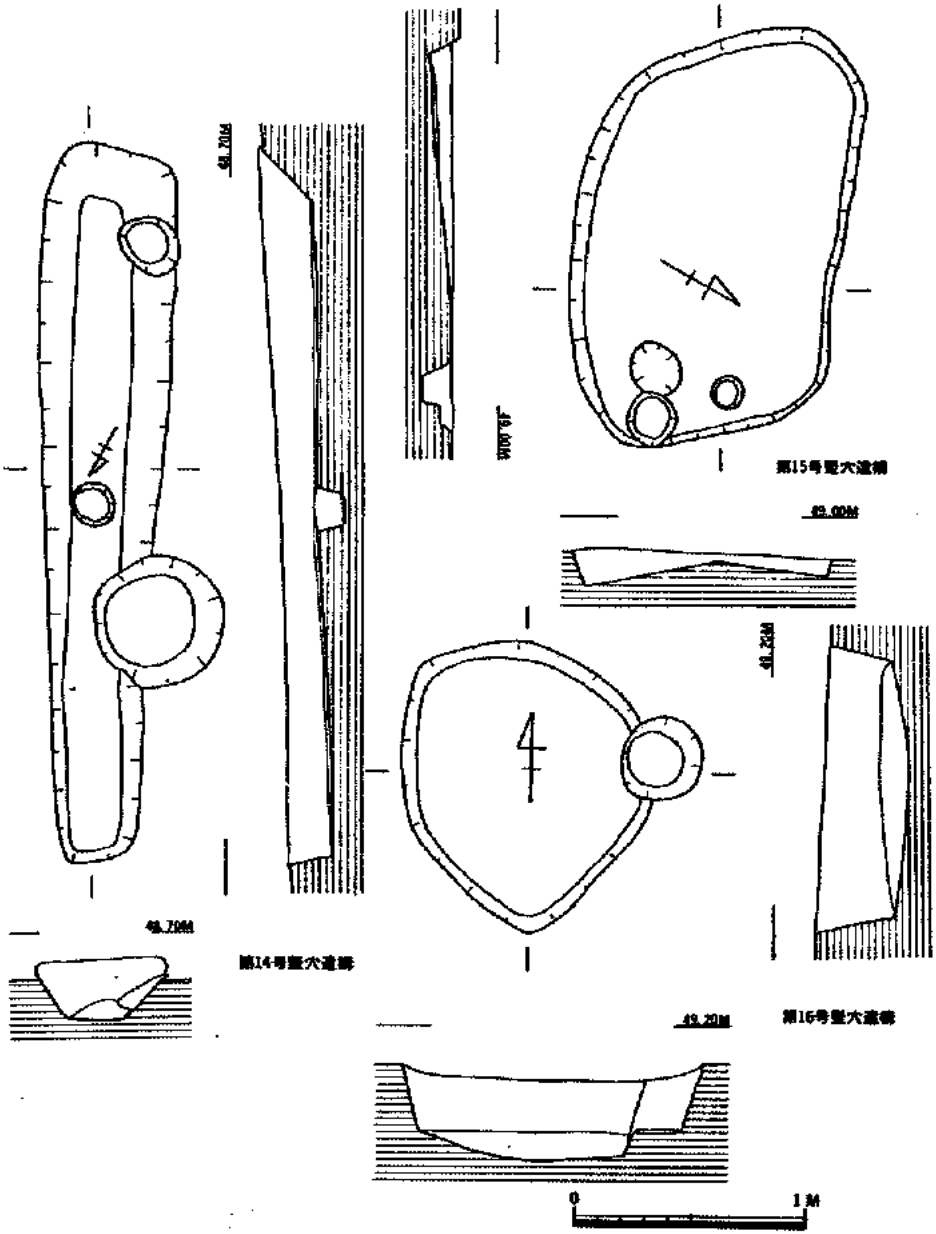
主軸をN－30°－W方向にとるもので、標高48.5mの等高線上に直交するように第15号掘立柱建物跡の東1m程の所に位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長3.11m×短軸長0.53mを測る。遺構の西壁北寄りの所及び、南隅、遺構中央は、それぞれ小竪穴によって切られている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、糸切り離し痕の残る土師器皿・杯、須恵器壺と思われるもの、瓦器質の椀、石鍋、鉄滓などが出土している。

土師器（第42図32）　32は、土師器杯である。復元口径10.0cm、器高3.2cm、底径5.8cmを測る。器壁は肉厚で、体部は外方向へ直線的に立ち上り、口縁端部は尖りぎみに仕上げている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。

石鍋（第42図33）　33は、滑石製石鍋である。復元口径24.2cm、鍔径27.2cmを測る。器壁は1～2cmと厚く、体部は鍔下まで緩やかに外上方に立ち上り、鍔上から口縁部にかけては、緩やかに内彎し、内壁は直立する。口縁端部は水平で、内外壁面との境で緩かに丸味をおびる。外面には全面に右から左方向へノミ状工具をあてて削り、ノミ状工具の走る方向と逆方向へと削り進む痕を残しており、内面では不定方向に走る沈線状のものがみられる。色調は内面で灰色を呈す。外面は火気のためか、鍔下及び口縁部が黒褐色を呈す。又断面は銀灰色を呈す。この材質は雲母を含んだようで光をおび、滑らかなものである。



第18図　野坂ホテ田遺跡B区第14～16号竪穴遺構実測図（1／30）

15)　第15号竪穴遺構

（1）　遺　構（第18図）

主軸をN－60°－E方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、第12号掘立柱建物跡の西1m程の所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.76m×短軸長1.13mを測る。遺構の東壁は第11号掘立柱建物跡7号柱穴に切られている。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器高杯及び甕と思われる破片などが出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。

16)　第16号竪穴遺構

（1）　遺　構（第18図）

主軸を磁北にとるもので、標高49mの等高線上に位置している。形は楕円形で長軸長1.29m×短軸長1.08mを測る。

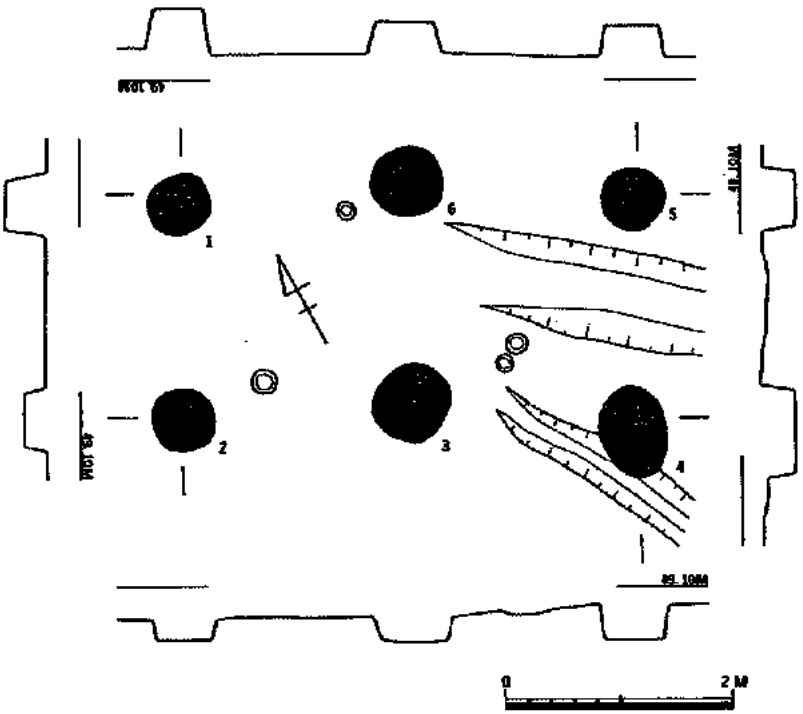
（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器甕の破片が出土しているが、体部のみのものであり傾きも定かでないため図化できなかった。

17)　第1号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第19図）

主軸をN－62°－W方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、等高線と直交する形で、調査区の南北隅第5号溝状遺構のすぐ北側に位置している。短軸1間×長軸2間の建物で、東側短軸長は2.76mを測り、柱穴間長は2.06mを測る。西側短軸長は2.48mを測り、柱穴間長は1.90mを測る。北側長軸長は4.56mを測り、柱穴間長は西から1.98m、2.06mを測る。



第19図　野坂ホテ田遺跡B区第1号掘立柱建物跡実測図（1／60）

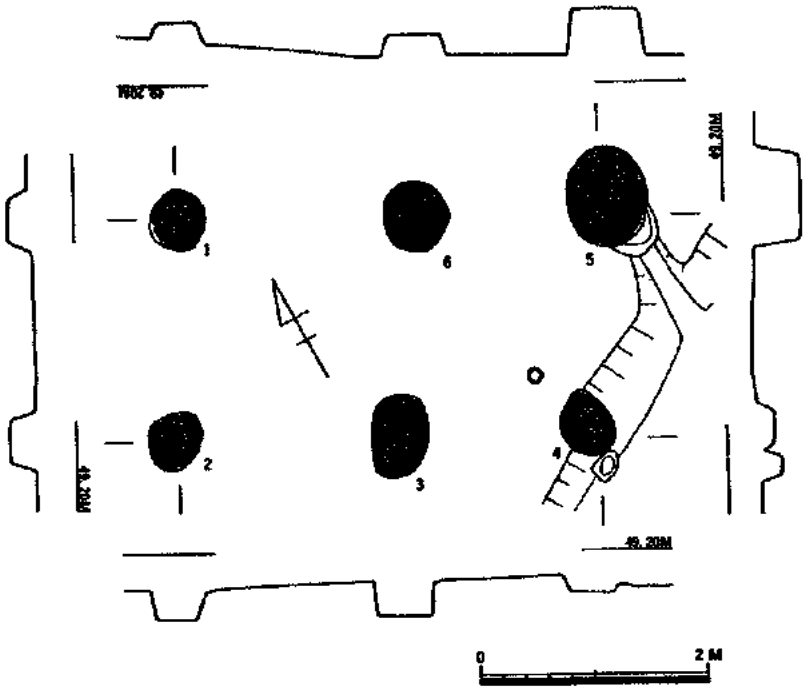
南側長軸長は4.48mを測り、柱穴間長は西から2.06m、1.98mを測る。当遺構の1・2・3号柱穴間と9号掘立柱建物跡との切り合いが推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

（2）　出土遺物

当遺構4・5号柱穴からは、土師器高台付椀、白磁椀などが出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。

18)　第2号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第20図）

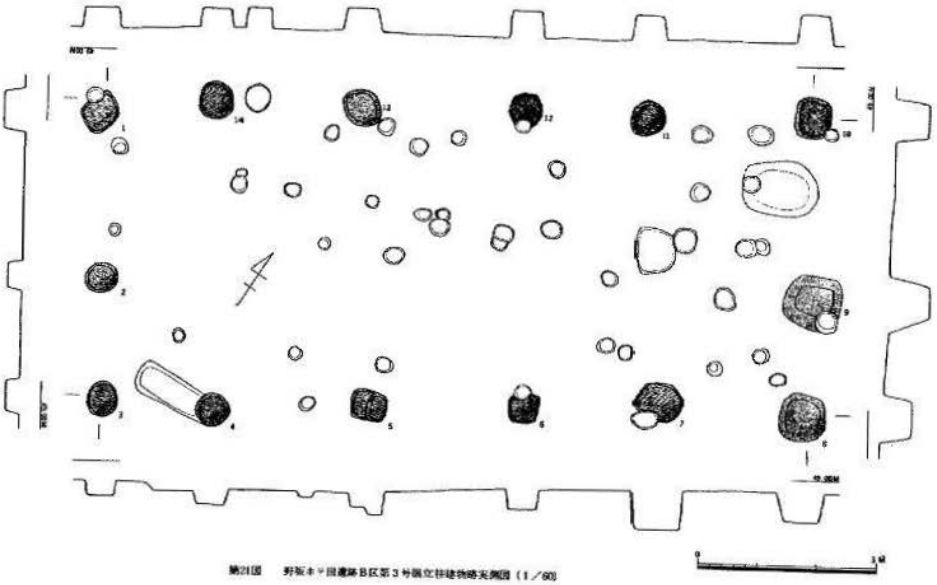


第20図　野坂ホテ田遺跡B区第2号掘立柱建物跡実測図（1／60）

主軸をN－62°－W方向にとるもので、標高49mの等高線上にあり、等高線と直交する形で、第1号掘立柱建物跡と3m程の間隔をもって、平行に並んでいる。短軸1間×長軸2間の建物で、東側短軸長は2.76mを測り、柱穴間長は2.0mを測る。西側短軸長は2.52mを測り、柱穴間長は2.0mを測る。北側長軸長は4.36mを測り、柱穴間長は西から1.98m、1.72mである。南側長軸長は4.10mを測り、柱穴間長は1.96m、1.78mを測る。当遺構の1・6号柱穴間及び1号柱穴と第9号掘立柱建物跡との切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

（2）　出土遺物

当遺構5号柱穴からは、土師器杯と思われる破片、須恵器の破片などが出土している。土師器底部には糸切り離し痕の残るものがあり、糸切り離し痕の残るものは確認できなかった。



第21図　野坂ホ平遺跡B区第3号掘立柱建物跡実測図（1／60）

19)　第３号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第21図）

主軸をＮ－57°－Ｅ方向にとるもので、標高48.5ｍから 48.75 ｍの間にあり、等高線と平行する形で、第１号掘立柱建物跡から西９ｍの所に位置している。短軸２間×長軸５間の建物で、東側短軸長は5.82ｍを測り、柱穴間長は南から 2.0 ｍ、3.06ｍを測る。西側短軸長は5.50ｍを測り、柱穴間長は南から2.04ｍ、2.70ｍを測る。短軸２間であるが、中位の２・９号柱穴は中央よりやや南に偏している。北側長軸長は 12.58 ｍを測り、柱穴間長は西から1.85ｍ、2.45ｍ、2.73ｍ、2.06ｍ、2.78ｍを測る。南側長軸長は 12.32 ｍを測り、柱穴間長は西から1.83ｍ、2.78ｍ、2.42ｍ、2.39ｍ、2.31ｍを測る。当遺構の６・７柱穴は、いずれも４号掘立柱建物跡に切られた状況で検出されている。

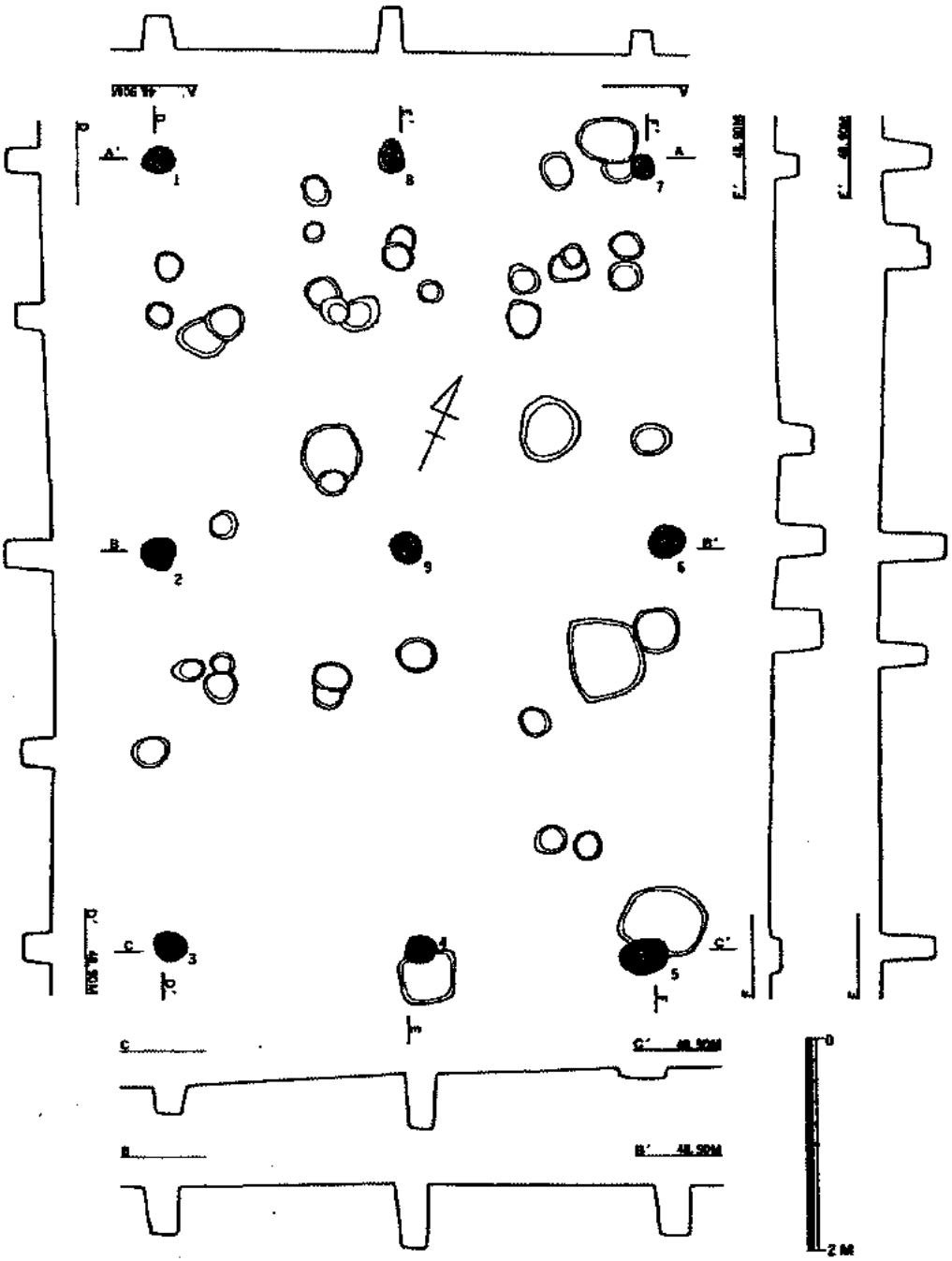
（２）　出土遺物

当遺構２・４・８・11・12号柱穴からは、土師器杯、須恵器杯、瓦器質の土器、焼土塊などが出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。

20)　第４号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第22図）

主軸をＮ－25°－Ｗ方向にとるもので、標高48.5ｍから 48.75 ｍの間にあり、等高線と直交する形で、第11号掘立柱建物跡から北５ｍの所に位置している。短軸２間×長軸２間の建物で、北側短軸長は4.77ｍを測り、柱穴間長は西から2.20ｍ、2.32ｍを測る。南側短軸長は4.77ｍを測り、柱穴間長は西から2.35ｍ、2.06ｍを測る。東側長軸長は7.77ｍを測り、柱穴間長は北から3.56ｍ，3.97ｍを測る。西側長軸長は7.73ｍを測り、柱穴間長は北から3.72ｍ、3.72ｍを測る。当遺構には，短軸と長軸の中位柱穴を結ぶ交点にも柱穴が存在し、短軸方向西から2.30ｍ、2.43ｍ、長軸方向北から3.73ｍ、3.82ｍの所に位置する。当遺構の４・５号柱穴は，いずれも４号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。又１・２号柱穴間及び１・８号柱穴間と第18号掘立柱建物跡との切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。



第22図　野坂ホテ田遺跡B区第4号掘立柱建物跡実測図（1／60）

（2）　出土遺物

当遺構4・6・8・9号柱穴からは、糸切り離し痕を残す土師器皿・杯、須恵器破片などを出土している。

土師器（第42図1）　　1は、土師器皿である。復元口径8.6㎝、器高1.0㎝、底径7.8㎝を測る。体部は底部から屈曲して上外方に立ち上り、口縁部は、そのまま引き伸ばされ、端部は尖る。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整によって整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整が施されており、内底には不定方向のナデ調整を施している。底には緩かに板目圧痕が残る。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好と思われる。

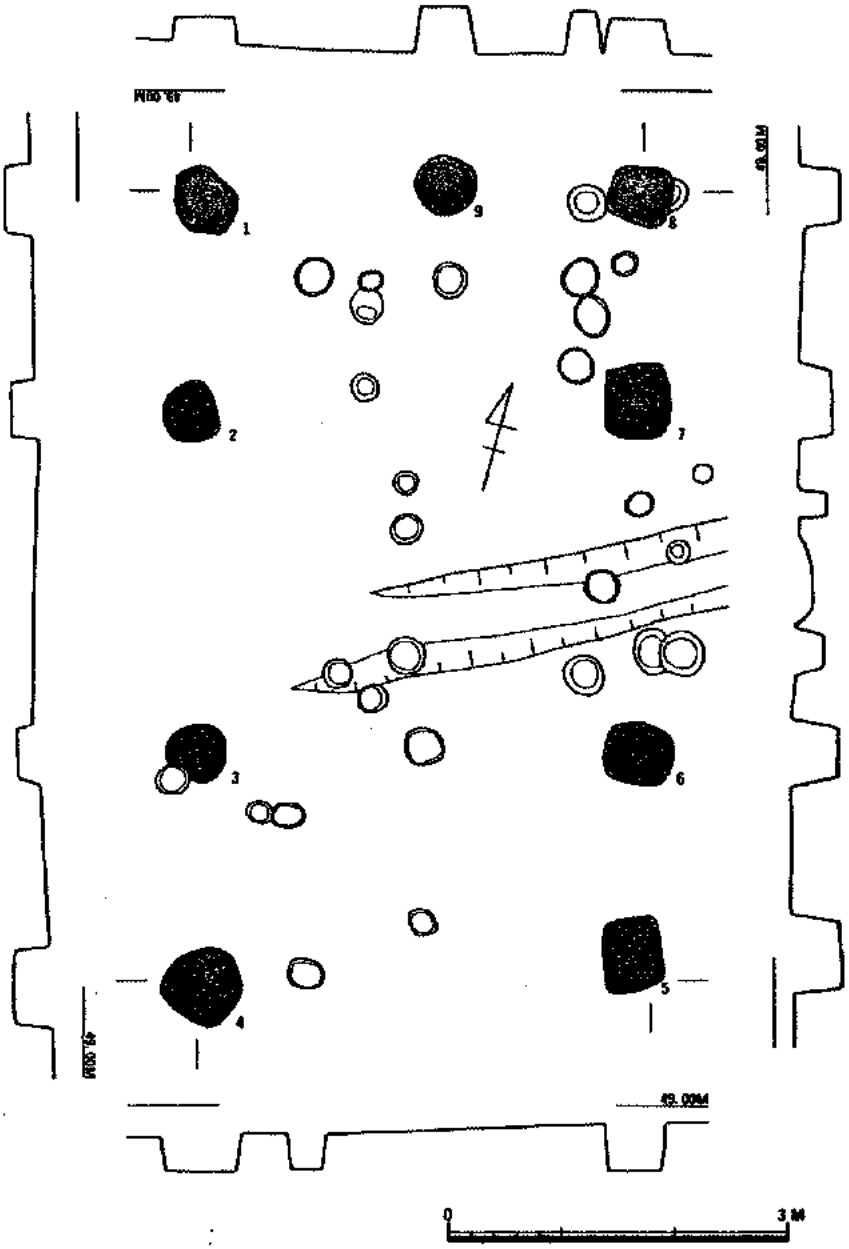
21）　第5号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第23図）

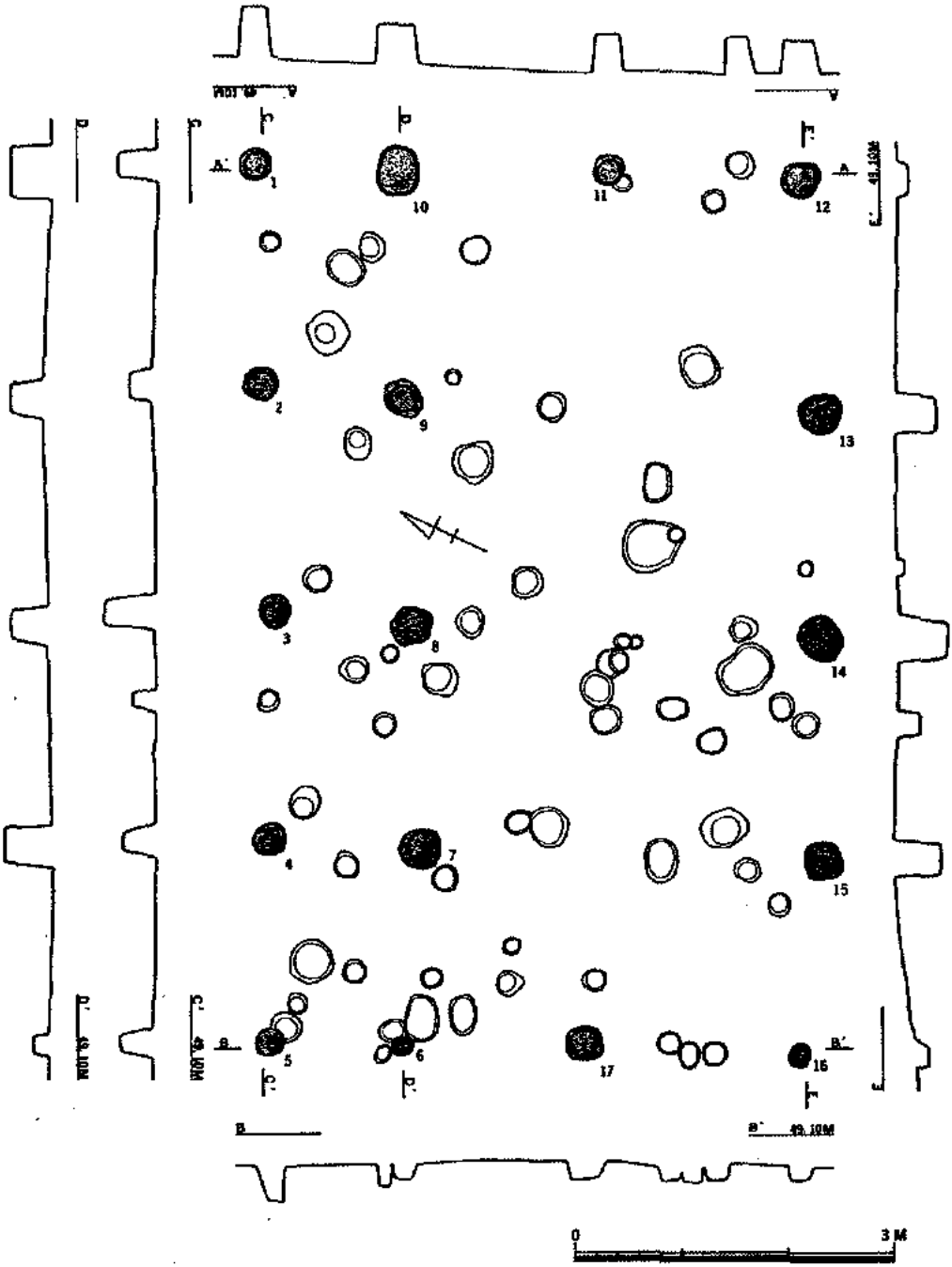
主軸をN－15°－W方向にとるもので、標高48.75ｍの等高線上にあり、等高線と直交する形で、第3号掘立柱建物跡から西5ｍの所に位置している。短軸2間×長軸3間の建物で、北側短軸長は4.40mを測り、柱穴間長は西から2.14m、1.84mを測る。南側短軸長は4.44mを測る。北側短軸の9号柱穴に相対する南側短軸の柱穴は検出することができなかった。4号柱穴から5号柱穴間長は3.92mを測る。東側長軸長は7.29mを測り、柱穴間長は北から1.94m、3.12m、1.76mを測る。西側長軸長7.64mを測り、柱穴間長は北から1.86m、3.01m、2.03mを測る。当遺構の1・7～9号柱穴間と第14号掘立柱建物跡との切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

（2）　出土遺物

当遺構2・4・8・9号柱穴からは、土師器杯・壺、須恵器椀の破片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。又土師器に関しては底部切り離し痕の確認できるものがなかった。



第23図　野坂ホテ田遺跡B区第5号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第24図　野坂ホテ田遺跡B区第6号掘立柱建物跡実測図（1／60）

22)　第６号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第24図）

主軸をＮ－65°－Ｅ方向にとるもので、標高 48.75 ｍから49ｍの間にあり、等高線と平行する形で、第５号掘立柱建物跡の南３ｍ程の所に位置している。短軸３間×長軸４間の建物で、北廂をもつものである。東側短軸長は5.48ｍを測り、柱穴間長は北から1.36ｍ、1.99ｍ、1.74ｍを測る。西側短軸長は5.20ｍを測り、柱穴間長は北から 1.2 ｍ、1.72ｍ、 2.0 ｍを測る。北側長軸長は8.56ｍを測り、柱穴間長は西から1.88ｍ、2.16ｍ、2.16ｍ、2.10ｍを測る。南側長軸長8.56ｍを測り、柱穴間長は西から1.88ｍ、2.06ｍ、2.14ｍ、2.20ｍを測る。当遺構は第19号掘立柱建物跡及び第20号掘立柱建物跡との切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

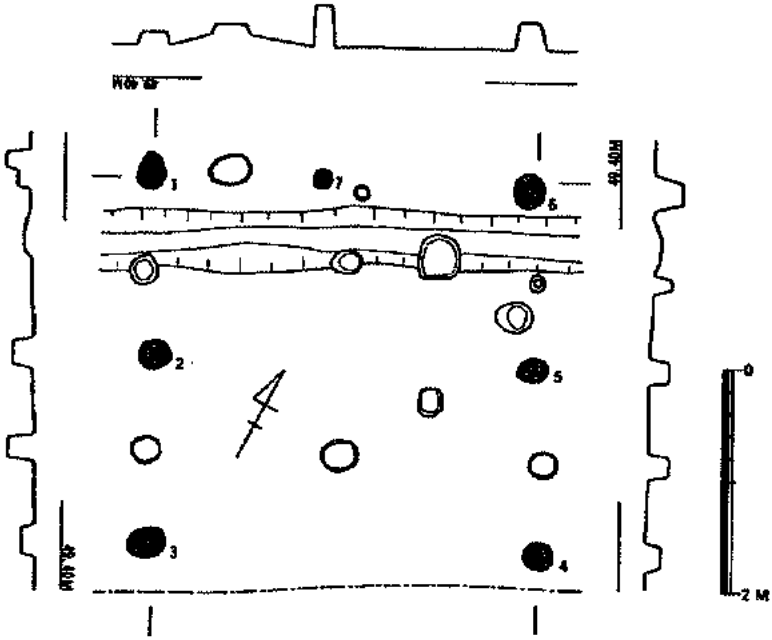
（２）　出土遺物

当遺構１～10・12～15号柱穴からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕、白磁皿、瓦器高台付椀・椀、鞴の羽口と思われる破片及び鉄滓・焼土塊などが出土している。いずれも細片のため図化できたものは、わずかであった。土師器杯及び皿については、底部切り離し痕が残るものを検出することができた。これは、篦切り離し、糸切り離しの２通りであった。

土師器（第42図２・３）　　２は、土師器皿である。復元口径 7.8 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 5.8 ㎝を測る。体部は底部から僅かに屈曲し外上方に立ち上る。口縁端部は丸くおさめている。調整は、体部内外面共に横ナデ調整を施している。底部切り離し痕については不明であるが、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。色調は内外面共に黄灰褐色を呈す。胎土は 0.5 ㎜程の赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。３は、土師器高台付椀である。底径 7.0 ㎝、高台径 6.6 ㎝、高台高 0.8 ㎝を測る。体部は底部から丸味をもって立ち上るもので、体部中位あたりの器壁は薄い。高台は貼りつけたもので、高台見込みに貼りつけ痕が残る。調整は摩滅が著しいため不明である。色調は内外面共に灰白色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成はあまい感がする。

23)　第７号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第25図）



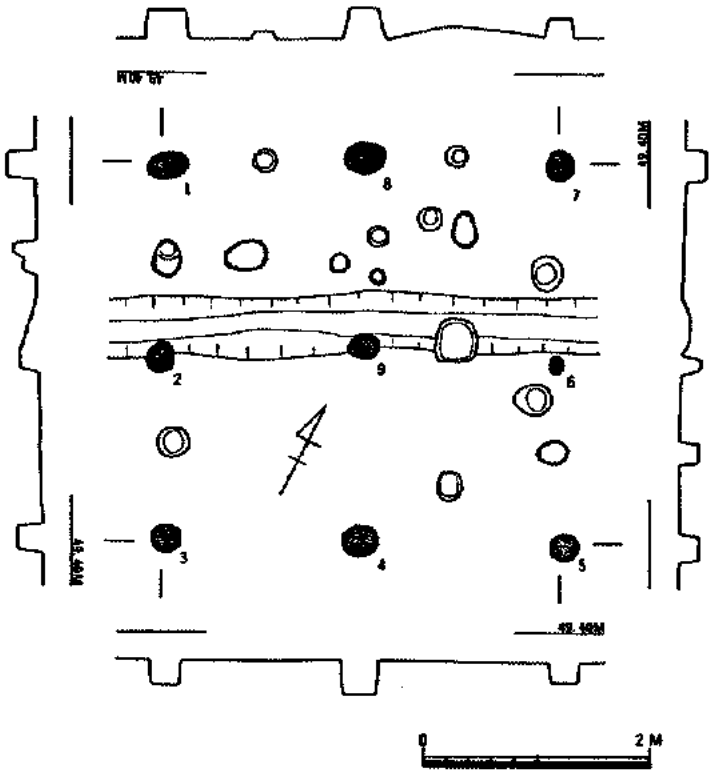
第25図　野坂ホテ田遺跡B区第７号掘立柱建物跡実測図（１／60）

主軸をN－27°－W方向にとるもので、標高49mから 49.25 mの間にあり、等高線と直交する形で、調整区南壁中央東寄りに接した所に位置している。短軸２間×長軸２間(α)の建物で、北側短軸長は3.62mを測り、柱穴間長は西から1.51m、1.82mを測る。北側短軸に相対する南側短軸は調査区外のため確認できなかった。東側長軸長は3.54m（現状）を測り、柱穴間長は北から1.59m、1.67mを測る。西側長軸長3.62m（現状）を測り、柱穴間長は北から1.56m、1.71mを測る。当遺構と８号掘立柱建物跡とは、主軸方向が同じであり、又柱穴列もほぼ等しいことなどから、建て替えの関係が推定できるが、その前後関係を遺構から明確にすることができない。

24)　第８号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第26図）

主軸をN－27°－W方向にとるもので、７号掘立柱建物跡に重複して存在している。短軸２間×長軸２間の建物で、東側短軸長は3.68mを測り、柱穴間長は北から1.84m、1.62mを測る。

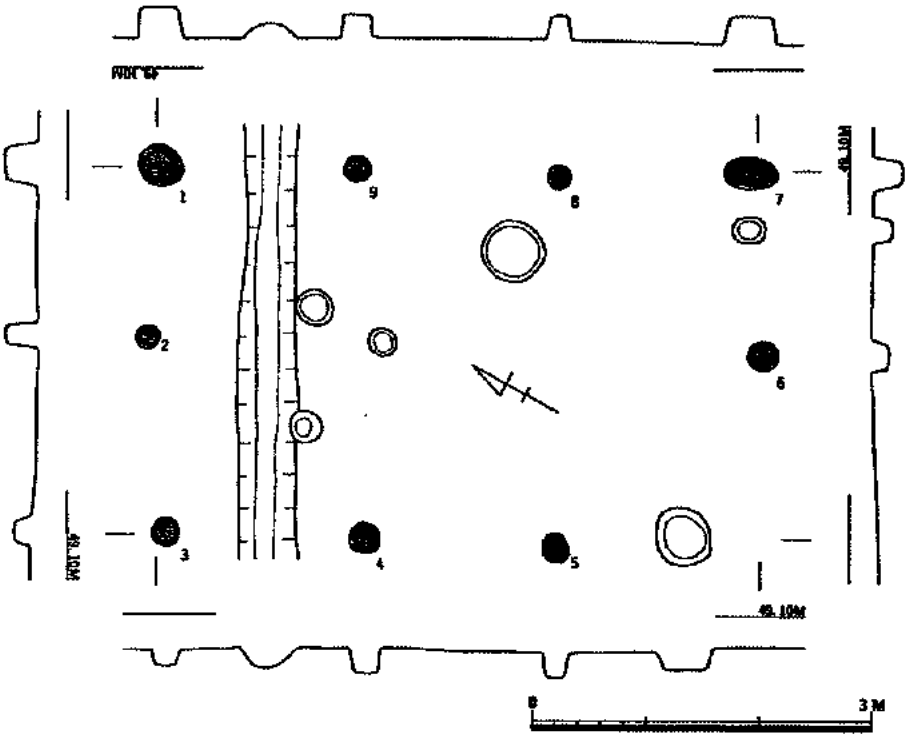


第26図　野坂ホテ出遺跡B区第8号掘立柱建物跡実測図（1／60）

西側短軸長は3.58mを測り、柱穴間長は北から1.74m、1.60mを測る。北側長軸長3.78mを測り、柱穴間長は西から1.76m、1.75mを測る。南側長軸長は3.78mを測り、柱穴間長は西から1.69m、1.86mを測る。当遺構には、短軸と長軸の中位柱穴を結ぶ交点にも柱穴が存在し、短軸方向西から1.82m、1.68m、長軸方向北から1.59m、1.76mの所に位置する。当遺構の2・9号柱穴は、いずれも第2号溝状遺構によって切られている。

（2）　出土遺物

当遺構4・5・8・9号柱穴からは、土師器皿、須恵器などの破片が出土しているが、細片のため図化できなかった。土師器の内には、底部篦切り離し痕を残しているものを検出した。

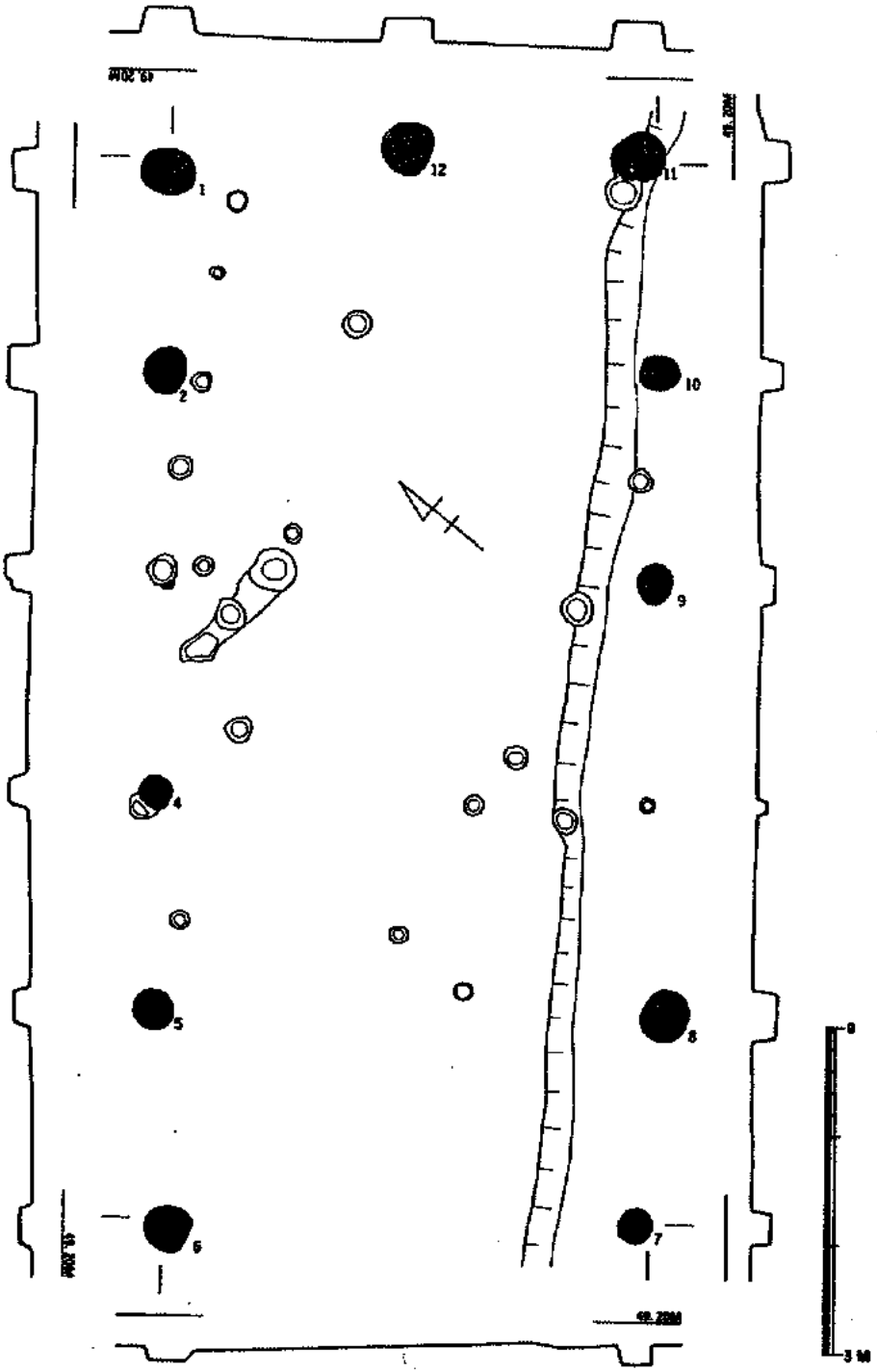


第27図　野坂ホテ田遺跡B区第9号掘立柱建物跡実測図（1／60）

25)　第9号掘立柱建物跡

(1)　遺　構（第27図）

主軸をN－28°－W方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、等高線と直交する形で、第1・2号掘立柱建物跡と重複し、第11号掘立柱建物跡の東2mの所に位置している。短軸2間×長軸3間の建物で、北側短軸長は3.58mを測り、柱穴間長は西から1.75m、1.54mを測る。南側短軸には、北側短軸3号柱穴に相対する柱穴が欠損している。6・7号柱穴間長は1.64mを測る。東側長軸長は5.62mを測り、柱穴間長は北から1.80m、1.82m、1.80mを測る。西側長軸には、東側短軸7号柱穴に相対する柱穴が欠損している。3～5号柱穴間長は北からそれぞれ1.73m、1.72mを測る。



第28図　野坂ホテ田遺跡B区第10号掘立柱建物跡実測図（1／60）

26) 第10号掘立柱建物跡

（1） 遺 構（第28図）

主軸をN－51°－E方向にとるもので、標高49mの等高線上にあり、等高線と平行する形で、第11号掘立柱建物跡と重複し、第8号掘立柱建物跡の北3mの所に位置している。短軸2間×長軸5間の建物で、北側短軸長は4.86mを測り、柱穴間長は西から2.28m、2.09mを測る。南側短軸は4.68mを測る。北側短軸12号柱穴に相対する柱穴が欠損している。6・7号柱穴間長は4.34mを測る。東側長軸長は10.32mを測る。西側長軸長4号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は北から1.94m、1.96m、4.06m、1.88mを測る。西側長軸長は10.22mを測り、柱穴間長は北から1.80m、2.06m、1.94m、2.06m、1.96mを測る。当遺構の3号柱穴は、第11号掘立柱建物跡11号柱穴により切られている。

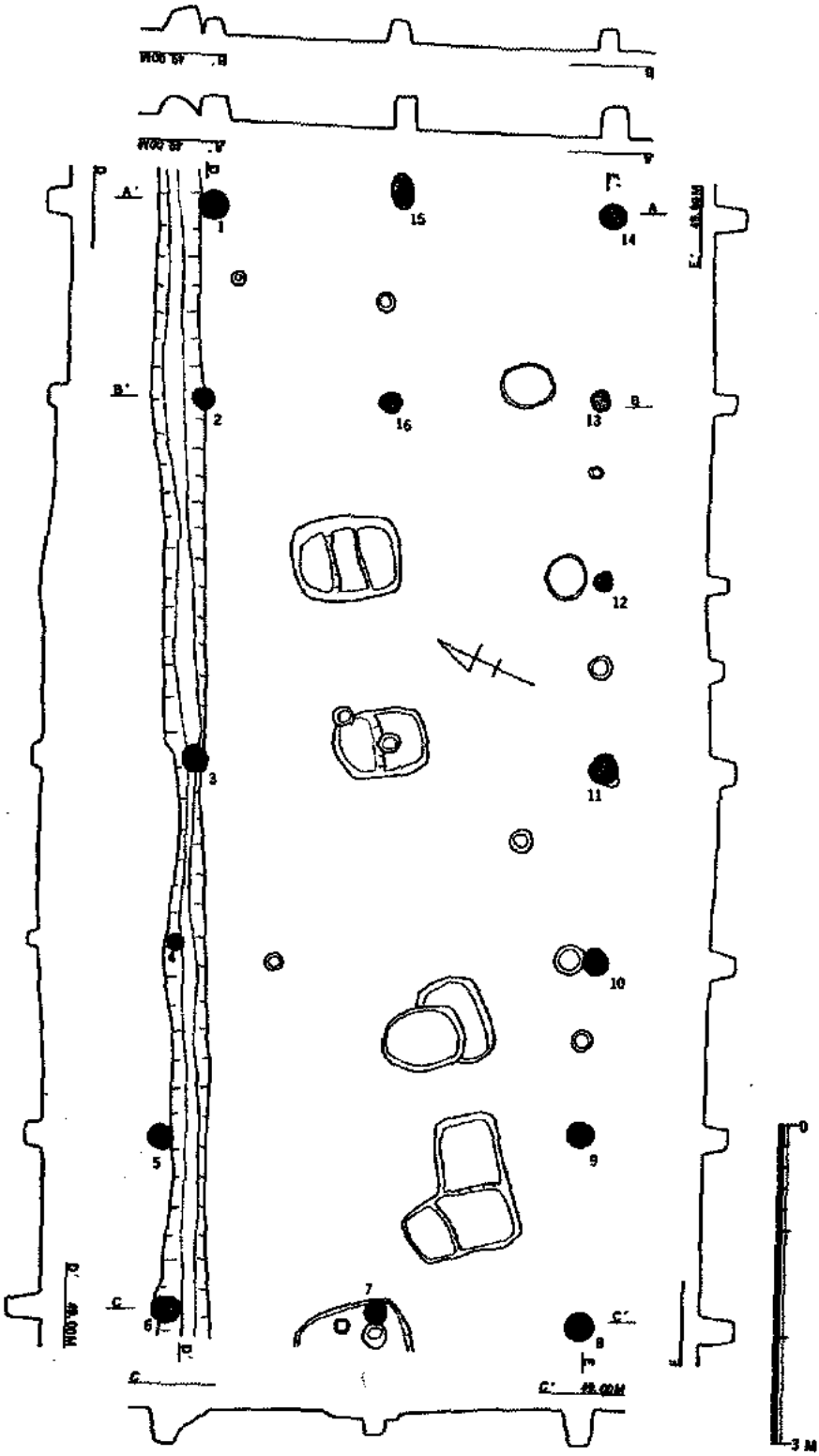
（2） 出土遺物

当遺構2・3号柱穴からは、土師器、須恵器の破片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。

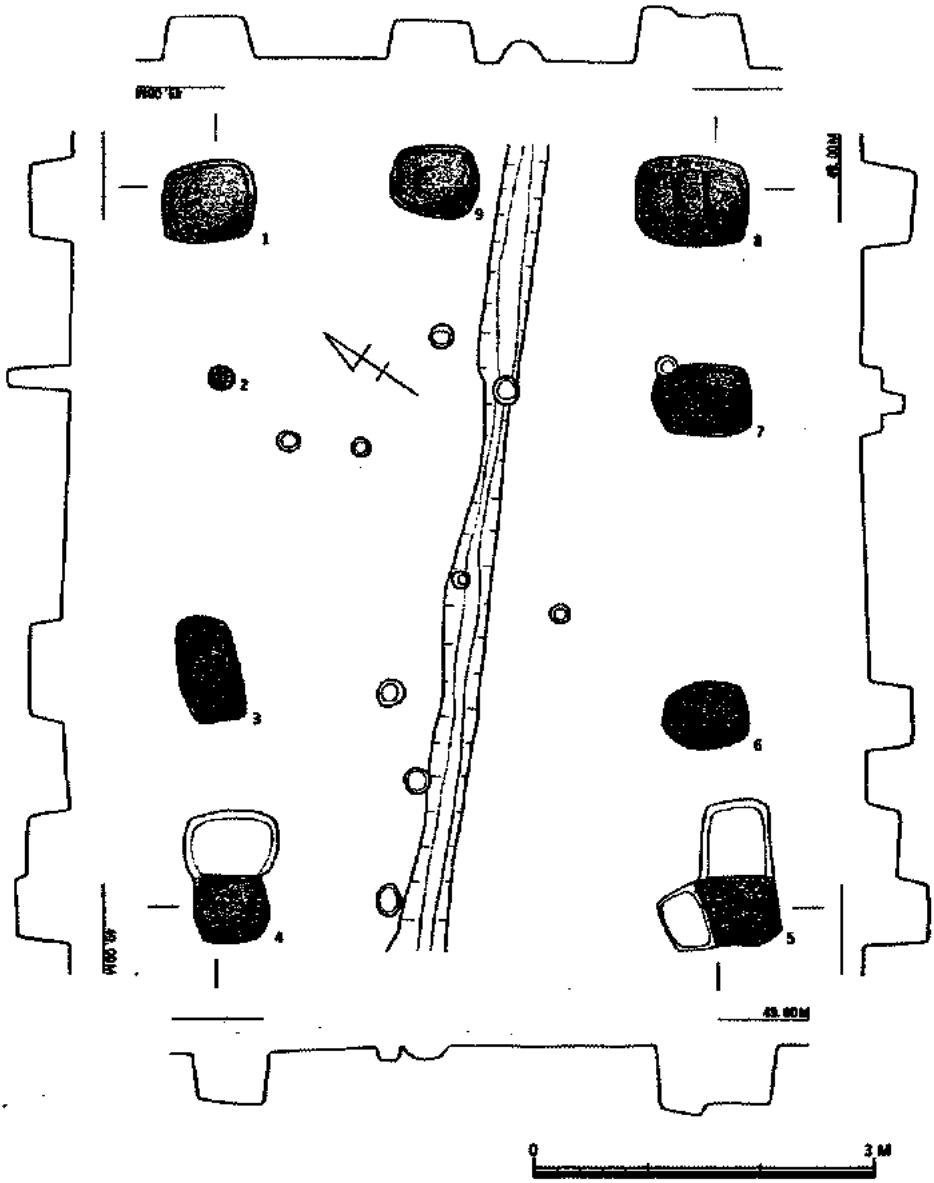
27) 第11号掘立柱建物跡

（1） 遺 構（第29図）

主軸をN－67°－E方向にとるもので、標高48.75mから49mの間にあり、等高線と平行する形で、第10・12号掘立柱建物跡と重複し、第9号掘立柱建物跡の西2mの所に位置している。短軸2間×長軸6間の建物で、東廂をもつものである。東側短軸長は3.98mを測り、柱穴間長は北から1.77m、1.96mを測る。西側短軸長は4.08mを測り、柱穴間長は1.92m、1.90mを測る。北側長軸長は10.76mを測る。南側長軸12号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は西から1.62m、1.85m、1.74m、3.42m、1.86mを測る。南側長軸長10.82mを測り、柱穴間長は西から1.80m、1.64m、1.83m、1.81m、1.66m、1.81mを測る。当遺構と第10・12号掘立柱建物跡との切り合い関係が推定できる。第10号掘立柱建物跡については前述したように、遺構による新旧関係は明確である。第12号掘立柱建物跡については、遺構による新旧関係は明確にできなかった。



第29図　野坂ホテ田遺跡B区第11号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第30図　野坂ホテ田遺跡B区第12号掘立柱建物跡実測図（1／60）

（2）　出土遺物

当遺構6・8・10・11・15号柱穴からは、土師器、須恵器杯の破片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。

28）　第12号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第30図）

主軸をN－56°－E方向にとるもので、標高48.75mの等高線上にあり、等高線と平行する形で、第3号掘立柱建物跡の南3m程の所に位置している。短軸2間×長軸3間の建物で、東側短軸長は5.18mを測り、柱穴間長は北から2.16m、2.32mを測る。西側短軸長5.16mを測る。東側短軸9号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は4・5号柱穴間で4.41mである。

（2）　出土遺物

当遺構2・3・5～8号柱穴からは、土師器細片のみが出土している。

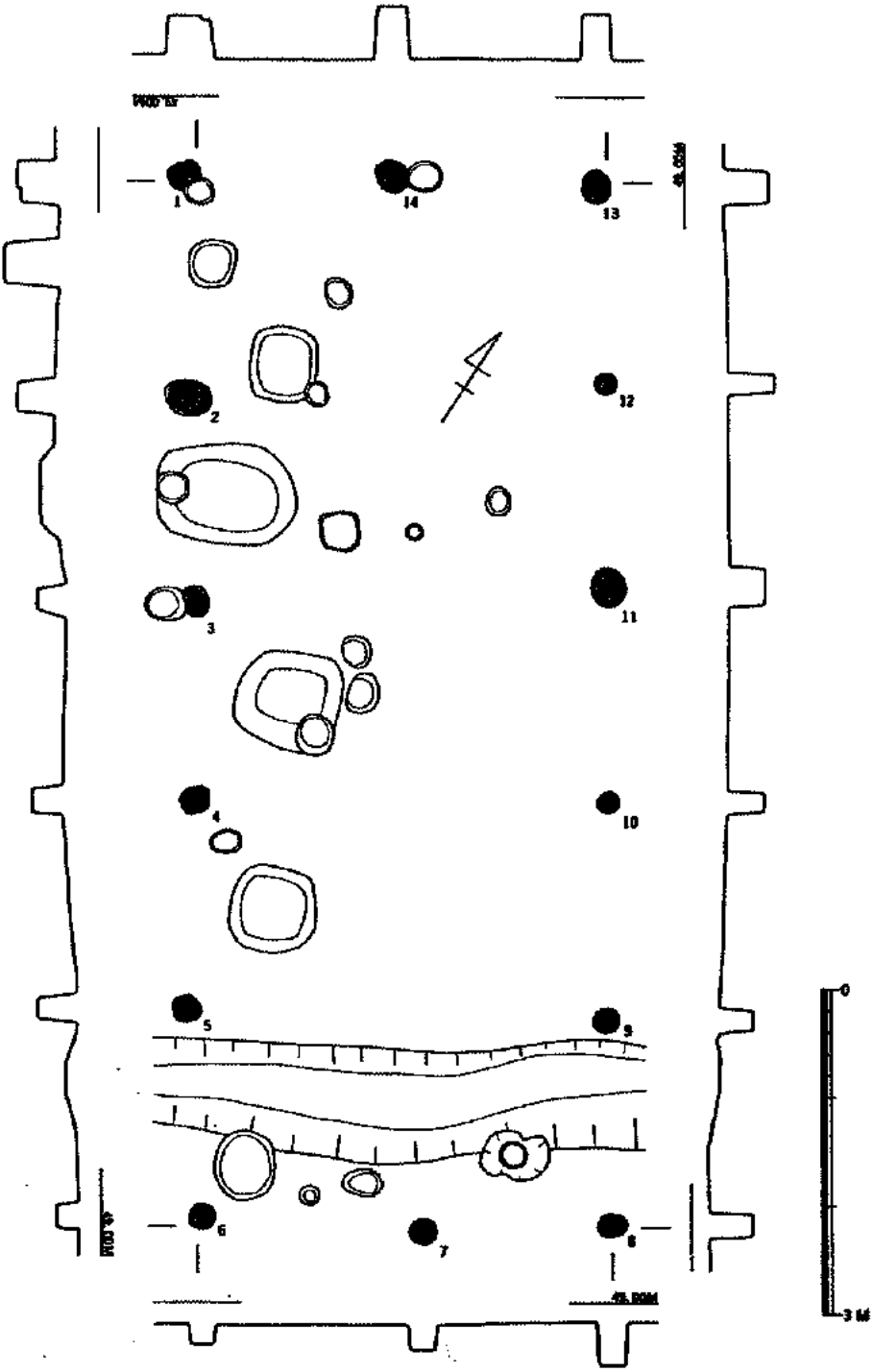
29）　第13号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第31図）

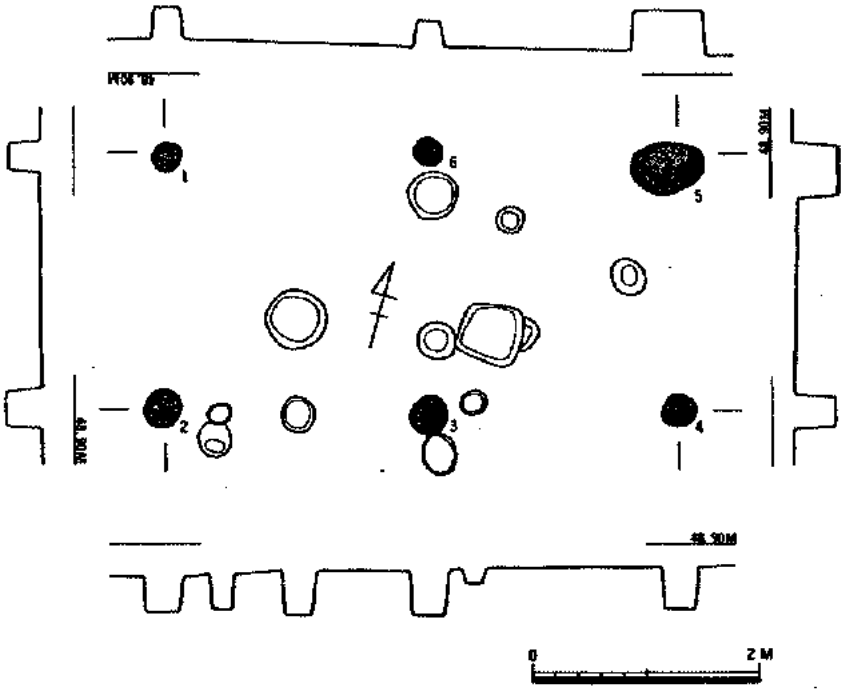
主軸をN－33°－W方向にとるもので、標高48.75mの等高線上にあり、等高線と直交する形で、第3号掘立柱建物跡と重複し、第9号掘立柱建物跡の北2m程の所に位置している。短軸2間×長軸5間の建物で、北側短軸長は4.08mを測り、柱穴間長は西から1.88m、1.88mを測る。南側短軸長は3.88mを測り、柱穴間長は北から2.02m、1.72mを測る。東側長軸長は9.94mを測り、柱穴間長は北から1.88m、1.90m、1.99m、2.02m、1.88mを測る。西側長軸長は9.96mを測り、柱穴間長は北から2.12m、1.91m、1.86m、1.92m、1.94mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構1・3・6・7・11・13・14号柱穴からは、土師器皿、須恵器杯、瓦器質の土器などが出土している。土師器については、底部篦切り離し痕の残るものを確認したが糸切り離し痕



第31図　野坂ホテ田遺跡B区第13号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第32図　野坂ホテ田遺跡B区第14号掘立柱建物跡実測図（1／60）

の残るものは確認できなかった。須恵器杯及び瓦器については細片のため図化できなかった。

土師器（第42図4）　4は、土師器皿である。口径8.8㎝、器高1.1㎝、底径6.2㎝を測る。体部は底部から僅かに屈曲し外上方へ立ち上る。口縁部は尖りぎみに引かれ端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。体部の調整は内外面共に横ナデ調整が施されている。色調は内外面共に茶褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を多く含むものである。

30)　第14号掘立柱建物跡

(1)　遺　構　(第32図)

主軸をN－75°－E方向にとるもので、標高48.5mから48.75mの間にあり、等高線と平行す

る形で、第５号掘立柱建物跡と重複し、第15号掘立柱建物跡の南１ｍ程の所に位置している。短軸１間×長軸２間の建物で、東側短軸長は2.56ｍを測り、柱穴間長は2.22ｍを測る。西側短軸長は2.56ｍを測り、柱穴間長は2.30ｍを測る。北側長軸長は4.89ｍを測り、柱穴間長は西から2.30ｍ、2.30ｍを測る。南側長軸長は4.88ｍを測り、柱穴間長は西から2.40ｍ、2.26ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構３～６号柱穴からは、土師器皿・杯、瓦器、鞴の羽口、鉄滓などが出土している。いずれも細片のため図化できなかった。土師器については、底部篦切り離し痕及び糸切り離し痕の残るものを確認した。

31）　第15号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第33図）

主軸をＮ－68°－Ｅ方向にとるもので、標高48.5ｍの等高線上にあり、等高線と平行する形で第３号掘立柱建物跡北側長軸と接する所に位置している。短軸１間×長軸４間の建物で、東側短軸長は4.31ｍを測り、柱穴間長は3.84ｍを測る。西側短軸長は4.70ｍを測り、柱穴間長は、4.28ｍを測る。北側長軸長は8.58ｍを測り、柱穴間長は西から1.86ｍ、2.16ｍ、2.20ｍ、1.96ｍを測る。南側長軸長は8.76ｍを測り、柱穴間長は西から2.0ｍ、2.04ｍ、2.16ｍ、2.14ｍを測る。

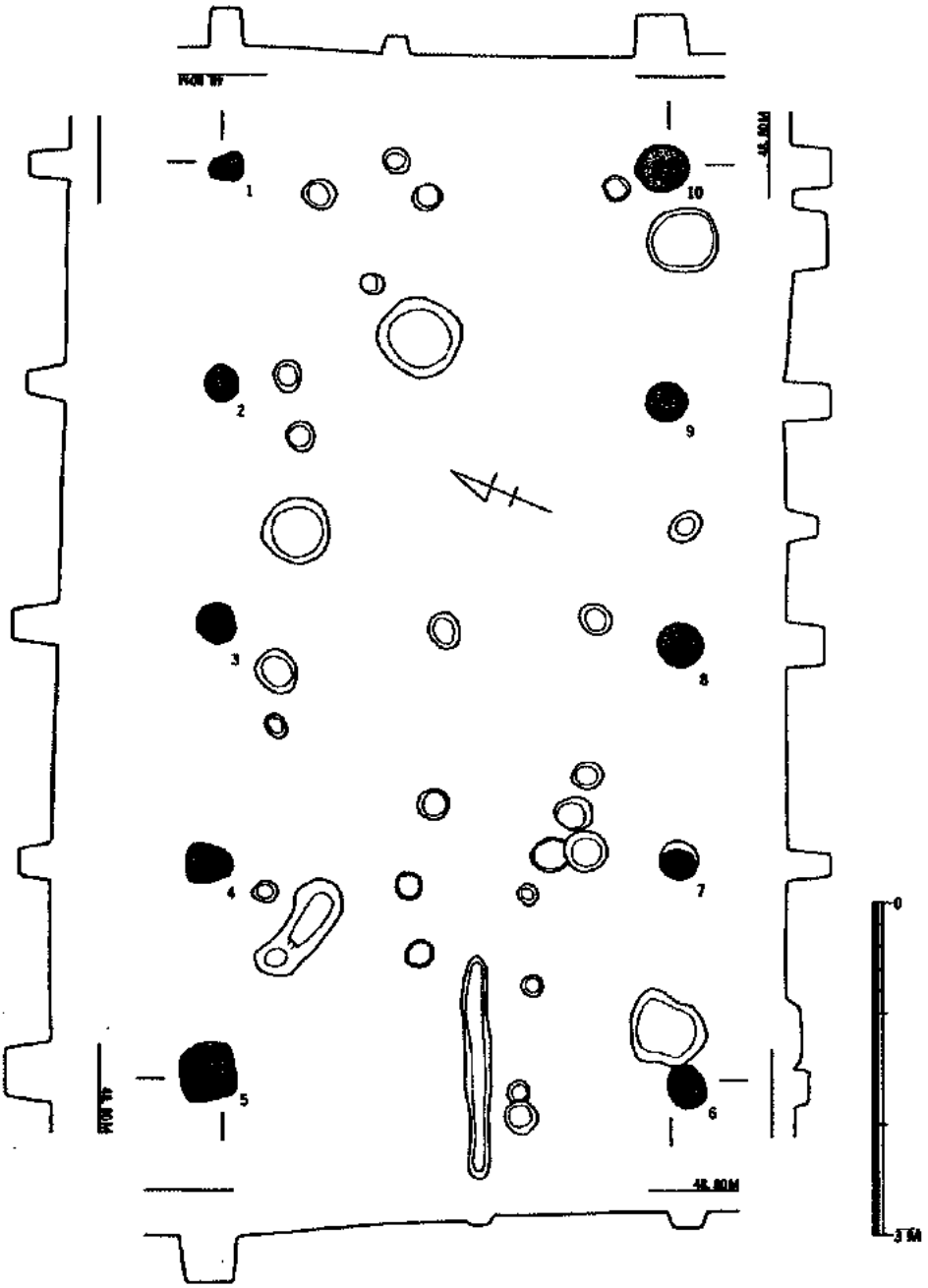
（２）　出土遺物

当遺構１～３・７～９号柱穴からは、土師器甕・土鍋、須恵器破片、焼土塊などが出土しているが、細片のため図化できなかった。

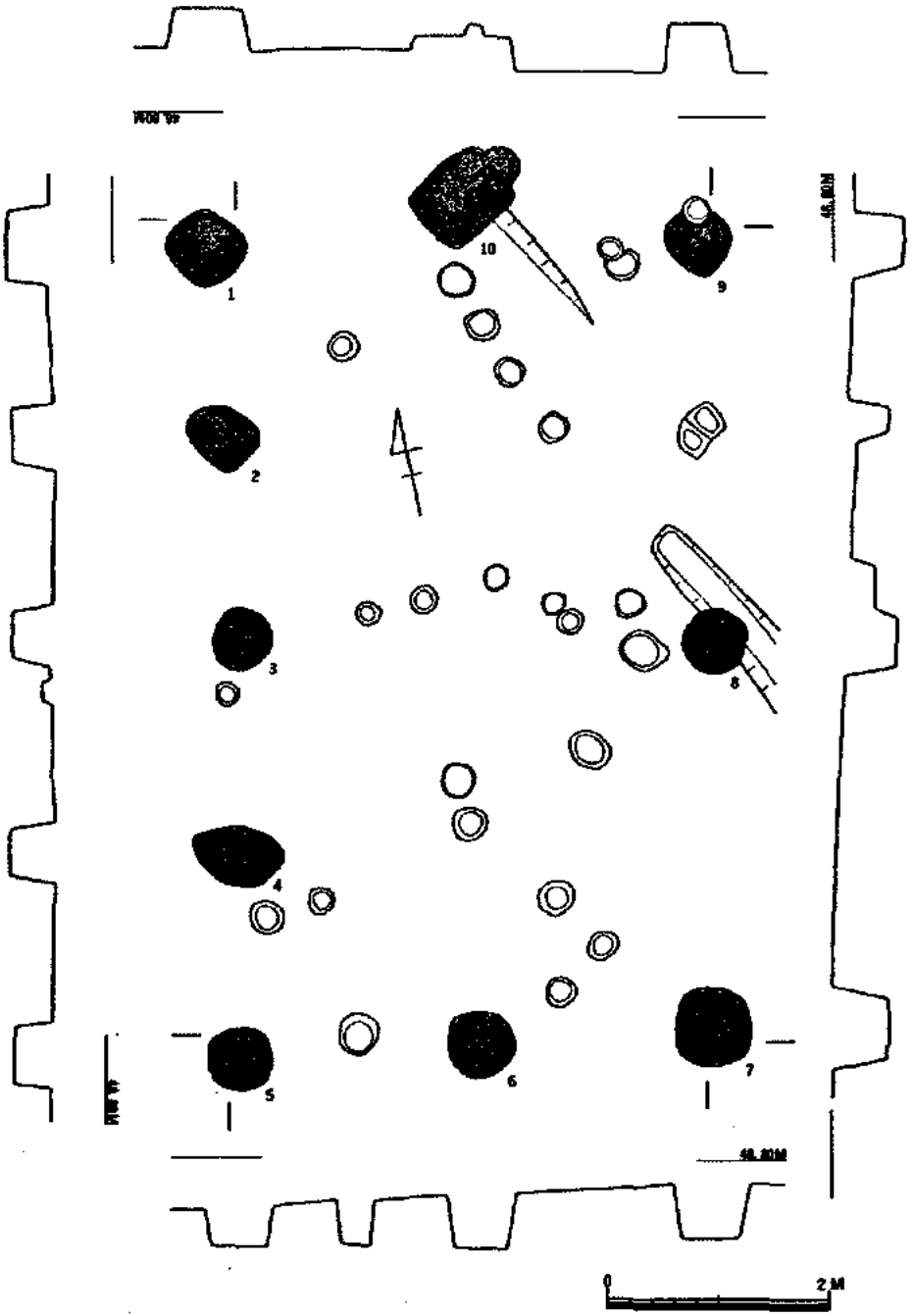
32）　第16号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第34図）

主軸をＮ－11°－Ｅ方向にとるもので、標高48.25ｍの等高線上にあり、第３号掘立柱建物跡の北３ｍの所に位置している。短軸２間×長軸４間の建物で、北側短軸長は5.08ｍを測り、柱



第33図　野坂ホテ田遺跡B区第15号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第34図　野坂ホテ田遺跡B区第16号掘立柱建物跡実測図（1／60）

穴間長は東から2.08m、2.38mを測る。南側短軸長4.88mを測り、柱穴間長は東から2.08m、2.26mを測る。東側長軸長は7.78mを測る。西側長軸長は2・4号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は北から3.66m、3.52mである。西側長軸長は7.98mを測り、柱穴間長は北から1.74m、1.82m、1.98m、1.86mを測る。当遺構8号柱穴と14号竪穴遺構とは切り合い関係にあり、8号柱穴が第14号竪穴遺構を切っている。

（2） 出土遺物

当遺構1・2・4・7・9・10号柱穴からは、土師器皿、須恵器壺などが出土している。土師器皿には底部篦切り離し痕が残るものが確認されたが、糸切り離し痕の残るものは確認されなかった。須恵器壺などは細片のため図化できなかった。

33） 第17号掘立柱建物跡

（1） 遺 構（第35図）

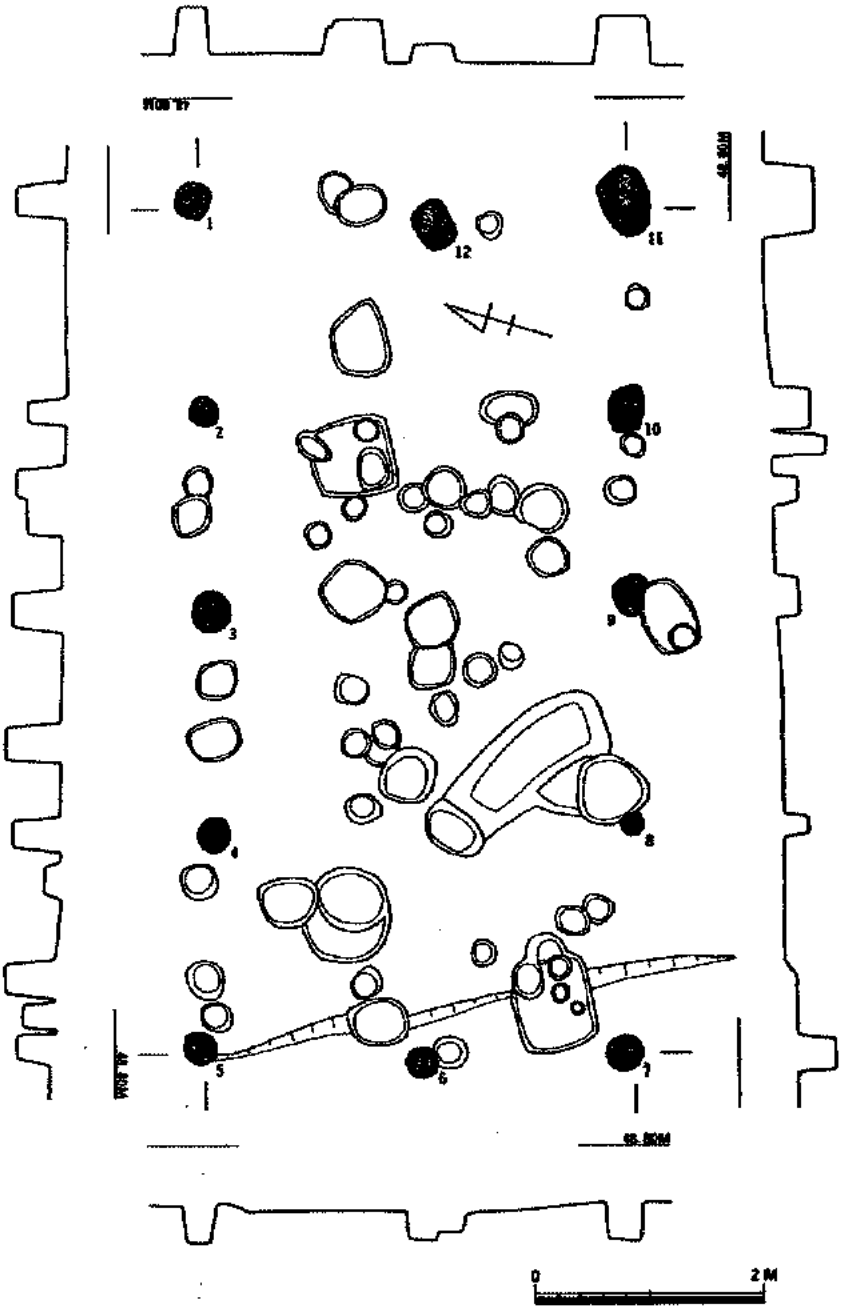
主軸をN－72°－E方向にとるもので、標高48.25mから48.5mにかけての等高線上にあり、調査区北東隅に位置している。短軸2間×長軸4間の建物で、東側短軸長は4.20mを測り、柱穴間長は北から2.14m、1.72mを測る。西側短軸長は4.06mを測り、柱穴間長は北から1.98m、1.76mを測る。北側長軸長は7.88mを測り、柱穴間長は東から1.90m、1.76m、1.99m、1.88mを測る。南側長軸長は8.10mを測り、柱穴間長は東から1.88m、1.74m、1.94m、2.03mを測る。当遺構6～8号柱穴間と第16号掘立柱建物跡との間には切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

（2） 出土遺物

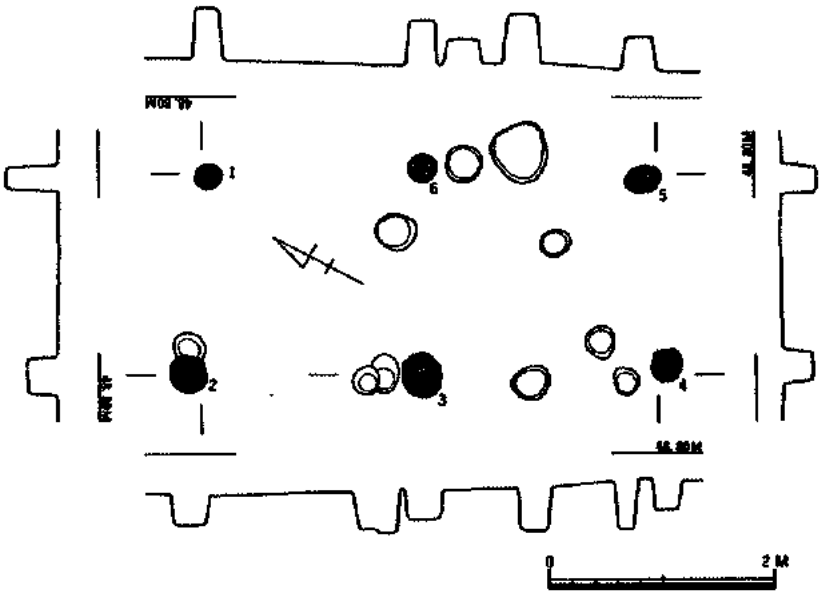
当遺構1・3～6・8・10・11号柱穴からは、土師器Ⅲ、白磁、瓦器、焼土塊などが出土している。いずれも細片のため図化することができなかった。

34） 第18号掘立柱建物跡

（1） 遺 構（第36図）



第35図　野坂ホテ田遺跡B区第17号掘立柱建物跡実測図（1／60）



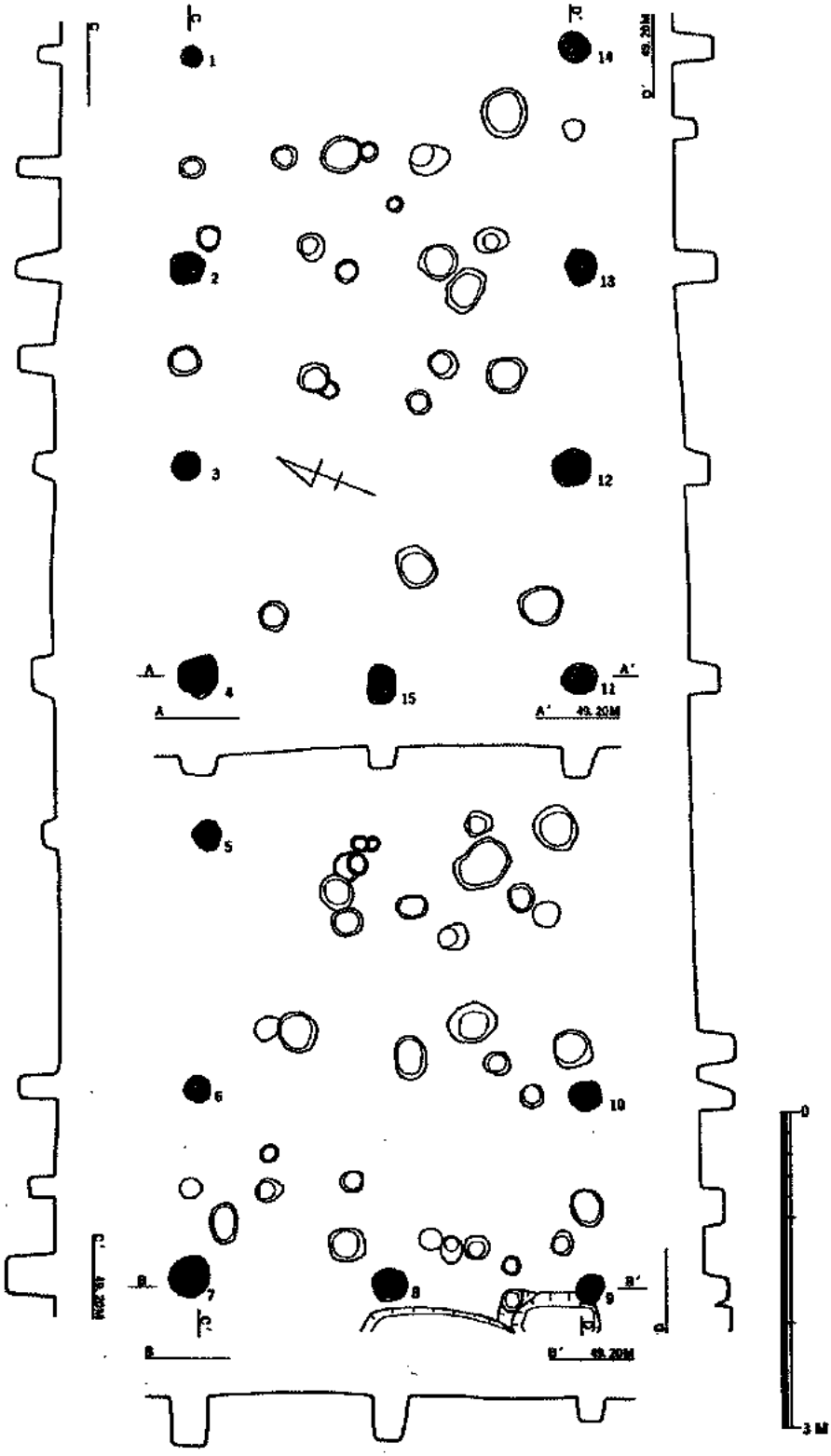
第36図　野坂ホテ田遺跡B区第18号掘立柱建物跡実測図（1／60）

主軸をN－28°－W方向にとるもので、標高48.5mの等高線上にあり、等高線と直交する形で第15号掘立柱建物跡の東3m程の所に位置している。短軸1間×長軸2間の建物で、北側短軸長は2.06mを測り、柱穴間長は1.80mである。南側短軸長は1.94mを測り、1.66mを測る。東側長軸長は4.10mを測り、柱穴間長は北から1.90m、1.92mを測る。西側長軸長は4.49mを測り、柱穴間長は北から2.06m、2.08mを測る。当遺構3～6号柱穴間と第4号掘立柱建物跡との間には切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。

（2）　出土遺物

当遺構1・3・4・6号柱穴からは、土師器皿・杯・甕、鉄器などが出土している。いずれも細片のため図化することができなかった。土師器皿の底部切り離し痕はナデ調整によって消されている。杯も同様の底部調整である。鉄器については、鉄鏃のような棒状のものであるが細片のためその器形を明確にすることができなかった。

35）　第19号掘立柱建物跡



第37図　野坂ホテ田遺跡B区第19号掘立柱建物跡実測図（1／60）

（1）　遺　構（第37図）

主軸をN－68°－E方向にとるもので、遺構南東隅が標高49mの等高線にかかり、等高線と平行する形で、第6・20号掘立柱建物跡と重複し、第5号掘立柱建物跡の南5mの所に位置している。短軸2間×長軸6間の建物で、東側短軸長は3.88mを測る。西側短軸8号柱穴に相対する柱穴が欠損している。1・14号柱穴間長は3.64mである。西側短軸長は4.10mを測り、柱穴間長は北から1.89m、1.88mを測る。北側長軸長は11.99mを測り、柱穴間長は東から2.04m、2.06m、2.04m、1.54m、2.42m、1.78mを測る。南側長軸長は12.20mを測る。北側長軸5号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は東から2.10m、1.97m、1.99m、4.01m、1.78mを測る。当遺構の東西長軸長中位柱穴を結ぶ線上中位には15号柱穴が存在しており、両長軸からの柱穴間長は北から1.76m、1.82mを測る。

（2）　出土遺物

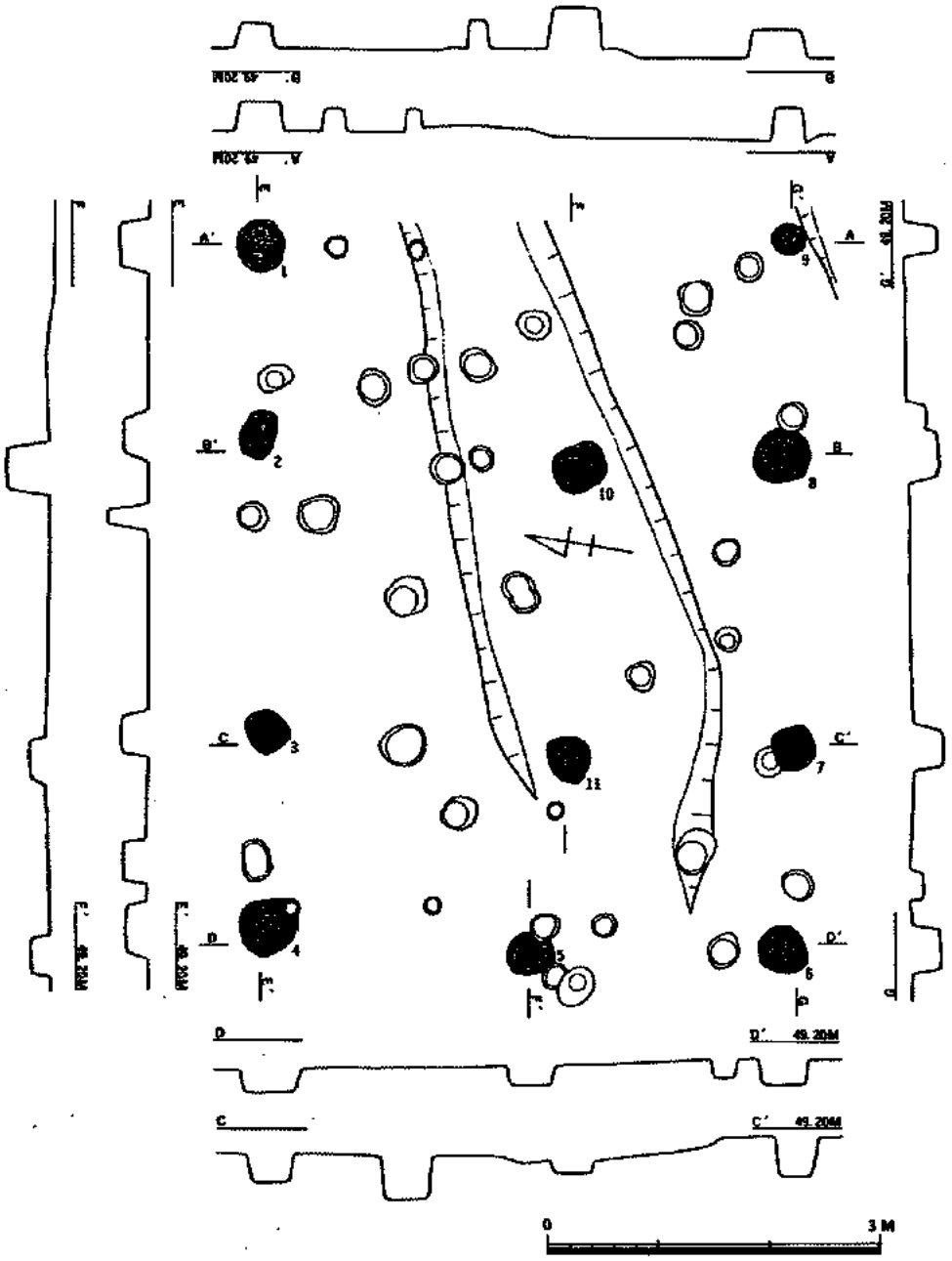
当遺構1～6・8～10・12～14号柱穴からは、土師器皿・杯、須恵器破片、瓦器椀、石鍋、鏃の羽口、鉄滓及び焼土塊などが出土している。いずれも細片で、図化できたのは石鍋のみであった。

石鍋（第42図6）　　6は、滑石製石鍋である。体部の破片である。右回転方向にノミ状工具をあてて削り出している。色調は内面で灰色を呈す。外面は灰銀色を呈し、一部火気のためか黒灰色を呈す。断面は黄味をおびた銀色を呈す。この材質は雲母を含んだようで、光をおび滑らかなものである。

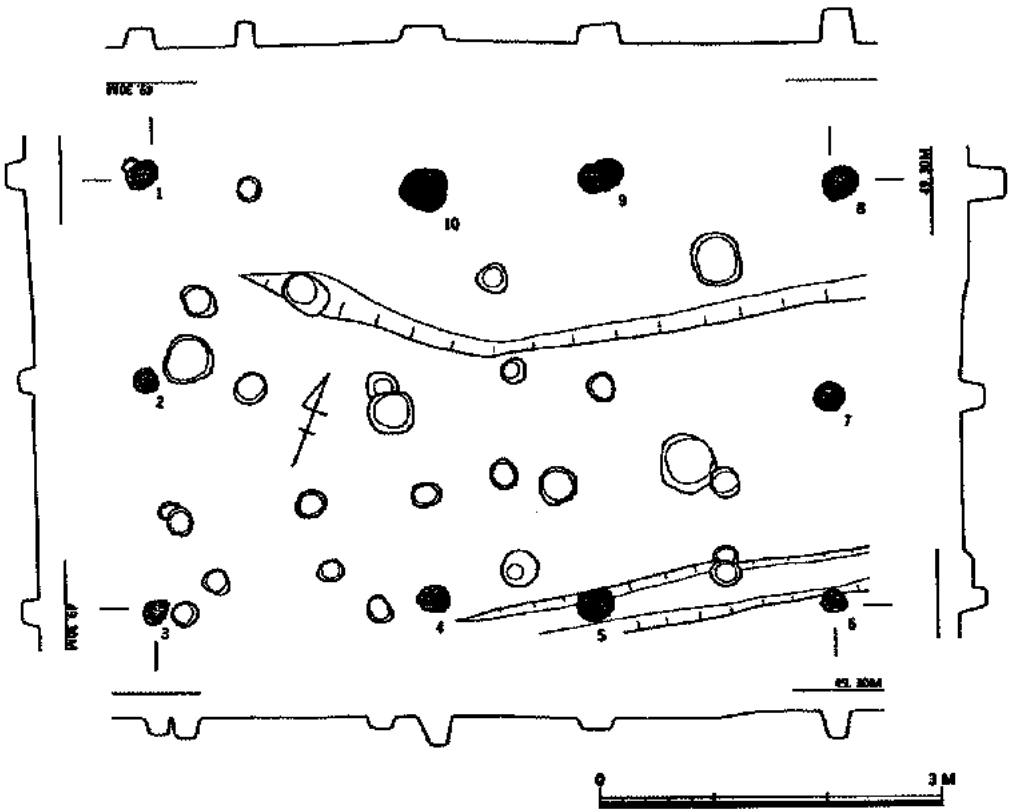
36）　第20号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第38図）

主軸をN－80°－E方向にとるもので、当遺構を標高49mの等高線が対角によこぎる形で、第6・19・21号掘立柱建物跡と重複し、調査区南西隅の一群を形成している。短軸2間×長軸3間の建物で、東側短軸長は5.12mを測る。西側短軸5号柱穴に相対する柱穴が欠損している。柱穴間長は4.74mを測る。西側短軸長は5.10mを測り、柱穴間長は北から2.32m、2.28mを測る。北側長軸長は6.72mを測り、柱穴間長は西から1.76m、2.71m、1.76mを測る。南側長軸長は6.86mを測り、柱穴間長は西から1.82m、2.68m、1.98mを測る。当遺構と第6・19・21号掘立柱建物跡との間には切り合い関係が推定できるが、遺構からの新旧関係は明確ではない。



第38図　野坂ホテ田遺跡B区第20号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第39図　野坂ホチ田遺跡B区第21号掘立柱建物跡実測図（1／60）

（2）　出土遺物

当遺構6・10号柱穴からは、土師器皿・杯、瓦器椀が出土しているが、図化できなかった。

37)　第21号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第39図）

主軸をN－68°－E方向にとるもので、標高49mの等高線上にあり、等高線と平行する形で、

第５号掘立柱建物跡の南８ｍ程の所に位置している。短軸２間×長軸３間の建物で、東側短軸長は3.99ｍを測り、柱穴間長は北から1.91ｍ、1.79ｍを測る。西側短軸長は、4.18ｍを測り、柱穴間長は北から1.86ｍ、2.07ｍを測る。北側長軸長は6.46ｍを測り、柱穴間長は西から2.49ｍ、1.63ｍ、2.04ｍを測る。南側長軸長は6.20ｍを測り、柱穴間長は西から2.46ｍ、1.42ｍ、2.10ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構１・５～７・９号柱穴からは、土師器皿・杯、須恵器及び瓦器破片などが出土している。いずれも細片のため図化できたのは土師器皿１点のみであった。

土師器（第42図７）　　７は、土師器皿である。復元口径4.2㎝、器高1.1㎝、底径7.0㎝である。体部は底部から外上方に屈曲して立ち上り、口縁端部は僅かに外反し丸くおさめられている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整によって整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整が施されている。内底の調整及び板目圧痕については明確にみいだせなかった。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は0.5㎜以下の黒色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。

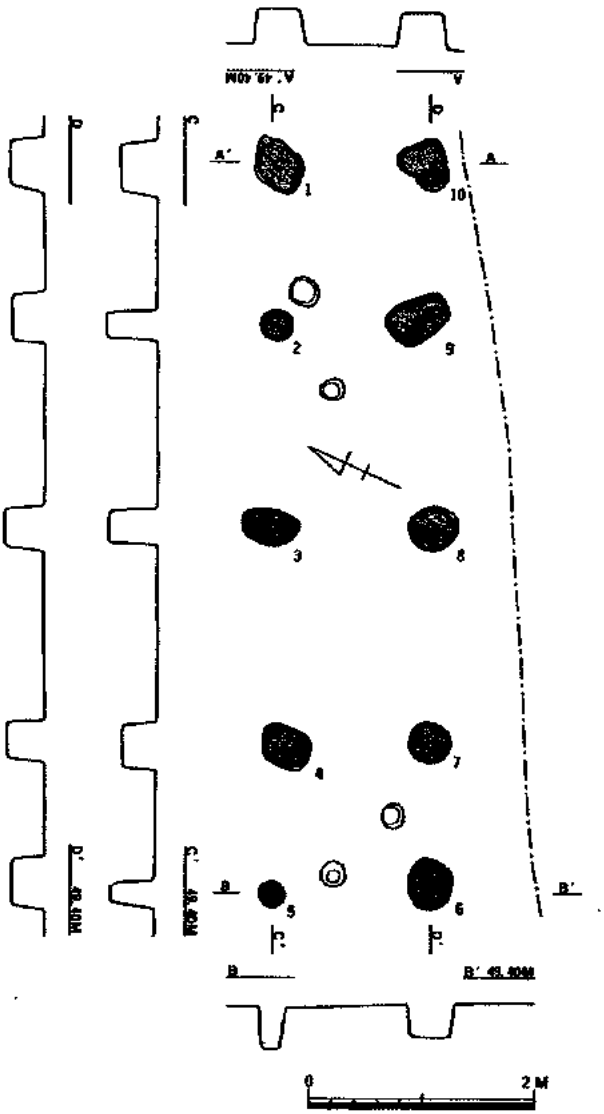
38)　第22号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第40図）

主軸をＮ－65°－Ｅ方向にとるもので、標高49ｍから49.25ｍの間にあり、等高線と平行する形で、調査区南壁西側に位置している。短軸１間（α）×長軸４間の建物で北廂をもつ。短軸方向が１間検出されており、他は調査区外となる。長軸４間と北廂をもつ構造を考慮すると第６号掘立柱建物跡と同一構造が考えられるが定かでない。東側短軸長は1.84ｍ（現状）を測り柱穴間長は1.34ｍを測る。西側短軸長は2.44ｍ（現状）を測り、柱穴間長は1.44ｍを測る。北側長軸長は6.88ｍを測り、柱穴間長は西から1.36ｍ、1.91ｍ、1.80ｍ、1.40ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構２号柱穴を除く柱穴からは、土師器皿・杯、須恵器破片、瓦器椀、青磁皿、鞴の羽口及び焼土塊などが出土している。土師器については、篦及び糸切り離し痕が残るものが確認されている。



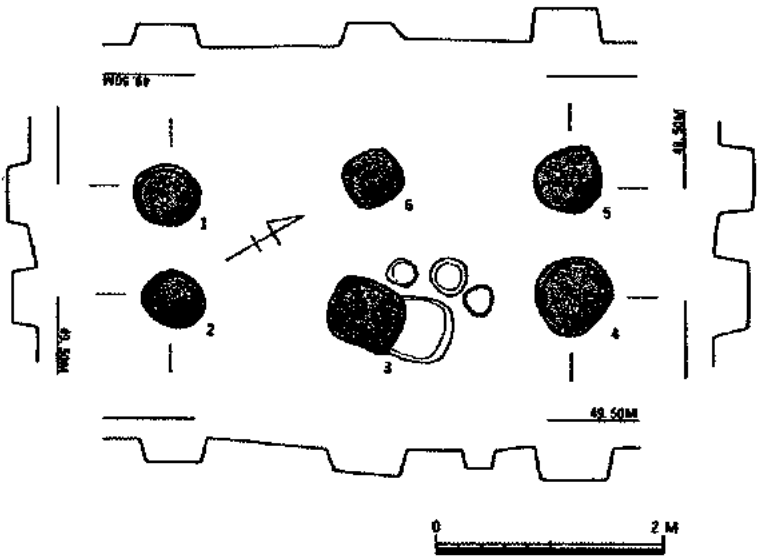
第40図　野坂ホテ田遺跡B区第22号掘立柱建物跡実測図（1／60）

土師器（第42図8～12）　8～11は、いずれも土師器皿である。8は復元口径8.4㎝、器高1.3㎝、底径6.4㎝を測る。器壁は肉厚で、体部は底部から僅かに屈曲させ外上方に立ち上り、すぐ口縁となる。端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。9は口径9.6㎝、器高1.3㎝を測る。底部から体部に移行する部位の器壁は薄いものである。体部は底部から屈曲して外上方に立ち上り、口縁端部をやや外反させ丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底には不定方向ナデ調整を施す。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に赤橙色を呈す。胎土は1㎜前後の赤色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。10は復元口径9.8㎝、器高1.1㎝、底径8.0㎝を測る。器壁は薄いもので、体部は底部から外上方に屈曲し口縁部となる。端部は丸くおさめている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向ナデ調整である。底には板目圧痕が残るが底部切り離し痕は明確でない。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒及び赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。11は復元口径9.8㎝、器高1.3㎝、底径8.0㎝を測る。体部は底部から外上方に屈曲するもので、口縁端部を丸くおさめている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施している。内底調整及び底部切り離し痕については明確でない。色調は内外面共に黄灰褐色を呈す。胎土は0.5㎜以下の赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。12は、土師器杯である。復元口径10.8㎝、器高2.7㎝、底径6.8㎝を測る。体部は底部から屈曲し外上方へ立ち上り、中位でやや内傾して口縁部下に至る。口縁部は外反し端部は尖りぎみに丸くおさめている。調整は内外面共に横ナデ調整を施している。底部には糸切り離し痕が残る。色調は外面で黄褐色を呈し、内面で暗褐色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良のものである。焼成は良好と思われる。

瓦器（第42図13）　13は、瓦器椀である。復元底径8.0㎝、高台径7.8㎝、高台高0.7㎝を測る。体部は底部から丸味をもって外上方に立ち上る。高台は逆台形を呈するものである。調整は器表風化が著しく明確にできない。色調は内面で黒灰色を呈し、外面で灰色を呈す。焼成はあまい。

白磁（第42図14）　14は、白磁V類に属するものと思われる。図示した傾きは定かでない。体部内面には1条の糸状沈線が施され、櫛目文を有す。施釉は薄く、釉色は内外面共に灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し微粒の黒色粒を含むものである。焼成は良好である。

39)　第1号掘立柱構築物跡



第41図　野坂ホテ田遺跡B区第1号掘立柱構築物跡実測図（1／60）

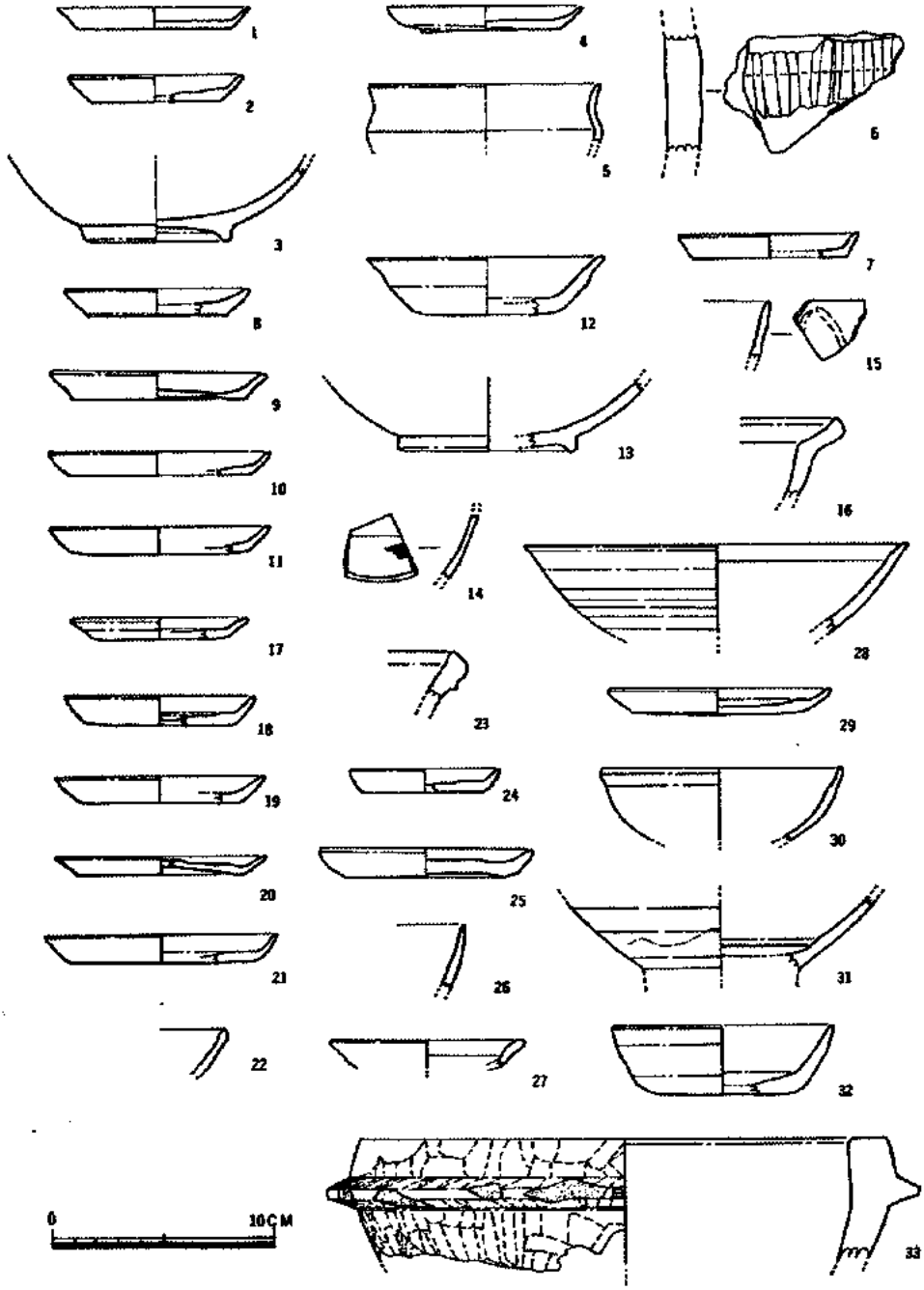
（1）　遺　構（第41図）

主軸をN－22°－E方向にとるもので、遺構北隅が標高48.25mの等高線にかかり、等高線と平行する形で、調査区北西隅に位置している。短軸1間×長軸2間の構築物である。北側短軸長は1.72mを測り、柱穴間長は1.10mを測る。南側短軸長は1.48mを測り、柱穴間長は0.94mを測る。東側長軸長は4.16mを測り、柱穴間長は西から1.72m、1.82mを測る。西側長軸長4.14mを測り、柱穴間長は西から1.80m、1.80mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構1・2・4・6号柱穴からは、土師器破片、須恵器杯身・壺などが出土している。いずれも細片のため図化できたものは壺1点にとどまった。

須恵器（第42図5）　5は、須恵器広口壺の破片である。復元口径10.6cmを測る。肩部に1条沈線を巡らすもので、体部は肩部で「く」字に屈曲し頸部から口縁部を若干外反させており、端部を丸くおさめている。調整は現存の破片では内外面共横ナデ調整を施している。色調は外面頸部上及び内面で青灰色を呈す。外面頸部下は黒褐色のまじる青灰色を呈す。胎土は1㎜前後の白色粒及び微粒の黒色粒を含むものである。焼成は良好。



第42図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図1（1／3）

40)　溝状遺構（第13図）

当調査区内には第1～7号までの溝状遺構が存在している。これらの遺構は、調査区の西隅及び南側に位置している。第5～7号溝状遺構は相互に切り合っているが、遺構が浅く、土質・土色が類似しているため、その新旧関係は明確でない。出土遺物については、切り合いのない場所から出土しているもので、各遺構のものは混入していない。

（1）　第1号溝状遺構

調査区西隅を南北に走るもので、直線距離にして20mを測る。北端は調査区北西隅で消滅し南端は第9号竪穴遺構上で消滅する。

出土遺物（第43図34～46）　34～37は、土師器皿である。34は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。底部器壁は厚い。体部は底部から屈曲しほぼ垂直に立ち上り、口縁端部を丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整を施している。底には板目圧痕が残る。色調は外面で茶褐色を呈し、内面で暗黄灰褐色を呈す。胎土は0.5mm程の白色粒を含むものである。焼成は良好である。35は復元口径8.4cm、器高1.2cm、底径7.0cmを測る。体部は底部から僅かに屈曲させたもので、すぐ口縁となる。口縁端部は尖りぎみではあるが丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整を施している。色調は外面で茶褐色を呈し、内面で暗灰褐色を呈す。胎土は微粒の白色砂粒を含むものである。焼成は良好と思われる。36は、口径8.4cm、器高1.2cm、底径7.0cmを測る。器壁は厚く、体部は底部から外上方に屈曲させたもので、すぐに口縁となる。端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施している。内底は不定方向のナデ調整で、底には板目圧痕が残る。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面は黄褐色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成は良好と思われる。37は復元口径9.0cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。体部は底部から外上方に屈曲させ直線的に立ち上るもので、口縁端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に丁寧な横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に暗黄灰褐色を基調とするもので、ナデ調整を施した器面の剥離した部位は赤褐色を呈す。胎土は赤褐色を呈し、0.5mm以下の赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。38は、瓦器椀である。復元口径13.8cmを測る。体部は丸味をおびて外上方に立ち上

る。内面口縁部には1条の沈線を巡らしている。調整は体部内外面共に横方向の篦研磨調整を施している。色調は内外面共に灰銀色を呈す。胎土は灰白色を呈し砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成はややあまい。39・40は、土師器椀である。39は復元底径6.8cm、高台径7.0cm、高台高1.0cmを測る。体部は底部から丸味をもって立ち上る。高台断面は逆台形を呈す。調整は内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に赤褐色を呈す。焼成はあまい。40は復元口径13.8cmを測る。体部は底部から僅かに屈曲し中位に稜をもち、口縁部を外反させ、端部を丸くおさめている。調整は内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に赤褐色を呈す。胎土は0.5mm程の赤色粒を含むものである。41～44は、磁器である。41は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類に属するものと思われる。体部は丸味をもって立ち上り、若干口縁端部を外反させ、端部を丸くおさめている。体部外面には中位まで篦削り調整を施している。体部内面には縦に2条の沈線を配し、画面を分割している。画面には飛雲文を配している。釉色は内外面共に青緑色を呈す。胎土は青味をおびた灰白色を呈し、微粒の黒色粒を含む緻密なものである。焼成は良好。42は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5－a類に属するものと思われる。底径7.0cm、高台径5.4cm、高台高0.9cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部は肉厚である。高台畳付及び高台見込みは露胎で、重ね焼成時の目跡が残る。体部外面には鎬のない蓮弁文を有す。内面見込みには篦による片彫の沈線が巡っている。釉色は内外面共に黄緑色を呈す。胎土は青灰色を呈し、緻密である。焼成は良好。43は白磁皿Ⅸ類に属するものと思われる。復元底径6.2cmを測る。底部は平底で、体部は底部から外上方へ直線的に立ち上る。施釉は全面に施されている。内見込みに1条の沈線を巡らしている。釉色は青味をおびた灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し緻密である。焼成は良好。44は同安窯系青磁皿Ⅰ－2－b類に属するものと思われる。体部は平底の底部から外上方へ直線的に立ち上り、体部中位で屈曲するものである。見込みには篦による片彫と櫛によるジグザグ文様を配している。施釉は全面施釉で底部のみ施釉後カキ取られている。釉色は黄味をおびた緑灰色を呈す。胎土は青灰白色を呈し緻密である。焼成は良好である。45は、土師器牛角把手付土器の把手部である。把手は3.4cm程の棒状土塊を土器にとり付け、1.5cm程の粘土塊により補強している。土器と把手接着部はナデ調整により整えられ、把手部は篦削り調整で整えられる。色調は赤褐色を基調とするが、把手部下端に黒斑がみられる。胎土は1mm前後の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。46は瓦器質の鉢である。体部は外上方に立ち上り、口縁部は外面を玉縁状に仕上げており、内面はやや内傾させ段を有し、断面は三角形を呈す。調整は体部内面を横方向の篦削り、それ以外は横ナデ調整を施している。色調は内外面共に黄灰色を呈す。一部口縁部外面で黒褐色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まないが、多孔質のものである。焼成はややあまい。他に図化できなかったが、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、瓦器質の土鍋、滑石製石鍋、鉄滓及び焼土塊などが出土している。

（2）　第２号溝状遺構

調査区南端を東西に走るもので、直線距離にして32ｍを測る。西端は第22号掘立柱建物跡の北１ｍの所で消滅し、東端は調査区南東隅へと続き、調査区外へのびる。

当遺構からは、土師器杯、白磁椀及び青磁、須恵器などが出土しているが、いずれも細片のため図化することができなかった。

（3）　第３号溝状遺構

調査区中央部やや南側を東西に走るもので、直線距離にして23ｍを測る。西端は第４号竪穴遺構上で消滅し、東端は調査区東壁へと続き、調査区外へのびる。

当遺構からは、土師器皿・杯、青磁椀、須恵器杯・甕、焼土塊などが出土している。土師器皿・杯については、篦及び糸切り離し痕を残すものも検出している。

（4）　第４号溝状遺構

調査区中央、第３号溝状遺構の北３ｍの所を東西に走るもので、直線距離にして24ｍを測る。西端は第14号掘立柱建物跡の南３ｍの所で消滅し、東端は円形の竪穴に切られ消滅している。

当遺構からは、土師器皿・杯・高台付椀・青磁椀・白磁椀、須恵器杯・壺・甕、瓦器などが出土している。土師器皿については糸切り離し痕を残すものを検出したが、篦切り離し痕の残るものについては確認できなかった。

（5）　第５号溝状遺構

第２号溝状遺構の北２ｍの所を東西に走るもので、直線距離にして33ｍを測る。西端は調査区東壁へと続き、調査区外へとのびる。

当遺構からは、土師器皿・高台付椀・牛角把手付土器、白磁椀・青磁椀・皿、須恵器甕、瓦器、鉄釘、焼土塊などが出土している。土師器皿については糸切り離し痕を残すものを検出したが、篦切り離し痕を残すものについては確認できなかった。

（6）　第６号溝状遺構

第５号溝状遺構と直交するもので調査区南東部に位置している。直線距離にして４ｍを測る。

北端は第９号掘立柱建物跡の東１ｍの所で消滅し、南端は第５号溝状遺構と切り合う。

当遺構からは土師器皿、須恵器杯蓋・杯、瓦器高台付椀、焼土塊などが出土した。いずれも細片のため図化することができなかった。土師器皿については糸切り離し痕を残すものであった。

（７）　第７号溝状遺構

第６号溝状遺構の東２ｍの所を走るもので、直線距離にして５ｍを測る。北端は第６号溝状遺構と並ぶように消滅し、南端は第５号溝状遺構と切り合う。

当遺構からは土師器皿、須恵器壺・甕、瓦器高台付椀などが出土している。土師器皿については糸切り離し痕の残るものを検出したが、篦切り離し痕の残るものは確認できなかった。

41）　その他の小竪穴出土遺物

土師器（第43図47～55・58）　47～52は、土師器皿である。47は口径 8.4㎝、器高 1.5㎝、底径 4.8㎝を測る。底部の器壁は厚く、体部は外上方に立ち上り、中位に稜を有する。口縁部はそのまま引きのばされ、端部は丸くおさめられている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し内底は不定方向のナデ調整である。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に暗褐色を呈す。胎土は 0.5㎜以下の白色粒を含むものである。焼成は良好。48は口径 8.4㎝、器高 1.4㎝、底径 6.8 ㎝を測る。体部は外上方に立ち上り、口縁を若干外反させ、端部は丸くおさめている。底部には糸切り離し痕が残る。切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好。49は口径 9.2㎝、器高 1.2㎝、底径 7.4㎝を測る。体部は底部から屈曲しほぼ直立する。底部の器壁は薄い。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は粗に横ナデ調整されている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整を施している。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。一部底部に黒斑がみられる。焼成はややあまい。50は復元口径 8.4㎝、器高 1.1㎝、底径 7.2㎝を測る。体部は底部から屈曲し、すぐに口縁部となる。口縁端部は尖り、断面三角形を呈す。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に茶褐色を呈す。胎土は 0.5㎜以下の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。51は復元口径 8.0㎝、

器高 1.0 cm、底径 6.4 cmを測る。体部は底部から僅かに屈曲し、外上方へ立ち上り、口縁部は尖りぎみで、端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。底には板目圧痕が残る。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成はややあまい。52は復元口径10.6cm、器高 1.5 cm、底径 8.2 cmを測る。体部は外上方に立ち上り、中位に稜を有する。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整である。色調は内外面共に茶褐色を呈す。胎土は微砂粒を多く含むものである。焼成はややあまい。内底に刱と思われる穀類の圧痕がある。53は、土師器高台付椀である。復元口径15.2cm、器高 5.1 cm、底径 6.6 cm、高台径 6.4 cm、高台高 0.4 cmを測る。体部は丸味をおびて外上方へ立ち上る。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめている。調整は底部に篦削りを施した後高台を貼り付け横ナデ調整により整えている。体部内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土は灰色のものを黄褐色のものが挟んだような色調を呈すもので砂粒を含まない精良なものである。焼成はあまい。54は、土師器椀である。復元口径15.6cm、器高 4.1 cm、底径 9.8 cmを測る大型のものである。体部は平底の底部から外上方へ直線的に立ち上り、口縁部を僅かに外反させ、端部は丸くおさめている。調整は風化が著しいため明確でない。色調は内外面共に黄灰褐色を呈す。胎土は 0.5 mm程の赤色粒を含むものである。焼成はあまい。55は、土師器杯である。口径12.4cm、器高 2.8 cm、底径 8.8 cmを測る。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は未調整である。調整は成形時の水引きによる横ナデ調整のみである。色調は内外面共に暗茶褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。58は、土師器小壺である。底部及び口縁部を欠くものである。球形の体部から外上方に開く口縁をもつものである。調整は体部外面でナデ調整を施しており、内面は指によるナデ調整を施している。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は 0.5 mm程の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。

須恵器（第43図56・57）　56・57は、いずれも須恵器杯蓋である。56は口径10.2cm、器高 3.1 cm、天井径 5.4 cmを測る。体部は天井部より丸味をおびて外下方に降る。口縁部は僅かに内彎し、端部は丸くおさめている。調整は天井部切り離し後の縁辺ナデ調整及び、体部内外面に施された横ナデ調整、天井部内面の不定方向ナデ調整である。色調は内面で青灰色を呈し、外面で黒灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。天井部内面には「V」字の篦記号がみられる。57は口径 7.0 cm、器高 2.4 cm、受部径 9.8 cmを測る。器形のわりに器壁が肉厚である。体部は天井部から外下方に降り中位に稜を有するものである。受部は深くかえりは内傾している。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめている。調整は外面で天井部

から体部中位まで篦削り調整で、それ以下及び内面については横ナデ調整を施している。色調は内面で暗い小豆色を呈し、外面で青灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。

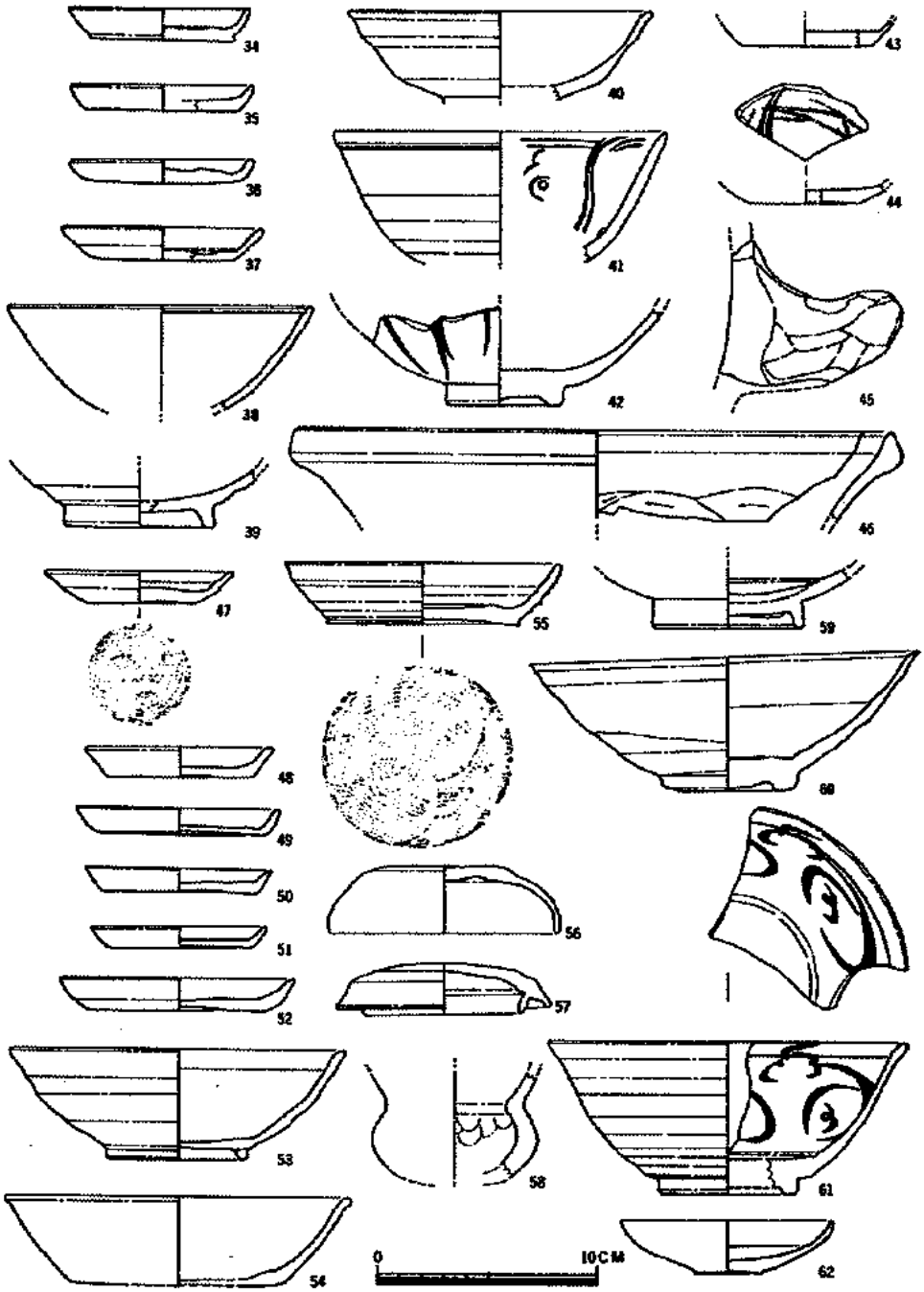
磁器（第43図59・60・62）　59・60は、いずれも青磁椀である。59は龍泉窯系青磁椀と思われる。底径7.2cm、高台径7.0cm、高台高1.4cmを測る。高台断面は四角形を呈し、底部器壁は肉厚である。高台見込みには重ね焼きの目跡が4ケ所みられる。施釉は現存している部位には施されておらず露胎となっている。胎土は黄灰白色を呈し、微粒の黒色粒を含むものである。焼成は良好である。60は同安窯系青磁椀Ⅱ類に属するものと思われる。底部の器壁が肉厚で、高台は逆台形状に削り出されている。口径17.8cm、器高6.2cm、底径6.6cm、高台径6.2cm、高台高0.6cmを測る。体部は僅かに内彎しつつ外上方に立ち上り、口縁部を外反させ、端部を尖りぎみにおさめている。調整は体部外面で底部から器高の½程を篦削り調整している。施釉は全面に施した後、体部外面下位をカキ取ったもので、体部下位及び高台は露胎となる。釉色は内外面共に黄味をおびた緑灰色を呈す。胎土は黄灰白色を呈し、やや粗なものである。焼成は良好である。62は、白磁Ⅲ Ⅵ類に属するものと思われる。口径8.6cm、器高2.4cm、底径3.0cmを測る。体部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。底部と体部の境には段を有しており明らかである。体部は僅かに内彎しつつ外上方に立ち上り、上位で屈曲し直立する。屈曲部内面には1条の沈線を巡らし段を有す。施釉は薄く全面に施した後、体部外面下位をカキ取ったもので、体部下位及び底部は露胎となっている。釉のかかりはよくなく、内面では剝離している部位もみられる。釉色は黄白色を呈す。胎土は灰白色を呈し粗なものである。焼成は良好である。

鉄滓を出土した小竪穴が1基あり、鞴の羽口を出土した小竪穴が4基ある。

42)　包含層出土遺物

包含層は、暗黒褐灰色の粘質の非常に強い土で、調査区北西部及び西部に10～15cm程の堆積をみるものである。この包含層を除去した面が、当調査区内遺構の検出面である。

土師器（第44図63～65・67・71・73）　63～65は、土師器皿である。63は口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.4cmを測る。体部は外上方に立ち上り、口縁部は僅かに外反し、端部は尖りぎみにおさめられている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施し、内底には不定方向のナデ調整を施している。底には板目圧痕が残る。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面で黄褐色を呈す。胎土は0.5mm程の赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。64は口径8.2cm、器高1.1cm、底径5.4cmを測る。底は僅かに上げ底で、体部は屈曲し直立する。口縁端部は丸くおさめ

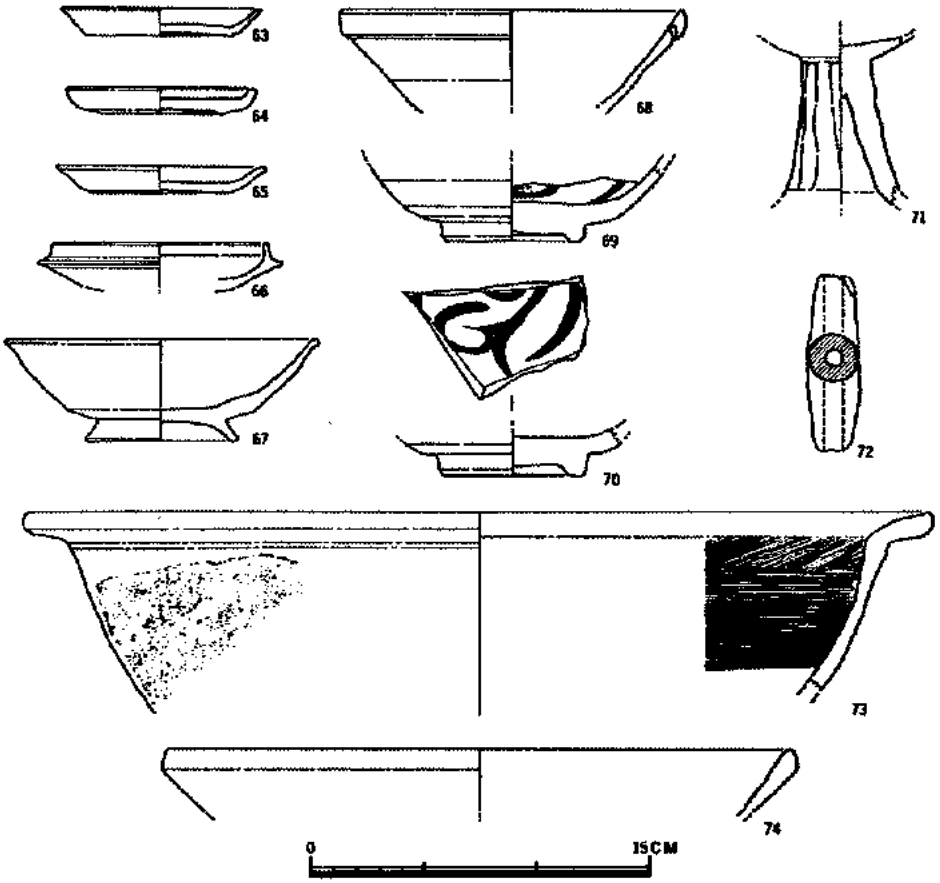


第43図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）

られている。底部には糸切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面で横ナデ調整を施し、内底は不定方向のナデ調整を施している。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面で茶褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。65は口径9.2cm、器高1.2cm、底径6.4cmを測る。体部は底部から外上方に立ち上り、口縁部を外反させ、端部は丸くおさめている。底部には篦切り離し痕が残り、切り離し後の縁辺は横ナデ調整により整えられている。調整は体部内外面共に横ナデ調整を施している。色調は外面で褐色を呈し、内面で暗黄灰褐色を呈する。胎土は灰色のものを褐色のものが挾んだ色調を呈するもので、砂粒をほとんど含まない精良なものである。焼成は良好と思われる。67は、高台付椀である。復元口径13.6cm、器高4.6cm、底径6.4cm、高台径6.8cm、高台高1.0cmを測る。体部は僅かに内彎しつつ外上方に立ち上り、口縁部を外反させ、端部を水平にするものである。高台は断面が逆台形を呈し、外方へ張り出すものである。調整は体部外面で、底部篦削り後に高台を貼り付け横ナデ調整を施す。内底は不定方向のナデ調整を施し内面は横ナデ調整を施す。色調は外面で黄褐色を呈し、内面で暗黄灰褐色を呈す。胎土は、黒色のものを黄灰褐色のものが挾んだ色調を呈するもので、0.5mm程の赤色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。71は、高杯の杯底から脚柱部にかけての破片である。杯底部内面はナデ調整を施し、脚柱部は篦削り調整である。色調は全面茶褐色を呈す。胎土は0.5mm程の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。73は、土師質の鉢である。体部は僅かに内彎しつつ立ち上り、口縁部下に至る。口縁部は外反し、端部は方形に仕上げられている。調整は外面上半は横ナデ調整を施し、下半には格子目叩きを施したものか、その一部を確認した。内面は口縁部で横ナデ調整を施し、それ以下は現存部位では横方向の刷毛目調整を施している。色調は内外面共に赤味をおびた黄灰褐色を呈す。胎土は灰色のものを赤味をおびた黄灰褐色のものが挾んだ色調を呈し、微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好と思われる。

須恵器（第44図64・74）　64は、須恵器杯身である。復元口径9.4cm、受部径10.8cm、立ち上り器高0.8cmを測る。体部は外上方に立ち上り、受部は水平にのばされる。受部端部は尖りぎみである。立ち上りは僅かに内傾している。口縁部は尖りぎみで、端部は丸くおさめられる。調整は現存部分では内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗青灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。74は、須恵質の鉢である。復元口径27.2cmを測る。体部は直線的に外上方へ立ち上り口縁部に至る。口縁端部は断面三角形に仕上げられている。調整は現存部位では横ナデ調整を施している。色調は内外面共に青灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を少量含むものである。焼成は良好。

磁器（第44図68～70）　68は、白磁椀Ⅳ類に属するものと思われる。復元口径15.2cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上る。口縁部は粘土紐を貼り付け肥厚させ玉縁となる。この際、貼り付け痕として玉縁中に空間ができている。施釉は内面及び外面体部上位に施されてい



第44図　野坂ホテ田遺跡B区出土遺物実測図Ⅲ（1／3）

る。釉色は青味をおびた灰白色を呈す。胎土は灰白色を呈し、微粒の黒色粒を含むものである。焼成は良好。69は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類に属するものと思われる。底径7.4cm、高台径6.4cm、高台高0.8cmを測る。底部器壁は肉厚で、高台断面は四角形を呈す。体部は丸味をもって外上方へ立ち上る。高台畳付及び高台見込みは施釉されず露胎である。釉色は内外面共に青味をおびた緑灰色を呈す。胎土は青灰白色を呈し、緻密なものである。焼成は良好。内面見込みには、重ね焼きの目跡が4ヶ所残る。70は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類に属すると思われる。底径8.0cm、高台径6.6cm、高台高1.0cmを測る。底部器壁は肉厚で、高台断面は四角形を呈す。内面見込みには篦片彫によるキノコ状の文様がみられる。高台畳付及び高台見込みには施釉されておらず露胎となる。釉色は内外面共に黄味をおびた緑灰色を呈す。胎土は灰白色を呈し、緻密なも

のである。焼成は良好。

土製品（第44図72）　72は土製の錘である。長さ7.8㎝、幅2.3㎝×2.1㎝を測る。形は中位が最大となるエンタシス状の円柱形を呈す。中は空洞で0.7㎝×0.8㎝を測る円形の穴があいている。色調は黄褐色を呈す。胎土は赤褐色のものを黄褐色のものが包み込むような色調を呈し、微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。

4. まとめ

今回の調査では、磯辺山から北東に派生する丘陵上に、A・B両区合せて、竪穴遺構24基、溝状遺構10基、木棺墓1基、掘立柱建物跡25棟、掘立柱構築物1基の存在を確認した。A・B両区は、その距離も近く一連の遺跡と思われる。

当遺跡の営まれた時期は、A区第8号竪穴遺構埋土中に混入して出土した須恵器杯の時期を初源とし、一時途絶え、12世紀初頭から12世紀前半を前後する時期にB区第1・2・6・22号掘立柱建物などが出現する。その後、12世紀末から13世紀前半にA区4～6号竪穴遺構やB区19号掘立柱建物、A区第1号木棺墓などが出現する最盛期となり、以後遺跡は衰退し、B区溝状遺構などが埋没して途絶える時期は13世紀前半から中頃の時期であろう。

A区検出の竪穴遺構は、鉄滓及び鞴の羽口、多量の焼土塊を出土することから、鍛冶、特に精錬工程に関連がある遺構の可能性が考えられる。又遺跡検出の掘立柱建物跡の柱穴埋土中からも鉄滓や鞴の羽口、焼土塊を出土する。掘立柱建物跡については、倉庫と建物の2種類が考えられ、建物は、相互の重複をみる。柱穴が切り合い関係にあるものは、B区第3・4・10・11号掘立柱建物の4棟にすぎない。新旧関係を旧→新と表記すると3号→4号、10号→11号掘立柱建物のようになる。

以上、見てきたように、当検出遺構は、12世紀後半から13世紀前半を中心とする時期のもので、鍛冶に関連する性格をおび、遺跡南部に見る掘立柱建物群は、これらに関る工人の工房もしくは家屋としての性格も考えられ、当遺跡が、中世野坂地区における鍛冶関連の拠点であったことを裏づけるものと思われる。時期はのぼるが周辺地域に、鍛冶炉を検出した野坂一町間遺跡が存在し、野坂地区が古くから鍛冶の一拠点として栄え、これに関連する工人集団の居住区の存在も考えられる。（安部）

註1　福岡県教育委員会　『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）』　1977年

註2　貝原益軒：『筑前国續風土記拾遺　第4巻』

註3　宗像市教育委員会　『埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』「野坂中山遺跡」　1984年

註4　宗像市教育委員会　『埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』「野坂一町間遺跡」　1985年

註5　横田賢次郎・森田勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究論集4　1978年

第3章　吉留下惣原遺跡

1. はじめに

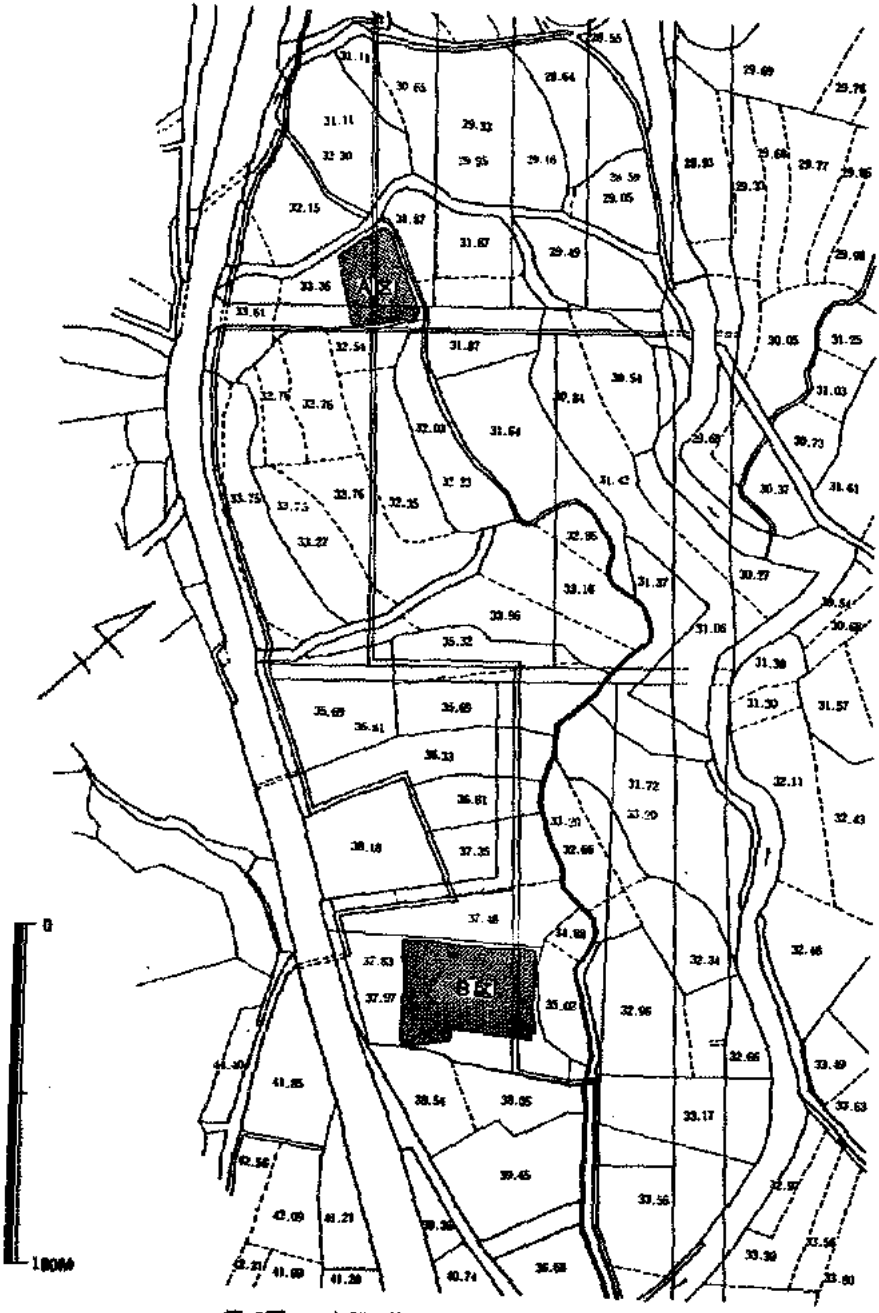
吉留下惣原遺跡は、福岡県宗像市大字吉留字下惣原に所在する遺跡で、宗像市と宮田町との郡境にそびえる標高325.7mの新立山から北へと派生する丘陵の北東側緩斜面にあたる標高33mから38mの地点に位置している。『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）』[1]では、330202番が所在する古墳群から東へ約250m、鞍手町新延から猿田峠を越えて宗像市の赤間に抜ける直方宗像線北側に沿うようにある。

当遺跡の所在する吉留地区は、遠賀郡・鞍手郡に抜ける分岐点として、古くから交通の要所として発展してきた地域である。8世紀後半から9世紀前半の範疇に考えられる武丸大上げ遺跡[2]にみる。総瓦葺きの掘立柱群などがこの地域に存在することや近世に筑前六宿等で知られる長崎街道の一宿木屋瀬と赤間道で知られる唐津街道の一宿赤間とを結ぶ官道であったことなどからも、当地区が交通の要所として発展してきたことを裏づけるものであろう。現在もこの地域は、国道3号線・直方宗像線等の道路が走り、遠賀郡から北九州市、鞍手郡から田川、豊前へと抜ける分岐点として発展している。

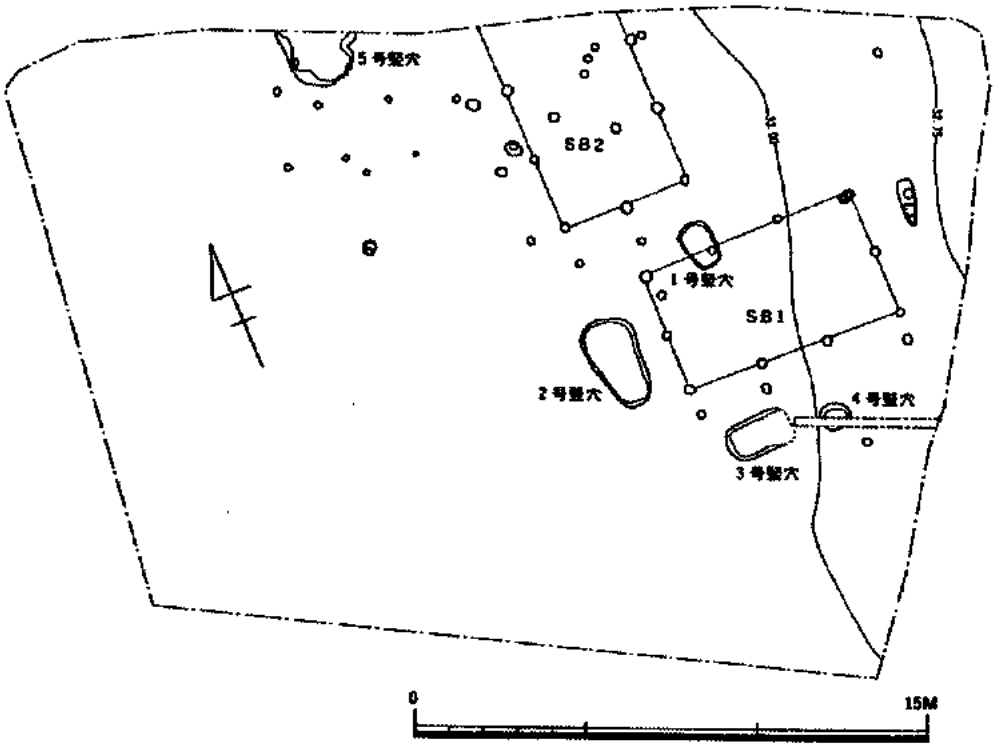
当遺跡の周辺には、中房内に一十八の蓮子を配する単弁十六弁蓮華文軒丸瓦及び、中央1本縦線を中心に左右上下4回反転均正唐草文軒平瓦等の瓦を配したと目される掘立柱群を検出した武丸大上げ遺跡をはじめ古墳時代初頭から12世紀におよぶ生活遺構と遺物を検出した武丸高田遺跡[3]、古墳時代の竪穴住居跡と中世から近世の建物跡を検出した武丸小伏遺跡[4]、弥生時代中期から6世紀の竪穴式住居跡等を検出した吉留京田遺跡[5]、『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）』に記されている吉留及び松丸の諸古墳、積石塚、遺物散布地など多くの遺跡が分布している。

発掘調査は、吉武地区県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査として、64haのうち、切り盛り調整が思うにまかせずに削土される部分について調査を実施し、このうち遺構の遺存状況が比較的よいと思われる2地点より掘立柱群及び縄文晩期の包含層等を検出した。北からそれぞれA区800㎡・B区1200㎡と称して面的調査を実施した。

発掘調査期間は、稲の収穫がはじまったばかりの昭和61年9月13日、重機搬入後ただちにおこなった試掘調査によって始まり、昭和61年12月24日遺構実測完了と共に、当遺跡の発掘調査を終了した。稲の収穫時期と重なり、途中収穫を待つために、約1ヶ月間発掘調査をみあわせた。



第45図　吉留下窯原遺跡発掘調査区図（1／2000）

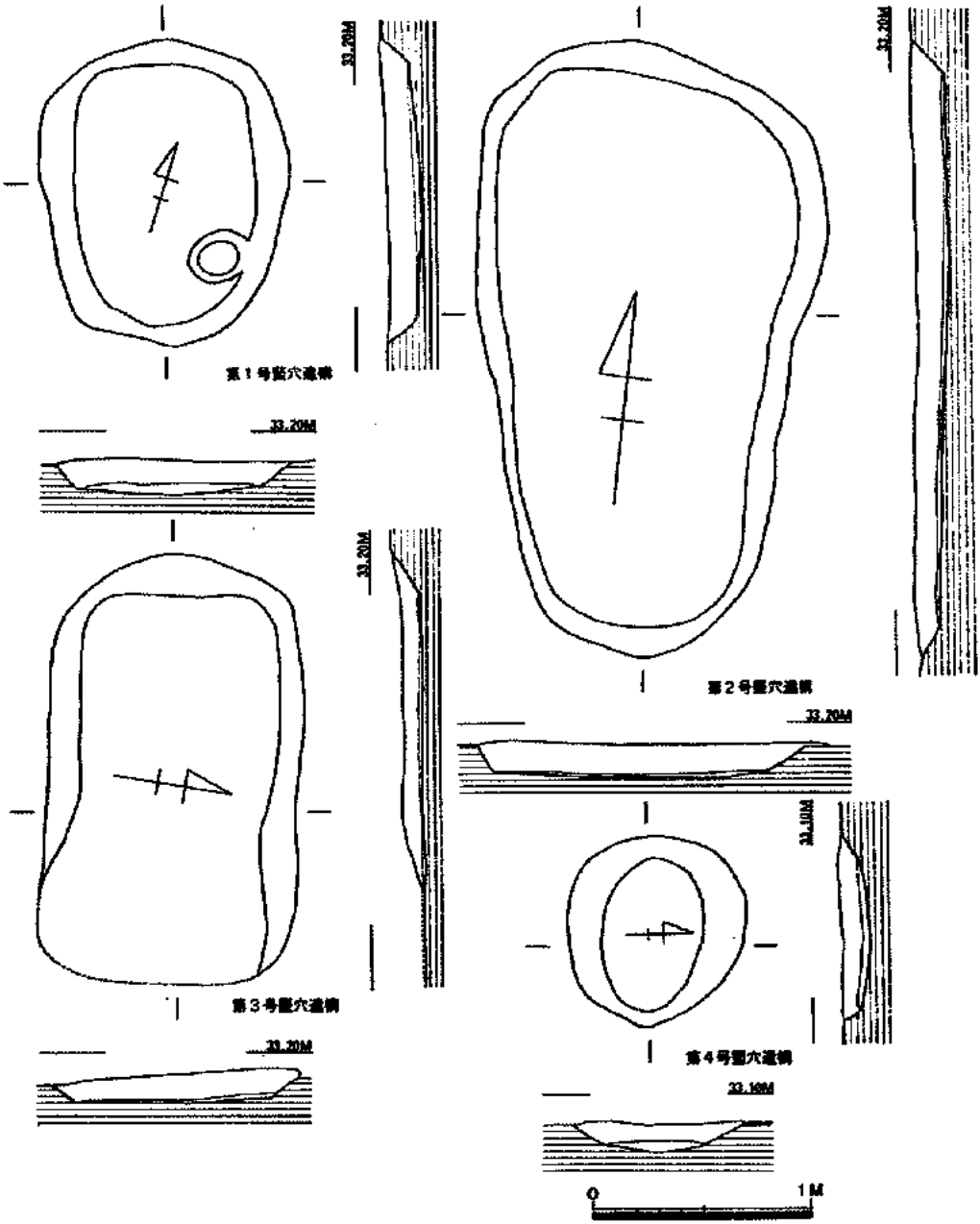


第46図　吉留下窓原遺跡A区遺構配置図（1／200）

2. A区の調査

当区は、面的調査を実施した内、北側に位置するもので、標高32.5mから33.25mの間に分布する800㎡の区域である。当区からは、竪穴遺構5基、掘立柱建物跡2棟と、20数基の柱穴と思われる小竪穴遺構を検出した。小竪穴遺構に関しては、遺物取り上げの便宜上、発掘進行順に遺物を出土したもののみにP番号1番から20番を符した。この中には、掘立柱建物跡2棟の柱穴も含まれているが、これは後に各遺構の柱穴番号に変更するものとした。又調査区遺構検出面下に数枚の堆積層があり、この中に縄文土器を包含することを確認したため、遺構の検出調査後、この包含層の調査を実施した。

当稿では、調査区内検出遺構について報告するものとし、縄文土器包含層及び出土遺物については、別稿にて報告する。



第47図　吉留下惣原遺跡A区第1～4号竪穴遺構実測図（1／30）

1）　第1号竪穴遺構

（1）　遺　構（第47図）

主軸をN－19°－W方向にとるもので、調査区の北東部に位置している。形は隅丸長方形を呈し、長軸長1.42m×短軸長1.13mを測る。

当遺構は、暗灰黒色粘質土を取り去った面で検出されており、埋土は黒色粘質土及び黒色砂質土であった。この埋土上から、第1号掘立柱建物跡3号柱穴が切りこんでいる。

2）　第2号竪穴遺構

（1）　遺　構（第47図）

主軸をN－8°－W方向にとるもので、調査区の中央やや東寄りの所に位置している。形は長方形を呈し、長軸長2.86m×短軸長1.49mを測る。

当遺構も第1号竪穴遺構と同様に暗灰黒色粘質土除去面で検出されており、埋土は黒色粘質土であった。

3）　第3号竪穴遺構

（1）　遺　構（第47図）

主軸をN－80°－E方向にとるもので、調査区東側、第1号竪穴遺構の南5mの所に位置している。形は遺構東壁を削平されており「コ」字状を呈しているが、長方形を呈していたものと思われる。長軸長1.99m（復元長）×短軸長1.14mを測る。

4）　第4号竪穴遺構

（1）　遺　構（第47図）

主軸をN－87°－W方向にとるもので、第3号竪穴遺構の東1mの所に位置している。形は円形を呈し、長軸長0.87m×短軸長0.78mを測る。

当遺構は、暗灰黒色砂質土を取り去った面で、黒褐色粘質土の遺構面が検出された。この面

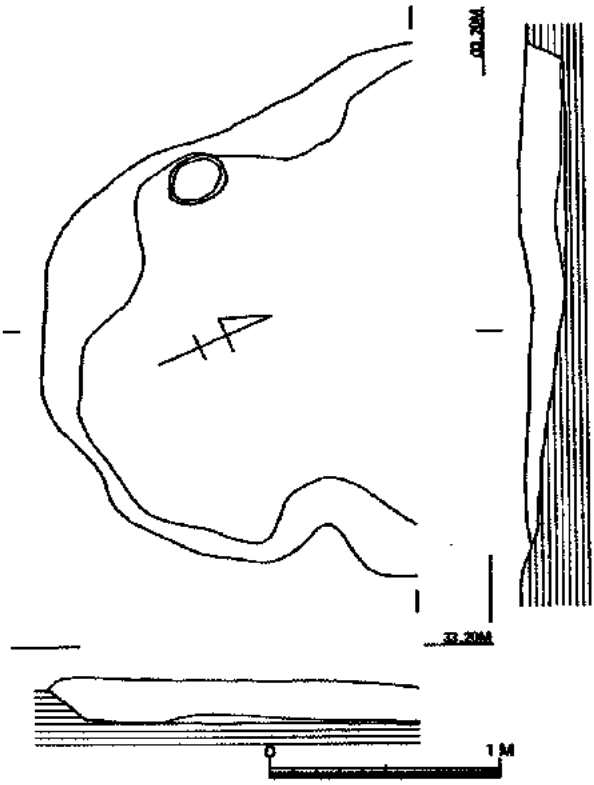
は、他の遺構検出面と同様である。

5） 第５号竪穴遺構

（１） 遺 構（第48図）

主軸をＮ－23°－Ｅ方向にとるもので、調査区北西部にあり、第１号竪穴遺構の北西11ｍの所に位置している。遺構は、当調査区内に約半分を検出したもので、残りは調査区外の畦により消滅している。形は現状で、くずれた楕円形を呈している。長軸長2.07ｍ（現存長）×短軸長2.39ｍを測る。

当遺構の埋土は、黒色粘質土が下層に堆積し、上層に黒色砂質土層が堆積している。



第48図　吉留下惣原遺跡Ａ区第５号竪穴遺構実測図（１／30）

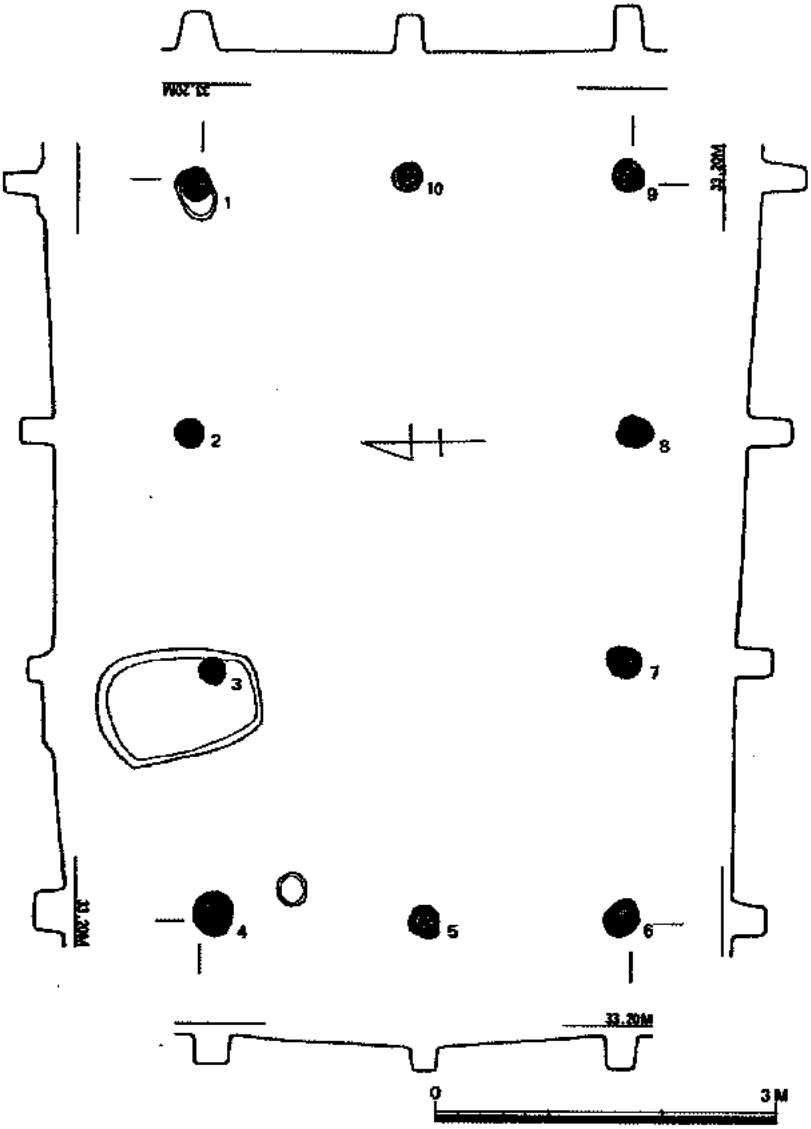
（２） 出土遺物

当遺構からは、土師器の手捏に近いもの及び須恵器甕の破片、焼土塊などが出土している。

6） 第１号掘立柱建物跡

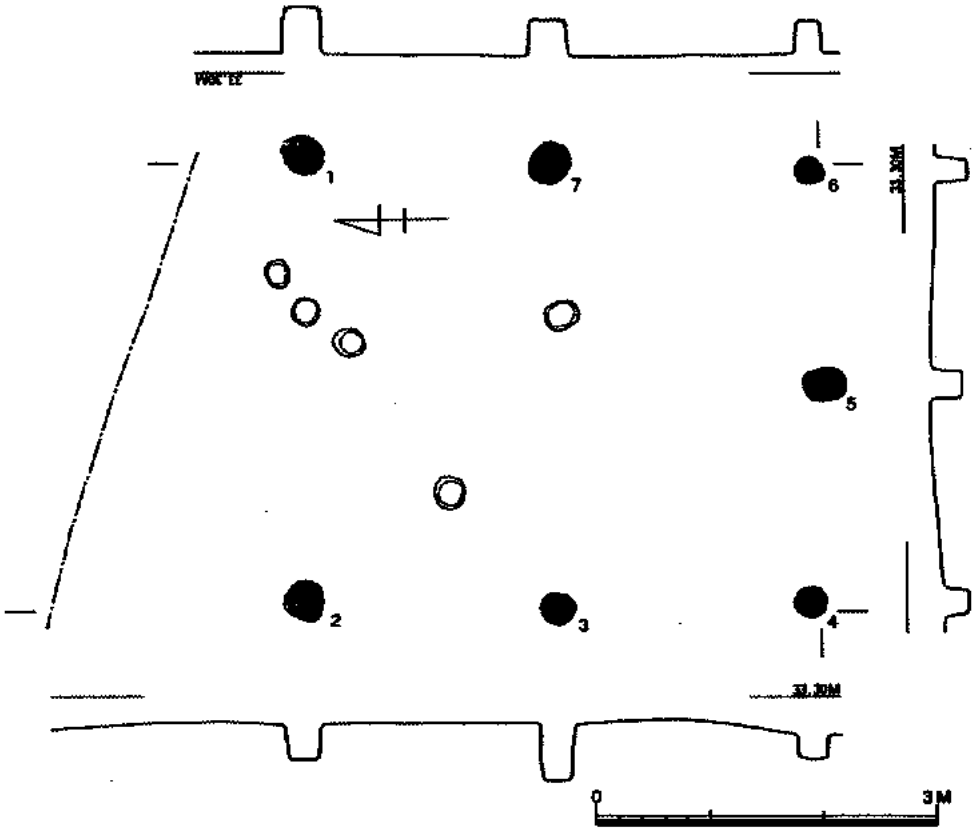
（１） 遺 構（第49図）

主軸をＮ－88°－Ｗ方向にとるもので、標高33ｍの等高線上にあり、等高線と直交する形で第２号竪穴遺構の１ｍ程西に位置している。短軸２間×長軸３間の建物で、東側短軸長は4.14ｍを測り、柱穴間長は北から1.89ｍ、1.93ｍを測る。西側短軸長は3.87ｍを測り、柱穴間長は北から1.86ｍ、1.74ｍを測る。北側長軸長は6.86ｍを測り、柱穴間長は西から2.16ｍ、2.14ｍ、



第49図　吉留下窯原遺跡A区第1号掘立柱建物跡実測図（1／60）

2.22mを測る。南側長軸長は6.94mを測り、柱穴間長は西から2.28m、2.06m、2.28mを測る。当遺構3号柱穴は、第1号竪穴遺構を切っている。

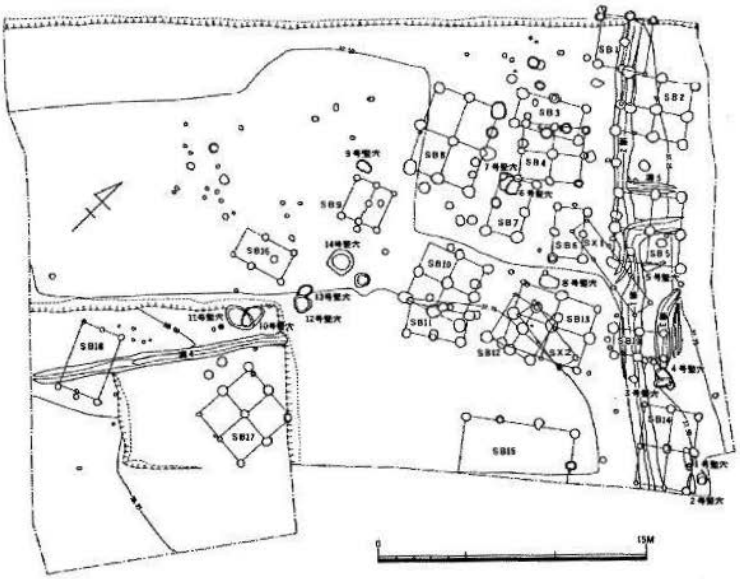


第50図　吉留下惣原遺跡A区第２号掘立柱建物跡実測図（１／60）

７）　第２号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第50図）

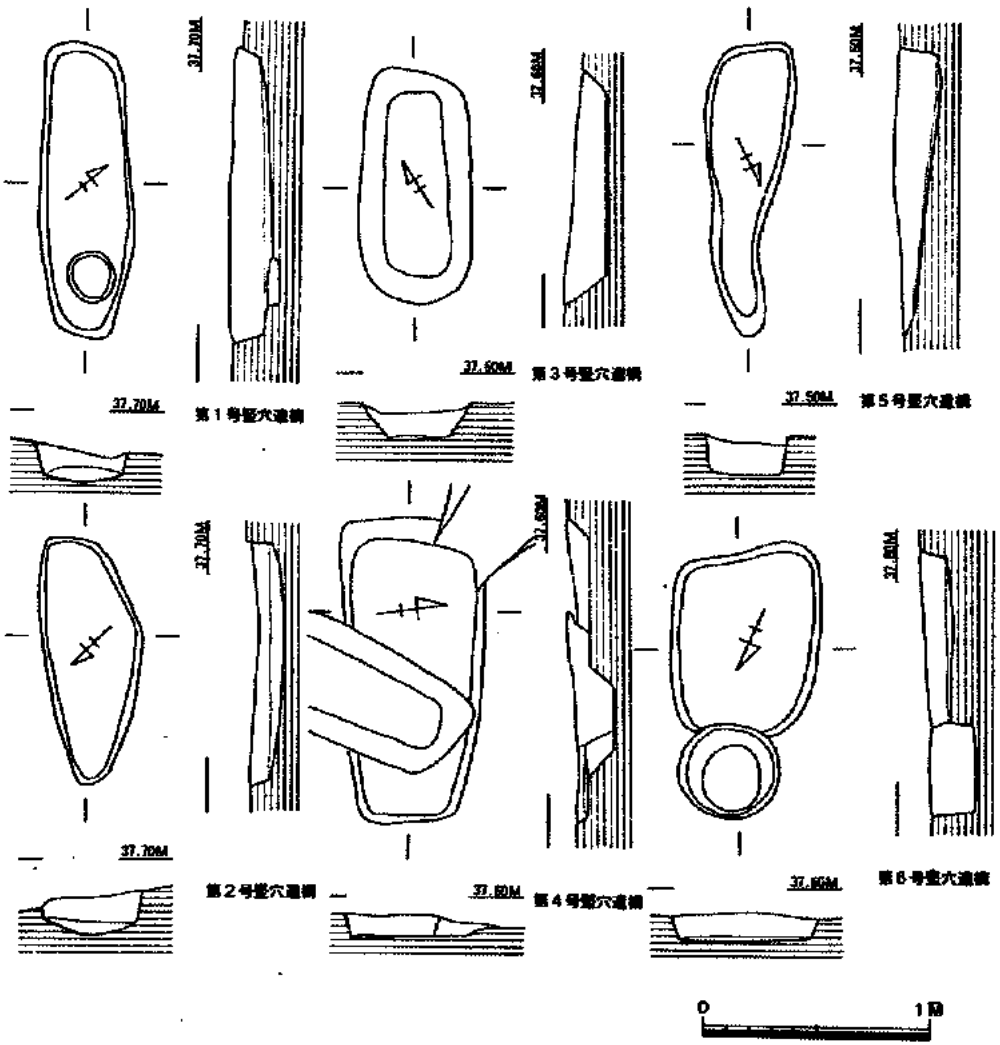
主軸を磁北方向にとるもので、標高33mの等高線と平行する形で第１号掘立柱建物跡の北２mの所に位置している。短軸２間×長軸２間（α）の建物で、北側短軸は調査区外である。南側短軸長4.12mを測り、柱穴間長は西から1.96m、1.92mを測る。東側長軸長は5.58m（現存長）を測り、柱穴間長は南から2.30m、2.16mを測る。西側長軸長は6.82m（現存長）を測り、柱穴間長は南から2.24m、2.24mを測る。



第51図　吉留下恩原遺跡B区遺構配置図（1／200）

3. B 区 の 調 査

当区は、面的調査を実施した内、南側に位置するもので、標高37mから38.5mの間に分布する、1200㎡の区域である。当区からは、竪穴遺構14基、溝状遺構５基、掘立柱建物跡19棟、掘立柱構築物２棟と多数の小竪穴遺構を検出した。A区同様に、小竪穴遺構に関してP番号１番から128番を符した。各遺構の柱穴に含まれるものは、後に各遺構の柱穴番号に変更する。



第52図　吉留下惣原遺跡B区第１～６号竪穴遺構実測図（１／30）

1）　第１号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－51°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線と平行する形で、調査区の北東隅に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.32m×短軸長 0.4 mを測る。当遺構と第14号掘立柱建物跡６号柱穴とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器甕、須恵器甕・杯と思われる破片などが出土している。いずれも細片のため図化することができなかった。

2）　第２号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－47°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線と平行する形をとり、第１号竪穴遺構の西50cmの所に位置している。形は、南壁のややくずれる長方形を呈し、長軸長1.19m×短軸長0.45mを測る。当遺構と第14号掘立柱建物跡５号柱穴とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。当遺構の埋土は暗灰黒色粘質土で、第１号溝状遺構埋土と同様のものである。

（2）　出土遺物

当遺構からは、土師器甕、須恵器杯身などの破片が出土している。いずれも細片のため図化することができなかった。

3）　第３号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－32°－E方向にとるもので、標高37.5mの等高線上にあり、等高線と直交する形で、第１号竪穴遺構の北西３mの所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.06m×短軸長

0.49mを測る。当遺構と第4号竪穴遺構とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

4）　第4号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－82°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線と平行する形をとり、第3号竪穴遺構と重複した所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.35m×短軸長0.61mを測る。当遺構は第3号竪穴遺構に切られ、第3号溝状遺構からも切られている。

5）　第5号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－26°－E方向にとるもので、標高37.25mの等高線と直交する形をとり、第1号溝状遺構の北側に接するような位置に存在している。形は、東壁がややくずれる長方形を呈し、長軸長1.29m×短軸長0.36mを測る。当遺構と第5号掘立柱建物跡4号柱穴とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

6）　第6号竪穴遺構

（1）　遺　構（第52図）

主軸をN－26°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線と直交する形をとり、第8号掘立柱建物跡の東2mの所に位置している。形は、遺構北壁を切られており、「コ」字状を呈しているが、本来は長方形を呈する。長軸長0.77m（現存長）×短軸長0.66mを測る。当遺構と第4号掘立柱建物跡5号柱穴とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

7）　第7号竪穴遺構

（1）　遺　構（第53図）

主軸をN－45°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線と直交する形をとり、第6号竪穴

遺構と重複した所に位置している。形は、東壁を大きく切られており、「く」字状を呈しているが、本来は長方形を呈する。長軸長1.04m×短軸長0.83m（現存長）を測る。当遺構北西隅は、第7号掘立柱建物跡1号柱穴によって切られている。

8） 第8号竪穴遺構

（1） 遺　構（第53図）

主軸をN－61°－E方向にとるもので、標高37.5mの等高線と平行の形で、第6号掘立柱建物跡の南1mの所に位置している。形は、長方形を呈し、長軸長1.11m×短軸長0.74mを測る。当遺構の埋土は、暗黄褐色粘質土で、当調査区の地山（黄褐色粘質土）とほとんど同じ硬さであった。

（2） 出土遺物

当遺構からは、その上層で土師器壺の破片が出土している。これは、肩部から胴部にかけての破片で球形をしており、器壁も3㎜程で薄いものである。取り上げ時に細片となったため、図化することができなかった。

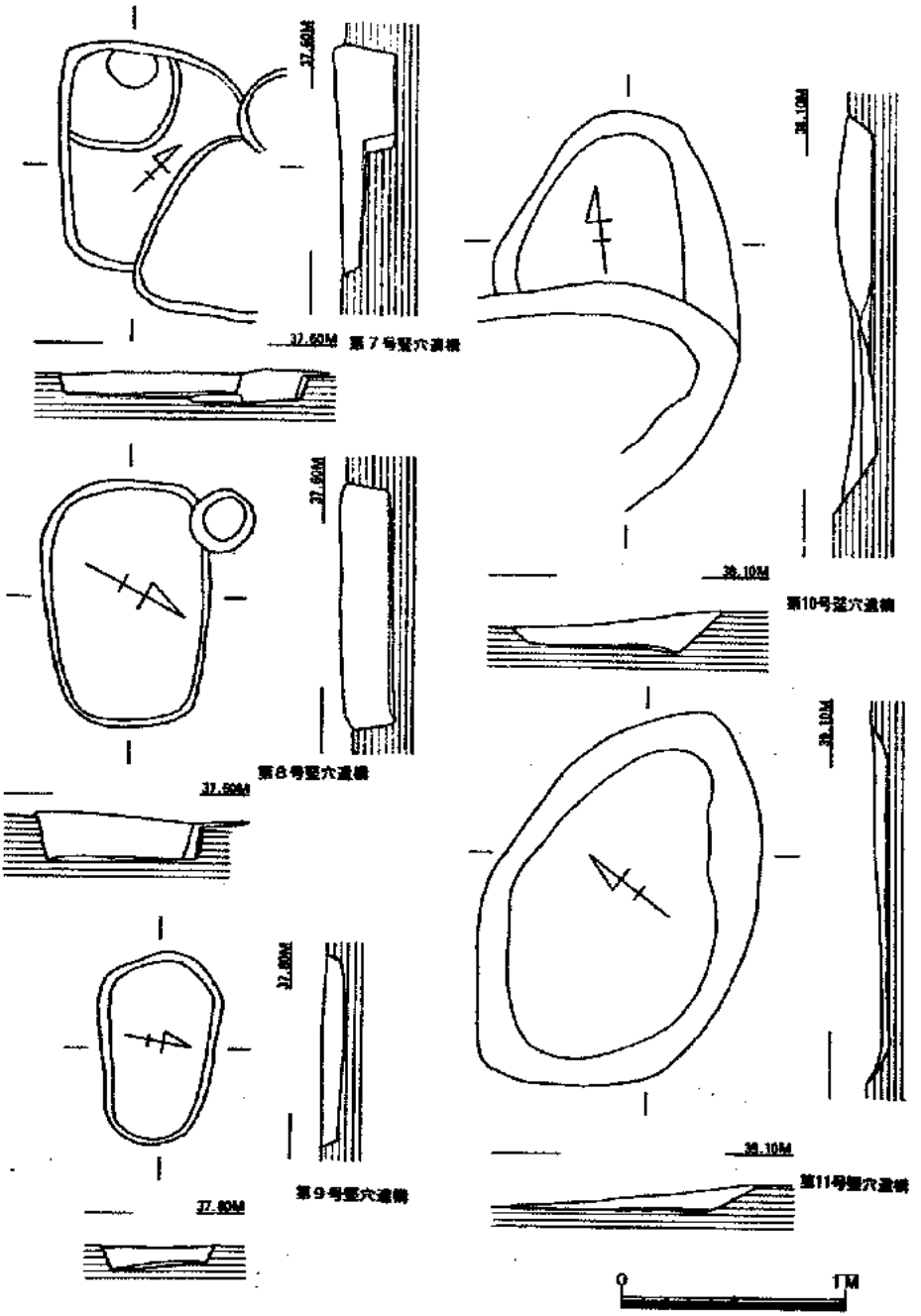
9） 第9号竪穴遺構

（1） 遺　構（第53図）

主軸をN－78°－E方向にとるもので、第9号掘立柱建物跡の北に接するように位置している。形は、隅丸長方形を呈し、長軸長0.86m×短軸長0.51mを測る。

（2） 出土遺物

壺（第76図20）　20は、弥生土器壺の底部破片である。僅かに上げ底となっており、内面は丸く窪んでいる。体部は底から2㎝程直立し、そこから外上方へ立ち上るものと思われる。色調は外面で暗灰褐色を呈し、内面で黄灰褐色を呈す。胎土は1㎜前後の白色及び半透明粒を多く含む多孔質のものである。焼成は良好。底径6.4㎝を測る。



第53図　　吉留下窓原遺跡Ｂ区第７～11号竪穴遺構実測図（１／30）

10)　第10号竪穴遺構

（1）　遺　構（第53図）

主軸をN－6°－E方向にとるもので、調査区の南東部に、第11号竪穴遺構と重複し、標高38mの等高線に直交する形で位置している。形は、遺構南壁を第11号竪穴遺構により大きく切られているが、楕円形を呈していたものと思われる。長軸長1.12m（現存長）×短軸長1.05mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構の出土遺物は、第11号竪穴遺構との重複部位で出土しており、両遺構のいずれに属すものか明確につかむことができず、10・11号竪穴遺構出土遺物として取り上げた。

土師器（第76図24）　24は、土師器甕の口頸部破片である。頸部は「く」字を呈し、この頸部から口縁部が直線的に外上方へのび、端部は尖りぎみにおさめている。調整は、現存部位で内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に褐色を呈す。胎土は1mm前後の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。口径20.4cmを測る。

須恵器（第76図22・23）　22は、須恵器杯蓋である。天井部から丸味をもって下降するもので、口縁部はさきぼそりとなり直立する。端部は尖りぎみにおさめられている。調整は、現存部位で内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に淡青灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。口径12.6cmを測る。23は、平瓶の肩部破片である。頂部に厚さ3mm程の粘土円盤を貼り付け穴を覆っている。調整は外面で横方向のカキ目調整を施し、その後口頸部を取り付ける横ナデ調整を施している。内面は現存部位で横ナデ調整を施している。色調は外面で黒灰色を呈し、内面で灰色を呈す。胎土は0.5mm程の白色粒を含むものである。焼成は良好。

11)　第11号竪穴遺構

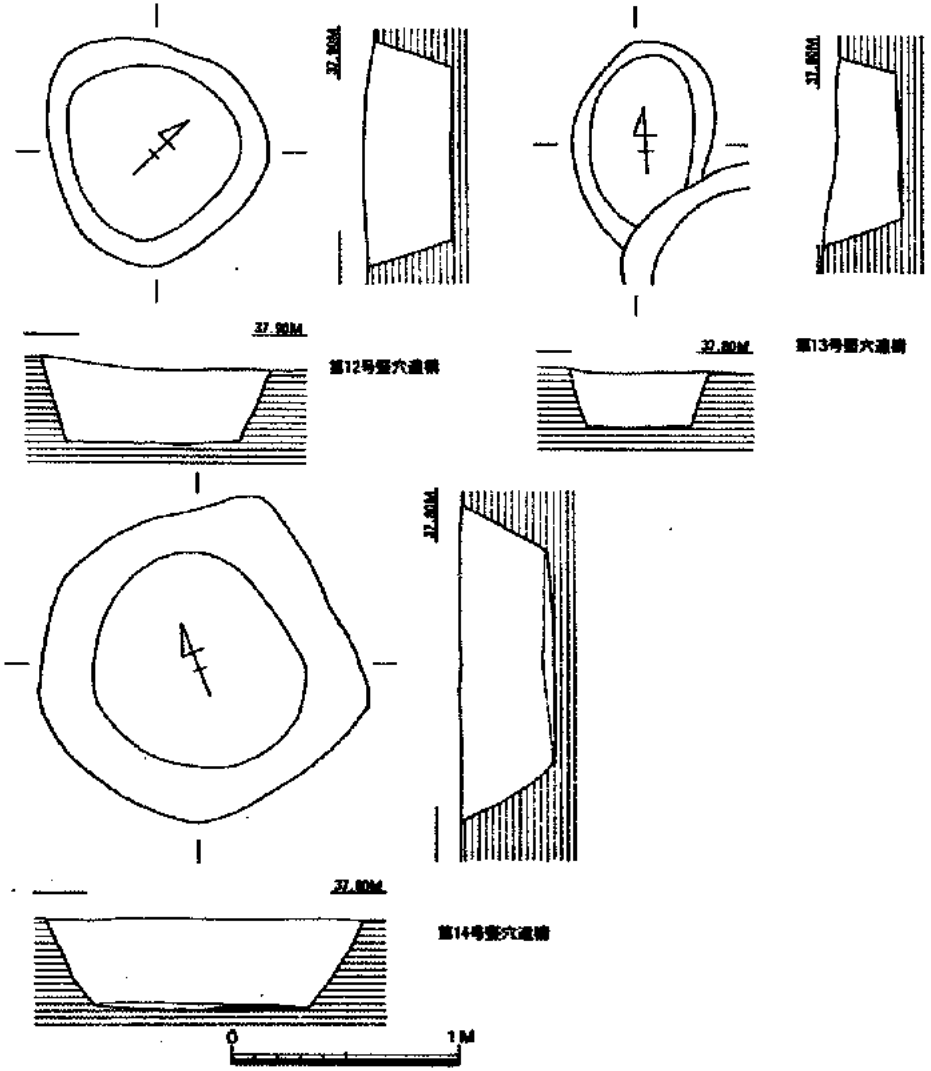
（1）　遺　構（第53図）

主軸をN－52°－E方向にとるもので、第10号竪穴遺構と重複し、標高38mの等高線に平行する形で、第16号掘立柱建物跡の南2mの所に位置している。形は楕円形を呈し、長軸長1.62m×短軸長1.16mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構からは、第10号竪穴遺構と重複していない部位より、須恵器壺を検出した。

須恵器（第76図21）　21は、須恵器壺胴部から肩部にかけての破片である。胴部中位上半に最大径をもつもので、球を偏した器形を呈す。調整は、現存部位で内外面共に横ナデ調整を施す。色調は内外面共に暗黄灰褐色を呈す。胎土は1㎜前後の砂粒を含む。焼成は不良。



第54図　吉留下悲原遺跡B区第12～14号竪穴遺構実測図（1／30）

12)　第12号竪穴遺構

（1）　遺　構（第54図）

主軸をN－46°－W方向にとるもので、調査区のほぼ中央に、第13号竪穴遺構と重複して存在している。形は、円形を呈し、長軸長１ｍ×短軸長0.96ｍを測る。

13)　第13号竪穴遺構

（1）　遺　構（第54図）

主軸をN－1°－E方向とほぼ磁北にとるもので、第12号竪穴遺構と重複して存在している。形は、遺構南東壁を切られているが、楕円形を呈するものと思われる。長軸長0.94ｍ×短軸長0.63ｍを測る。

14)　第14号竪穴遺構

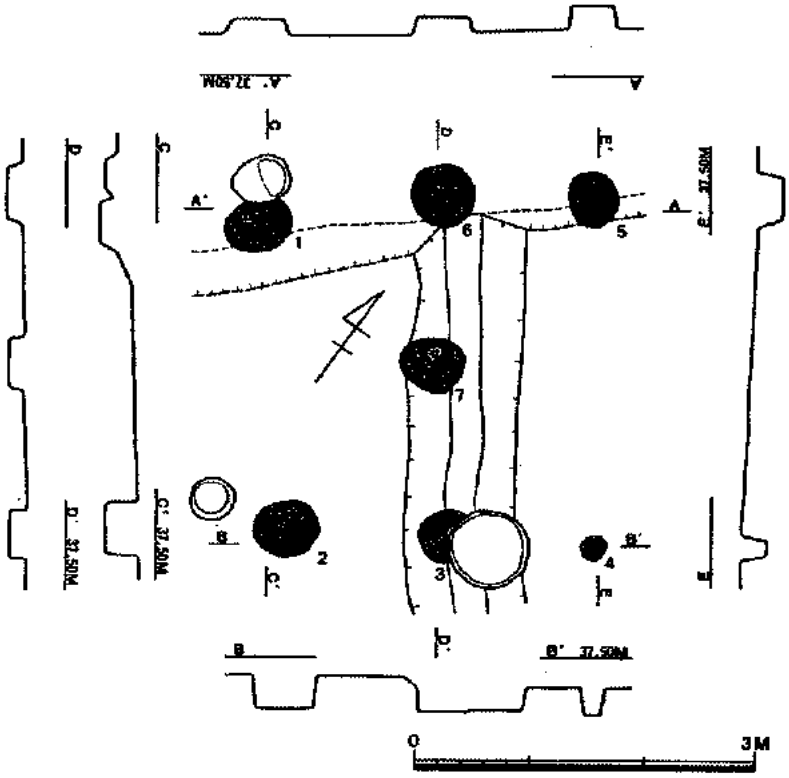
（1）　遺　構（第54図）

主軸をN－21°－E方向にとるもので、第９号掘立柱建物跡の南２ｍ程の所に位置している。形は、円形を呈し、長軸長1.49ｍ×短軸長１.４ｍを測る。

15)　第１号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第55図）

主軸をN－36°－W方向にとるもので、標高37.25ｍの等高線と平行する形をとり、調査区北隅に位置している。短軸２間×長軸１間の建物で、北側短軸長は3.42ｍを測り、柱穴間長は西から1.64ｍ、1.30ｍを測る。南側短軸長は3.08ｍを測り、柱穴間長は西から1.52ｍ、1.28ｍを測る。東側長軸長は3.46ｍを測り、柱穴間長は3.10ｍを測る。西側長軸長は3.20ｍを測り、柱穴間長は2.72ｍを測る。南北短軸中位柱穴を結ぶ中点にも７号柱穴が存在しており、柱穴間長は北から1.56ｍ、1.52ｍを測る。当遺構３号柱穴と第２号掘立柱建物跡１号柱穴とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。



第55図　吉留下惣原遺跡B区第1号掘立柱建物跡実測図（1／60）

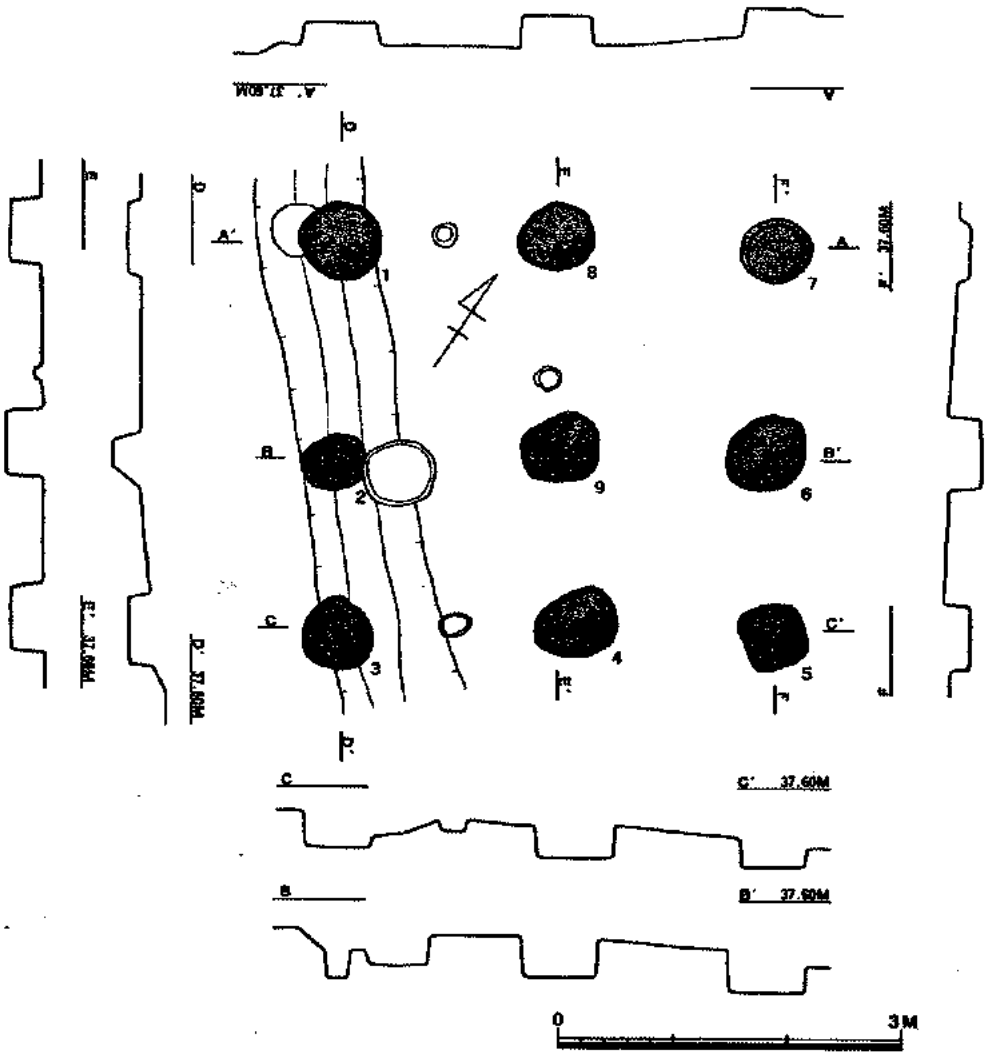
16)　第2号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第56図）

主軸をN－57°－E方向にとるもので、標高37.25mの等高線上にあり、等高線と直交する形で、第1号掘立柱建物跡の東に重複して存在している。短軸2間×長軸2間の建物で、東側短軸長は4.04mを測り、柱穴間長は北から1.76m、1.58mを測る。西側短軸長は4.16mを測り、柱穴間長は北から1.94m、1.62mを測る。北側長軸長は4.48mを測り、柱穴間長は東から2.04m、1.76mを測る。南側長軸長は4.40mを測り、柱穴間長は東から1.84m、1.92mを測る。当遺構3号柱穴と第2号溝状遺構とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

（2）　出土遺物

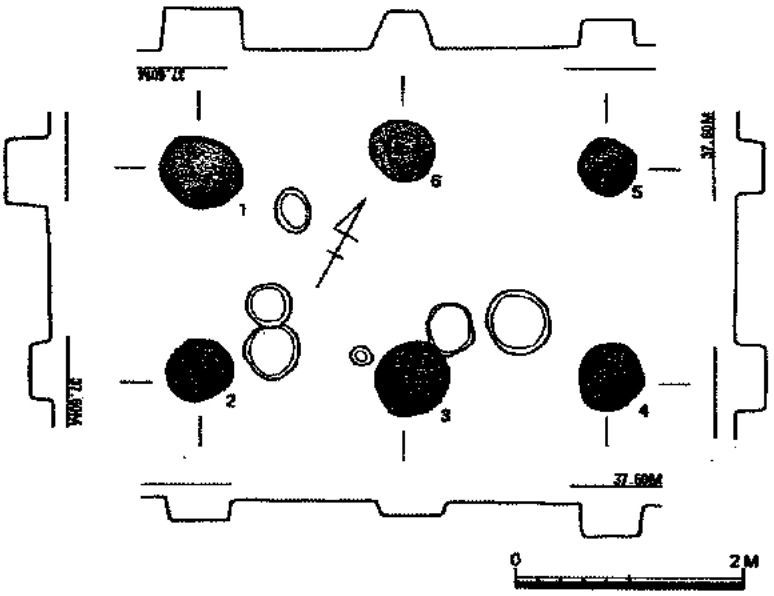
当遺構1・3～9号柱穴からは、土師器甕・牛角把手付土器の把手部、須恵器杯蓋・杯身・甕などを出土している。



第56図　　吉留下惣原遺跡B区第2号掘立柱建物跡実測図（1／60）

土師器（第76図３）　３は、土師器牛角把手付土器の把手部である。把手は2.5㎝程の棒状土塊を土器にとり付け、５㎜程の粘土紐貼り付けにより補強している。土器と把手接着部はナデ調整により整えられ、把手部は篦削り及びナデ調整により整えられている。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土は１㎜前後の半透明粒を多く含む多孔質のものである。焼成は不良。

須恵器（第76図１・２）　１は、杯蓋口縁部の破片である。図示した傾きは定かでない。体部と口縁部の境にかるい稜を有する。口縁部は僅かに外反し、端部はやや尖りぎみではあるが、丸くおさめられている。色調は外面で暗灰褐色を呈し、内面は小豆色を呈す。胎土は黄味をおびた青灰色を呈し、微粒の白色粒を含む精良なものである。焼成は良好。２は、杯身である。体部は緩やかに内彎しつつ外上方に立ち上り、受部でかるい段をもって内傾するたちあがりがとりつく。受部は短かく水平にのび、端部は丸くおさめている。口縁部は、ささぼそりにのばされ、端部はやや尖りぎみではあるが、丸くおさめている。色調は外面で黄味をおびた青灰色を呈し、内面は黒灰褐色を呈す。胎土は、灰白色に黄緑色粒斑を含む色調を呈し、0.5㎜程の白色粒及び黒色粒を含むやや粗なものである。焼成は良好。復元口径12.2㎝、受部径13.6㎝、たちあがり高0.9㎝を測る。



第57図　吉留下窓原遺跡Ｂ区第３号掘立柱建物跡実測図（１／60）

17)　第３号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第57図）

主軸をＮ－60°－Ｅ方向にとるもので、標高37.5ｍの等高線と直交する形をとり、第４号掘立柱建物跡と重複し、第２号掘立柱建物跡の西２ｍの所に位置している。短軸１間×長軸２間の建物で、東側短軸長は2.41ｍを測り、柱穴間長は1.96ｍを測る。西側短軸長は2.34ｍを測り、柱穴間長は1.72ｍを測る。北側長軸長は4.22ｍを測り、柱穴間長は東から1.82ｍ、1.68ｍを測る。南側長軸長は4.22ｍを測り、柱穴間長は東から1.68ｍ、1.78ｍを測る。当遺構３号柱穴と第４号掘立柱建物跡８号柱穴とは切り合い関係にあり、当遺構が第４号掘立柱建物跡に切られている。

（２）　出土遺物

当遺構１～６号柱穴からは、土師器甕、須恵器杯の破片などが出土している。いずれも細片のため図化することができなかった。

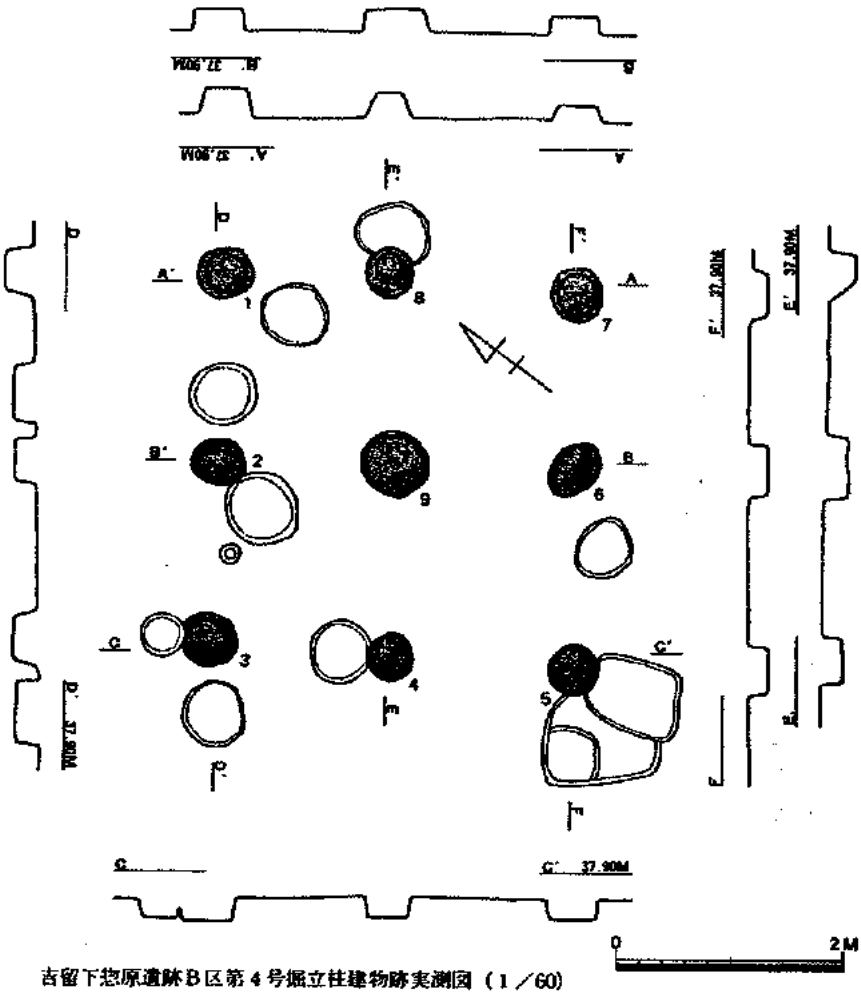
18)　第４号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第58図）

主軸をＮ－52°－Ｅ方向にとるもので、標高37.25ｍの等高線に直交する形をとり、第６号竪穴遺構及び第３号掘立柱建物跡と重複した形で存在している。短軸２間×長軸２間の建物で、東側短軸長は3.52ｍを測り、柱穴間長は北から1.44ｍ、1.64ｍを測る。西側短軸長は3.62ｍを測り、柱穴間長は北から1.62ｍ、1.56ｍを測る。北側長軸長は3.74ｍを測り、柱穴間長は西から1.58ｍ、1.68ｍを測る。南側長軸長は3.82を測り、柱穴間長は1.82ｍ、1.56ｍを測る。南北長軸中位柱穴及び東西短軸中位柱穴を結ぶ交点にも９号柱穴が存在しており、柱穴間長は北から1.62ｍ、1.56ｍを測り、西から1.72ｍ、1.82ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構１～５・７～９号柱穴からは、土師器壺と思われる破片・甕、須恵器杯・壺・甕などの破片が出土している。いずれも細片のため図化できなかったが、須恵器壺の破片は、器壁が



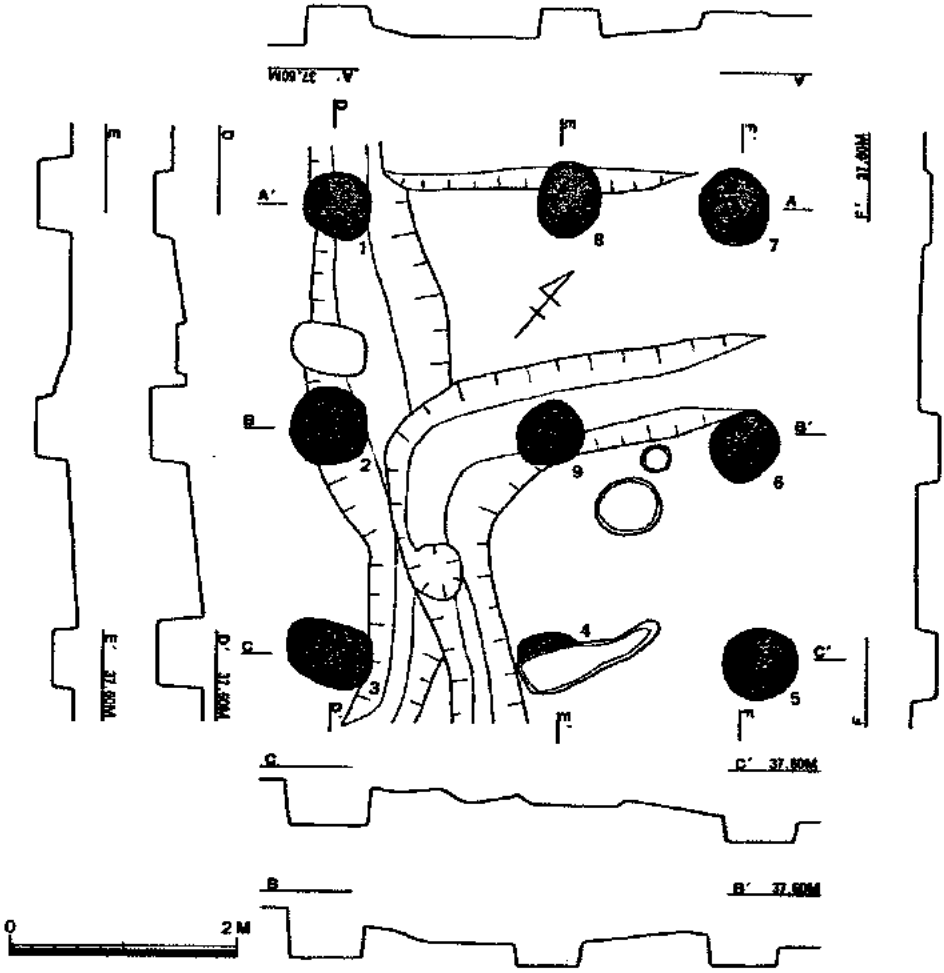
第58図　吉留下恕原遺跡B区第4号掘立柱建物跡実測図（1／60）

4mm程で、体部が球形を呈す。内面に同心円、外面に平行叩きを有するものである。

19)　第5号掘立柱建物跡

(1)　遺　構（第59図）

主軸をN－41°－W方向にとるもので、標高37.25mの等高線上にあり、等高線と平行する形をとり、第2号掘立柱建物跡の南東3mの所に位置している。短軸2間×長軸2間の建物で、



第59図　吉留下窓原遺跡B区第5号堀立柱建物跡実測図（1／60）

北側短軸長は4.08mを測り、柱穴間長は西から2.04m、1.44mを測る。南側短軸長は4.48mを測り、柱穴間長は西から1.88m、1.88mを測る。東側長軸長は4.64mを測り、柱穴間長は北から2.14m、1.96mを測る。西側長軸長は4.62mを測り、柱穴間長は北から2.06m、2.22mを測る。当遺構4号柱穴と第5号竪穴遺構、9号柱穴と第1号溝状遺構、1・2号柱穴と第2号溝状遺構とは切り合い関係にあり、新旧関係が認められる。

（2）　出土遺物

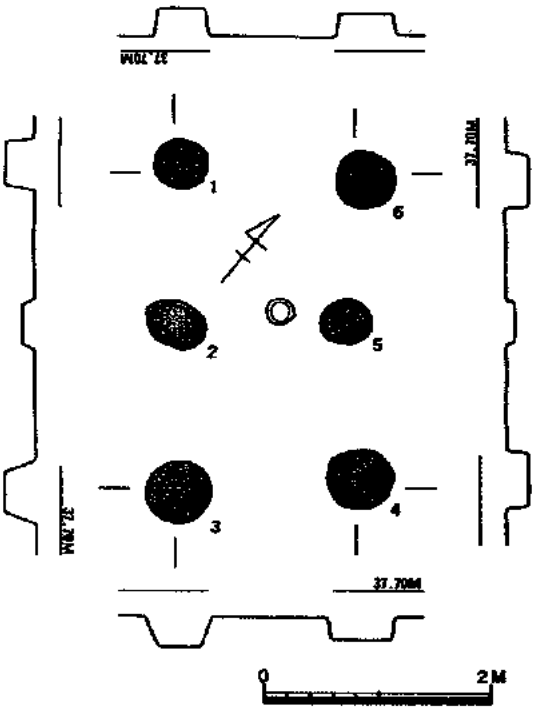
当遺構の柱穴からは、土師器壺・甕、須恵器杯身・壺・甕などの破片が出土している。いずれも細片のため、図化できたものは須恵器杯身１点にとどまった。

須恵器（第76図４）　　４は、杯身である。体部は緩やかに内彎しつつ外上方へ立ち上り、受部で段をもって内傾するたちあがりがとりつく。受部は水平にのばされ、端部は尖りぎみではあるが丸くおさめている。口縁部は、さきぼそりにのばされ、端部は尖っている。色調は外面で暗黄灰褐色を呈し、内面で黄褐色を呈す。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は不良。復元口径11.0cm、受部径13.0cm、たちあがり高0.6cmを測る。

20)　第６号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第60図）

主軸をN－41°－W方向にとるもので、標高37.25ｍの等高線に平行する形をとり、第１号掘立柱構築物跡と重複し、第５号掘立柱建物跡の東２ｍの所に位置している。短軸１間×長軸２間の建物が考えられるが、当遺構北東２ｍ程に第５号掘立柱建物跡２号柱穴と並ぶ２基の小竪穴を当遺構のものと想定すると短軸２間×長軸２間の建物が考えられる。しかし、これは、第５号掘立柱建物跡３号柱穴を当遺構の柱穴としなければならないので、考えにくいものである。よって、短軸１間×長軸２間の建物とする。北側短軸長は2.12mを測り、柱穴間長は1.74mを測る。南側短軸長は2.18mを測り、柱穴間長は1.76mを測る。東側長軸長は



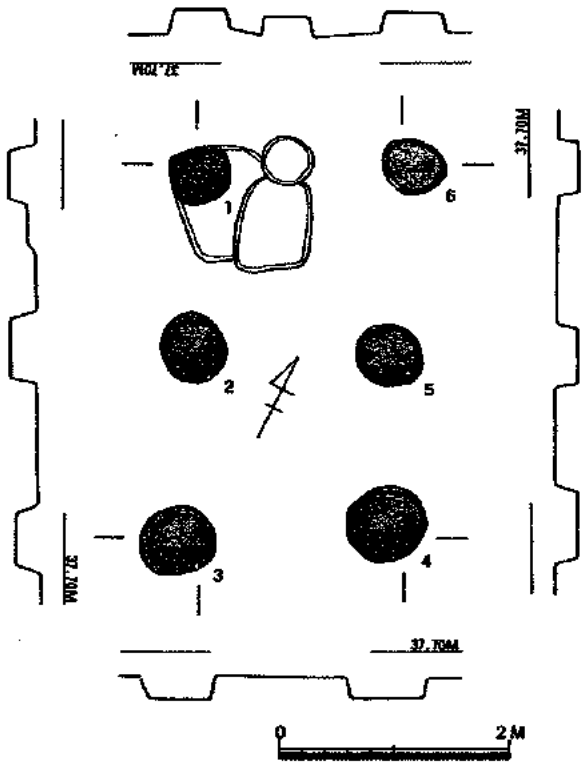
第60図　　吉留下惣原遺跡Ｂ区第６号掘立柱建物跡実測図
（1／60）

3.18mを測り、柱穴間長は北から1.16m、1.42mを測る。西側長軸長は3.42mを測り、柱穴間長は北から1.46m、1.48mを測る。

21)　第７号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第61図）

主軸をN－21°－W方向にとるもので、第７号竪穴遺構と重複し、第６号掘立柱建物跡の西１m程の所に位置している。短軸１間×長軸２間の建物で、北側短軸長は2.44mを測り、柱穴間長は1.86mを測る。南側短軸長は2.52mを測り、柱穴間長は1.82mを測る。東側長軸長は3.76mを測り、柱穴間長は北から1.68m、1.50mを測る。西側長軸長は3.78mを測り、柱穴間長は北から1.70m、1.68mを測る。当遺構と第４号掘立柱建物跡とは切り合い関係が推定されるが、遺構から明確にすることはできなかった。



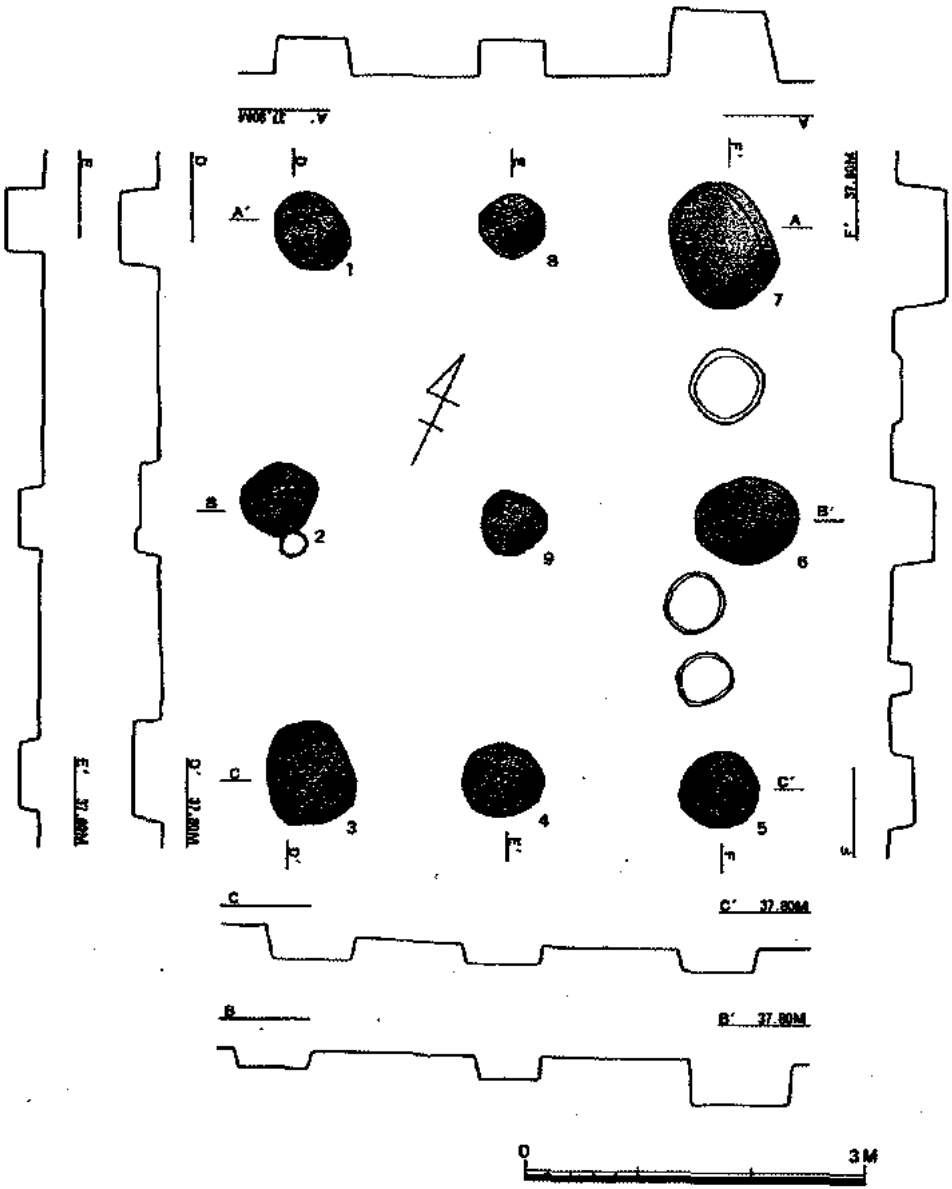
第61図　吉留下恕原遺跡Ｂ区第７号掘立柱建物跡実測図

（１／60）

（２）　出土遺物

当遺構５・６号柱穴からは、土師器壺・甕の破片が出土している。

土師器（第76図５）　５は、土師器甕の破片である。口縁部は「く」字状を呈し、外上方へのび、端部は僅かに外反する。調整は内外面共に横ナデ調整を施す。色調は外面で黒褐色を呈し、内面で褐色を呈す。胎土は１mm程の砂粒を多く含む。焼成は良好。



第62図　吉留下惣原遺跡B区第8号掘立柱建物跡実測図（1／60）

22)　第８号掘立柱建物跡

（１）　遺　構（第62図）

主軸をＮ－25°－Ｗ方向にとるもので、標高37.5ｍの等高線上にあり、等高線と平行する形をとり、第７号掘立柱建物跡の西２ｍの所に位置している。短軸２間×長軸２間の建物で、北側短軸長は4.46ｍを測り、柱穴間長は西から1.72ｍ、1.82ｍを測る。南側短軸長は4.34ｍを測り、柱穴間長は西から1.72ｍ、1.90ｍを測る。東側長軸長は5.76ｍを測り、柱穴間長は北から2.52ｍ、2.32ｍを測る。西側長軸長は5.64ｍを測り、柱穴間長は北から2.40ｍ、2.26ｍを測る。

（２）　出土遺物

当遺構の柱穴からは、土師器鉢・甕、須恵器杯蓋・杯身・壺・甕などが出土している。

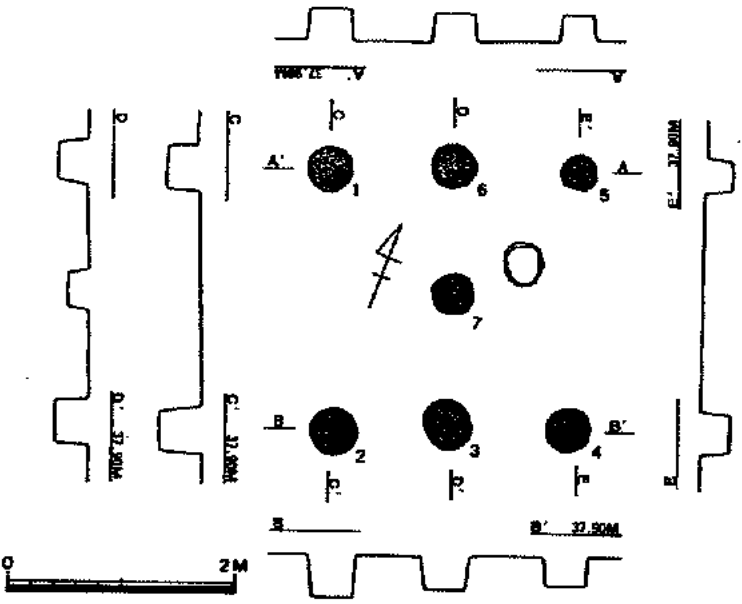
土師器（第76図９～12）　11は、土師器鉢である。図示した傾きは、破片が細片であるため定かでない。体部は僅かに内彎しつつ外上方に立ち上り、頸部にかるい稜をもって口縁部へと大きく外反する。端部は尖りぎみにおさめられている。調整は風化が著しく明確ではないが頸部外面稜線下に斜方向に走る刷毛目調整を認める。内面は横方向のナデ調整のように思える。色調は内外面共に赤味をおびた黄灰褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。９・10・12は、土師器甕である。９は、「く」字状に屈曲する頸部をもつもので内面に１稜を有する。口縁部は内面で直線的に外上方に立ち上るが、外面は僅かに内彎しつつ立ち上り、端部は尖る。調整は内外面共に横ナデ調整を施す。色調は外面で赤褐色を呈し、内面で黒褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。10は、体部が内彎しながら頸部に至り、大きく外反して口縁部となる。端部は尖りぎみではあるが、丸くおさめている。体部、頸部、口縁部の境は明瞭でない。調整は内外面共に横ナデ調整を施す。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。12は、体部球形を呈し、頸部内面に段をもつ。口縁部は外反しつつ立ち上り、尖りぎみで端部は丸くおさめている。調整は風化が著しく明確ではないが、口頸部は横ナデ調整、体部外面は縦方向の刷毛目調整を施したと思われる。色調は外面で黒褐色を呈し、一部褐色を呈する部位を認める。内面は赤味をおびた黄褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。復元口径17.2cmを測る。

須恵器（第76図６～８）　６は、杯蓋である。天井部から丸味をもって下降し、口縁部を僅かに内彎させ、端部は尖りぎみではあるが、丸くおさめて直立させる。天井部は削切り離しの後未調整のものである。調整は現存部位で内外面共に横ナデ調整を施す。色調は外面で黒灰

色を呈し、内面で灰色を呈す。胎土は1㎜前後の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。復元口径11.8cm、器高3.8cmを測る。7は、杯身である。体部は緩やかに内彎しつつ外上方に立ち上り、受部でかるい段をもって内傾するたちあがりがとりつく。受部は短かく水平にのばされ、端部は丸くおさめている。口縁部は、さきぼそりにのばされ、端部は尖っている。調整は現存部位で内外面共に横ナデ調整を施す。色調は内外面共に暗茶色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。復元口径9.0cm、受部径10.6cm、たちあがり高0.7cmを測る。8は、壺の破片である。図示した傾きは定かでない。体部は球形を呈す。調整は体部下位に篦削り調整を施し、他は横ナデ調整である。色調は内外面共に暗青灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。

23) 第9号掘立柱建物跡

(1) 遺 構(第63図)



第63図　吉留下惣原遺跡B区第9号掘立柱建物跡実測図(1/60)

主軸をN－20°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線に平行する形をとり、第8号掘立柱建物跡の南2mの所に位置している。短軸2間×長軸1間の建物で、北側短軸長は、2.54mを測り、柱穴間長は西から1.14m、1.08mを測る。南側短軸長は2.44mを測り、柱穴間長は西から1.02m、1.08mを測る。東側長軸長は2.62mを測り、柱穴間長は2.36mを測る。西側長軸長は2.72mを測り、柱穴間長は2.34mを測る。南北中位柱穴を結ぶ中点にも7号柱穴が存在しており、柱穴間長は北から1.14m、1.16mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構1・3・5・6号柱穴からは、土師器の破片、須恵器杯などが出土している。

須恵器（第76図13）　13は、杯である。体部は緩やかに内彎しつつ外上方に立ち上るもので、中位にかるい稜をもつ。調整は底部に篦削り調整を施し、内底で不定方向のナデ調整が施されている。他は横ナデ調整である。色調は内外面共に暗茶褐色を呈す。胎土は内面側で灰色外面側で暗茶褐色を呈す色調で、0.5㎜程の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。

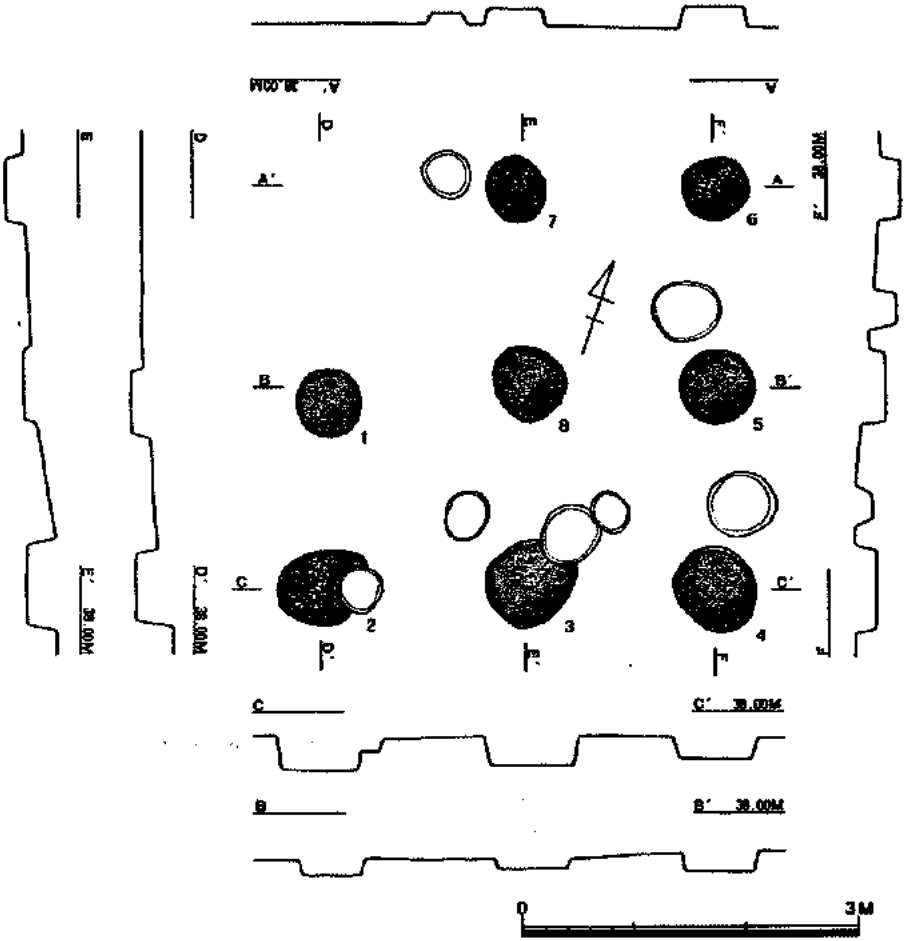
24）　第10号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第64図）

主軸をN－7°－E方向にとるもので、標高37.75mの等高線上にあり、等高線と平行する形をとり、第7号掘立柱建物跡の南2mの所に位置している。短軸2間×長軸2間の建物で、東側短軸長は4.26mを測り、柱穴間長は北から1.88m、1.62mを測る。西側短軸では、東側短軸4号柱穴に相対する柱穴が欠損している。現存短軸長は2.29mを測り、柱穴間長は1.66mを測る。北側長軸では、南側長軸2号柱穴に相対する柱穴が欠損している。現存短軸長は2.36mを測り、柱穴間長は1.80mを測る。南側長軸長は4.27mを測り、柱穴間長は西から1.86m、1.74mを測る。東西短軸中位柱穴及び南北長軸中位柱穴を結ぶ交点にも8号柱穴が存在しており、柱穴間長は西から1.74m、1.62mを測り、北から1.78m、1.66mを測る。当遺構3号柱穴と第11号掘立柱建物跡6号柱穴とは切り合い関係にあり、当遺構が第11号掘立柱建物跡に切られている。

（2）　出土遺物

当遺構柱穴からは、土師器甕、須恵器杯・甕などの細片が出土している。



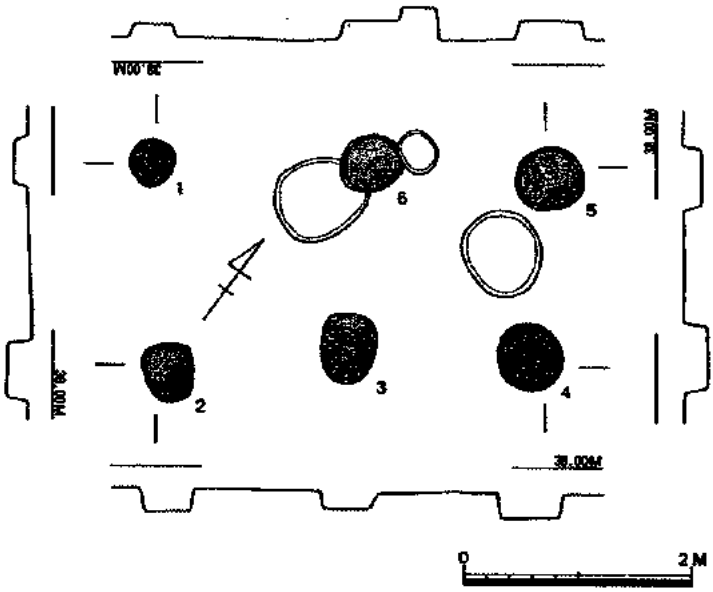
第64図　吉留下惣原遺跡B区第10号掘立柱建物跡実測図（1／60）

25）　第11号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第65図）

主軸をN－55°－E方向にとるもので、第10号掘立柱建物跡と重複し、標高37.75 mの等高線と平行する形をとるもので、第7号掘立柱建物跡の南5 m程の所に位置している。短軸1間×

長軸２間の建物で、東側短軸長は2.19mを測り、柱穴間長は1.72mを測る。西側短軸長は2.36mを測り、柱穴間長は1.84mを測る。北側長軸長は3.99mを測り、柱穴間長は西から1.80m、1.68mを測る。南側長軸長は3.70mを測り、柱穴間長は西から1.62m、1.74mを測る。

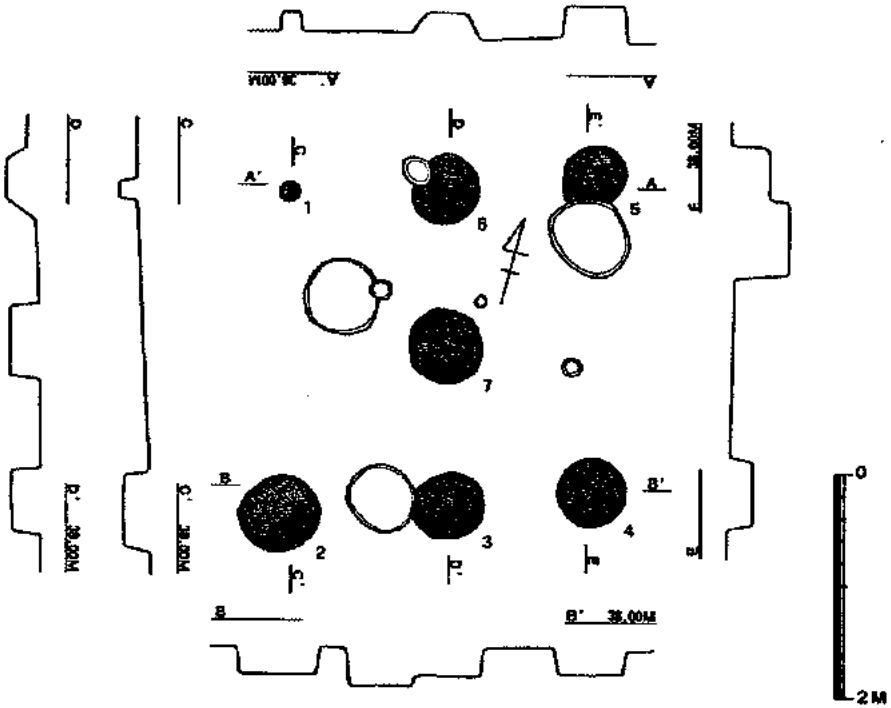


第65図　吉留下惣原遺跡Ｂ区第11号掘立柱建物跡実測図（１／60）

（２）　出土遺物

当遺構柱穴からは、土師器杯・甕の破片などが出土している。いずれも細片のため、図化できたものは、土師器杯１点にとどまった。

土師器（第76図14）　14は、土師器杯である。器壁は１～２㎜と非常に薄いものである。体部は緩やかに内彎しつつ、外上方に立ち上り、口縁部は薄く引きのばされ尖ったものになり直立し、端部は丸味をもっている。調整は底部外面で右斜方向から左斜上方向に向って静止箆削り調整が右回転方向に施されており、体部中位にかるい稜をもたらす。この稜から上は横ナデ調整を施す。内面体部も横ナデ調整である。色調は内外面共に茶褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成はあまい。復元口径12.4cmを測る。



第66図　吉留下惣原遺跡B区第12号掘立柱建物跡実測図（1／60）

26)　第12号掘立柱建物跡

（1）　遺　構　（第66図）

主軸をN－15°－W方向にとるもので、第6号掘立柱建物跡の南東2m、第10号掘立柱建物跡の東2mの所に位置している。短軸2間×長軸1間の建物で、北側短軸長は3.06mを測り、柱穴間長は西から1.40m、1.30mを測る。南側短軸長は3.40mを測り、柱穴間長は西から1.58m 1.36mを測る。東側長軸長は3.44mを測り、柱穴間長は2.76mを測る。西側長軸長は3.32mを測り、柱穴間長は2.82mを測る。南北短軸中位柱穴を結ぶ中点にも7号柱穴が存在する。柱穴間長は北から1.38m、1.48mを測る。当遺構3・5号柱穴と第13号掘立柱建物跡5・9号柱穴とは切り合い関係にあり、当遺構が切られている。又当遺構6号柱穴と第2号掘立柱構築物跡1号柱穴も切り合い関係にあり、当遺構が切られている。

（2）　出土遺物

当遺構1号柱穴を除く柱穴からは、土師器甕の破片、須恵器杯身・瓶の口縁部破片などが出土している。

須恵器（第76図15・16）　16は、杯身である。体部は底部から外上方に立ち上り、中位に沈線状の段を有し、これから屈曲して、垂直にのび、口縁部となる。受部は水平にのび、端部は尖る。たちあがりは、内面で垂直に立ち上り、外面は内傾して立ち上る。口縁端部は尖る。調整は底部に箆削り調整を施し、それ以外は横ナデ調整である。色調は外面で青灰色を呈し、内面で暗灰色を呈す。胎土は微粒の黒色粒を含むものである。焼成は良好。復元口径6.8㎝、受部径8.4㎝、器高1.6㎝、たちあがり高0.5㎜を測る。15は、瓶口頸部の破片である。口頸部は直線的に外上方に立ち上り、口縁部は僅かに内彎し直立する。端部は丸くおさめている。調整は、現存部位で横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗灰色を呈す。胎土は淡青灰色を呈し、微粒の黒色粒及び0.5㎜程の白色粒を含むものである。焼成は良好。復元口径6.6㎝を測る。

27）　第13号掘立柱建物跡

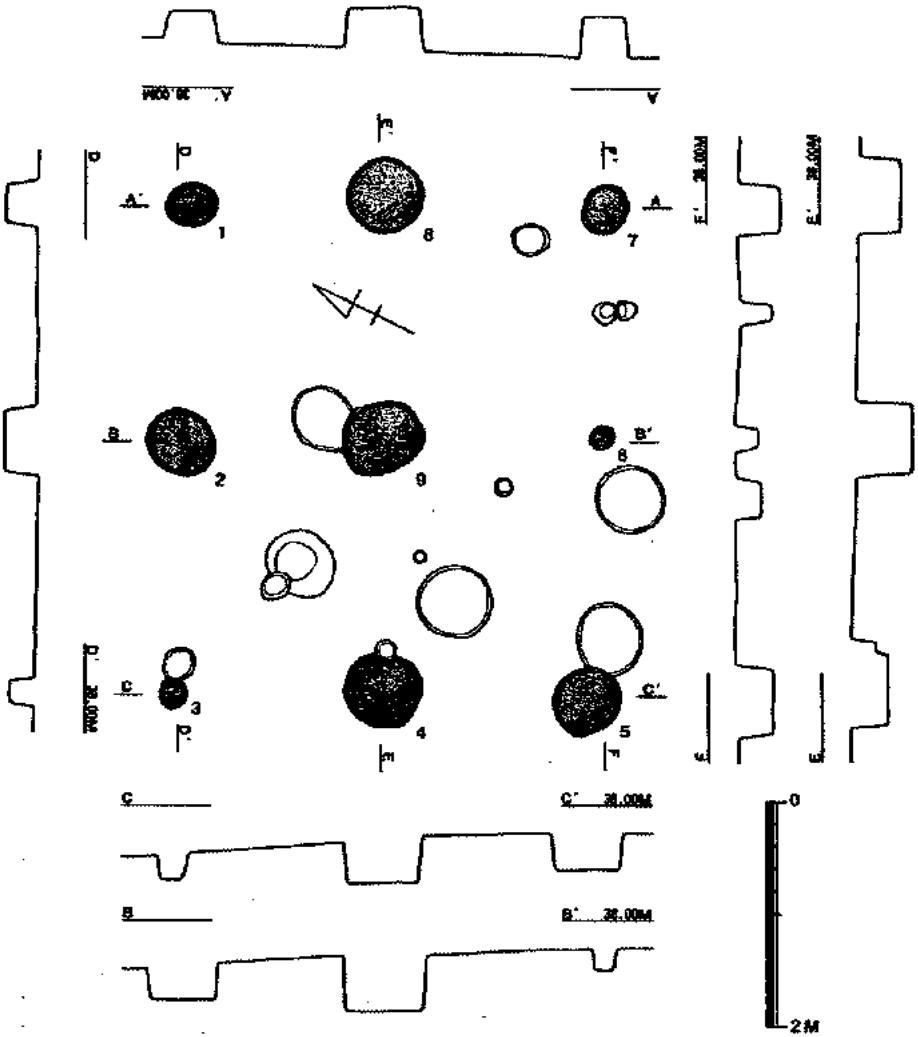
（1）　遺　構（第67図）

主軸をN－64°－E方向にとるもので、第12掘立柱建物跡及び第2号掘立柱構築物跡と重複し、第10号掘立柱建物跡の東2mの所に位置している。短軸2間×長軸2間の建物で、東側短軸長は4.12mを測り、柱穴間長は北から1.68m、1.96mを測る。西側短軸長は4.10mを測り、柱穴間長は北から、1.82m、2.02mを測る。北側長軸長は4.70mを測り、柱穴間長は西から2.24m、2.12mを測る。南側長軸長は4.94mを測り、柱穴間長は西から2.32m、2.04mを測る。当遺構9号柱穴と第2号掘立柱建物跡6号柱穴とは切り合い関係にあり、当遺構が切られている。

28）　第14号掘立柱建物跡

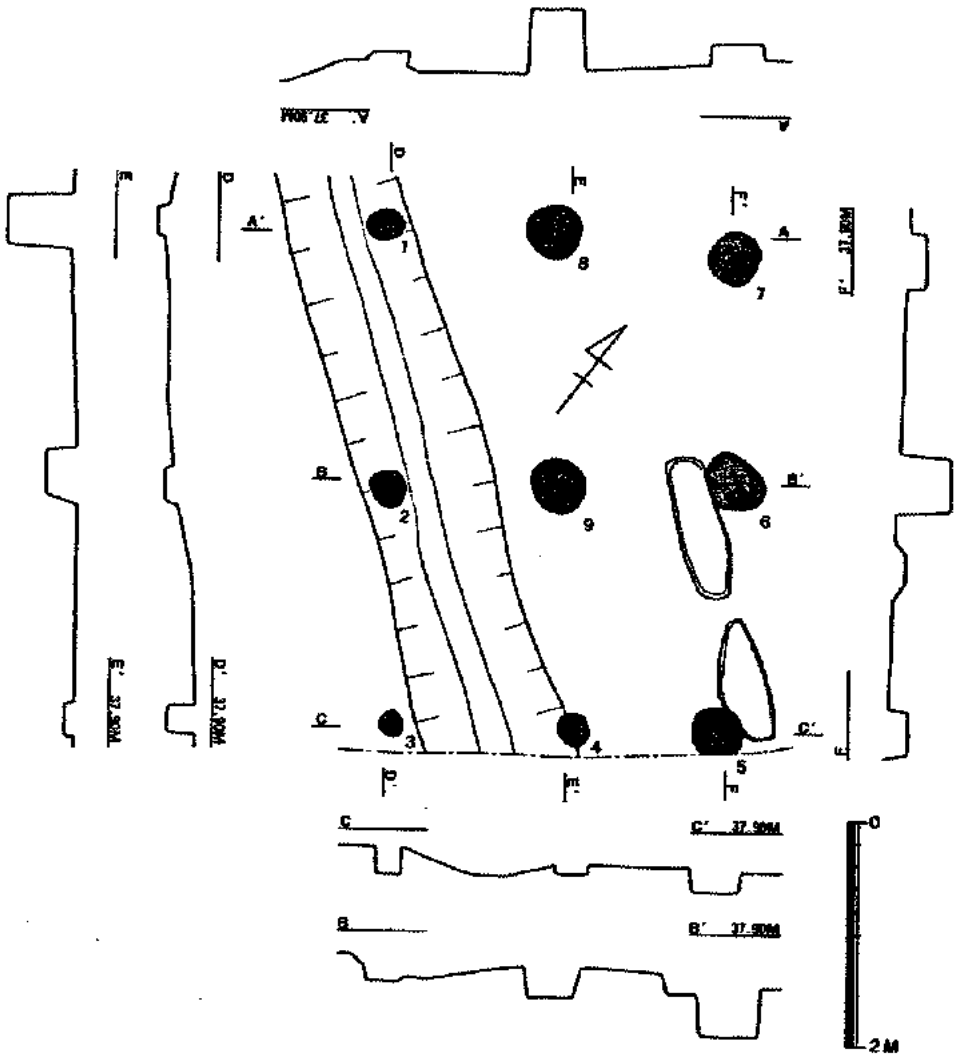
（1）　遺　構（第68図）

主軸をN－37°－W方向にとるもので、第1・2号竪穴遺構と重複し、調査区の西隅に位置している。短軸2間×長軸2間の建物で、北側短軸長は3.46mを測り、柱穴間長は西から1.46m、1.58mを測る。南側短軸長は3.20mを測り、柱穴間長は西から1.62m、1.26mを測る。東側長

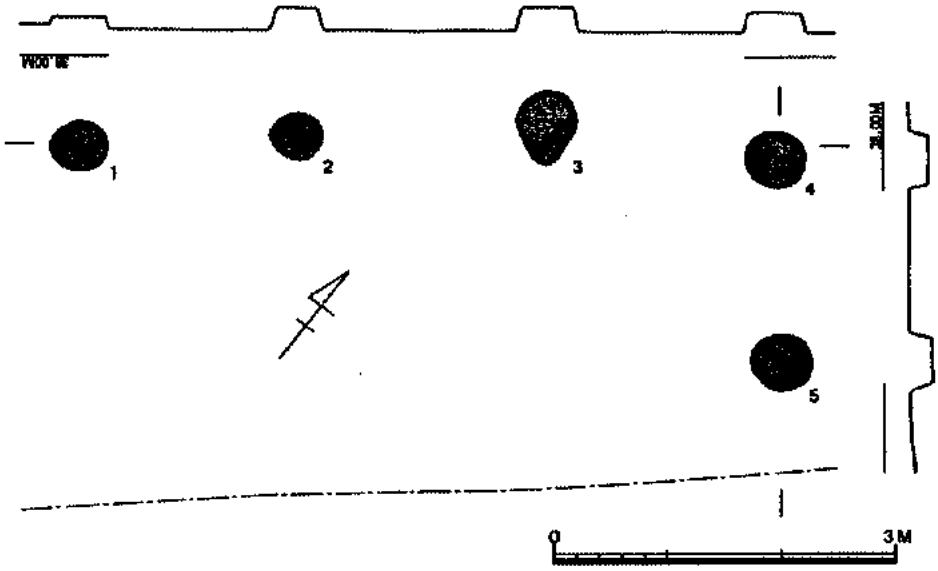


第67図　吉留下惣原遺跡B区第13号掘立柱建物跡実測図（1／60）

軸長は4.70mを測り、柱穴間長は北から1.98m、2.24mを測る。西側長軸長は4.70mを測り、柱穴間長は2.36m、2.14mを測る。南北短軸中位柱穴及び東西長軸中位柱穴を結ぶ交点にも9号柱穴が存在しており、柱穴間長は北から2.24m、2.21mを測り、西から1.46m、1.50mを測る。



第68図　吉留下恵原遺跡B区第14号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第69図　吉留下犂原遺跡B区第15号掘立柱建物跡実測図（1／60）

29)　第15号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第69図）

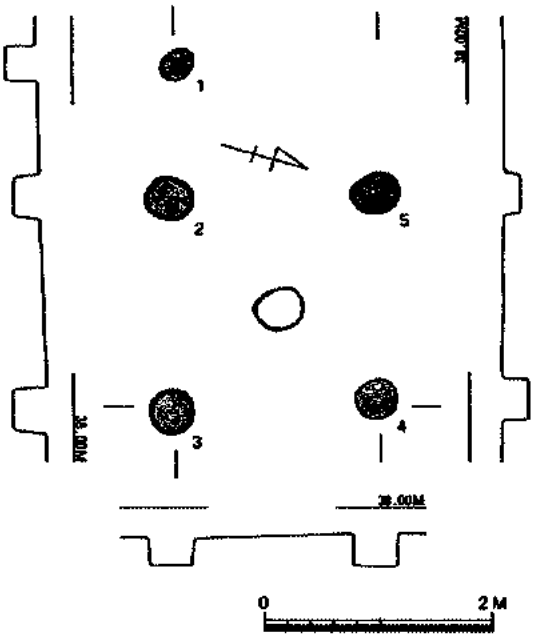
主軸をN－52°－E方向にとるもので、第14号掘立柱建物跡の南西4ｍの所に、調査区南東壁へ消えるように位置している。短軸1間（α）×長軸3間の建物で、東側短軸長は3.06ｍ（現状）を測り、柱穴間長は1.80ｍを測る。西側短軸では隅の柱穴を検出したのみである。北側長軸長は6.68ｍを測り、柱穴間長は西から1.94ｍ、2.22ｍ、1.92ｍを測る。

30)　第16号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第70図）

主軸をN－73°－E方向にとるもので、第10・11号竪穴遺構の北2ｍ程の所に位置している。短軸1間×長軸2間の建物で、東側短軸長は2.18ｍを測り、柱穴間長は1.82ｍを測る。西側短

軸では、東側短軸4号柱穴に相対する柱穴が欠損している。北側長軸では、南側長軸1号柱穴に相対する柱穴が欠損している。現存長軸長は2.22mを測り、柱穴間長は1.84mを測る。南側長軸長は3.48mを測り、柱穴間長は西から1.20m、1.92mを測る。南北長軸中位柱穴は西に偏している。



第70図　吉留下惣原遺跡B区第16号掘立柱建物跡実測図
(1／60)

（2）　出土遺物

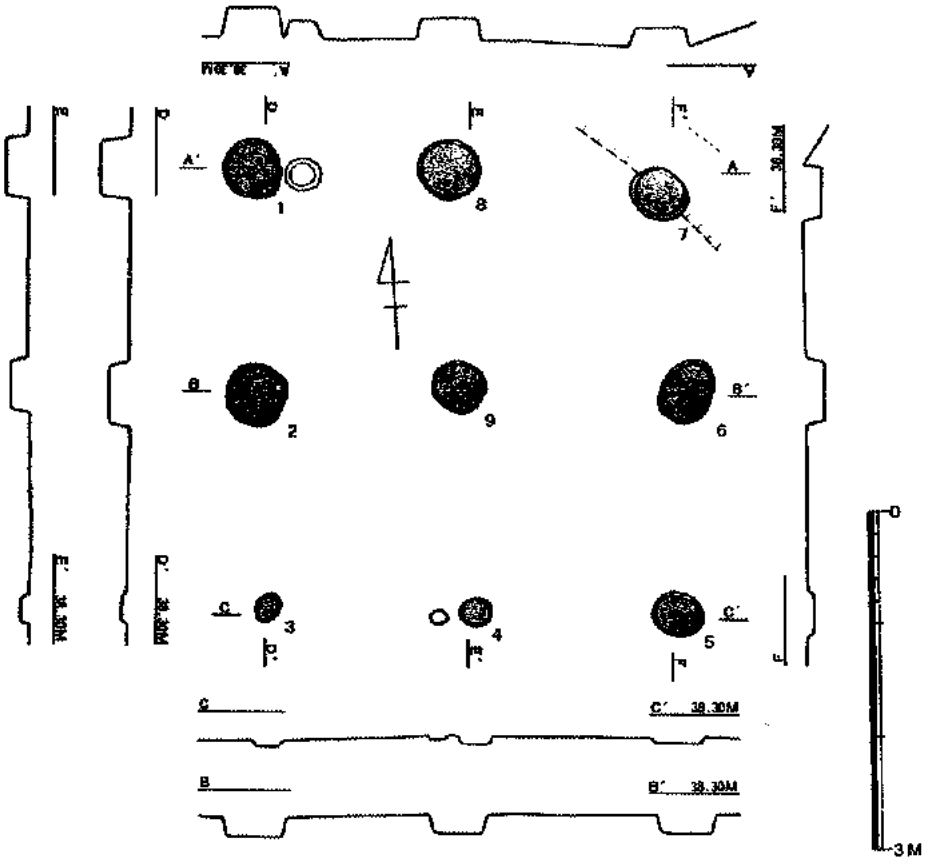
当遺構2～4号柱穴からは、土師器杯・甕などの破片が出土している。

土師器（第76図17）　17は、土師器杯である。体部は丸味をもって外上方に立ち上り、口縁部は僅かに内彎して直立する。端部は丸くおさめられている。調整は現存部位で内外面共に横ナデ調整を施している。色調は内外面共に暗茶褐色を呈す。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好。復元口径10.4cmを測る。

31）　第17号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第71図）

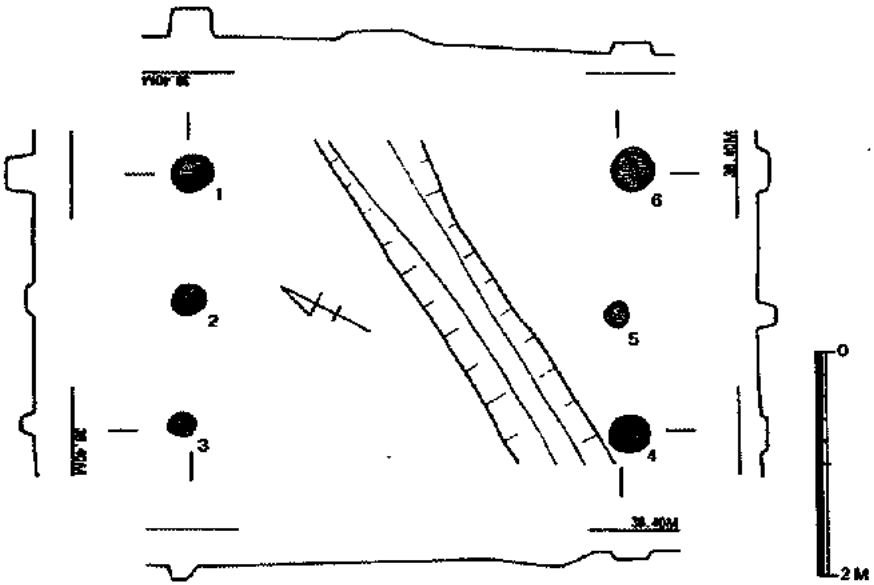
主軸をN－4°－E方向にとるもので、第16号掘立柱建物跡の南東5mの所に位置している。短軸2間×長軸2間の建物で、北側短軸長は4.16mを測り、柱穴間長は西から1.88m、1.80mを測る。南側短軸長は3.98mを測り、柱穴間長は西から1.84m、1.78mを測る。東側長軸長は4.22mを測り、柱穴間長は北から1.90m、1.88mを測る。西側長軸長は4.32mを測り、柱穴間長は2.04m、1.86mを測る。南北短軸中位柱穴及び東西長軸中位柱穴を結ぶ交点にも9号柱穴が存在しており、柱穴間長は北から1.96m、1.98mを測り、西から1.98m、1.86mを測る。



（2） 出土遺物

当遺構1・8号柱穴からは、土師器甕の破片などが出土している。いずれも細片で、図化できたものは1点にとどまった。

土師器（第76図18）　18は、土師器甕の口縁部破片である。図示した傾きは定かでない。口縁部は外反しており、端部は尖っている。調整は風化が著しく明瞭ではない。色調は内外面共に暗茶褐色を呈す。胎土は1㎜程の白色粒を多く含む多孔質のものである。焼成は良好と思われる。



第72図　　吉留下窓原遺跡B区第18号掘立柱建物跡実測図（1／60）

32）　第18号掘立柱建物跡

（1）　遺　構（第72図）

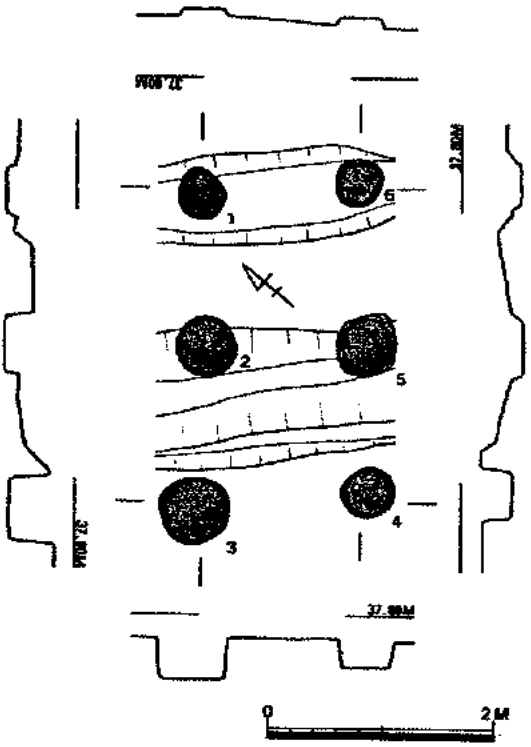
主軸をN－26°－W方向にとるもので、第16号掘立柱建物跡の南8m程の所に位置している。短軸2間×長軸1間の建物で、北側短軸長は2.52mを測り、柱穴間長は1.12m、1.08mを測る。南側短軸長は2.74mを測り、柱穴間長は西から1.06m、1.30mを測る。東側長軸長は4.28mを測り、柱穴間長は3.88mである。西側長軸長は4.28mを測り、柱穴間長は4.0mを測る。

（2）　出土遺物

当遺構3・4号柱穴からは、土師器杯・椀などの破片が出土している。

土師器（第76図19）　　19は、土師器杯である。体部は緩やかに内彎しつつ、外上方に立ち上り、肩部に段を有し、口縁部は直立する。端部は尖っている。調整は外面肩部の段下から底

部にかけて、右斜下から左斜上方向の静止撫削りを右回転に施している。他の調整は明瞭でない。色調は内外面共に赤味をおびた黄灰褐色を呈す。胎土は0.5㎜程の白色粒を少量含むものである。焼成は良好。復元口径6.4㎝を測る。



第73図　吉留下惣原遺跡B区第19号掘立柱建物跡実測図（1／60）

33)　第19号掘立柱建物跡

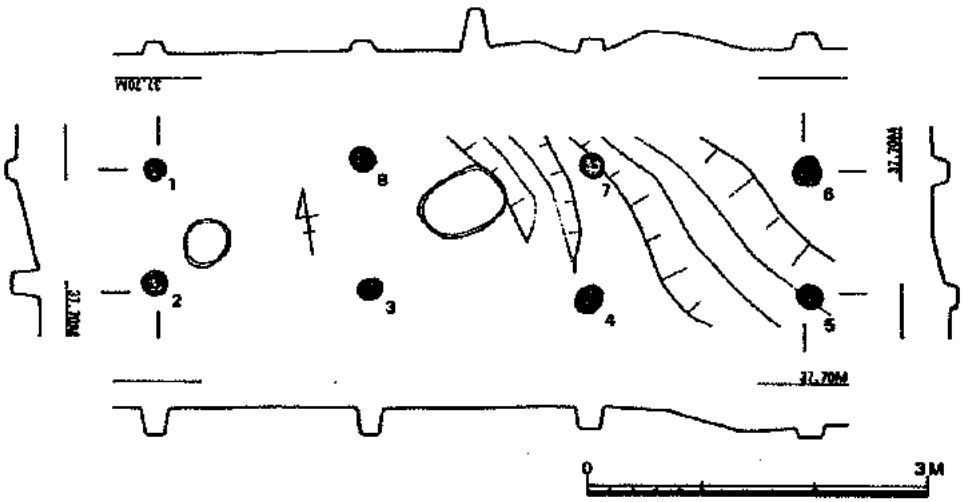
（1）　遺　構（第73図）

主軸をN－50°－E方向にとるもので、標高37.5mの等高線上にあり、等高線と直交する形をとるもので、第5号掘立柱建物跡の南東4m程の所に位置している。短軸1間×長軸2間の建物で、東側短軸長は1.82mを測り、柱穴間長は1.40mを測る。西側短軸長は2.08mを測り、柱穴間長は1.58mを測る。北側長軸長は3.38mを測り、柱穴間長は西から1.48m、1.34mを測る。南側長軸長は3.20mを測り、柱穴間長は西から1.40m、1.48mを測る。当遺構2・5号柱穴と第1号溝状遺構とは、切り合い関係にあり、当遺構が切られている。

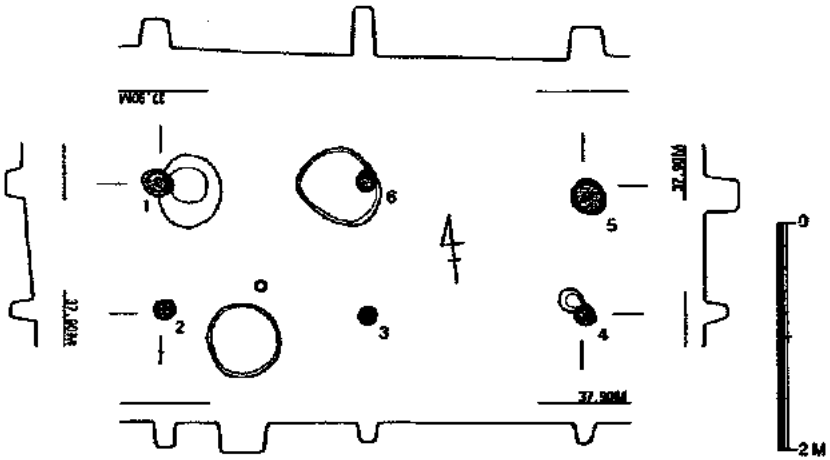
34)　第1号掘立柱構築物跡

（1）　遺　構（第74図）

主軸をN－82°－W方向にとるもので、標高37.5mの等高線に平行の形をとり、第7号掘立柱建物跡の東3mの所に位置している。短軸1間×長軸3間の構築物で、東側短軸長は1.36mを測り、柱穴間長は1.12mを測る。西側短軸長は1.22mを測り、柱穴間長は1.04mを測る。北側



第74図　吉留下恵原遺跡B区第1号掘立柱構築物跡実測図（1／60）



第75図　吉留下恵原遺跡B区第2号掘立柱構築物跡実測図（1／60）

長軸長は6.02mを測り、柱穴間長は西から1.86m、2.04m、1.86mを測る。南側長軸長は6.06mを測り、柱穴間長は西から1.96m、1.94m、1.96mを測る。当遺構5・7号柱穴と第1号溝状遺構とは切り合い関係にあり、当遺構が切られている。又当遺構と第6号掘立柱との間に切り合い関係が推定できるが、遺構による新旧関係は明確にできなかった。

35) 第2号掘立柱構築物跡

(1) 遺 構 (第75図)

主軸をN－82°－W方向にとるもので、第1号掘立柱構築物跡の南4mの所に平行して存在している。短軸1間×長軸2間の構築物で、東側短軸長は1.30mを測り、柱穴間長は1.04mを測る。西側短軸長は1.34mを測り、柱穴間長は1.12mを測る。北側長軸長は4.11mを測り、柱穴間長は西から1.88m、1.96mを測る。南側長軸長は3.92mを測り、柱穴間長は西から1.82m、1.88mを測る。

36) 溝状遺構 (第51図)

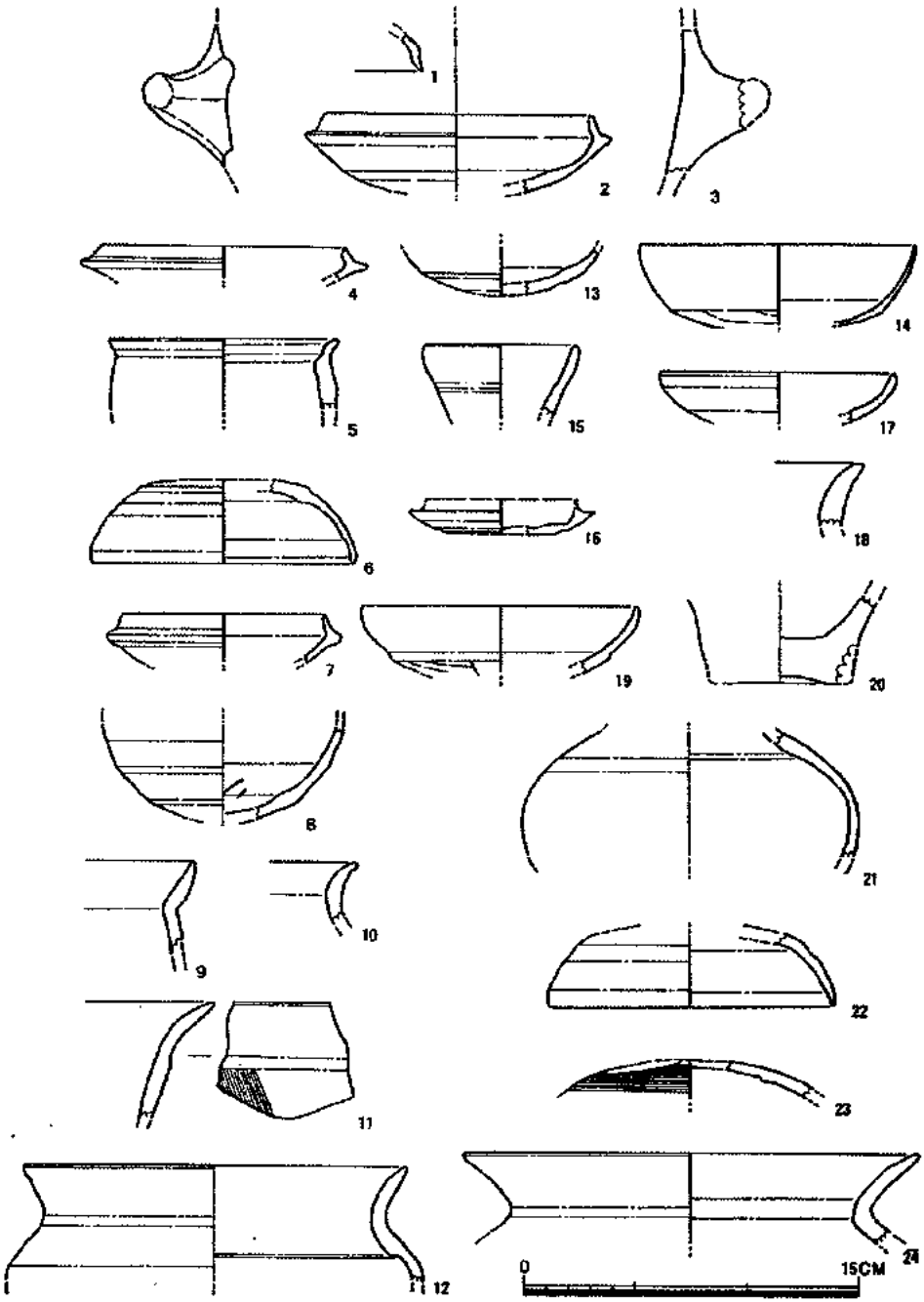
当調査区内には第1～5号までの溝状遺構が存在している。これらの遺構は、調査区の北側端及び南東部に位置している。第1・2号溝状遺構は切り合い関係にあり、第1号溝状遺構を第2号溝状遺構が切った状況で検出された。又第2・5号溝状遺構も相互に切り合っているが土色、土質に変化がなく、新旧関係については明確でない。

(1) 第1号溝状遺構

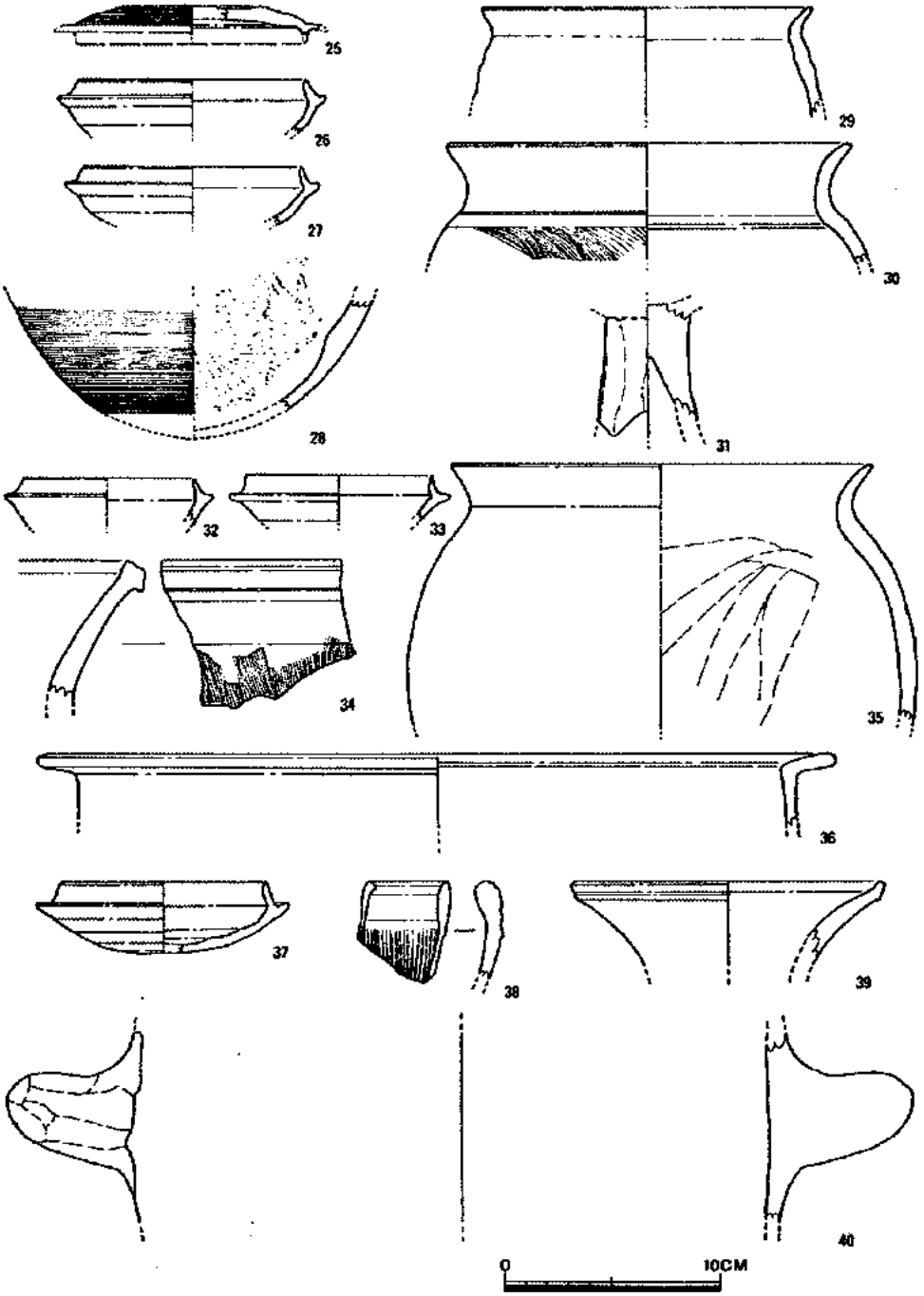
調査区北部を南東から北西方向に走るもので、北西部を谷方向へ直角にとるものである。直線距離にして15m程を測る。南東部は調査区外へと続いている。

出土遺物 (第77図25) 25は、須恵器杯蓋である。天井部は水平でやや窪み、つまみがつくようである。体部は緩やかに内彎しつつ、外下方に降り、水平よりやや下る受部へと続く。口縁部は、内傾する反りから直立し、端部は尖るものと思われる。調整は外面で天井部から受部までカキ目調整を施す。内面は天井部で不定方向のナデ調整を施す。色調は外面で暗灰色を呈し、青灰色の斑点を散りばめたようになっている。内面は淡青灰色を呈す。胎土はほとんど砂粒を含まない精良なものである。焼成は良好。復元口径10.4cmを測る。

当遺構からは、他に土師器甕、須恵器杯身・甕などを出土しているが、図化できなかった。



第76図　吉留下惣原遺跡B区出土遺物実測図Ⅰ（1／3）



第77図　吉留下惣原遺跡B区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）

（2）　第２号溝状遺構

第１号溝状遺構の北西部を走るもので、南東端は第13号掘立柱建物跡の北１ｍ程の所で消滅し、北西部は畦により削平されている。

出土遺物は土師器・須恵器の甕などを出土しているが、細片のため図化できなかった。

（3）　第３号溝状遺構

第１号溝状遺構の北東部に、これと平行して走るもので、南東端は第４号竪穴遺構に当り、北西部は谷に向うものである。

出土遺物（第77図26～31）　26・27は、須恵器杯身である。26は、体部が内彎しつつ外上方へ立ち上り、内面受部でやや内傾し口縁部となる。受部は水平よりやや上方にのび、端部は丸い。口縁端部も丸くおさめている。調整は現存部位で内外面共に横ナデ調整を施す。色調は内外面共に黄白灰色を呈す。胎土は微粒の黒色粒を多く含むものである。焼成はややあまい。復元口径10.4cm、受部径12.4cm、たちあがり高0.8cmを測る。27は、体部が内彎しつつ外上方へ立ち上り、内面受部でかるい段をもち内傾して口縁部となる。受部は水平にのび、端部は丸い。口縁端部は尖りぎみにおさめている。調整は現存部位で内外面共に横ナデ調整を施す。色調は内外面共に黄灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は不良。復元口径10.0cm、受部径11.8cm、たちあがり高0.8cmを測る。28は、須恵器壺の破片と思われる。体部は球形になるものと思われる。調整は外面でカキ目調整を施し、内面は放射状線のはいる叩き調整の後ナデ調整を施している。色調は外面で暗灰色を呈し、内面は灰色を呈す。胎土は小豆色のものを暗灰色のものが挟むような色調を呈し、0.5mm程の白色粒を多く含むものである。焼成は良好。29・30は、土師器甕の破片である。29は、体部が緩やかに内彎し、口縁部で外反するものである。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめられている。調整は風化が著しいため明瞭でないが、内面については横ナデ調整を施す。色調は外面で褐色を呈し、内面で暗茶褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。復元口径15.4cmを測る。30は、体部が内彎し、頸部内面に段をもって外反する口縁部となる。調整は口縁部及び内面で横ナデ調整を施し、外面体部は斜方向の刷毛目調整を施す。色調は内外面共に赤味をおびた褐灰色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成は良好。復元口径18.6cmを測る。31は、高杯の杯部から脚柱部にかけての破片である。杯底部内面はナデ調整を施し、脚柱部は箆削り調整を施す。色調は全面赤褐色を呈す。胎土は微粒の白色粒を含むものである。焼成はややあまい。

（4）　第４号溝状遺構

調査区西部を南北に走るもので、南部は第18号掘立柱建物跡の南1mの所で消滅し、北部は畦により削平されている。

当遺構からは、土師器・須恵器の甕破片などが出土している。

(5) 第5号溝状遺構

第2号溝状遺構の北に接し谷方向に走るもので、北端は第5号掘立柱建物跡の西で消滅し、南端は第2号溝状遺構と切り合う。

37) その他の小竪穴出土遺物

土師器（第77図35） 35は、壺である。体部が内彎して立ち上り、外反する口縁部となる。調整は外面でナデ調整を施し、内面で縦方向の篦削り調整を施す。色調は外面で赤褐色を呈し、内面で暗黄灰褐色を呈す。胎土は砂粒を多く含むものである。焼成は良好。

須恵器（第77図32～34） 32・33は、杯身である。いずれも体部が内彎しつつ、外上方に立ち上り、受部内面にかるい段をもって内傾するたちあがりがとりつく。口縁部は細くのばされ端部は尖る。現存部位はいずれも横ナデ調整を施す。色調は32で内外面共に淡灰色を呈し、33で暗黒灰色を呈す。焼成はいずれも良好。

弥生土器（第77図36） 36は、甕の口頸部破片である。体部は直立し逆「L」字状を呈す口縁部となる。調整は現存部位で内外面共にナデ調整を施す。色調は内外面共に赤味をおびた黄灰褐色を呈す。胎土は1mm前後の白色粒を多く含む多孔質のものである。焼成は良好。

38) 包含層出土遺物

包含層は、暗黒褐灰色の粘質土で、第1～3・5号溝状遺構上を覆う。堆積は10～15cm程のもので、これを除去した面が、当調査区北部の遺構検出面である。

土師器（第77図39・40） 39は、壺の口縁部破片である。口縁部は外反し、端部を屈曲させて直立させる。調整は横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。40は、牛角把手付土器の把手部破片である。内面はナデ調整、外面は篦削り及びナデ調整。胎土は砂粒を多く含むものである。

須恵器（第77図37・38） 37は、杯身である。体部は緩やかに内彎しつつ、外上方に立ち上り受部から内傾するたちあがりがとりつく。受部は斜上方へのび端部は丸い。調整は底部篦削りで他は横ナデ調整を施す。色調は内外面共に褐色を呈す。焼成はややあまい。38は、須恵質擂鉢の口縁部破片である。体部は直立し、口縁部が内彎する。内面には縦沈線が多数走る。

4. まとめ

今回の調査では、新立山から吉留地区に向って北に派生する丘陵上に、縄文時代から歴史時代にかけての遺構・遺物が、多く存在することを確認することができた。

当遺跡A区の調査により、竪穴遺構5基・掘立柱建物跡2棟の存在を確認した。これらの遺構からは、竪穴遺構から若干の土師器及び須恵器を出土するだけで、時期を比定するには至らなかった。掘立柱建物跡は、第1号掘立柱建物跡と第1号竪穴遺構の間に切り合い関係を認め、これを考慮すると竪穴遺構に後出することが窺える。又当調査区包含層中から縄文時代晩期に比定される土器が出土しており、宗像地域における最初の調査例となった。

当遺跡B区の調査により、竪穴遺構14基、溝状遺構5基、掘立柱建物跡19棟、掘立柱構築物2棟の存在を確認した。この内掘立柱建物跡については、その規模、構造によって、5類に大別される。1類は、短軸2間×長軸1間の建物で、中心に柱穴をもつ。第1・9・12号がこれに属する。2類は、短軸2間×長軸1間の建物で、中心に柱穴をもたない。第18号がこれに属する。3類は、短軸2間×長軸2間の建物で、中心に柱穴をもつ。この類は、正方形に近いもの（3－a類）と長方形に近いもの（3－b類）に細分できる。第2・4・5・10・13・17号が3－a類に属し、第8・14号が3－b類に属する。4類は、短軸1間×長軸2間の建物である。5類は、全容を明確にしえないが、長軸3間のもので、第15号がこれに属する。これらの掘立柱建物跡は、相互に重複しているが、柱穴相互の切り合いが検出できたものは、第1～4・10～13号の8棟と第2号掘立柱構築物の1棟にすぎない。新旧関係を旧→新と表記すると1号→2号、3号→4号、10号→11号、12号→13号→第2号掘立柱構築物跡のようになり、分類でみると1類を3－a類の規模の大きいものが切り、3－b類の規模の小さなものと4類は相互に切り合いをみせる。これから、1類より3類が後出し、3類と4類は、平行もしくは相前後して出現したものと思われる。2類・5類については、1例のみの検出であるため明確にはできないが、その方位などから、3類に平行もしくは相前後するものと考えられる。これら掘立柱建物跡は、規模、構造などから推して、倉庫としての性格が推定でき、当区が、当地の倉庫群であったと思われる。

当調査区が営まれた時期を出土遺物からみると第9号竪穴遺構及び包含層中から出土した弥生土器の時期を初源とし、一時途絶えて、6世紀後半から7世紀初頭頃を最盛期とする倉庫群が営まれ、これが衰退する頃に溝状遺構や第1から5号までの竪穴遺構が出現し、溝状遺構の埋没する7世紀前半に途絶えるものと思われる。

以上見てきたように、当遺跡は6世紀後半～7世紀初頭頃を中心とする倉庫群と思われる。この時期は各地で群集墳が営まれるようになる時期と重なり、このようにまとまった倉庫群の運営を考えると、各地域の家父長層の台頭を思わせる。これは、太宰府政庁成立前夜の時期で

あり、各地域に分散的なまとまりをみる倉庫群が、多くできるものと思われる。これらは後に各地域で集中し、武丸大上げ遺跡でみるような総瓦葺きの掘立柱建物を成立させるようになるものと思われる。（安部）

註1　福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）』1977年

註2　宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』「武丸大上げ遺跡」1984年

註3　宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』「武丸高田遺跡」1985年

註4　宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』「武丸小伏遺跡」1985年

註5　宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告概報10集』「吉留京田遺跡」1986年

註6　横田賢次郎、森田　勉　『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究論集4　1978年

5. 縄文時代の調査

A区の試掘時に縄文土器を検出したため、市域では始めての縄文時代の調査となった。調査地は狭い舌状の台地となっており、幅約30mで東西は小さな盆地を形成している。調査区からさらに北へ20～30mの丘陵が延びて、鈎川と接して段丘をつくる。この調査から北側は先年の耕地整理により削平を受けていた。

調査面積は約200㎡と狭く、さらに薄い包含層のみであったために、遺跡そのものの性格等は明らかにはできなかったが、当地域での縄文時代調査の発端となるであろう。

遺　構

調査区内の土層は7層に分けられた。第1層の表土と、第7層の黄赤褐色粘質の地山土との間の第5層の下部と第6層の上部が縄文時代の包含層である。包含層の南側は削平を受けて平坦となっており、最南では白色の粘土が認められ、第7層の下部層になるものであろう。

出土遺物

出土遺物は土器と石器である。土器は深鉢、粗製と精製の浅鉢、石器は石鏃と石斧がある。出土量が少なく、全体像を捉えることは困難である。遺物はAトレンチとCトレンチの間が密度が濃い分布を示している。また、Aトレンチの西側では、土器群が重なりあって出土した、(第78図)。以下、個々の遺物について延べる。

土　器

深鉢（第79図1～9、第80図11）　1は体部の中途から外反して立ち上がり、口端部が最大径となる。口縁部の上面は部分的に上方へ延びるところがあり、波状の口縁部をもつものであろう。口縁端部の周辺は横なで調整、口縁部外面は横方向の条痕、内面はなで調整、口縁部と体部との境から上部で約2cm幅で条痕の上から横なで調整が認められる。体部外面は擦痕があり、内面は横方向の条痕がある。砂粒を多く含む。焼成は普通である。体部外面にススを附着する。口縁部外面は暗黄褐色、体部外面は暗茶灰色、内面は黒灰色。口径35.6cm。体部最大径33.2cm。

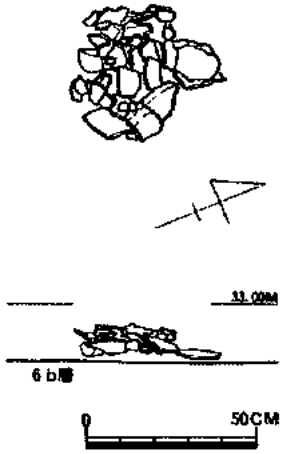
2は口縁部破片である。外反する口縁部の口端部はやや尖り気味に上方へ引き出される。1同様に波状口縁であろうか。外面は擦痕が認められ、内面はなで調整が施されている。砂粒を

多く含み、焼成は普通。外面は暗灰黒色、内面は暗茶褐色である。

3は口縁端部が「コ」字形に仕上げられ、横なで調整をしている。口縁下の外面は横方向の擦痕がある。細かい砂粒を多く含み、焼成は普通。灰黒色器面である。

4は口縁部である。外反して立ち上がり、口端部は「コ」字状となる。器面は右下がりの条痕、内面は横なで調整、細かい砂粒を含み、焼成は普通。破片の上半は灰黒色、下半は暗茶褐色である。

5は体部片である。体部最大径から内側に屈曲の後に外反しながら立ち上がる。立ち上がりの面は横方向の条痕、体部は横方向の条痕。器内面はなで調整。体部最大径から上部約2cm幅に明瞭な横なで調整が認められる。細かい砂粒を多く含み、焼成は普通。器外面は茶黒色〜暗赤褐色、内面は黒灰色。



第78図　吉留下惣原遺跡縄文土器出土状況（1／20）

6は口縁下半部の砂片である。やや直線的に外側へ開く。器外面は横方向の条痕のあとに一部になでが見られる。下端部に近いところでは横なで調整が明瞭に残っている。器内面はなで調整の細砂粒を多く含み、焼成は普通。器面は暗赤茶褐色〜灰黒色。

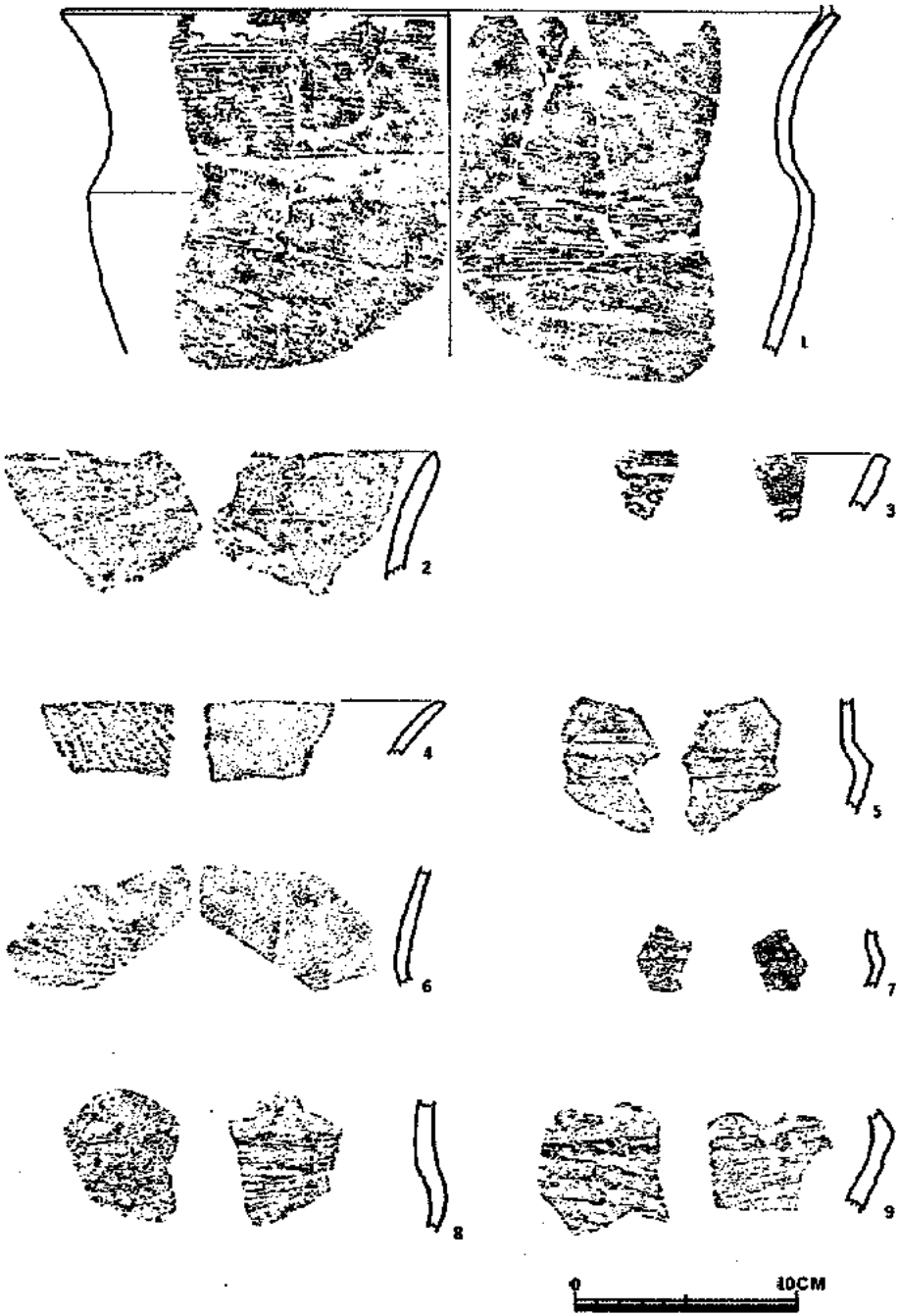
7は体部破片である。体部最大径から上は横なで調整、下部は擦痕が認められる。内面はなで調整、細砂粒を多く含み、焼成普通。外面は暗黄褐色、内面は灰黒色。

8は体部破片である。体部最大径での屈曲は小さく、「S」字状に立ち上がる。最大径から上部は横方向の擦痕の後に線刻を施している。下半はなで調整、器内面は上半がなで調整、下半は横方向の条痕である。砂粒を多く含み、焼成は普通。外面は暗黄褐色、内面は灰黒色である。

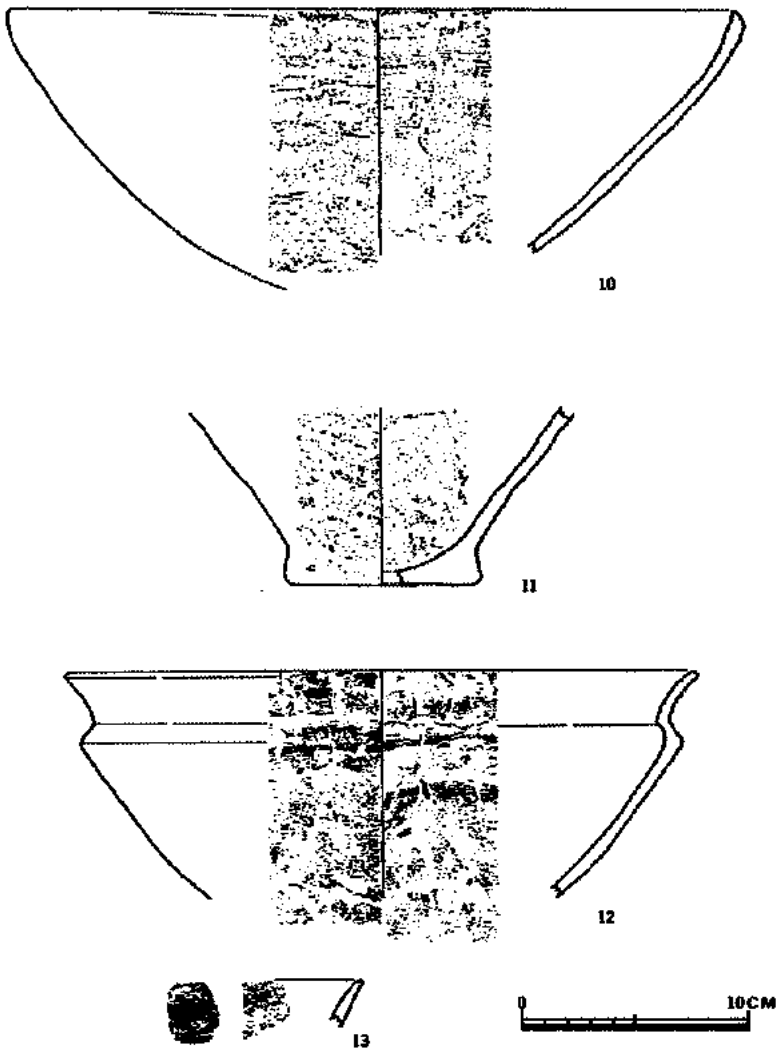
9は体部破片である。最大径から上部は横なで調整、下半は擦痕が認められる。内面は横方向の条痕である。微粒の砂を含み、焼成は普通、器面には気泡が多い。外面は暗茶褐色、内面は灰黒色である。

11は唯一出土の底部である。1とつながる可能性がある。平底で体部内外面は横方向の条痕底部はなで調整、砂粒を多く含み、焼成は普通。内外面とも暗黄褐色。

粗製浅鉢（第80図10）　底部を欠いている。体部の立ち上がりは浅く、口縁端部は上方へ引き出され、外側に面をつくる。器外面は横方向の条痕、内面は工具によるなで調整、口縁部は横なで調整。底部は平底、丸底を明らかにできなかった。砂粒を多く含み、焼成は普通。外面



第79図　吉留下黍原遺跡A区出土遺物実測図Ⅰ（1／3）



第80図　古留下恵原遺跡A区出土遺物実測図Ⅱ（1／3）

は暗茶褐色、内面は黒褐色。口径32.5cm。

精製浅鉢（第80図12・13）　12は底部を欠いている。体部の立ち上がりは深く、最大径での屈曲は明瞭である。体部の屈曲からさらに外反して立ち上がる口縁部は3cmほどのびる。口端部はやや外側へ引き出されながらも丸くおさまる。器面は全体に磨き調整が施されている。細かい砂粒を多く含み、焼成は良好。器外面は暗茶褐色、内面は暗灰茶褐色。口径28.4cm。

13は口縁部片である。外反する口縁部の端部は丸くおさまる。全体に磨き仕上げを施してい

る。微粒の砂を含み、焼成良好。器面は暗黄褐色～黒色。（原）

石　器

石　鏃（第81図　表2）

採集されている石鏃は、17点ありその内包含層に伴う資料を主として12点を図示した。これらのうち2点は攪乱を受けている。石鏃は、基部の形状観察で、抉り込みを有するものと基部がほぼ直線的で全体形が三角形を呈するものが認められることから、前者をⅠ類、後者をⅡ類に分類しておく。

Ⅰ類（1～6）

本類に属するものでは、やや幅広でズングリした形状を呈する。1・3・4と、細身で鋭利な2・5・6とがあり両者は外見上異った観を受けるが、いずれも身部と脚部の境で一担クビレ以下脚部に向って広がるという製作上の共通点を有している。

Ⅱ類（7～12）

本類においてもⅠ類同様幅広の7・8と、細身の9～12とに分けられる。前者は基部がほぼ直線的であるのに対し、後者は、基部が若干内彎する。本類の調整は、全体に粗雑であり、Ⅰ類に属するものが、いずれも各縁部から入念な押圧剥離による調整を施しているのとは対象的である。

Ⅱ類の内9～12の細身のものについては、身部中段で「く」字状に曲り中段以下で左右側辺が平行に基部に向うのは、所謂駒形鏃と称されるものの範疇でとらえることができるものである。

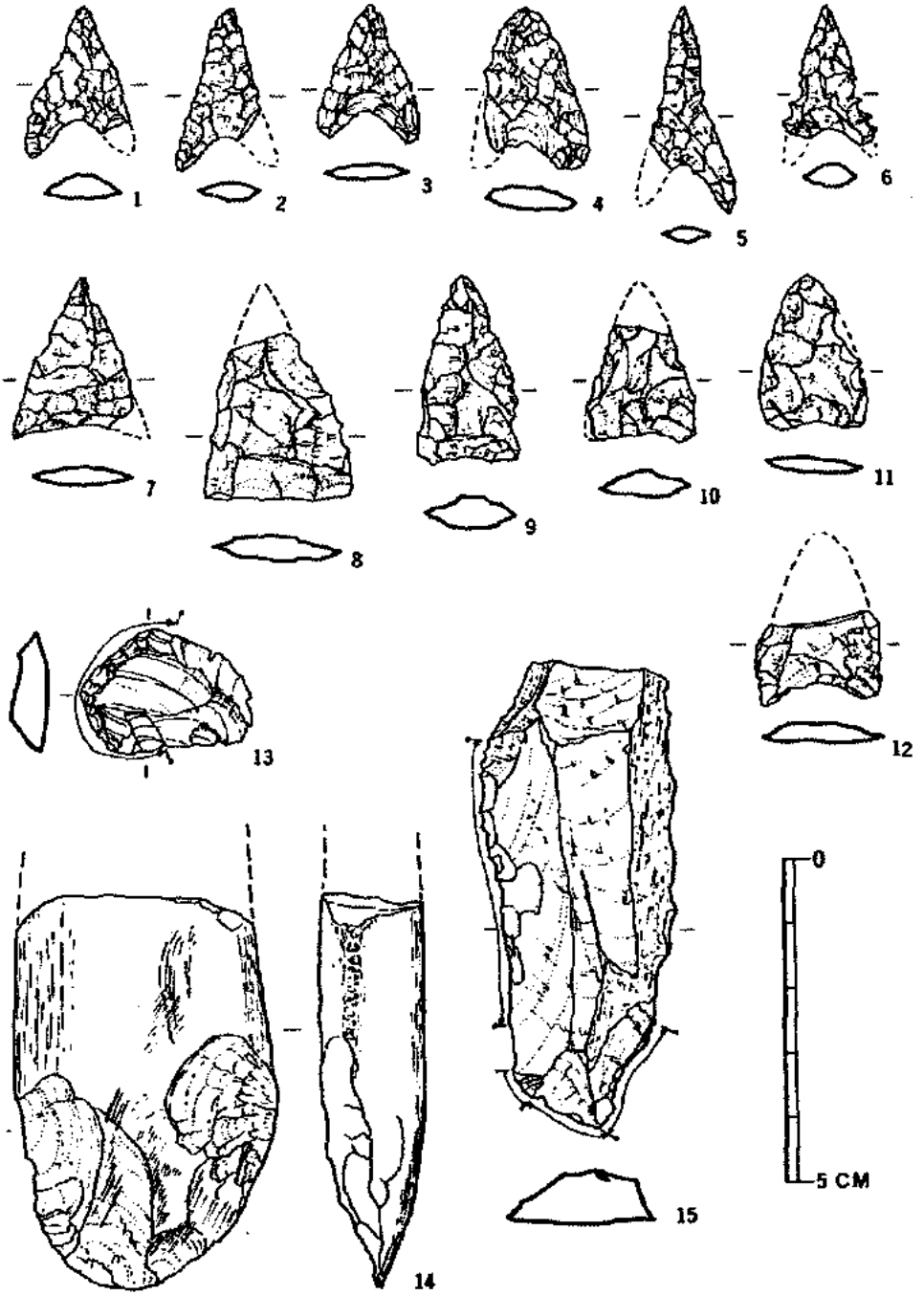
スクレイパー

13は、姫島産の黒曜石を素材とした不定形剥片を用い、上位中央から左側辺部に刃潰し加工状の調整を連続して裏面からのみ施し刃部を作り出している。

15は、サヌカイトの縦長剥片を素材とし、素材の剥片は、打面と右側面に礫面をそのまま残していることから、未調整の原石を母核とした石核から剥取されたものである。刃部調整は、左側辺部と下部に施されている。下位の調整は、先端部左側辺部に刃潰し加工状で急角度の刃部を作り、右側辺には浅いノッチを設けており、それぞれの刃部に使用の痕跡が認れる。また左側辺部の中間部にも使用の痕跡が残ることから複数の機能を有していたことが理解できる。

石　斧

14は、玄武岩式の石材を用い、全面に研磨が施されている。刃部調整は、全体の研磨終了後にa面の先端部と左右側辺の基部付近にのみ裏面からの加撃で調整を行っている。加撃による刃部調整後再度a面中央部の剥離部に研磨を行っている。刃部調整及び刃部の形状（b面）などは所謂局部磨製石斧に類似するが、b面上位の側面調整が敲打技法による調整を施すことな



第81図　吉留下窪原遺跡A区出土遺物実測図Ⅲ（1／1）

第2表　石器一覧　（復原）

番号	石　　材	最大幅(mm)	最大長(mm)	欠損部	備　　考
1	姫島産黒曜石	15 (16＋α)	23.5	右　脚	6層　No.170
2	サヌカイト	12 (15＋α)	26	〃	6層上　No.76
3	黒曜石	15.5	21.5		1号竪穴
4	黒曜石	15 (18＋α)	25.5	左　脚	東側包含層
5	サヌカイト	12 (16＋α)	32.5	〃	6層上　No.61
6	〃	14 (15＋α)	21 (23＋α)	両　脚	表　採
7	〃	18 (21＋α)	24 (26＋α)	右　脚	5層下　No.127
8	〃	23	26 (34＋α)	先　端	5層下　No.37
9	〃	15.5	29.5		5層下　181
10	〃	16 (17＋α)	17 (26＋α)	先　端	6層上　No.164
11	〃	16.5	24		5層下　4グリッド
12	〃	19	13 (26＋α)	先　端	5層下　4グリッド
13		26	19	—	5層下　No.30
14	石　斧	39	59＋α	—	No.9
15	サヌカイト	29.5	71.3	—	3 or 4層
16	石鏃・サヌカイト	15	18	先端と脚	表　採
17	石鏃・サヌカイト	15	22	両　脚	6層下　No.155
18	黒曜石・石鏃	19	16	先　端	2号竪穴　No.6
19	石　鏃				
20	石　鏃				

と相違点も有している。その他に図には乗せていないが5点の石鏃が出土しており図版21と表にその形態等を示している。

小　結

縄文土器の出土は少ないが、宗像地域における最初の発掘調査であり、今後、同様の調査は増加するものと思われる。

調査地は、宗像市東部の鞍手郡との境に近く、市域を貫流する釣川を前面にした段丘上にあり、標高は約30mである。また、調査地の北西2kmの遠賀郡との境に近い武丸大上げ遺跡は標高30mの丘陵緩斜面に位置し、土器の出土はないが石匙を出している。

標高30mの丘陵線は市中央では、主に弥生時代の遺跡となっている。光岡長尾遺跡、曲香畑遺跡、久原遺跡等であるが、これらの遺跡からは縄文土器一片の採集もしていない。このため市域の縄文時代遺跡の立地検証は困難を極めていた。

市の中央部での縄文時代遺跡は、標高30mよりさらに低位の標高10mを前後する丘陵地にその存在が考えられよう。

当遺跡は、丘陵平坦面は少なく集落を形成するには困難である。本集落とは離れた、拠点的居住地が妥当なところであろうか。

出土遺物は少ないが、粗製の深鉢、浅鉢、精製の浅鉢、石鏃、石斧で構成されている。

深鉢は全て体部最大径から、外反して立ち上がる口縁部を有する。境の屈曲は強弱がある。

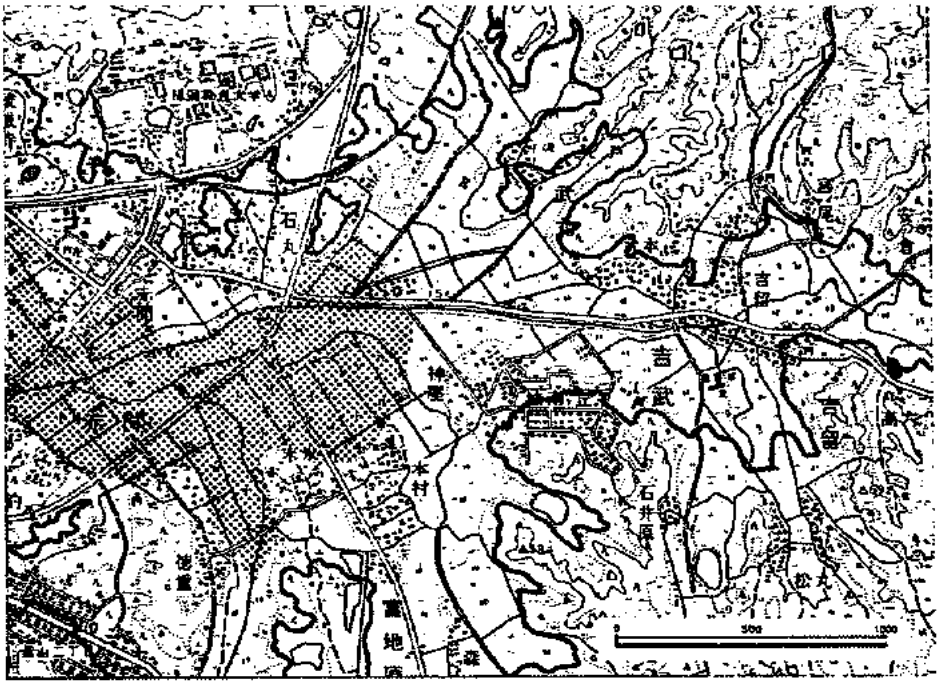
口縁端部が波状となるものもある（第79図1・2）。直口の口縁はなく、口縁部に突帯を有するものもない。調整は口縁部の外面は横方向の条痕ないし擦痕、内面的ななで調整を特徴とする。第79図4は外面右下がりの擦痕をもつ。体部の外面は横方向の擦痕をもつものが多い。また、この器種の特徴として、体部最下径から上部の幅約2cmに横ナデ調整が明瞭に認められ、強く押し当てているために上部では弱い段をつくるものもある。第79図8は唯一の線刻をもつ土器であるが、何を表現したのかわからない。底部は一点あり、平底である。

粗製の浅鉢は、底部を欠いているが、丸底をつくる可能性がある。

精製の浅鉢は、体部に深みがあり、口縁部の外反、立ち上がりは高いのが特徴である。口端部の沈線は内外面とももたない。

これらの器種には突帯文土器を伴っていないが資料が少ないため同時期に考えられる北九州長行遺跡のような状況にあるのかは今後の調査にかかる問題である。

数少ない資料から併行関係を求めると、那珂川町松木遺跡3・4層・山鹿見塚の精製浅鉢の特徴は当遺跡のものに近いものである。このタイプの浅鉢は、口縁端部に段をもつものや、沈線をもつものと共伴しないが、当遺跡では資料はない。口縁端部の段や沈線は時期が下がるとともに消滅する傾向にあり、当遺跡の資料はより新しい段階にあることが考えられる。



第82図　縄文時代遺跡立地（1／25000）

（● 吉留下惣原遺跡　▲ 武丸大上げ遺跡
アミ 10m未満の標高　太線 30mの等高線）

粗製深鉢の体部最大径上部の横ナデ技法はこの時期以前の土器には見られないものであり、より新しいものか、あるいは、宗像的な技法であろうか。

宗像地域の調査では、弥生時代前期の遺跡である大井三倉遺跡、今川遺跡、光岡長尾遺跡など全ての遺跡出土の土器は、縄文時代的特長である聳体部の屈曲や段・底部の上げ底などの刻目突帯文土器が色濃く残っており、地域色と言えるものである。当遺跡の資料は、その祖形となるものである。

今後の調査によって、この間の空白が埋まっていくであろう。（原）

第4章　光岡草場遺跡

1. 調査の経過

本調査は昭和61年11月27日から62年1月31日にかけて、畑地造成工事に先立って実施された。地権者の山田明次郎氏から開発申請を受け、現地に赴いたところ、古墳1基を確認した。そこで11月末から発掘調査を実施し、古墳周辺の表土を除去したところ、周囲は近現代の墓に取り囲まれ、はなはだしく攪乱を受けていた。また尾根線に沿って、幅約2mのトレンチを入れたが、やはり後世の攪乱を受けている状況であった。そこで、調査対象区を古墳とその周辺の約300㎡に限定した。

2. 位置と環境（第83・84図）

本遺跡は標高40m前後の尾根上にあり、調査区の標高は37.25mから40.50mを測る。また尾根の東と西側には沖積地が広がる。

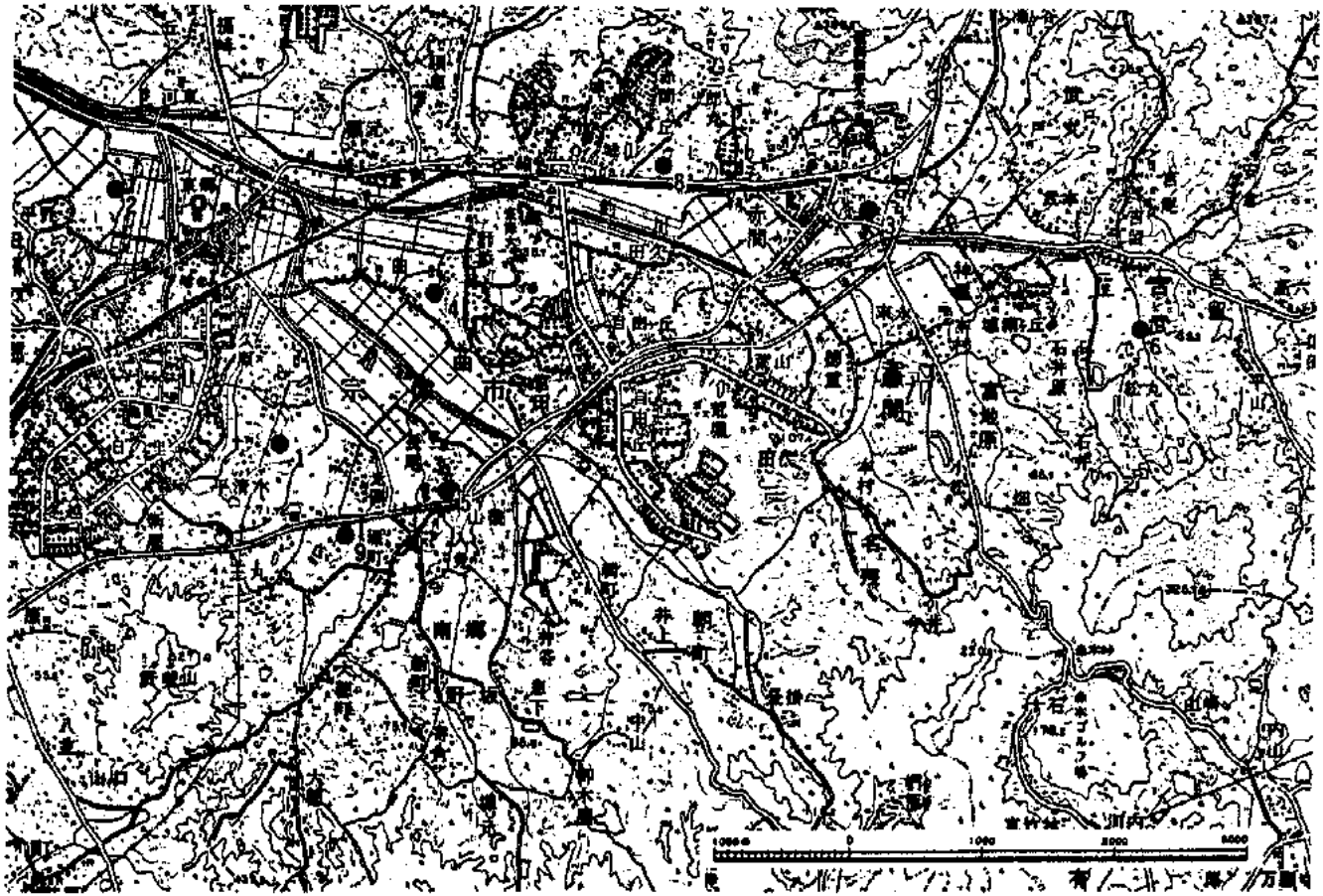
本遺跡からは古墳1基と弥生時代中期の土壙墓が24基、及び小児甕棺墓が2基発見された。市内で検出された弥生時代の遺跡は、釣川水系により形成された沖積地を背景に、標高30～40mの丘陵上に立地する。ただし丘陵上に立地する遺跡は、貯蔵穴群や、土壙墓を中心とした墓域がほとんどである。本遺跡の東側の丘陵には光岡長尾遺跡があり、前期から中期初頭にかけての貯蔵穴が50基以上発見された。また貯蔵穴群を取り囲むように正円に近い形の環溝が巡らされていた。

そして西側の丘陵には久原遺跡があり、19基の貯蔵穴、前期と中期の墓域が各々形成されていた。前期では小児用甕棺墓7基と成人用の土壙墓9基が発見され、中期では小児用から成人用の土壙墓33基が検出された。また前期のⅡ－8号土壙墓から有柄式石剣1本と朝鮮式磨製石鏃4本が発見された。さらに中期のⅣ－1号土壙墓には細形銅剣、細形銅矛が副葬されていた。

市内で墓域が検出されたその他の遺跡では冨地原梅木遺跡があげられる。中期後半を主体とする土壙墓100基以上発見された。土壙墓は隅丸長方形を呈し、2段掘りである。また副葬品としては鉄鏃、鉄戈が1点ずつ出土している。

さらに三郎丸古墳群、第4号墳地山面で、土壙6基が発見されており[①]、時期についての詳細な報告はないが、それらの形状から弥生時代の土壙墓の可能性を窺わせる。

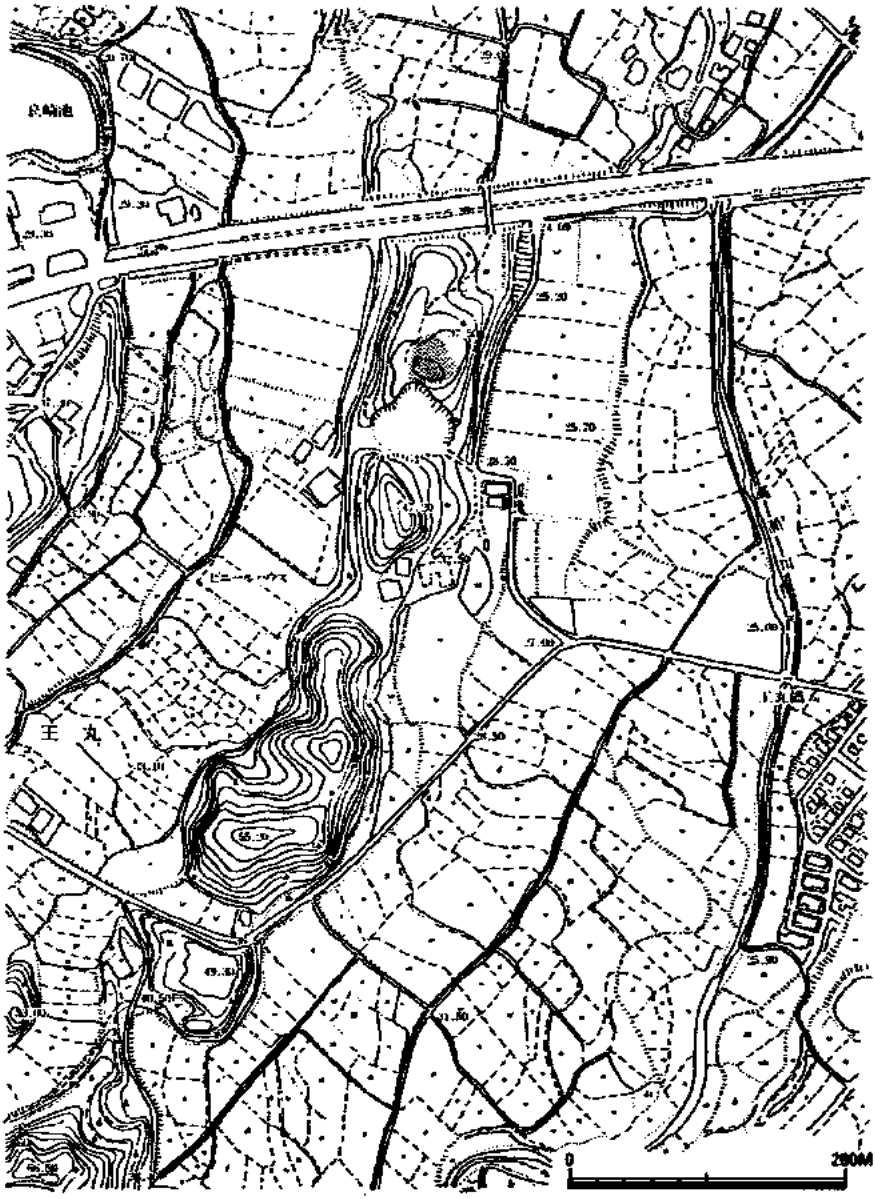
小児甕棺が検出されたその他の遺跡には、吉留京田遺跡があげられ、後期の甕棺3基が発見された。また成人甕棺が墓域を形成した調査例は今のところ認められていない。



1. 久原遺跡　3. 石丸遺跡　5. 光岡長尾遺跡　7. 富地原梅木遺跡　9. 光岡草場遺跡

2. 大井三倉遺跡　4. 曲香畑遺跡　6. 吉留京田遺跡　8. 三郎丸古墳群

第83図　弥生時代主要遺跡分布図



第84図　光岡草場遺跡発掘調査区図（1／5000）

（網かけ部分が調査区を示す）

3. 遺跡の概要

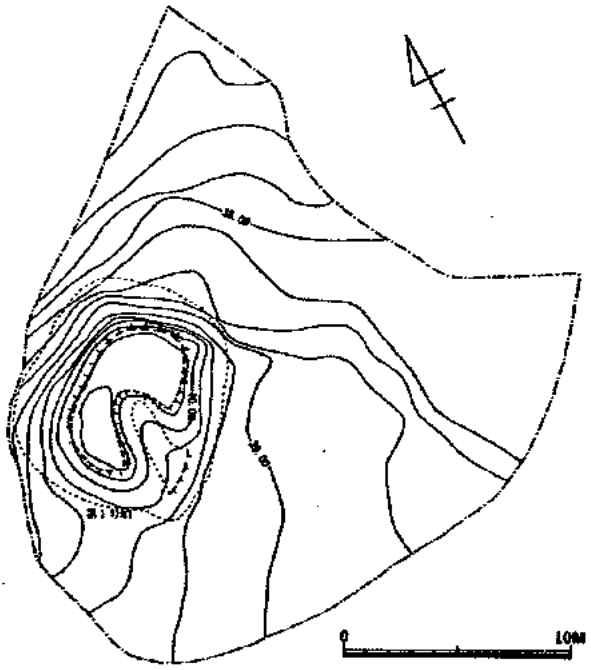
幅100m前後の細い尾根線上の高まりに位置する本遺跡の周辺は、北側が3号線バイパスで分断され、南側は土取り工事により大きく削平を受けている。

現況測量では1号墳は円墳もしくは方墳の可能性を思わせるが、古墳の西側を里道が巻くように走り、墳裾のラインは不明瞭である。また墳頂部も盛土の流出が予想され、本来の墳形をとどめていない。さらに周溝の確認は出来なかったため、墳形を断定することは困難であると思われる。

また墳頂から南側に向けて盗掘坑が掘られており、その方向に沿って幅2mのトレンチを設定した。そしてそのトレンチ内盗掘坑埋土中から鉄刀一振と鉄鏃12本が発見された。しかしトレンチ内から古墳主体部は検出されず、石材の痕跡も木棺墓の痕跡も確認出来なかった。

そこで盛土断面を裁ち割った後、盛土を除去し、地山整形面を検出したが、トレンチ内と同様に主体部の痕跡は認められなかった。代わりに同整形面上から多くの土壙墓が発見された。

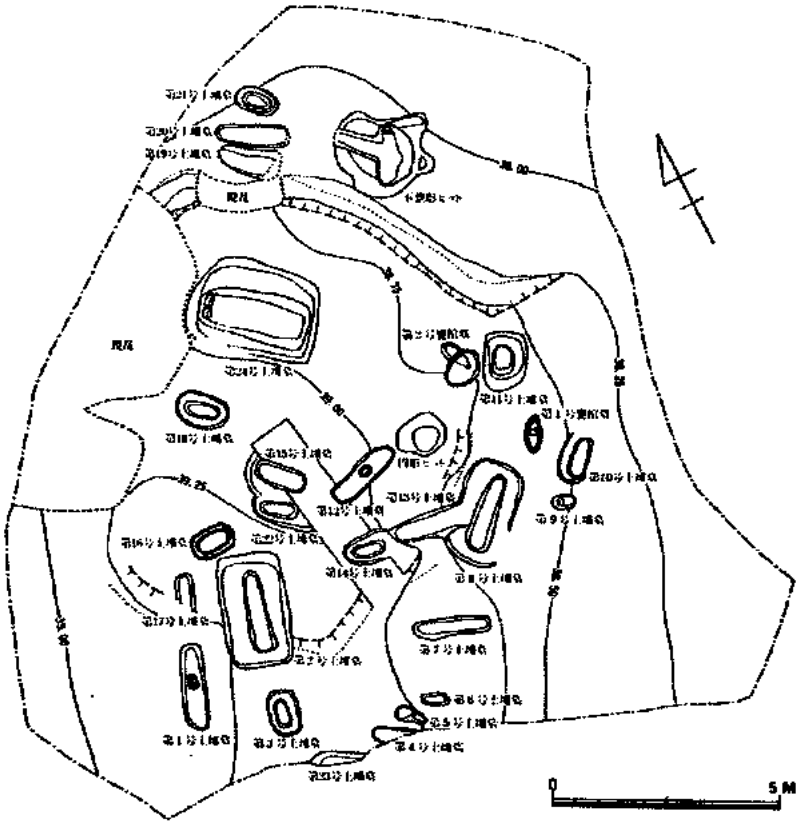
また基本土層は古墳の盛土下、黒褐色土(旧表土)、灰褐色土、赤褐色土と堆積する。弥生時代の土壙墓は灰褐色土層上面で検出可能である。但し土壙内埋土は、黒褐色土、あるいは黒褐色土と灰褐色土との混在土であることから、実際の遺構の掘り込み面は黒褐色土中に求められるようである。



第85図　光岡草場遺跡現況測量図（1／300）

4. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の土壙墓は全部で24基発見された。また小児甕棺墓の検出は２基のみである。さらに調査区の北側で、不整形のピットが発見されたが、出土した遺物はなく時期は不明である。そして調査区中央から円形ピットが１基検出され、上場の径１ｍ、下場の径50cm、深さ40cmを測る。



第86図　光岡草場遺跡遺構配置図（１／150）

1）　土壙墓

土壙墓は二段掘の土壙墓（2・3・8・10・11・14・15・16・18・21・22・24号土壙）と長方形プランを掘り込んだもの（1・4・5・6・7・9・12・13・17・19・20・23号土壙）に分けられる。また全ての土壙について、板材、目張り粘土の痕跡は認められなかった。

前者の中には、棺内小口に立石を用いるもの（24号土壙）があるが、板材その他の痕跡が認められないので、ここでは土壙墓としてとり上げた。また後者の中には、土壙底面中央に深さ20cmのピットを有するもの（1・12号土壙）が認められる。

次に棺内法の規模から、長軸1mを境にし、それより大形のものと小形のものの2グループに分けられるが、ここでは1mに満たないものを小児用として取り扱っておく（3・4・5・6・9・10・11・14・16・18・21・22号土壙）。

土壙墓の切り合い関係は、8・13・14号土壙が切り合い、土層観察等から13号は14号より新しく、13号は8号より新しい。また15号と22号土壙が切り合うが、新旧関係は確認出来なかった。

以下土器を供献していた土壙墓について概述する。

（1）　第2号土壙墓（第88図・図版29）

二段構築の土壙墓である。1号墳西南側の地山整形の墳裾面にまたがって検出された。棺外墓壙埋土中から弥生時代中期の供献壺1点が発見された（第92図・3）。また棺身の最大幅が南に求められることから、頭位は南向きと予測出来る。さらに供献壺の出土地点が墓壙の南西部分であることから、頭位方向の棺外に置かれたものと考えられる。

（2）　第24号土壙墓（第87図・図版28）

二段構築の本遺跡最大規模の土壙墓である。調査区の北側、1号墳地山整形面上で検出された。前述したように片側の棺内小口に大形と小形の立石を用いている。立石を用いた例は鞍手郡の汐井掛遺跡A地区第2号土壙墓に見られるが、両小口に掘込をもつ点、一段構築である点など相違が多い。また本土壙墓は小口に掘込みが認められず、板材の痕跡もないので、土壙墓としてとらえたが、小口に立石を用いその内側に木棺を埋置した可能性もあるかもしれない。

さらに棺外墓壙埋土中から弥生時代中期の供献壺1点が発見された（第92図・4）。出土地点は墓壙の略北東部分である。

他には調査区東側、2号甕棺墓に隣接する第11号土壙墓の埋土上面から、丹塗りの中期の壺

の破片が発見された。

なお各々の土壙墓の計測値については第３表を参照されたい。

２）　出土土器（第92図・図版31）

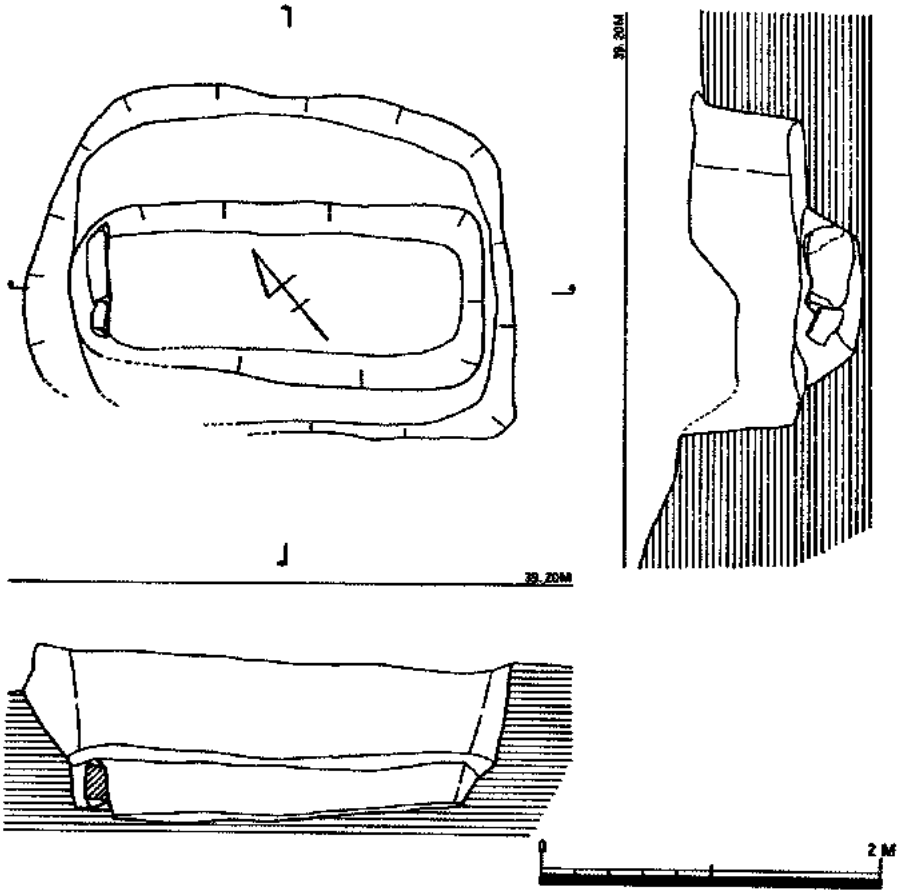
１・２は１号墳地山整形面南西部分、第16号土壙墓の北側の黒褐色土（旧表土）中から、並んで発見された。１は半形の壺で、復元口径10cm、器高21.3cm、復元底径7.8cmを測る。胴部最大径はやや下位にあり、器表面外面に丹彩がある。また全面にわたりヘラ研磨している。２は半形の壺で、復元口径31cm、胴部最大径34cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し、肩部と胴部中

第３表　土壙墓一覧表

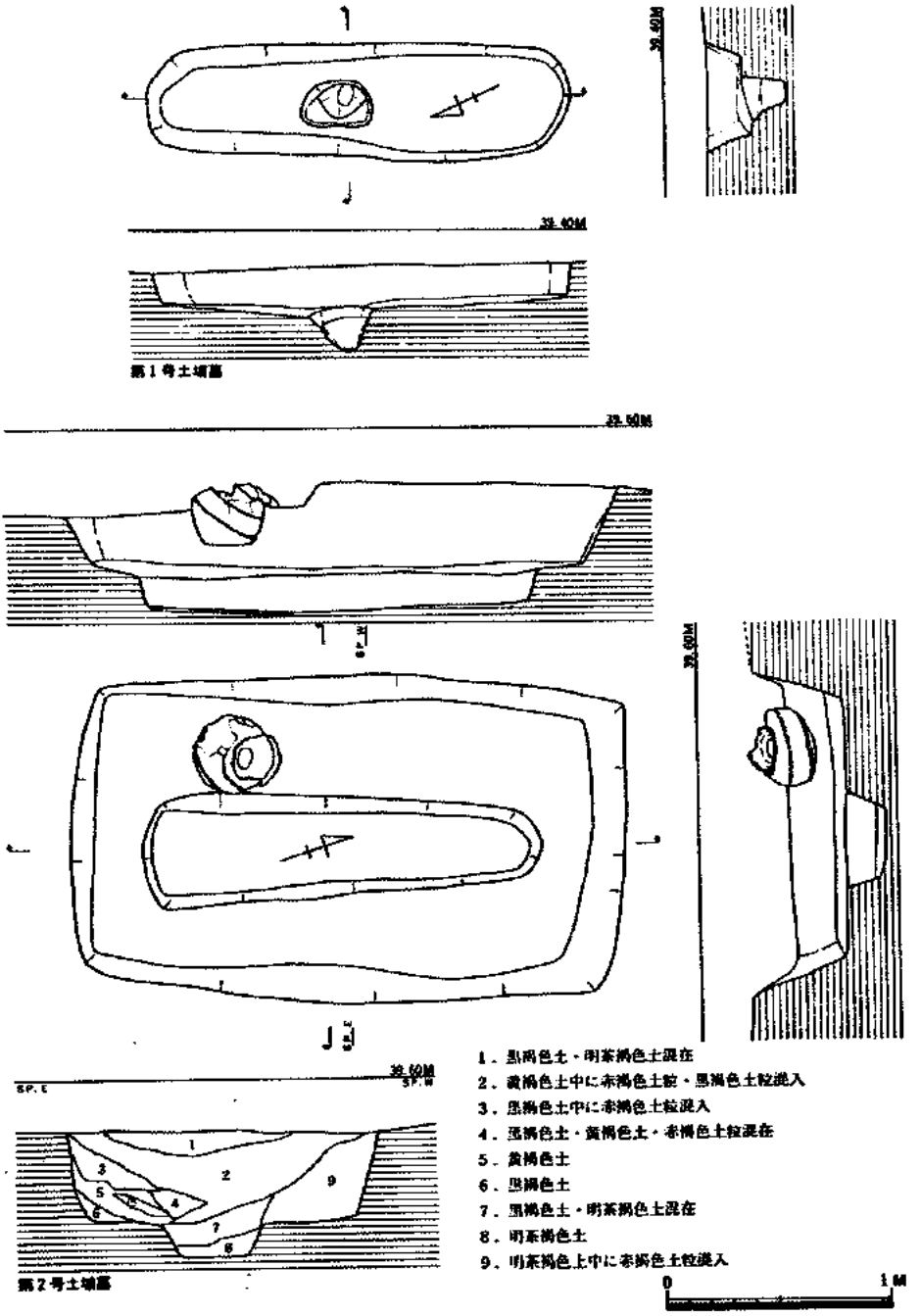
（単位はcm）

No.	主軸方向	構築法	墓壙規模（長軸×短軸）	棺内法（長軸×短軸）	備考
1	N－22°－E	1段		180×40	中央にピット(深さ20)
2	N－17°－E	2	250×145	170×40	供献壺有り
3	N－5°－E	2	100×65	55×20	
4	N－52°－W	1		90(?)×30	
5	N－38°－W	1		65(?)×15	
6	N－66°－W	1		55×20	
7	N－70°－W	1		155×25	
8	N－48°－E	2	235×130	165×35	
9	N－73°－W	1		40×25	
10	N－43°－E	2	110(?)×65	85×35	
11	N－25°－E	2	135×95	55×35	壺有り
12	N－71°－E	1		165×45	中央にピット(深さ20)
13	N－88°－W	1		150(?)×35	
14	N－88°－W	2	110(?)×65	60×20	
15	N－42°－W	2		110×40	
16	N－86°－E	2	100×65	70×30	
17	N－16°－E	1		80(?)×25	
18	N－53°－W	2	120×80	70×25	
19	N－49°－W	1		(?)×40	
20	N－56°－W	1		150×40	
21	N－50°－W	2	90×55	50×20	
22	N－50°－W	2	145(?)×？	65×20	
23	？	1	？	？	
24	N－50°－W	2	290×200	205×70	供献壺・立石有り

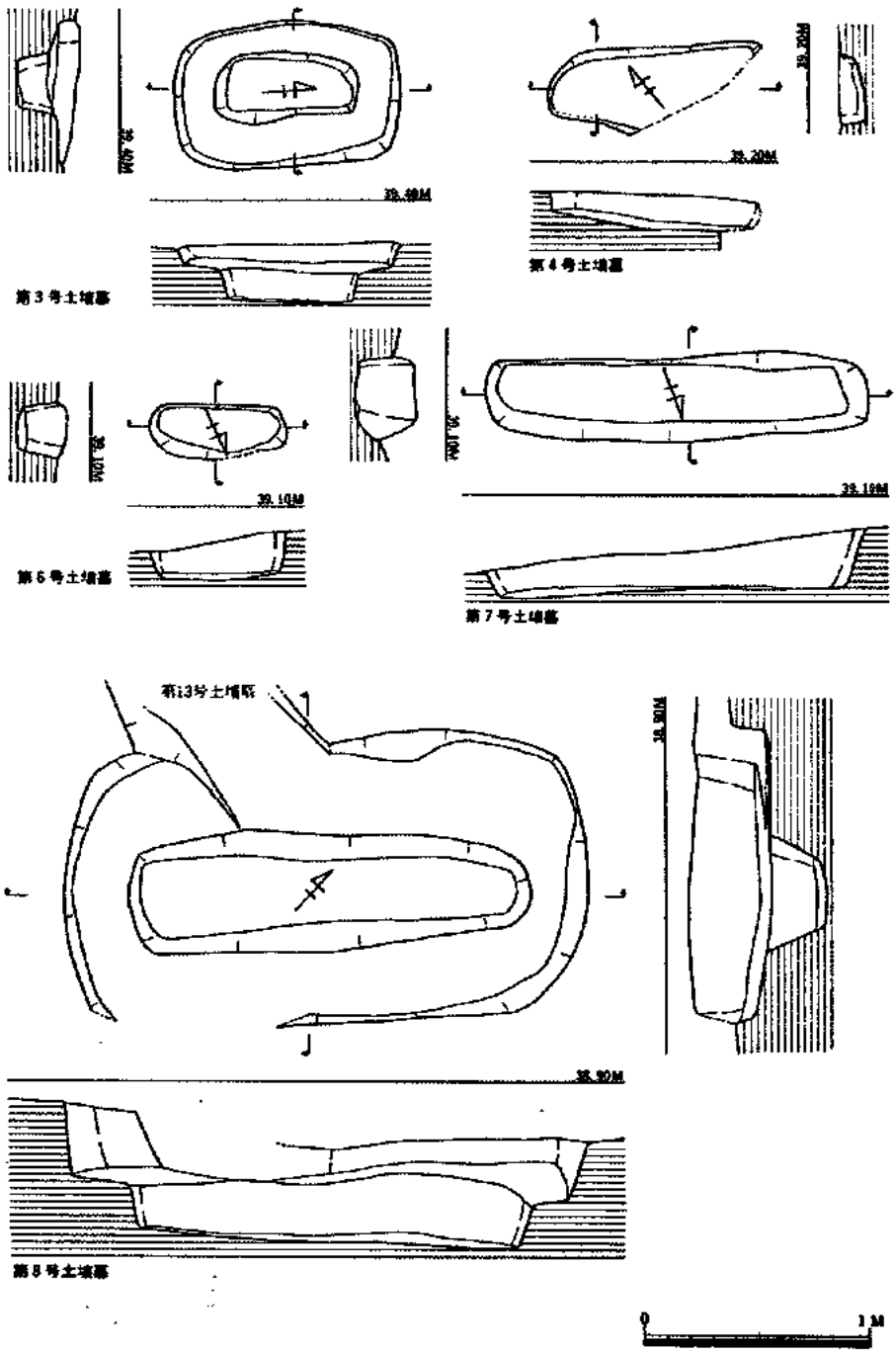
央にM字凸帯をもつ。器表面は剝落し、調整技法については不明瞭である。3は略完形の壺で、復元口径28.4cm、胴部最大径33.4cm、器高37.8cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し、肩部と胴部にM字凸帯をもち、底部は内反り気味の平底である。4は完形の壺で口径17.8cm（内径8.6cm）胴部最大径23.4cm、器高28.8cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し、底部は内反り気味の平底で、頸部には暗文が見られる。時期はいずれも中期後半に位置づけられよう。



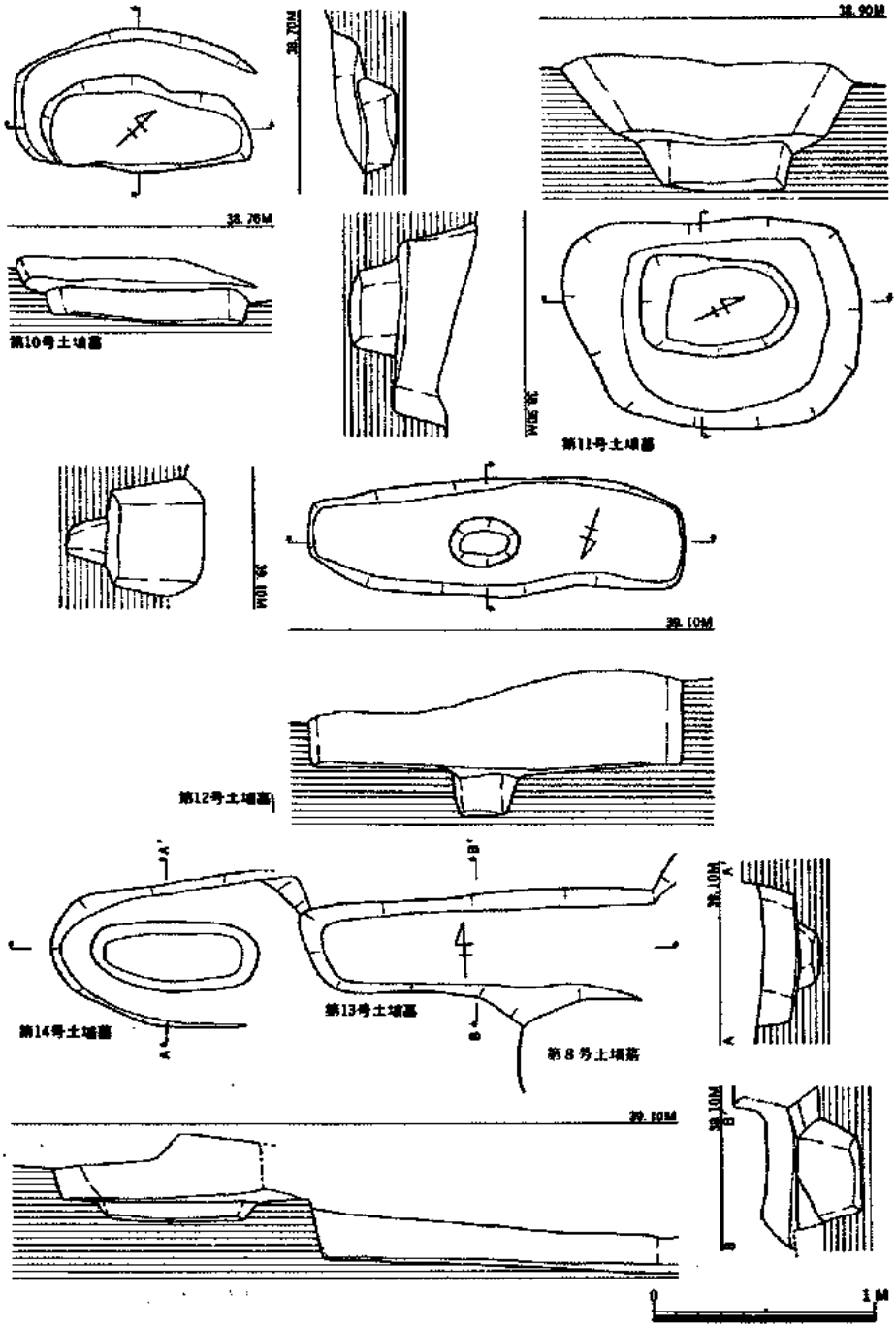
第87図　光國草場遺跡第24号土壙墓実測図（1／40）



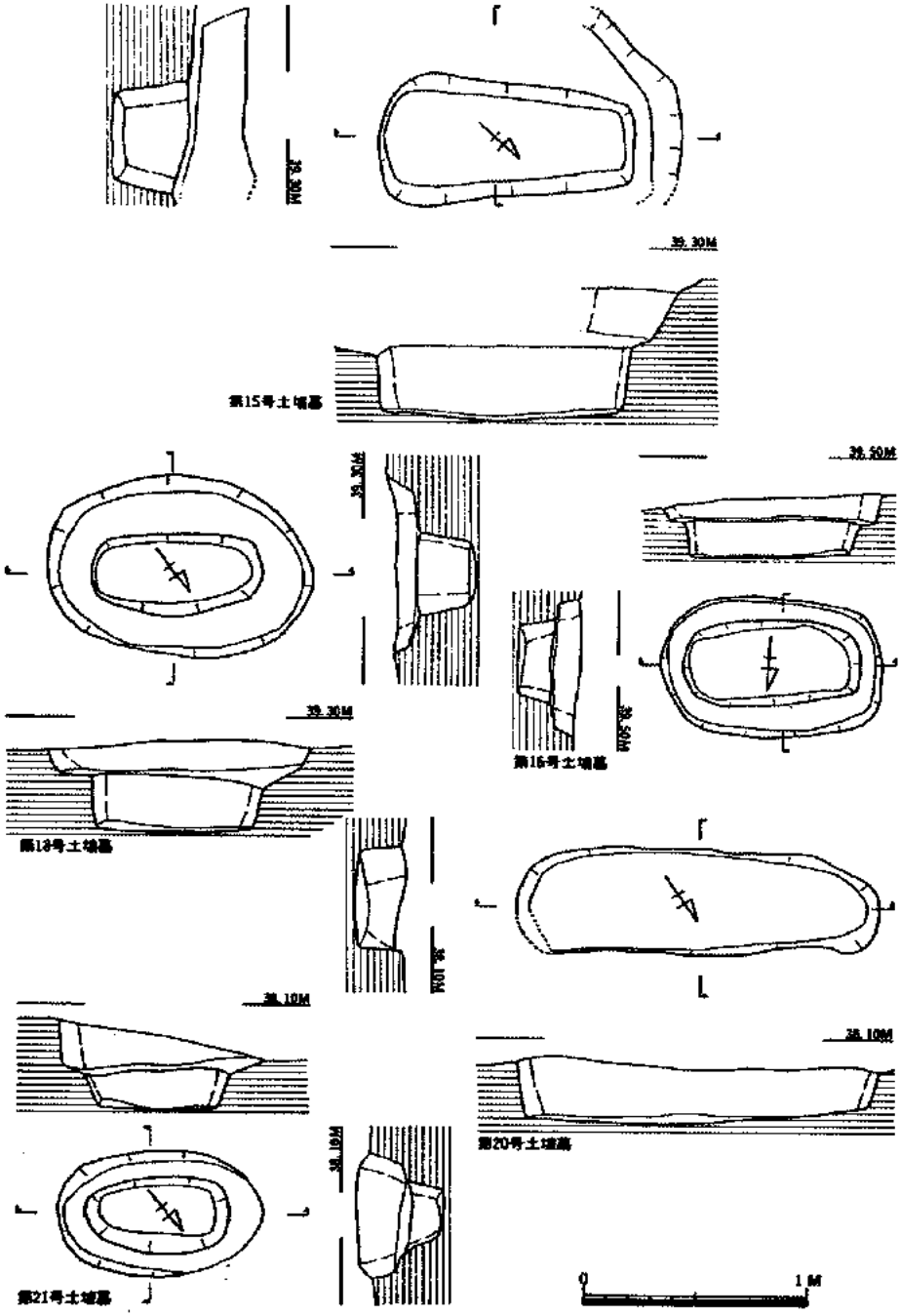
第88図　光岡草場遺跡第1・2号土壙墓実測図（1／30）



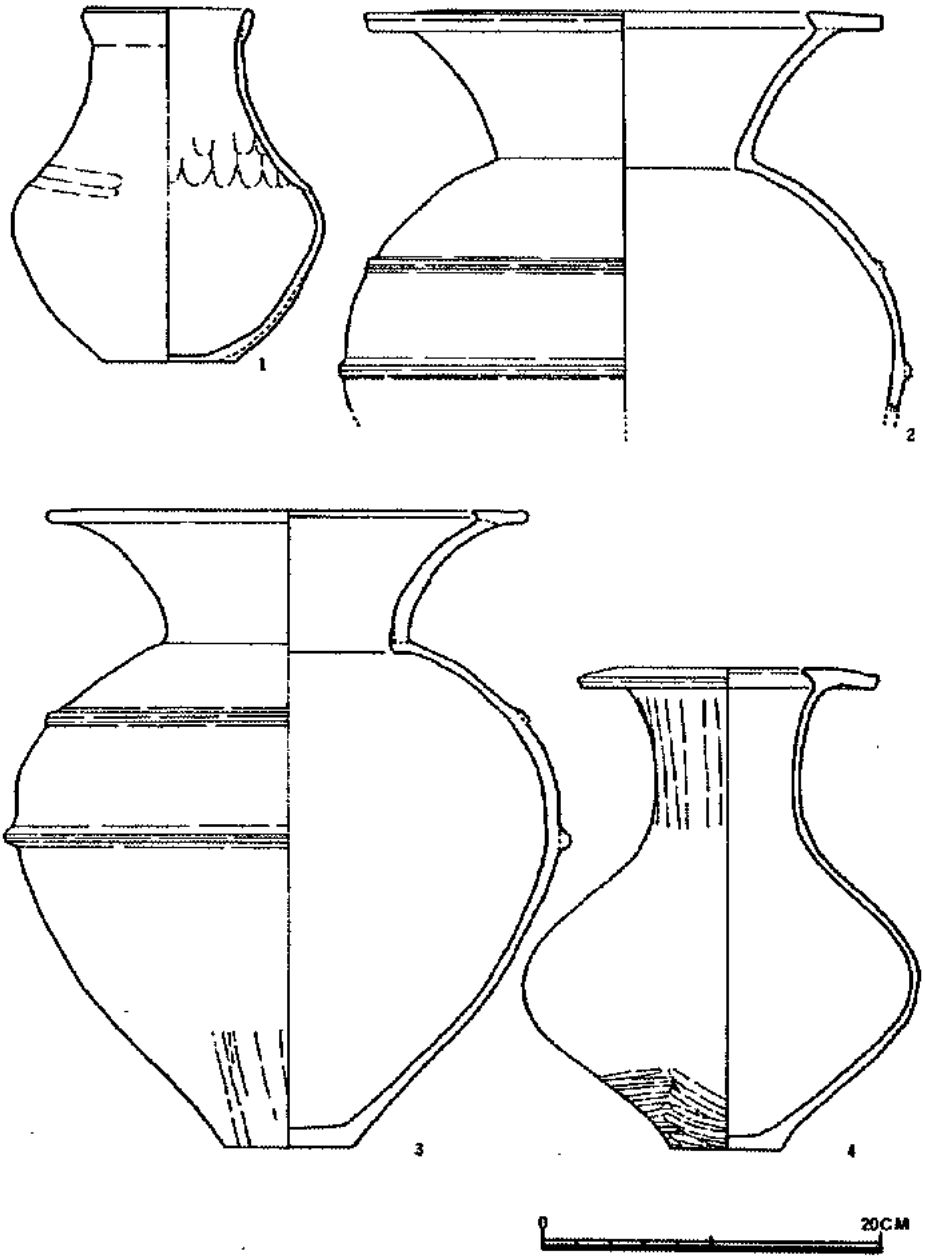
第89図　光岡草場遺跡第3～8号土壙墓実測図（1／30）



第90図　光岡草場遺跡第10～14号土壙墓実測図（1／30）



第91図　光岡草場遺跡第15～21号土壙墓実測図（1／30）



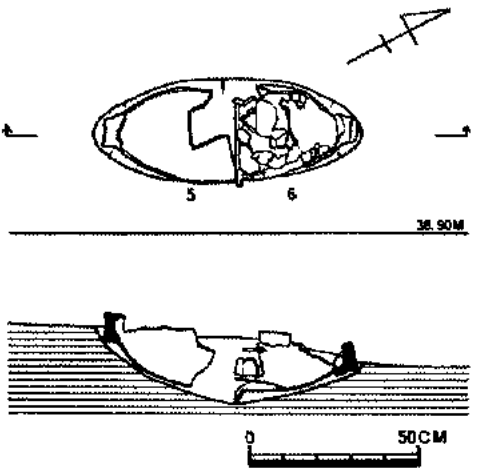
第92図　光岡草場遺跡土壙墓出土土器（1／4）

2） 甕棺墓 (図版32・33)

（1） 第1号甕棺墓

調査区の東側で検出された接口式の小児用甕棺墓である。墓壙形態、規模ともに不明瞭である。主軸方位はN－28°－Eを示す。

5・6ともに外反した短い口縁部をもち、5の口縁部下には1条の凸帯がめぐらされる。また6の口縁端部は跳ね上がり気味に立ち上がる。

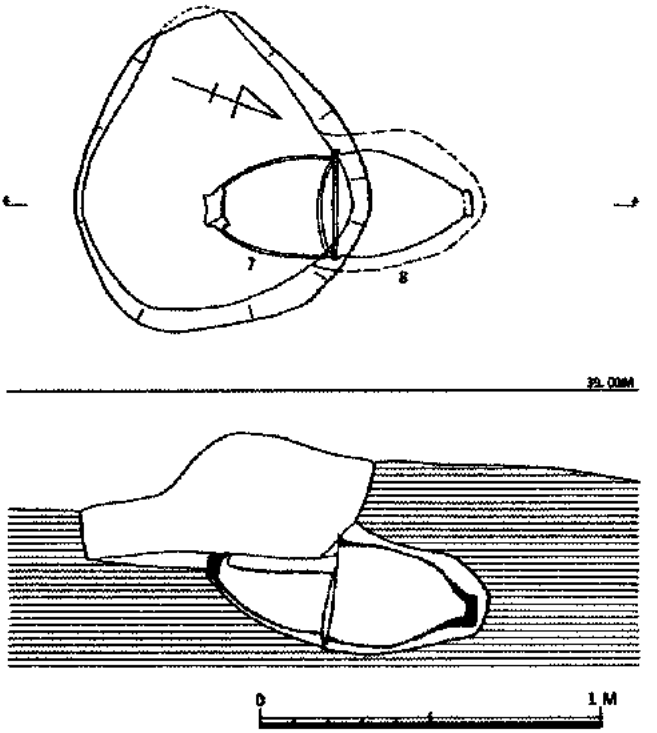


第93図　光岡草場遺跡第1号甕棺墓実測図（1／20）

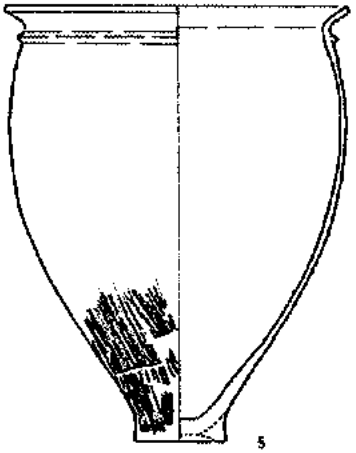
（2） 第2号甕棺墓

1号甕棺墓の北側、11号土壙墓に隣接して検出された接口式の小児用甕棺墓である。墓壙は不整円形を呈する。規模は長軸95cm、短軸85cmで、深さは30cmを測る。北西側壁に奥行50cmの横穴を掘り、下甕のほとんどを挿入している。主軸方位N－20°－Wを示し、埋葬傾斜角度は＋10°である。

7・8ともに外反した短い口縁部をもち、7の口縁部下には1条の凸帯がめぐらされている。

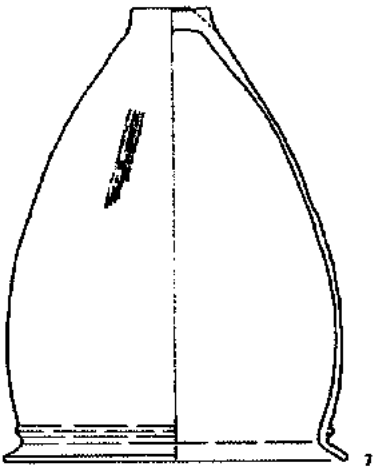


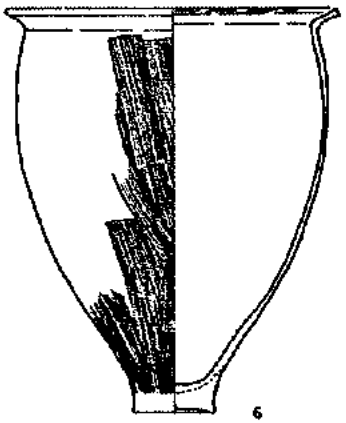
第94図　光岡草場遺跡第2号甕棺墓実測図（1／20）



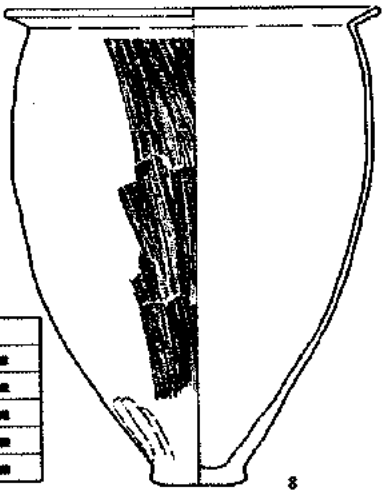
No.5	
器高	39.0cm
口径	30.0cm(推定)
口縁内径	25.3cm
胴部最大径	29.4cm
底径	8.0cm

No.7	
器高	40.4cm(推定)
口径	30.2cm
口縁内径	25.3cm
胴部最大径	29.3cm
底径	7.1cm





No.6	
器高	35.9cm(推定)
口径	29.2cm
口縁内径	24.0cm
胴部最大径	27.2cm
底径	7.2cm



No.8	
器高	42.0cm
口径	33.4cm
口縁内径	27.6cm
胴部最大径	32.0cm
底径	8.5cm

0 20CM

第95図　光岡草場遺跡甕棺実測図（1／6）

5. 古墳時代の遺物

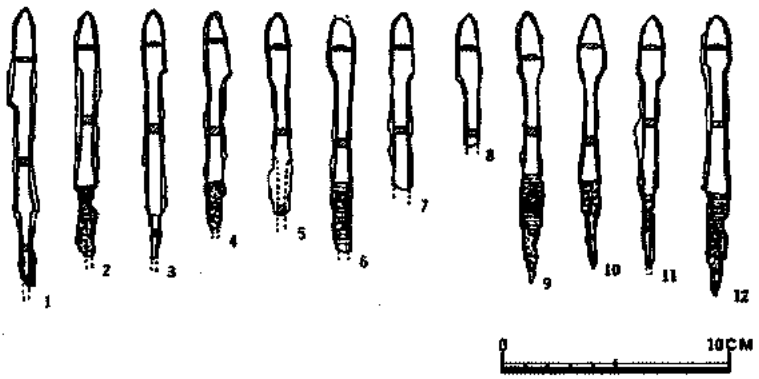
1号墳盗掘坑埋土中から鉄刀1振、鉄鏃12本が発見された。

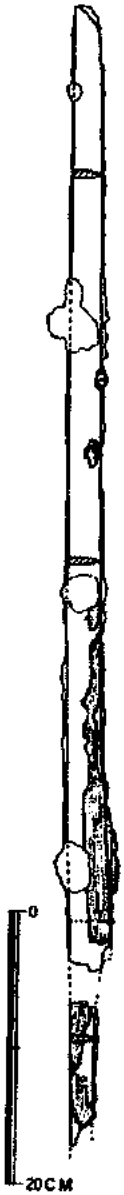
1） 鉄刀（図版34）

現存長82cm、刀身71.8cm、茎現存長10.6cm、最大身幅3.2cmを測る直刀である。茎に目釘穴（径3.5mm）を2ヶ有し、刀身および茎には鞘の木質が一部付着している。また関は欠失しているが、片関の可能性を窺わせる。さらに刀装具の遺存はみられなかった。

2） 鉄鏃（図版34）

1～12はいずれも尖根式に属すものと思われる。関の形態から、片関のもの（1～8）と、両関のもの（9～12）に分けられる。片関の1～8には両丸造り(1)と片丸造り（2～8）のものがみられるが、1は鏃身の錆がひどく、断面形はやや不明瞭である。両関の9～12は片丸造りであると思われる。10は実測図中両丸の観を呈しているが、これも鏃身の錆がひどく、不明瞭である。但し、他遺跡の出土例から、片丸造りの可能性が高い。





第96図　光岡草場遺跡第1号墳出土鉄器実測図（鉄鏃1／3、鉄刀1／5）

6. まとめ

宗像市では弥生時代前期から後期までの墓が確認されているが、基本的な墓制は土壙墓である。

土壙墓が群として明確な墓域を形成した遺跡は、前述の久原遺跡（大字久原・光岡・王丸）と富地原梅木遺跡（大字富地原字梅木1723～1775所在）及び本遺跡である。久原遺跡は弥生時代前期と中期の土壙墓があり、尾根をへだてて墓域を分けている。中期の土壙墓群（33基）は尾根の中央部から鞍部にかけてまとまって検出されたが、約500㎡という比較的狭い範囲に集中している。土壙墓群の形成は中期前葉から後葉にかけて行われたと推測出来るが、中期中葉に一つの形成期があったことは確実である。

また富地原梅木遺跡からは中期後半を主体とした土壙墓群が100基以上発見されたが、細い尾根線上に連続的な配置を示している。

本遺跡の土壙墓群の形成期は、2号、24号土壙墓出土の供献壺、及び1号墳地山整形面上出土の壺の時期から、中期後半が予測出来る。また2基の小児甕棺墓の甕の時期も、中期後半と考えられる。

このことから、時期的には富地原梅木遺跡と略同時期、位置的には久原遺跡に近接する。そこで本遺跡の土壙墓の分布をみると、300㎡という狭い範囲にまとまっている。もちろん、調査区の周辺は大きく攪乱を受け、遺跡の位置する尾根自体も南北分断されているので、この土壙墓群が尾根線に沿って連続的に配置されていたのか、今となっては不明である。しかし、現況から判断すれば、検出された土壙墓群の位置が尾根線の最も高い所にあること、及び北側には小さな埋没谷が形成されていることから、南側に土壙墓群の広がりはあったとしても、久原遺跡同様かなりまとまりをもった分布を示していたのではないかと思われる。（清水）

註1　波多野正三　『三郎丸古墳群』　福岡教育大学紀要第21号第2分冊　昭和46年

註2　福岡県教育委員会　『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第2集』pp. 97－98　1980

註3　福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXVIII』　1979

参考文献

鹿部山遺跡調査会　『鹿部山遺跡』　1973

福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII』　1977

原俊一　「宗像の考古学」『福岡考古第13号』　福岡考古学懇話会　1986

安部裕久・清水比呂之　「久原遺跡出土の両耳付き鍋子」『考古学ジャーナル1』　1987

図　　版

図版 1

野坂ホテル遺跡

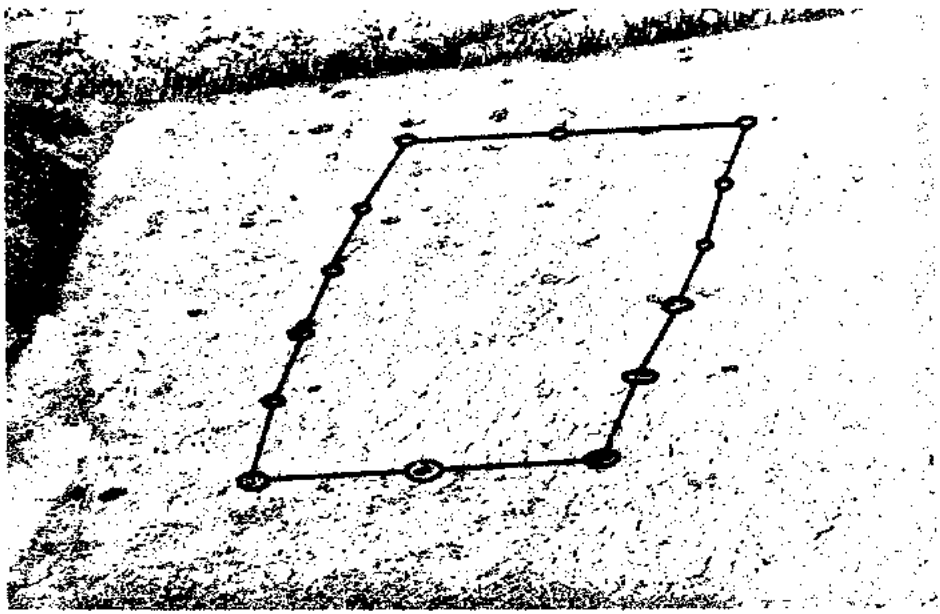
調査前写真

野坂ホヲ田遺跡

1　A区全景（西から）

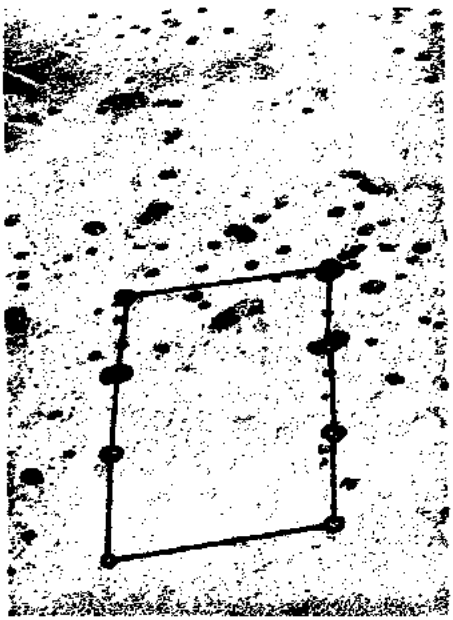
2　A区全景（北から）

野坂ホヲ田遺跡



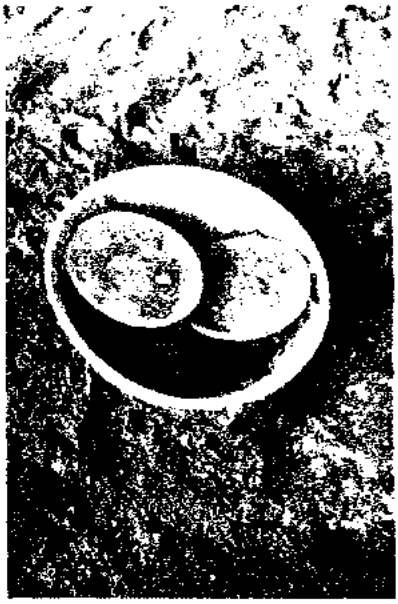
1　A区第1号掘立柱建物跡（西から）

2　A区第2号掘立柱建物跡（西から）



3　A区第3号掘立柱建物跡（西から）

野坂ホテ田遺跡

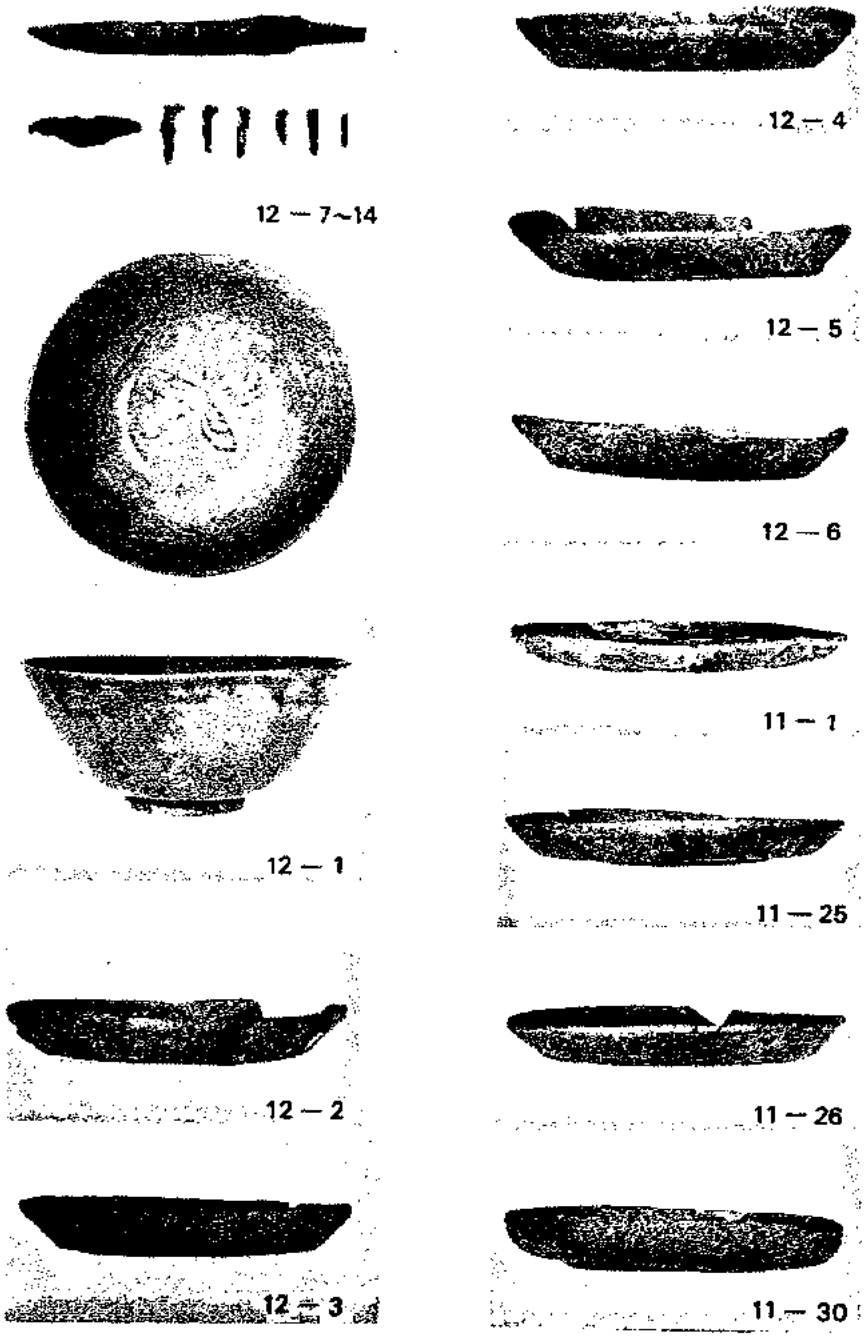


1　A区1号木棺墓遺物出土状況（南から）

2　A区1号木棺墓遺物出土状況（東から）

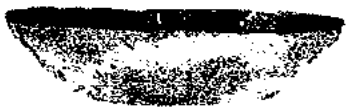
3　A区1号木棺墓遺物出土状況（東から）

野坂ホテ田遺跡



A区出土遺物 I

野坂ホテ山遺跡

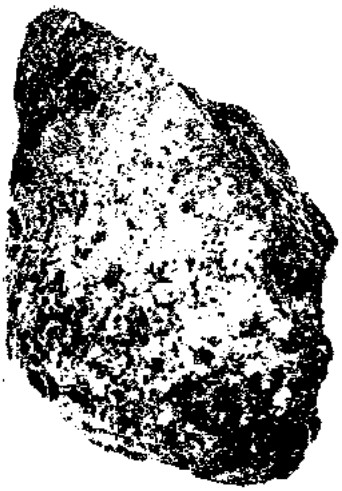


11 — 18

11 — 7

11 — 20

11 — 38

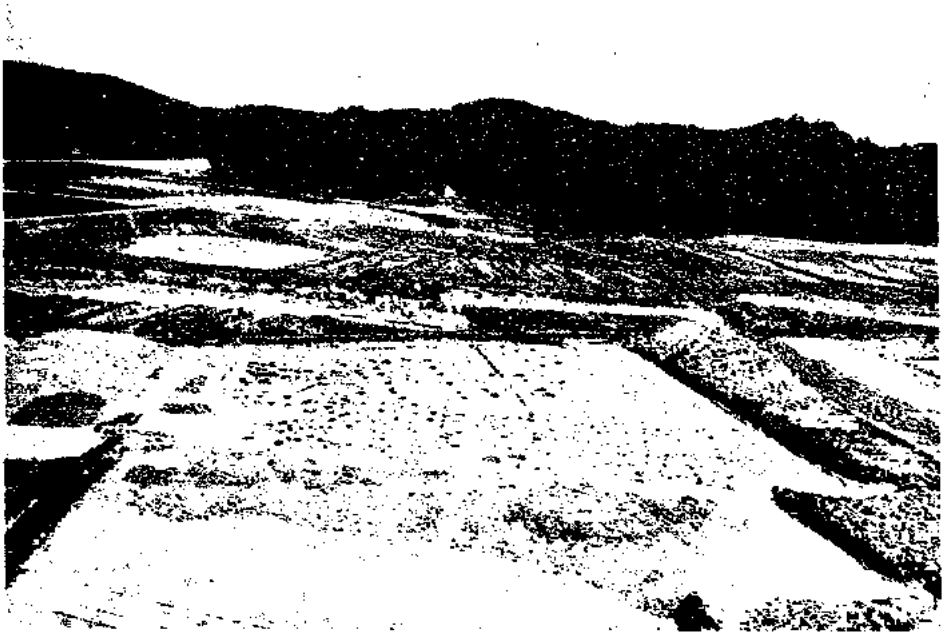


11 — 14

11 — 14

A区出土遺物 II

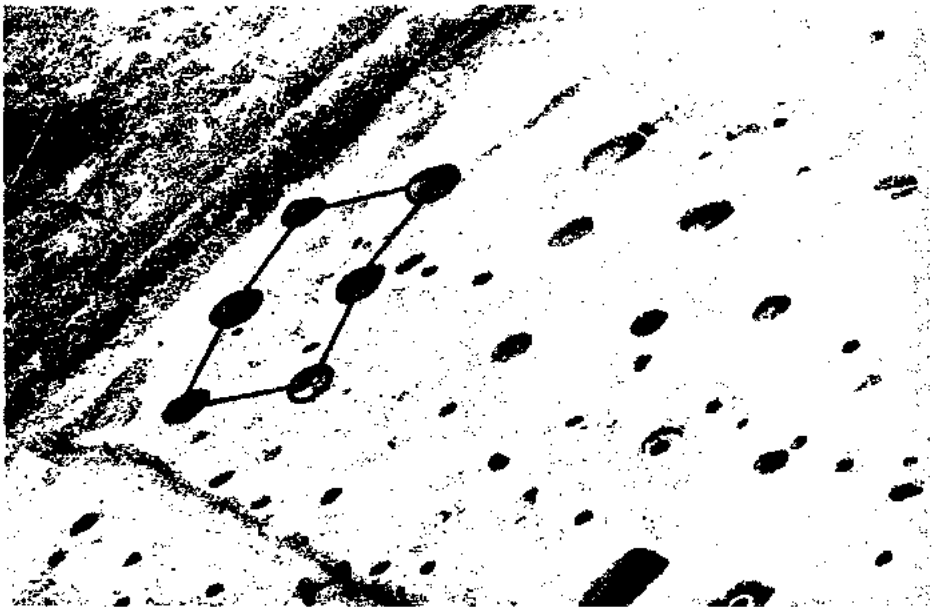
野坂ホテル遺跡



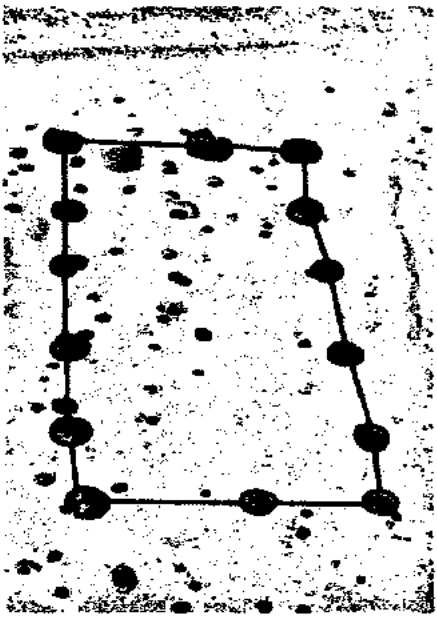
1　B区全景（西から）

2　B区全景（北から）

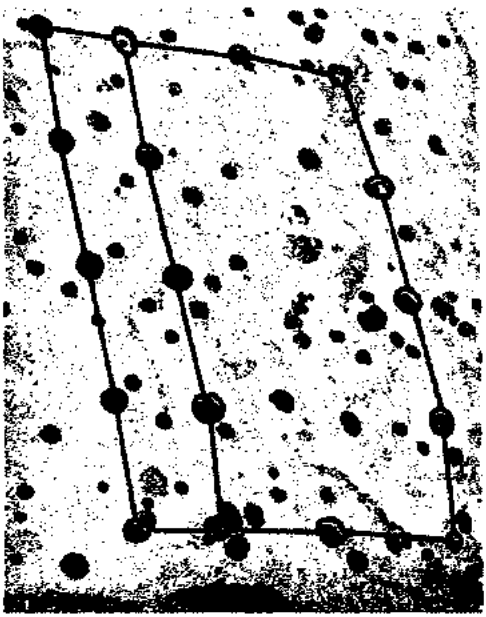
野坂ホー田遺跡



1　B区第1号掘立柱建物跡（北から）

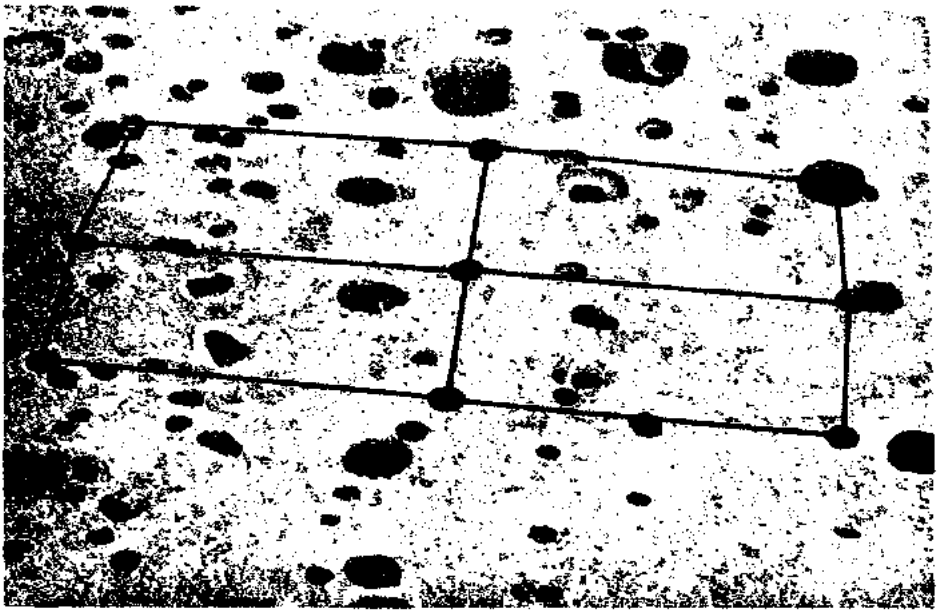


2　B区第3号掘立柱建物跡（西から）



3　B区第6号掘立柱建物跡（西から）

野坂ホテ山遺跡

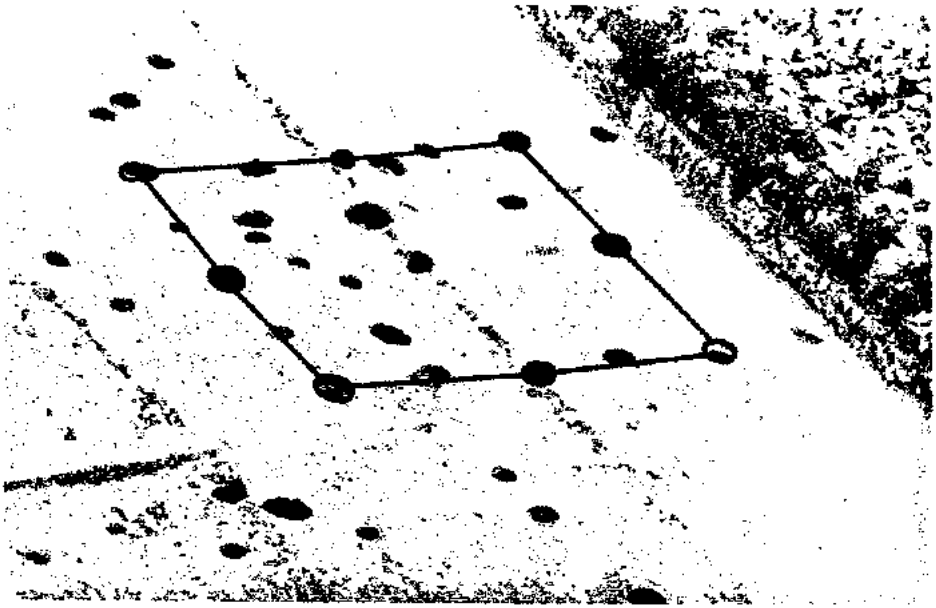


1　B区第4号掘立柱建物跡（西から）

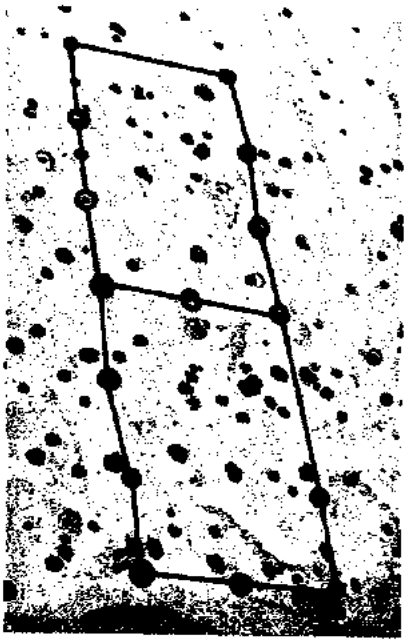
2　B区第11号掘立柱建物跡（西から）

3　B区第17号掘立柱建物跡（西から）

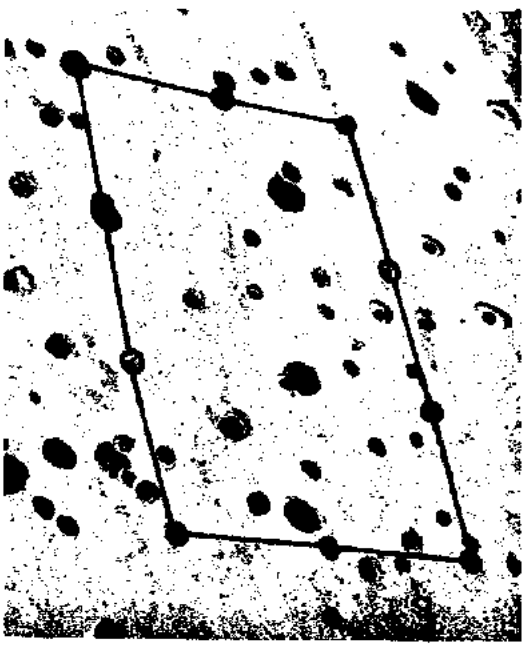
野坂ホヤ田遺跡



1　B区第8号掘立柱建物跡（西から）



2　B区第19号掘立柱建物跡（西から）



3　B区第21号掘立柱建物跡（西から）

野坂ホテ田遺跡

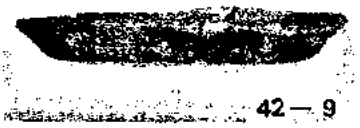
1　B区P－215出土遺物（東から）

2　B区P－215出土遺物（西から）

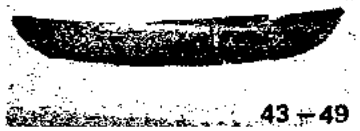
野坂ホテ田遺跡

43－57

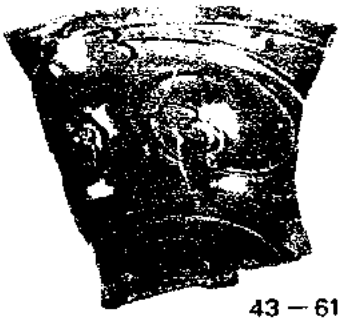
43－60



42－9

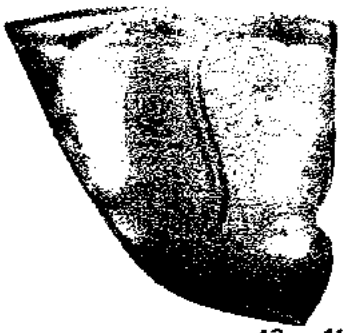


43－49

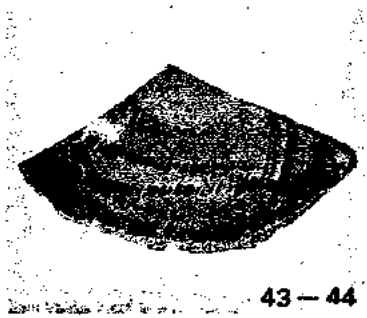


43－61

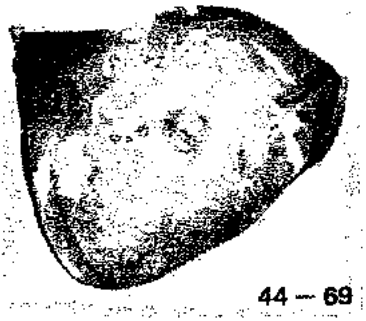
43－55



43－41



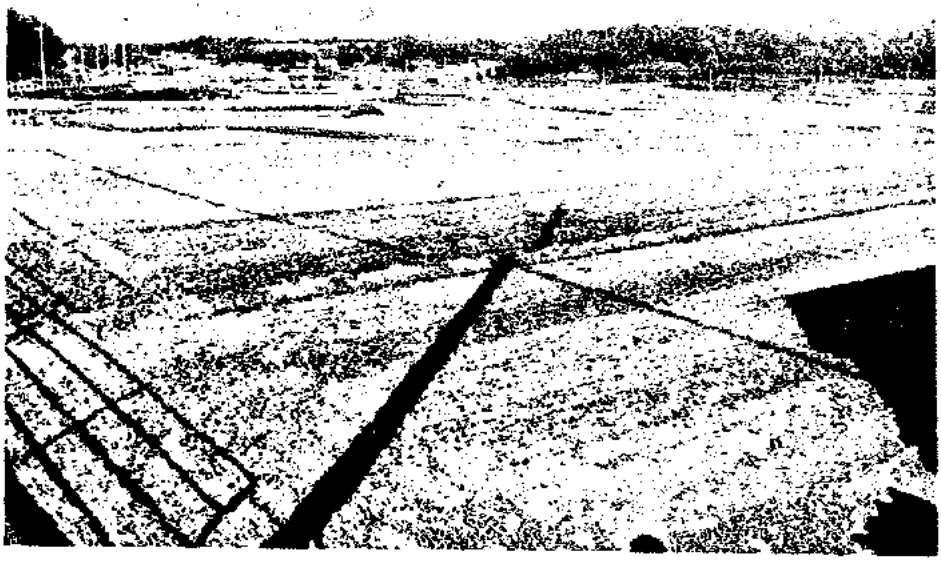
43－44



44－69

B区出土遺物

吉留下窯原遺跡



1　A区調査前写真（東から）

2　B区調査前写真（南から）

吉留下塩原遺跡

1　A区全景（西から）

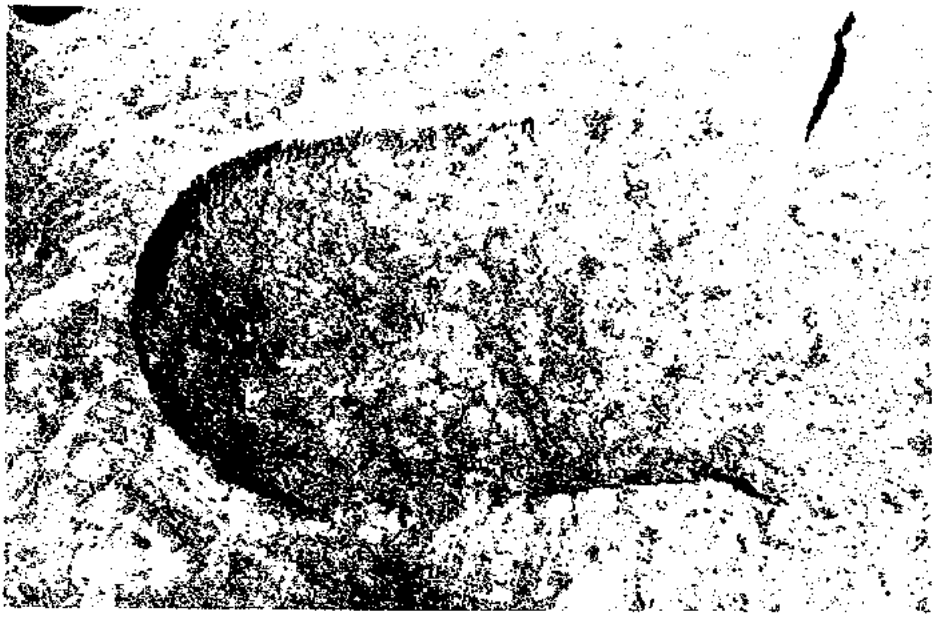
2　A区全景（東から）

吉留下窓原遺跡

1　A区第1号竪穴遺構（東から）

2　A区第2号竪穴遺構（西から）

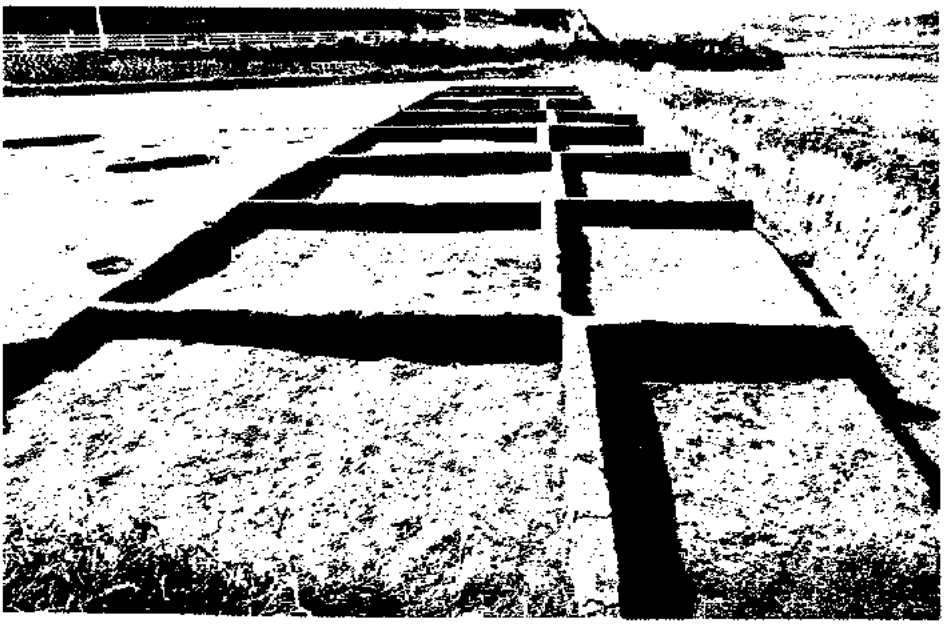
古留下恕原遺跡



1　A区第3号竪穴遺構（南から）

2　A区第1号掘立柱建物跡（西から）

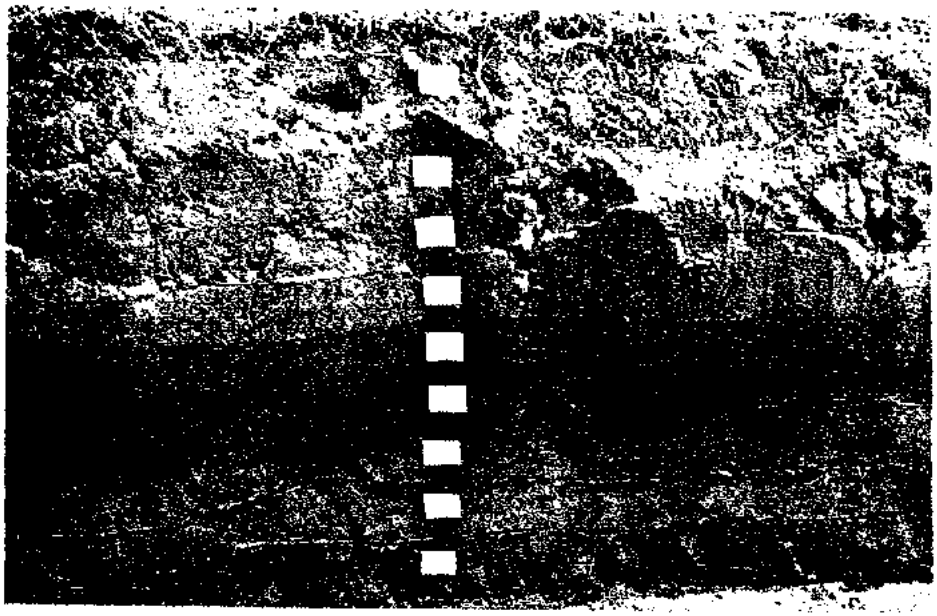
古留下黍原遺跡

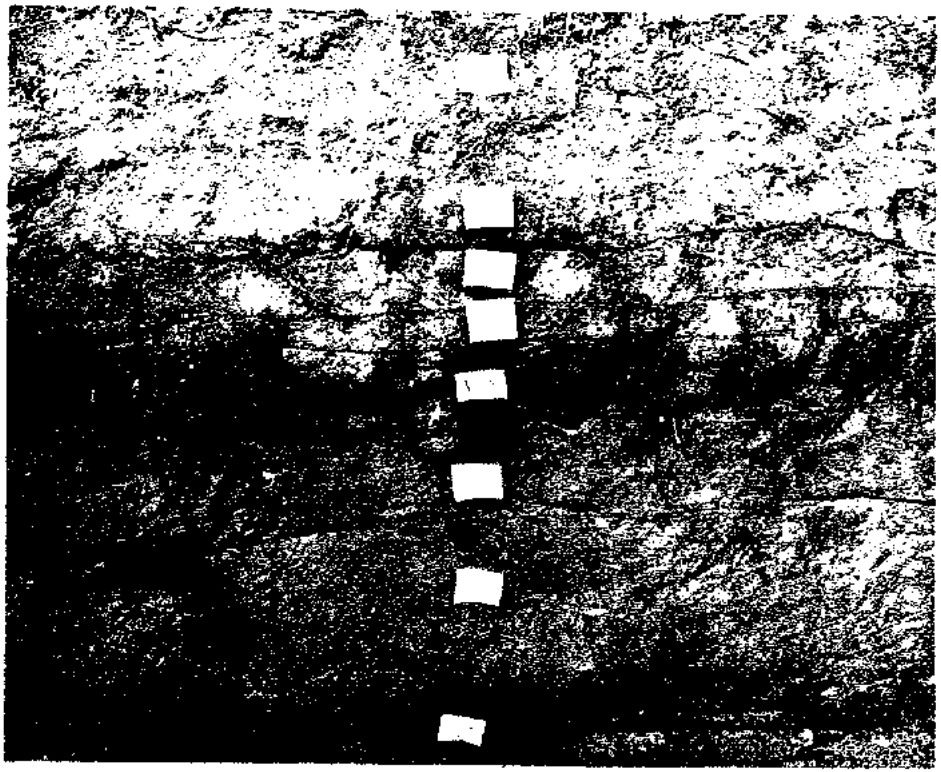


1　A区グリット全景（南から）

2　A区グリット全景（東から）

古窑下挖原道路





1　A区南壁土層写真

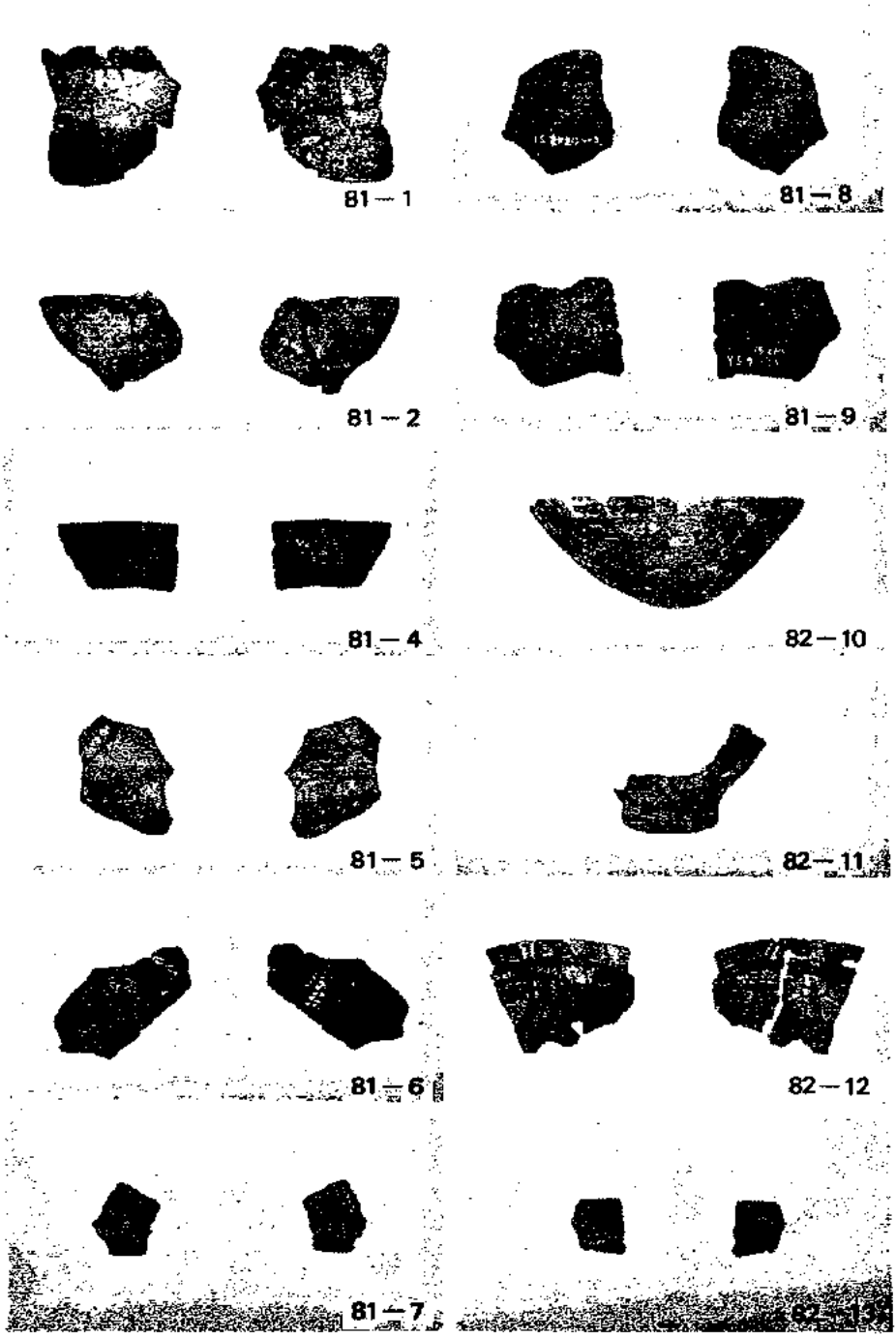
2　A区東壁土層写真

古留下空洞遗迹

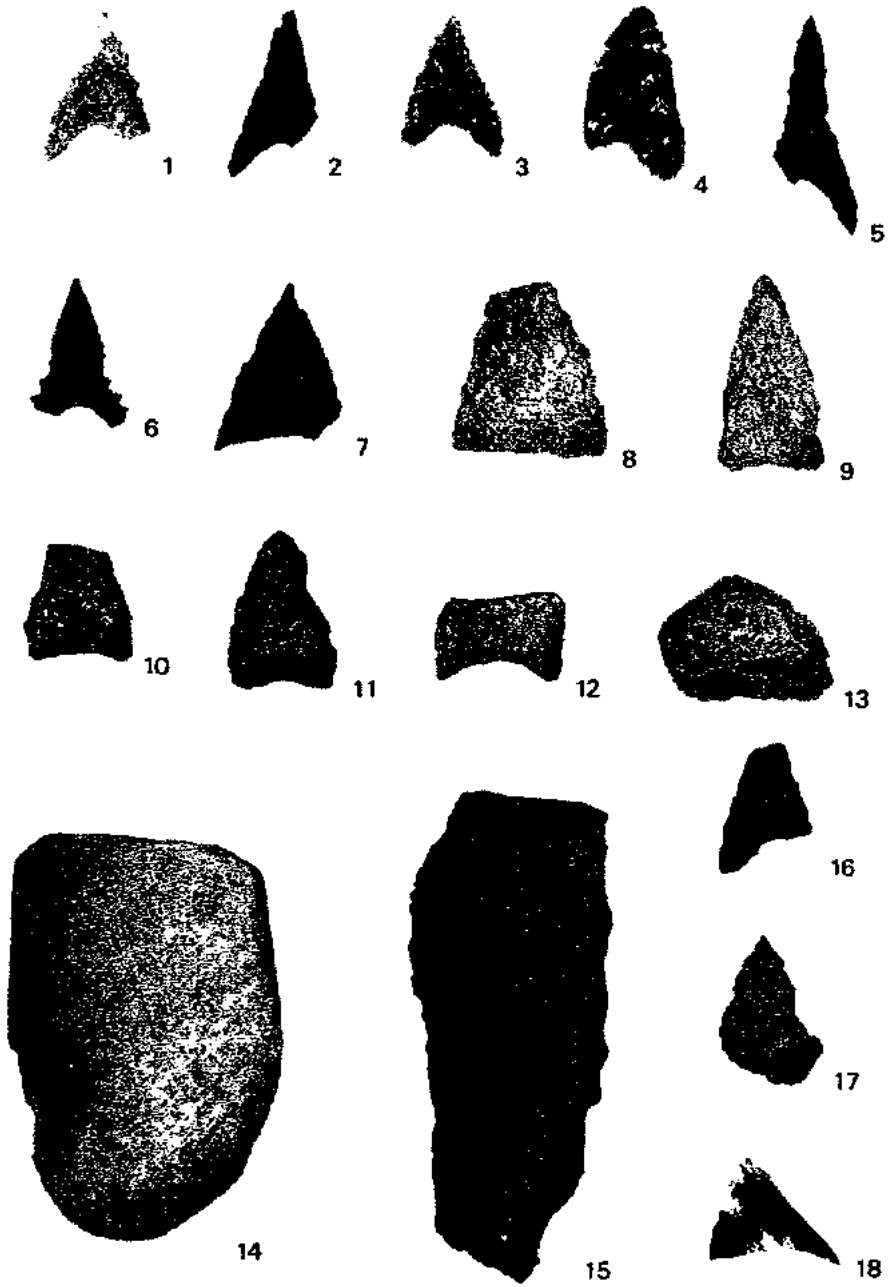
1　A区遗物出土状况

2　A区遗物出土状况

古留下犂原遺跡



出土遺物Ⅰ

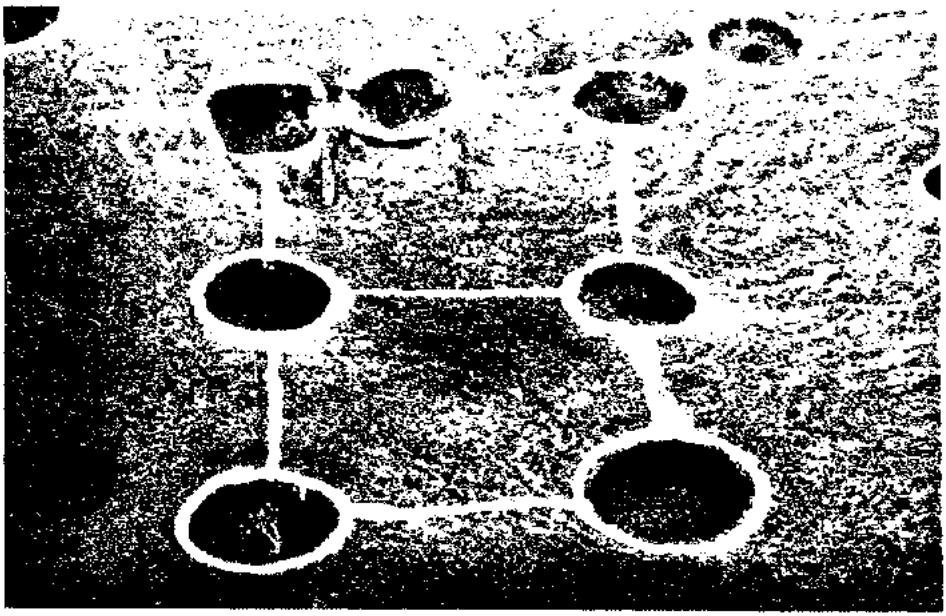


出土遺物Ⅱ（挿図第83図）

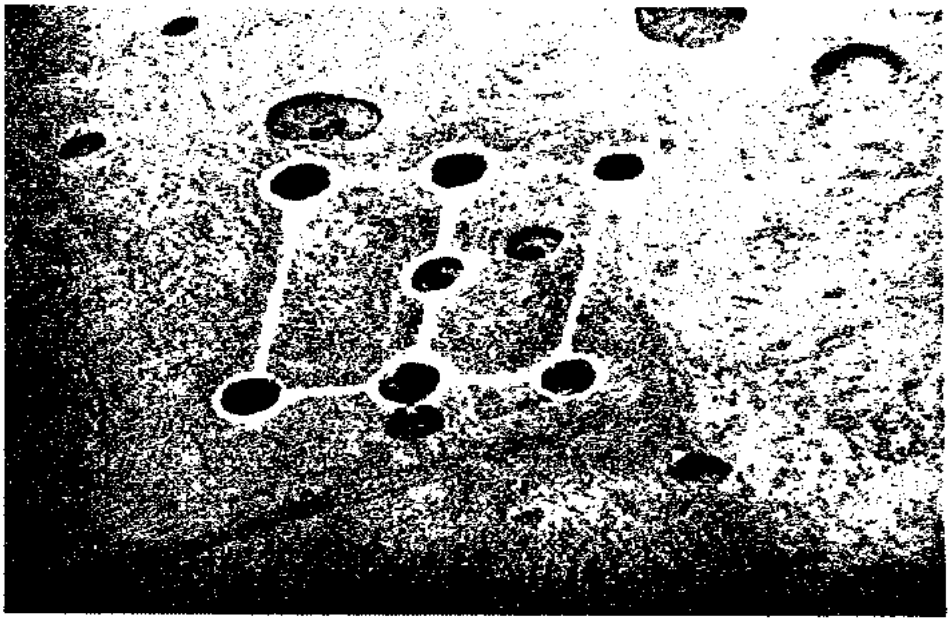
吉留下窯跡遺跡

1　B区全景（南から）

2　B区全景（東から）



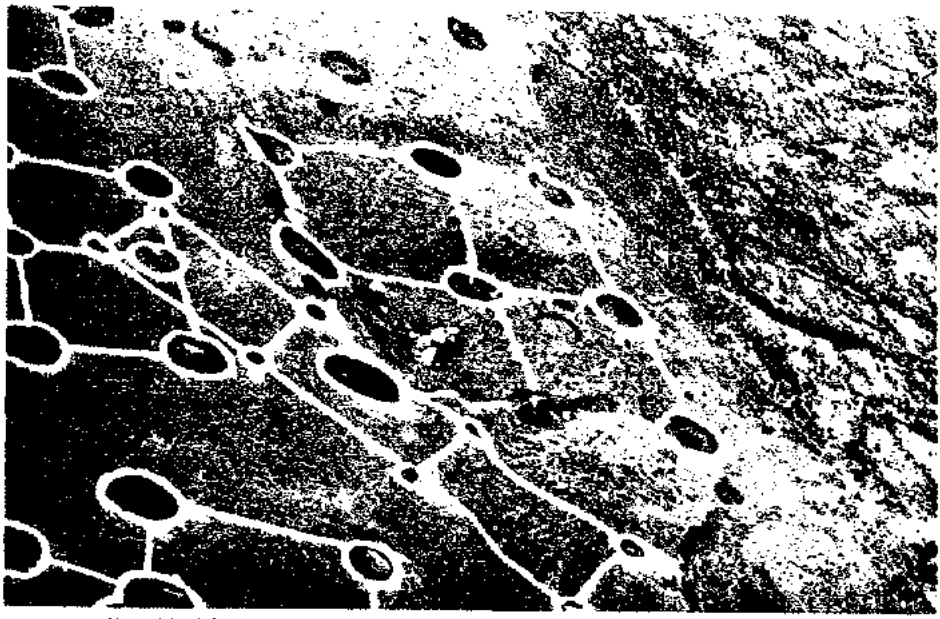
1　B区第7号掘立柱建物跡（東から）



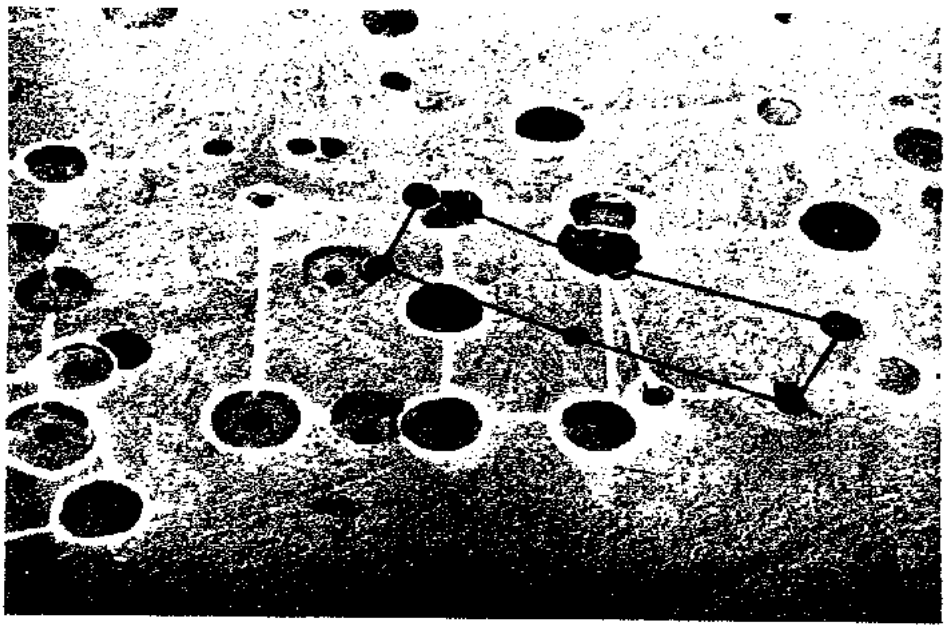
2　B区第9号掘立柱建物跡（東から）

1　B区第14号掘立柱建物跡（南から）

2　B区第15号掘立柱建物跡（東から）



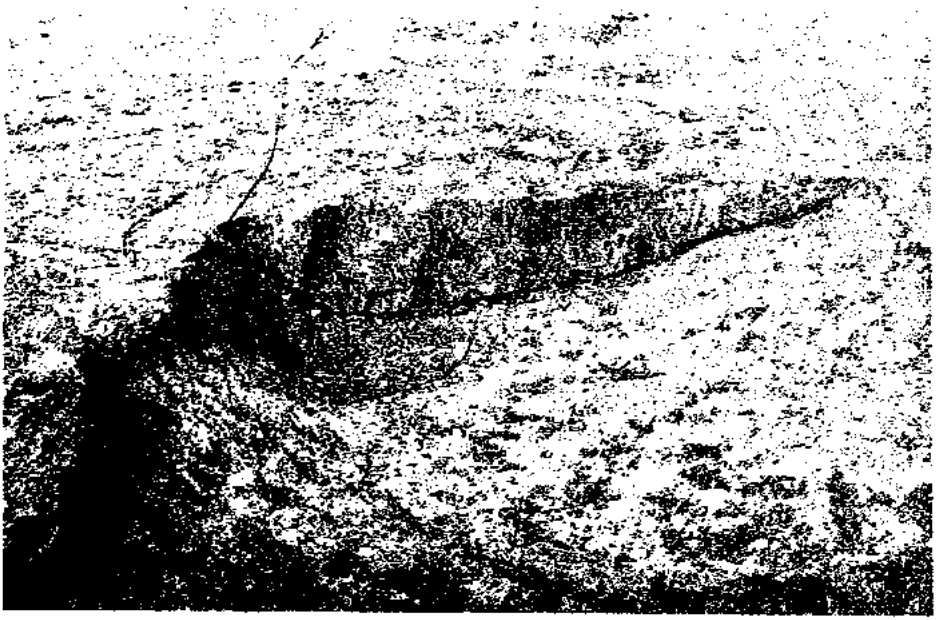
1　B区第20号掘立柱建物跡（東から）



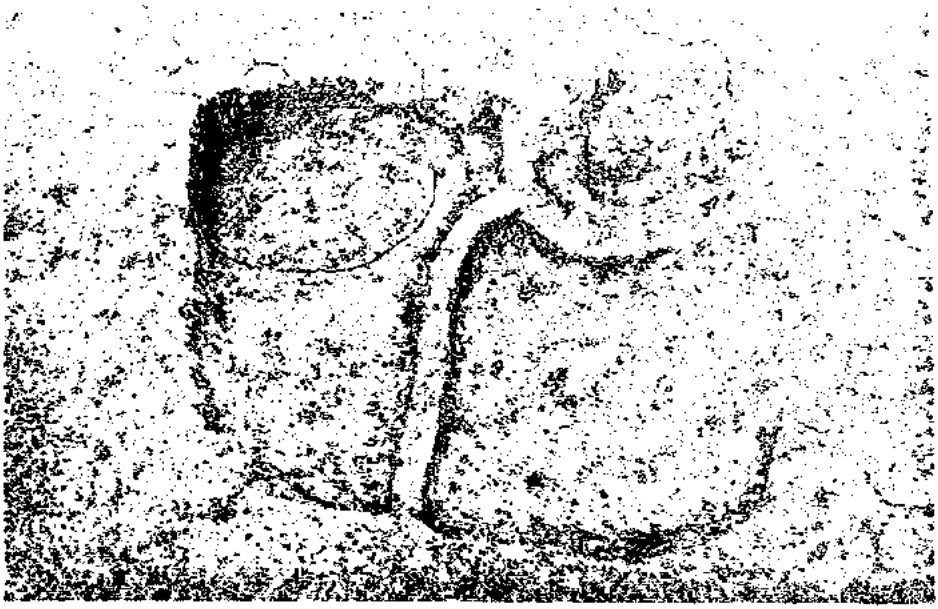
2　B区第21号掘立柱建物跡（東から）

古留下窓原遺跡

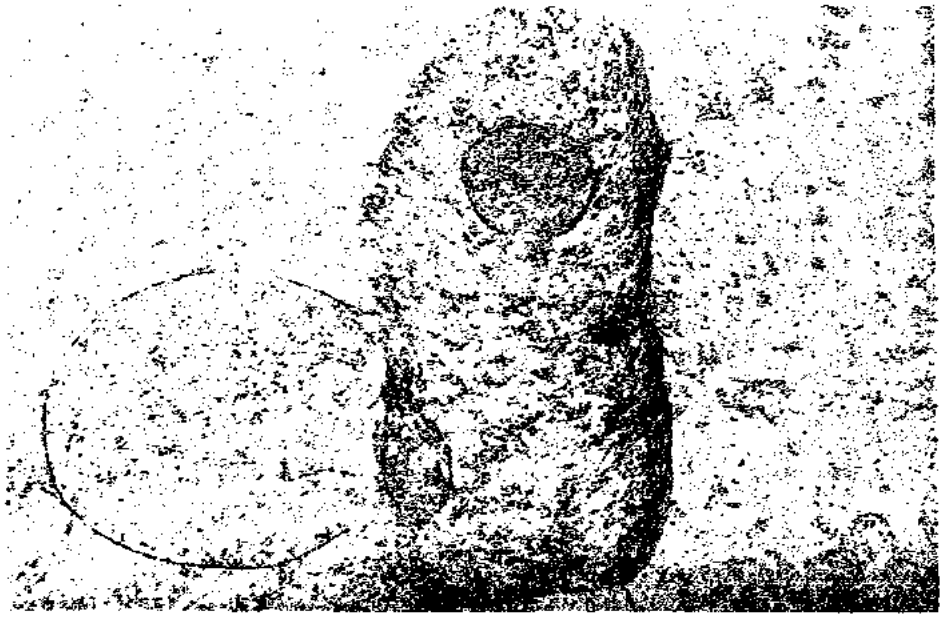
1　B区第1・2号掘立柱建物跡切り合い状況



2　B区第2号溝状遺構・第2号掘立柱建物跡切り合い状況

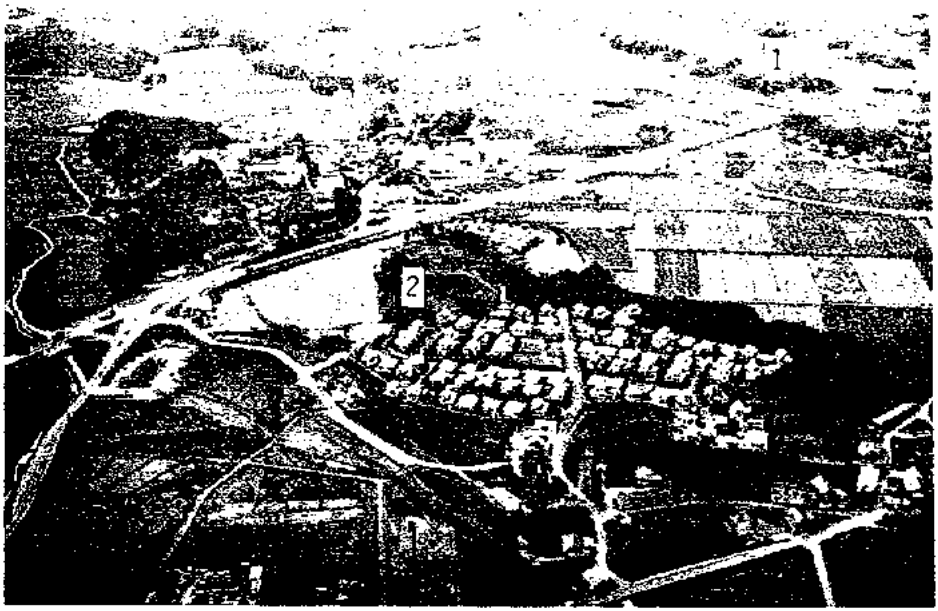


1　B区第4号掘立柱建物跡第6号第7号竪穴遺構切り合い状況

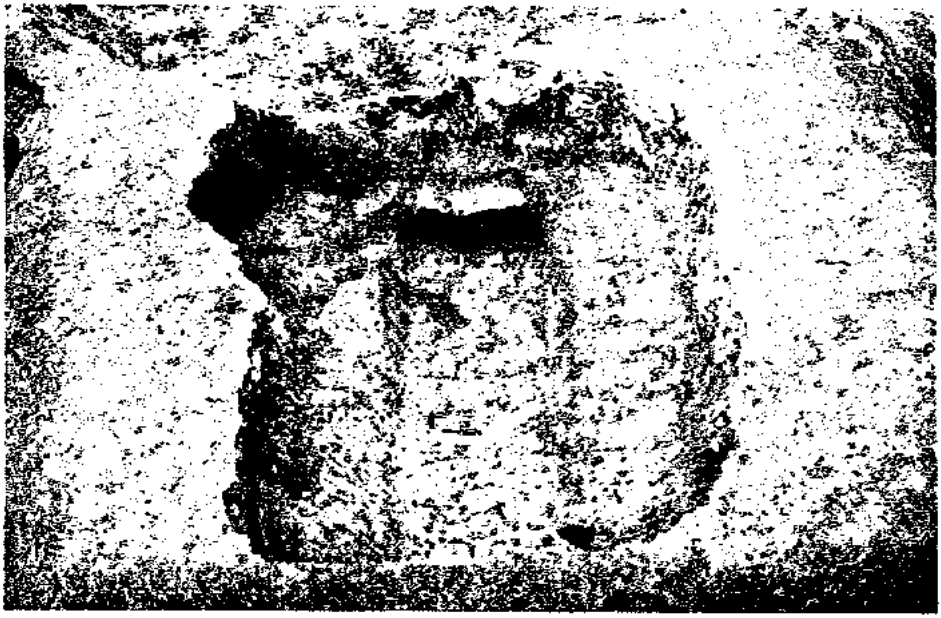


2　B区第14号掘立柱建物跡第1号竪穴遺構切り合い状況

光岡草場遺跡



1　遺跡遠景（1：草場遺跡、2：光岡長尾遺跡）



2　第24号土壙墓（南東から）

光岡草場遺跡

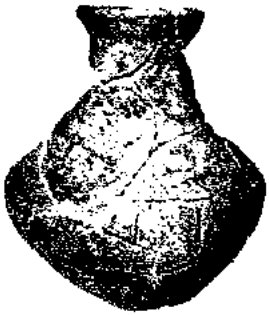
1　第2号土壙墓とその周辺　(▽は第2号土壙墓を示す)

2　第8号土壙墓とその周辺　(▽は第8号土壙墓を示す)

光岡草場遺跡

1　土壙墓群（西から）

2　土壙墓群（東から）



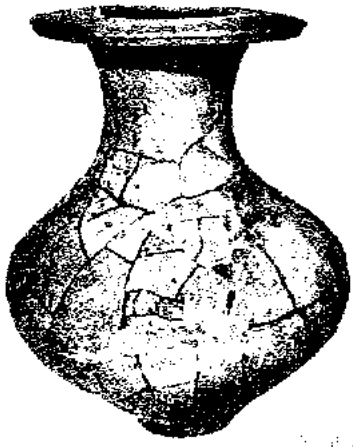
1

2

▽は第2号土壙墓

第2号土壙墓出土土器

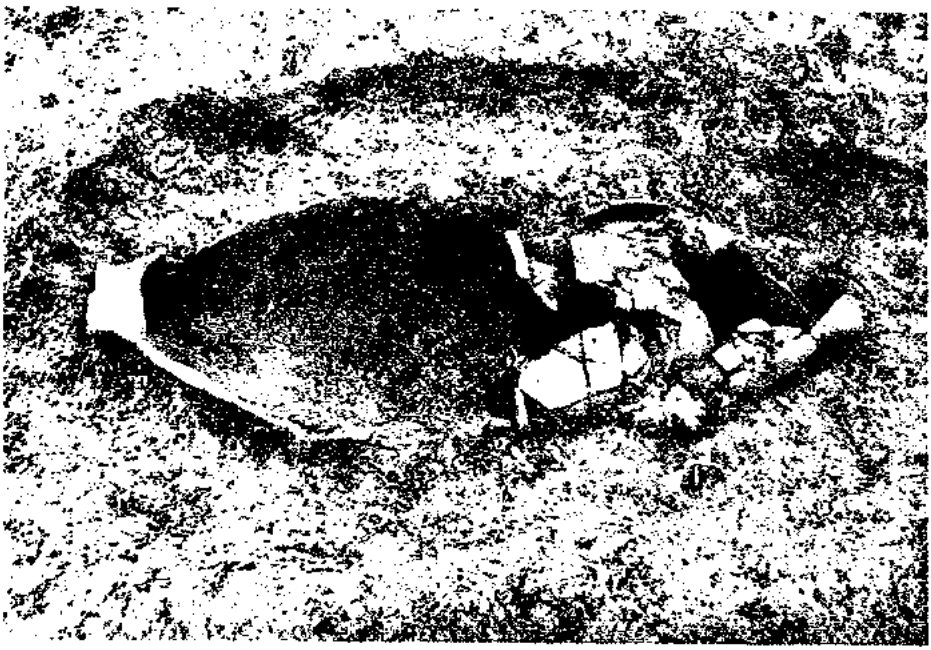
3



土壙墓出土土器

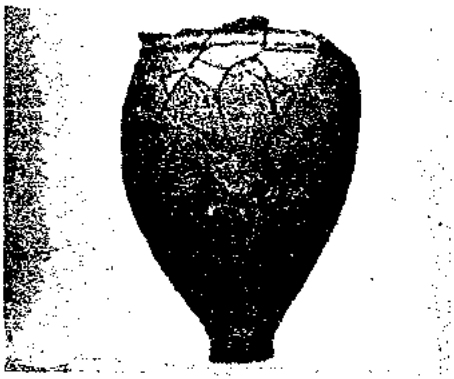
4

光岡草場遺跡



1　第1号墳墓（南東から）

2　第2号墳墓（南から）

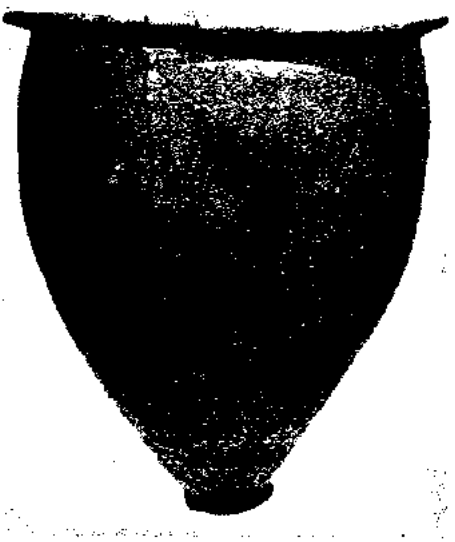


5

6

第1号甕棺墓

7



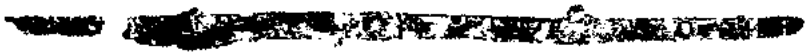
8

第2号甕棺墓

第1・2号甕棺墓（5・6は1号、7・8は2号甕棺）

光岡草場遺跡

1　第1号墳出土鉄鏃



2　第1号墳出土鉄刀

3　第1号墳現況（南から）

宗　像
埋蔵文化財発掘調査報告書
－ 1986年度 －
宗像市文化財調査報告書　第 12 集
1987 年 3 月 31 日
発行　宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地
印刷　釜　瀬　印　刷
福岡県宗像市河東